
とある狼の冒険譚

ウルフガイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある狼の冒険譚

【Nコード】

N5910L

【作者名】

ウルフガイ

【あらすじ】

孤独だった少年は師を見つけ、仲間を得て、女と出会う。大戦期を経た少年は自らの師を超えるための力を得ていき、人とのふれあいを経て成長していく。そして新たな物語が始まる。

第0話 弟子入り（前書き）

一気に進みますのでご注意を。

まあ、主人公の生い立ちなんか興味ないからぱっぱと行きます。

第0話 弟子入り

俺に物心がついた頃、すでに父親はいなかった。
それでも俺がまともな人間として育つことができたのは、俺を育ててくれた母のおかげだ。
感謝してもしきれない。

魔法世界。

様々な種族の「ヒト」や竜などと言った魔法生物が暮らす世界。
その辺境にある村にて俺は生まれた。

豊かな自然に囲まれた、のどかな村だった。
村の人々は皆優しくかった。

たまに訪れる来訪者も、陽気な者が多かった。

俺の父は狗族と呼ばれる種族で、母とは違う種族だったらしい。
母は長命種の。。。という種族で、俺はハーフと言う奴らしい。
まあ母の髪は金色なのに俺は焦げ茶で狗の耳まで生えてるんだから、
何か事情があるとは思っていた。
普通ハーフと言うのは嫌われるものなのだそうだが、そんなことは
なかった。

毎日忙しかったが、楽しく過ごす事が出来ていた。

父は戦いで命を落としたと聞いた。
家族のために戦ってそして死んだと。

そのおかげなのか、俺は戦う方法を父から受け継いでいた。
顔も知らないはずなのに、『狗神』を使う方法が、それを使う後ろ
姿を知っていた。

それは父から受け継いだのではなく、本能であつたのかもしれない。
それでも、『力』を手に入れて強くなるということは幸福だった。

そんな母も俺が六歳の時に病によって命を落とした。

俺は親を失い、金に困った。

幸いと言ふべきか、近所には昔拳闘士だった男がいた。

気さくな男で、いつも俺に昔の話をしていてくれた。六歳の俺に、
真面目になつて修行をつけてくれたのもそいつだった。

だから俺はそいつに頼んで拳闘士となった。

金を得るためには、住み慣れた村を棄てて戦うしかなかった。

無論、六歳の身でそんなのになれるはずが無い。

俺は辺境の街の闘技場で、幻術の薬を使って偽りの姿となつて金を
稼いだ。

その生活も長くは続かない。

数年後、その時に俺が住んでいた新しい街は戦火に包まれた。

思えば辺境の争いから始まった『大戦』の発端であるこの小さな争
いの時から、俺はこの大戦に巻き込まれていたのだ。

その戦争で家を失つた後。

俺は故郷と言ふべき村へと戻っていた。

まあ、金は何年か普通に過ごすだけはあつたし、久しぶりに修行一
筋に打ち込んでみようと思つたのだ。

そして村に戻ってしばらくが経ったある日。

俺は自分がきつととてつもなく運が悪いのか、もしくは呪われているのかと疑った。

なぜなら、この村さえも戦争の渦へと巻き込まれたからだ。

きつと俺は前に戦いに巻き込まれた時に呪いでも掛けられたんだろう、そう思わずにはいられない程の不幸だった。

その時の俺はたいして強くは無かったが、別に弱いわけでもなかった。

狗族特有の身体能力があつたし、色々な戦い方も教わつたし、そこそこの戦いの経験もあつた。

でも軍の正規兵、それも多対一では勝てるはずもなかった。

結局のところ俺はうぬぼれてもいたのだ。

まだ生まれてから10年ほどしかたっていないくせに、中途半端な強さを持っていたから。

そしてそんな死にかけた俺が、地面に倒れて今にもトドメを刺されそうな時にそれは起きた。

爆音と共に吹き飛ぶ兵隊たちが見えた。

あたりに雷が降り注ぐのも見えた。

切り刻まれていく兵たちも見えた。

これが、俺ことアリウス・ウィンダートが紅き翼に拾われた時に覚えている光景である。

第0話 弟子入り

「ああ？ 弟子にしてほしいだ？」

「はい！」

「めんどくせえ。だいたいそんなもん詠春にでも頼めばいいじゃないか」

「あの人はスタイルが合わないんだ！ お願いします！」

「え」

あの後、俺は紅き翼に治癒されている最中に起きて、連れて行ってくれと頼んだ。

……気がする。正直気が動転していたけど、一回寝て起きるといつてこいと言われた。夢じゃなかったらしい。そして現在。

俺も一応拳闘士であつたからには、ジャック・ラカンの名を知らないはずが無い。

『あのおっさん剣が刺さんねーんだけどマジで』という誰かの実体験のような噂も聞いたことがあるくらいだ。

だから俺は、『強さを求めるためにはジャック・ラカンを師にするしかない！』と決めていた。

そして現在、微妙に猫かぶって猛アタック中なのである。

「いいじゃないですかジャック。弟子くらい取ってあげれば」

「えゝ、めんどゝし。アルがやればいいじゃねえか」

「えっ！？ それは……」

「フフフ。アリウス君は私が嫌いなようですよ。少し悲しいですね……」

「いやいやそんなことはっ！」

「彼はどう見ても戦士系ですからね。ジャックとも相性がよいでしょうし、狗族とのハーフみたいですから資質は充分だと思いますよ？」

（スルーされた……）

「んゝ、そうだなゝ」

一応からかわれてはいるけど真面目に考えてもくれるのか。アルビレオさんは、噂に聞いた通り性格が悪いようだ。根は優しいんだと思いたいけど。

と、そこでいきなりラカンさんが大声を出した。

「よっしゃ決めた！ アリウスでいいんだよな！」

「はい！」

「とりあえずお前今日から俺の弟子な」

「やった！」

「そんでだ」

ガツシリと肩を掴まれる。

そして顔を近づけてくる。

なんて迫力だ。ってか近づけ過ぎだ！

「な、なんですか？」

「そのうちタカミチと戦わせて賭けやるから、絶対勝て」

「は？」

「返事は！？」

「わかりましたっ！」

そんなこんなで俺は弟子となった。
ところで師匠、一言いいですか？

「ん？」

「タカミチって誰だよ！」

タカミチは紅き翼のガトウさんを師匠とする、俺の同志ともいえる奴だった。

俺も魔法とか全く使えないから、呪文の詠唱ができないというタカミチとはかなり仲良くなった。

「アリウス、周りを見返してやろう!」

「了解だぜタカミチ! 戦士系最強!」

「君には負けないからね!」

「はっ! 上等だぜ!」

とまあこれくらいには。

まあテンションが上がった時しかタカミチはハツチャケないけど。

タカミチはガトウさんに居合拳を習ってるらしい。

俺はというと、ラカン師匠にメチャ手加減された手合わせとか、巨大な岩持ち上げとか、ドラゴン狩ってこいとか言われている。

たぶん生命力と身体能力を上げる修行なんだろう。ドラゴンは無理だけど。

狗神についてはゼクトという変わった口調の小さい(言ったら怒る)人が修行を見てくれた。

制御して体に纏わせたりとか、そういうやり方を主に習った。

正直、ラカン師匠の3倍わかりやすかった。

あの人の修行は結構感覚的な物が多い。

それでも強くなってるから別にいいんだが、やっぱりわかりやすい方がいい。

クルトというメチャクチャ生真面目な奴も、俺の同志だ。

こいつは色々な仕事を兼任したりしてあまり会うことができないが、友達だと思っている。

器用で物覚えがいい、いわゆる秀才タイプで、いい加減な俺がそんなに好きじゃないようだ。

まあ、仕方ない。

俺は元々荒っぽいところに長くいたし、師匠がラカンだ。いい加減な性格にもなる。

「アリウス、少しはこっちの仕事も手伝ってくれ」

「クルトうるさい。邪魔。一瞬の油断が命取り」

「なっ、なんだとー！」

「てか動くんじゃないよ！ 見りゃわかるだろ！」

今指立て伏せの最中でおまけに背中に何段も石を積み重ねてるんだぞ！

うかつに動いたら全部崩れて師匠に怒られるだろうが！

手伝いくらい後でほんの少しはやってやるから満足してくれ！

「そ、それなら仕方ない……か」

クルトは修行している最中はやさしくなる。

俺もクルトも、頼みこんで弟子にしてもらったタイプだから、そう言う時は気が合うのだ。

無論、タカミチは言うまでも無い。

さて、そんなこんなで俺が紅き翼に来てしばらくが経過した。

俺は結構強くなった。タカミチやクルトが忙しく働いてる中ボーッとするわけにもいかず、その分自分でも修行をしていたのだ。

「どうだろう。結構うまくできてると思うんだけど」

「そうだね。狗神を分身として使うのは新しいけど、気で分身を作るのと変わらないから、うまくできてると思うよ」

「よっし！ 詠春さんのお墨付きだ！」

今俺の修行を見てもらっているのは青山詠春さん。

剣の達人で、サムライマスターという二つ名がある。俺もかっこいいのが欲しいところだ。

旧世界の陰陽道というの少しはわかるというので、前にナギさんに見せてもらった分身の術を応用してやって見せてみたのだ。どうにも、狗神は陰陽道につながっているらしいし。

今回やったのは狗神による分身の作成だが、密度と言うものがうまくいってなかったらしい。修行あるのみ、だな。

「おうアリウス！ 分身の術試してるって聞いたぜ？ できたのか？」

「あ、ナギさん」

「さんはいらねえつつってるだろ？ で、どうなんだ？」

「まだ微妙。さっきも詠春さんに見てもらったんだが……」

「ダメか」

目の前の赤毛の青年（少年？）はナギ・スプリングフィールド。無敵の魔法使いとして有名だけど、すごくフレンドリー。

狗神というのはあまり見た事が無いから、それで分身作るのは面白そうだなと言って分身を見せてくれたりする。

俺がラカン師匠と戦ってるの見て、野次を飛ばしたりアドバイスを送ったりすることもある。

正直、噂で聞いてたのと違った。

面白いからいいか、と俺はそこで思考を止めた。

ガトウさんはかなり色々なところを回っているようで、あまり姿を見掛けない。

俺が修行してる時間とかぶってるからだろうが、たまに会った時にはすごく紳士的だ。

ものすごく丁寧にアドバイスをくれたりする。

あそこを攻めるとかこう動けとか。

ラカン師匠には教えてもらえないことも多いので、最高にかっこいい人だと断言する。

そういえば、あのダンディーな雰囲気でファンクラブができたと思うが、本当だろうか。

まあ、紅き翼の全メンバーにファンクラブがあるから不思議な事じゃない。

「何か変な事を考えなかったか？」

「気のせいです」

キノセイデスヨ。ハハハ。

そんな感じで帝国をガンガン攻め立てていく連合軍。

そんな最中、ついにガトウさん（&タカミチ）が黒幕をつきとめた。
秘密結社『完全なる世界』……どうでもいいか。

俺と師匠の『そんなの知ったこっちゃねえや』コンビはいつも通り
修行を開始した。

だつて考えたら頭がパンクしそうだったんだ。
しょうがないだろう？

そしてそのまた数日後。

俺達はガトウさんに本国の首都に呼び出された。

紅き翼の協力者で、会わせたい人がいるんだってさ。

「協力者？」

「そつだ」

そこで髭のおっさんが姿を現した。
誰？

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう」

この人以外にお茶目？

「主賓はあちらのお方だ」

そう言つて爺さんは俺達の目を階段に向けさせる。
誰か上がってくるな。

「ウエスペルタティア王国……アリカ王女」

「……………」

フードをかぶつた金髪美女が階段を上つてきた。
お姫様が協力者……どうなんだろう。
強くは無いから何かの役に立つんだろう。

ところでナギさん、無言でお姫様を見つめてどうしました？
女性を見つめては失礼だってガトウさんが言つてた気がしないでもないけど。

まあどっちでもいいか。

お姫様もナギさんの方見てるし。

……はあ。

修行し過ぎで腹減つた。

第0話 弟子入り（後書き）

腰を痛めたと思ったら書いていた。
全く関係なかった。

転生最強系がばかりだったので、普通に結構強い主人公で頑張りたいです。

第一話 無鉄砲な英雄（ただし赤毛に限る）

「休暇？」

「ああ。ま、たまには休むのもいいだろう」

「タカミチ達はどこにいったんです？」

「んあ？ あいつらは情報収集だ。どっちにしろ俺たちじゃ役にたたねーだろ」

「……そうですね」

どうせ頭そんなに良くないもんな、俺達。

そんじゃあ修行するか。

師匠はマジでバカンス楽しんでる感じだけど。

俺は時間が惜しいしな。

何回も戦場に連れだされて、命がいくつあっても足りやしない。

「今日は狗神の応用から——」

第一話 無鉄砲な英雄（ただし赤毛に限る）

『完全なる世界』ってのは中々に厄介な組織らしい。

一緒に色々調べてたタカミチが言うには、いろんなところの国の内部に入り込んで根を張っているんだとか。

俺は頭を使うのは苦手だからゴチャゴチャしたのはわからないけど、正面からぶつ壊せないというのは理解できた。

だいたい、それで何とかなるならなんとかしてるだろう。

そんなこんなで修行漬けで休暇が終わった。

ナギさんがお姫様を連れて敵の本拠地をぶつ潰しにいったらしいけど、何事も無かった。

それくらいやるのがナギさんらしい。全員のだいたいの性格くらいは把握している。

ついでにその時証拠を発見してきたらしい。

幸運すぎるでしょ。俺にもその幸運を分けて欲しい。

でもその件で詠春さんにナギさんは怒られている。

俺が部屋の隅っこでアホみたいな大きさのダンベルを持たされている横で、くどくど説教するのはやめて欲しい。

せめて他の部屋でやってほしかった。

まあ、この部屋で始めさせたのは師匠だから仕方ないけど。

「詠春さん！」

そこへタカミチが飛び込んできた。

「あの怖い冷血お姫様が今廊下で僕に向かってニッコリ……僕ビツクリしちゃって……あ、なんかナギさんにお礼を伝えて、だそうで

す。確かに笑いましたよねっ！」

「うむ。驚いたのじゃ」

タカミチ、お前はまず落ち着け。

でもゼクトさんが驚いた顔してるってことはそこまで珍しいものだったのか。

……お前らもまた幸運の持ち主か。

いやまあ、別に笑顔が見たかったわけじゃないけど。

で、その証拠は戦争を終わらせる証拠になるし、姫様本来の目的である戦争終結に役立つらしい。

そんな訳でナギさん達は証拠を持って法務官とやらの証拠を見せに行くことになったのだが……

「なんで俺が姫様について行かなきゃならないんだー！」

「あ？　だってお前ここにいてもやることねーだろ？」

「いやまあそうだけど……クルトかタカミチでもいかせりゃいいだろ！」

「あの子たちは忙しいですからねえ。頭もいいですし」

「ぬああああー！」

お姫様が帝国の第三王女つてのと停戦の交渉しに行くんだろ？
やることないからつてついてつても、本当にやること無くなるぞ！
第一、俺にはお姫様のあの空気には耐えられない！

「まあ、社会見学ですかねえ……？」

いやいやアルさんそれは無いでしょう。

「社会見学じゃな」

ゼクトさん、あんたまでそんなこと言うのか。

「そうだな。アリウスは少々……言いたくないけどラカンに似てバカだから少し学んできた方がいい」

詠春さん、それ露骨に師匠の事も馬鹿つて言ってますよね。

俺もそう思うけど。というかどう学ぶんだ。俺は自覚してるけど。

「まあ気軽に行ってこいや」

師匠……俺はもう諦めた。

ヘラヘラ笑ってる顔を殴りたくなつたけど諦めた。

「まあ、危険は無いと思うし。アリウスも頑張つてね」

だってタカミチが既に笑顔で行つてらっしゃいムードだ。
何を頑張れと言っただ。

俺がやることなんて何もないだろ。

ナギさんはお姫様と喋ってるし。

また頬をひつ叩かれたし。

大変ですねナギさん。でもたぶんあんたが原因なところが多いと思う。

そしてそんなお姫様と、俺はしばらくいることになるんだから機嫌を悪くさせないでほしい。

俺がとばっちりを食らうんだからさ。絶対に。

結局。

俺はボロ船（ナギさん命名）に乗ってお姫さまについていくことになった。

名目的には、『護衛』らしい。

師匠が言うには、『今なら正規兵ぐらいなら余裕じゃね？』だそうな。

そりゃあんたに戦場に無理やり連れられて行ったんだから、それくらい強くなってなきゃ困る。

自分としては大量に来られたら全然勝てる気しないけど、何とかなると思いたい。

何も起きないことを祈るのみだ。

——道中——

「うむ……犬、名は何といったかの？」

「なんで犬なんだ！　俺はアリウスだ！……ですよ姫様」

「お主、敬語を話せんのなら別にせんでもよいぞ」

行く寸前までタカミチに言い聞かされてたんだよ！

アリウスは敬語苦手だからねえ、とか言いやがって。

元々気性は荒い方だし馬鹿だし仕方ねえだろコンチクショー！

「で、護衛という面目なんじゃから少しは強いんじゃないかな」

「そりゃー師匠に毎日訓練されてるし。正規兵には負けなと思うけど」

「まあ、何かあつたら頼んだぞ」

……姫様。それ、露骨に何かあると思っただけですか？

というかそんなに頼みにされても困りますよ。俺はナギさんでも師匠でもねーんですから。

マジでやめてくれよ。頼むから。何も起きないでくれ。

——交渉の場にて——

「あれが帝国の第三王女だよ」

正直、交渉する相手にはとても見えない。

まだまだ子供過ぎる気がするんだけど……頭のいい連中の考えることはわかんねえな。

二人が交渉する間、俺は第三王女……テオドラだかの護衛（角生え

た強そうなおっさん）と一緒に部屋の外で待機している。
なんで俺なんかが護衛役なんだろうとこちらを訝しげに見ている。
そんな目で見えるあんたはきつとまともなんだろうなあ……

で、交渉開始して10分くらい経った頃。

どうにも嫌な予感がする。

犬の耳と鼻にピンピン来る。

どうやら隣のおっさんもなんか感じたらしく身構えている。

「これ、まずいんじゃない？」

「ああ。そのようだ。姫様達に知らせ……っ!？」

「魔法の矢!？」

「坊主! お前は姫さん達連れてさっさと逃げろ!」

魔法の矢が何十本も、遠くに見える通路の角から飛んできた。それをおっさんが魔法障壁を展開して受け止める。

それで敵の隠蔽の魔法が切れたのか、何人もの兵が姿を現す。
こりゃまずい。

俺はおっさんの言葉に素直に従うことにした。

「姫様っ! 襲撃です!」

「……まさか本当に襲撃されるとはのう」

「のんきに言ってる場合じゃないですよ! さっさと逃げましょう!」

「アリウス、お主護衛なんじゃから何とかなんのか？」

「俺にナギさんと同じ成果を期待しないでください！ 多勢に無勢です！」

俺は無駄に耳がいいから聞こえちまうんだよ！

おそらく姿と一緒に足音とかも全部隠蔽してあったんだろうが、今ではその必要も無いと感じたんだろう。何十人規模の足音が聞こえてくる。

外の人がメチャ強いとかじゃない限りは無理だ。

「待たぬか！」

「ん？」

「妾にも少しは説明せんか！」

「……姫様？」

「お主がせい、面倒じゃからな」

さいですか。

さつさと逃げねばならんで時間が惜しいんだが。

「このままここにいたら捕まっちまうってことだよ！ 時間が無いから話は後だ！ 姫様、この部屋隠し通路ありましたよね？」

「うむ。こつちじゃ」

「なんじゃその態度は……わひゃっ!？」

うるさいテオドラ王女を引っ搦んで背中に背負って、後ろからアリカ姫に指示されたとおりに隠し通路を走る。

なかなかに入り組んでいるけど、ここに来る前に全部覚えたんだろうか。

そうだとしたらメチャ頭いいんじゃないだろうか。

「の、のお主。名前は何と言うのじゃ？」

「俺はアリウスだよ。テオドラ王女殿？　ってか話しかけないでくれよ。今そんな状況じゃねえって」

「妾の護衛はどうしたのじゃ？」

「あゝもう。あのおっさんは俺達に先に行ってくれてさ！　漢だね、全く」

「アリウス。次は右じゃ」

「了解！」

そろそろ外の匂いがしてきた。

一応、敵の気配はしないが……俺はまだ隠蔽魔法を遠くから見破れるほどの実力は無い。
それが気がかりだが……

「出口じゃ。他に道は無いから、ここからしか出れぬ」

「やっぱそうだよな……ハア」

こういうことはナギさんとか、強い人たちがやるべきことだろう。無論そのうち追いつく気ではあるが、そういう強い人たちなら考えなしでも突っ切れるのだし。

考えても仕方ない。元々考えて行動するタイプじゃなし。行こう。

「で、結局というかやっぱりこうなるのか」

「ふむ、まあ予測はしておったがの」

「か、囲まれてしまったではないか！ アリウス、なんとかせぬか！」

「頭叩くな！ …… たく、どうしろってんだこの状況」

人が一人やつと通れる出口から出てみれば、最後の姫様が出てきた途端に15人の兵が姿を現した。

連合でも帝国でもない鎧だが…… さてはて。真ん中の大きな鎧が一步前に出て言った。

「大人しく投降しろ」

「お主らは一体どこの兵じゃ？」

「大人しく投降しろ」

「無視かコノヤロー」

「大人しく投降しろ」

もうやだこいつ。

絶対にまともじゃない。

「とりあえずやるだけやってみるので、姫様達は通路に戻ってください」

「無理ではなかったのか？」

「やらないよりやってみた方がいいでしょ」

「……ふむ、そうじゃな」

姫様が頷くのを待つて、テオドラ王女を出てきた通路に投げ入れる。なんか声がしたけど関係ない。怒った声がしたけど関係ない。姫様が通路に入ろうとしたところで、俺は敵が動き始めるのを見た。捕縛の魔法の矢を放ってくるが、狗神を複数放って相殺させる。そしてそのまま瞬間を使って動き始めた兵たちの中に突撃する。

「オラア！」

「ぐう……！？」

兵の一人に狗神を纏った拳を思い切り叩きつけると、ぐぐもった様な声を発して吹き飛んだ。

周りの兵が剣を突きたてようとするが、子どもゆえの背の低さが役に立った。

そのままさらに姿勢を低くし、数人に足払いをかけて転ばせ、そのまま狗神を放って吹き飛ばす。

背後から振り下ろされる剣を察知して、少し横に動いて思い切りオ

ーバーヘッドキックをくらわせる。

そこまでやって、俺は一度瞬動を使って距離をとった。

俺の少し前方、先程までいたところに紅蓮の炎が発生する。

炎系の中級魔法だろう。

避けなかったらダメージを負ってるところだ。

この後も戦闘があるかもしれないからには少しでも楽に切り抜けた
い。

しかし、さらに敵に増援が到着した。

数はおよそ30人。

無理だつて。

ガキ一人にマジにならないでくれ頼むから。

俺はため息をつくと、やけくそとばかりに狗神を放って攻撃を開始
した。

十分後、そこにはボロボロの俺が立っていた。

無論、敵はきっちり全員倒した。

時間が惜しいのに、ここで十分も使っちゃった。

さつさと逃げなきゃまずいつてのに。

師匠、これ社会見学とかいうレベルじゃねえっす。

「姫様あー！ 敵は全員……あろ？」

なんだ？ これ。霧？

急激に眠気が……

俺は地面に倒れた。

「姫は確保したか」

「はっ！ 帝国の第三王女も同時に確保しました！ こいつはどうしますか？」

「紅き翼に所属しているガキだ。一応捕まえておけ。無論、力は使えないようにしておけよ」

「はっ！」

どこからか声が……

あ、そうだ。

これ、確か眠りの……霧……

そこで俺は意識を失った。

第一話 無鉄砲な英雄（ただし赤毛に限る）（後書き）

あとがき

最後は結局こうなる。

あっけなく捕まるのがウルフガイクオリティ。

ヒロインはきつとあの人。

第二話 忘れられてる哀れな子（前書き）

タイトルの意味は最後にならないと絶対にわからないと思う。
まあ今回の最後まで読めば絶対にわかるけど。

第二話 忘れられてる哀れな子

「なんでお主はあっけなく捕まっておるのじゃ。情けないのう」

「うるっせーな！ テオドラだって姫様と一緒にあっけなく捕まってるだろうが！ 俺よりも先に！」

「お主がさつさと敵を片付けんからじゃろうが！」

「人に戦わしといてなんだとこの野郎！」

「やめぬか！」

バチーン！

「ぐはっ！ 何で俺だけ……」

というか何であんたのビンタこんな強いんですかお姫様……
今は気とか使えないからモロに……ガクッ

「ちとやりすぎたかのう……」

「アリウスー！ 目を覚まさぬかー！ まだ妾の話は終わっておらぬぞー！」

「痛い痛い痛いー！ 頬をつねるな引つ張るな！ お返しだこの野郎！」

「ふぁ！ ふぁにふぁふるのひゃ！」

「うるせー！ 弄り回してやるぜテオドラア！ オラオラオラア！」

「ひゃふ！ わふ！ ひゃめるのひゃー！」

「やべえ癖になってきた」

「ひゃふ~~~~！」

「うるさい！ 静かにせぬか！」

「ぐへぁ！」

やっぱりこうなるのか……

世界を狙える右だった……ぜ……ガクッ。

第二話

俺達が捕えられてから何日かが経った。

テオドラをいちいち王女とつけて呼ぶのは何か腹立ったので呼び捨てにした。

あと、正直暇なので腹筋やら腕立て伏せやらで体を鍛えることにした。

鍛えることにしたのはいいんだが……

「何故背に乗る。重い。すごく重い」

「女子に重いなどと言うのは失礼じゃと教わらんかったのか？」

「うるせえ。重いもんは重い！」

腕立て伏せ……それも片腕だけでやってるからキツイキツイ。
というか年代的に同じくらいの体格なんだからキツイんだよ！
ボキッと逝っても知らねえぞ！

「いつまでここに閉じ込めておく気なのかのう……外の情勢がわかればよいのじゃが」

「あゝそうっすね」

「そうじゃの」

暇すぎてこうやって話すくらいしかできない。
だから姫様と話すのもだいぶ慣れてきた。
……まだちょっと慣れてないが。

「まあそのうち我が騎士が助けに来るはずじゃ」

「ナギさんの事ですか？ 俺もそう思います」

「あの噂の『紅き翼』か。それは期待できるのう。早く来てほしいものじゃ」

「俺、一応『紅き翼』に所属してることになってるんだけど――」

弟子として。

タカミチも同じ扱いだし。

「早く来ないかのう」

「無視かつ！ いじけるぞチクショー！」

更に十数日後

ドガン！

俺達が閉じ込められてた部屋の壁が吹き飛んだ。

そこにいたのはやっぱりナギさん。後ろに詠春さんも立っている。ちなみに俺はその時、テオドラを背に乗っけて腕立て伏せをしていた。

「よお。来たぜ姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

あれ？

師匠はいないんですか？

立ちあがった俺の視線を感じた詠春さんが答えてくれた。

「アリウス、ラカンなら攪乱行動中だ。……やりすぎてるが」

「ああ、この爆音は師匠か」

「まあ、問題ないだろう。それより行くぞ。そちらは……」

「帝国の第三王女のテオドラ」

「彼女が……同じ場所に捕えられていたのか……」

俺はテオドラに後ろから犬耳をいじられている。
もう慣れた。慣れたったら慣れた。

「まあ、一緒に連れて行こう」

「ここに残したら可哀そうですもんね」

「あたりまえじゃ。妾をおいて行くなど許さんぞ」

わかったから耳を障るのやめれ。

背伸びしてまでいじりたいのかお前。

「この感触が……」

よっしわかった後でお前の頬を引っ張って遊んでやろう。

ナギさんが姫様を抱えたのを見て俺はテオドラを背負い、脱出のため走り始めた。

さすがに耳を引っ張るのは自重してくれた。いやまあ、危ないしな。

ともかく、意外と早く脱出することができた。

紅き翼の秘密基地へと向かう最中で、俺と師匠はとても感動的とは思えない再会を果たした。

「なんで捕まってやがる！ 修行を増やしてやるぜ！」

「痛い！ 再会した途端に殴るな！」

「まあ、無事でよかったよかった」

「先にそつち言えよ！」

こんな感じである。

ひどい、さすが師匠。だいたい予想してた。

俺も染まったな……

そんなこんなで秘密基地到着と共にテオドラが言った言葉。

「何だ。これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！ どんな所かと思えば掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してやがんだこのジャリは」

「ってか秘密基地何だから当たり前じゃねえか」

辛辣な言葉を口にした師匠と俺は決して悪くない。
だって腹立ったのだ。仕方ない。
相手テオドラだし、別にいいでしょ。

「貴様無礼であろう！」

「うるへー！ 散々人の耳を弄りやがって！ こっしてやる！」

「ひゃめっ、ひゃめんかばかもの！」

「うはは。うりうり」

「よっしゃアリウス！ もっとやってやれ！」

「イエッサー師匠！」

「ひはまらー！」

「何言ってるかわかんねえぜ！」

師匠からも了承を得たので念入りにいじってやるぜ。
屈辱を味わうがいい。うははは。

「いいのか？ あれ？ 第三王女と聞いたんだが」

「フフ、微笑ましいじゃないですか」

「おい、聞こえてるぞこら」

「ジャックも混ざればいいじゃないですか」

「放置した方が面白そうじゃね？」

「……確かにそうですね」

ぬう、いつの間に俺の耳を掴んだテオドラ！
やるな！ ならば俺も頬ではなく耳を掴んでやる！

「うりうり」

「ほれほれ」

「……」

「……」

「耳は慣れてないだろう」

「っ！？」

「俺の勝ちだ！」

「うっうっうっ」

「うはははは！ うりうりうりうり」

調子に乗ってたら途中で師匠に拳骨もらった。

今シリアスだから空気読め、らしい。

そう言われてテオドラと二人並んで姫様の方を向く。

「連合に帝国……そして我がオステイア……全てが敵というわけじやな。じゃが……主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

考えてみれば、これは世界を巻き込んだ戦争だ。

俺はそんな中に身を置いてるのか。すごく感慨深い。

「世界全てが敵——良いではないか。こちらの数はたったの八人。だが最強の八人じゃ」

いや姫様。

俺とタカミチは弱いですし、何よりクルト忘れてます。

……やっべ。そっぴゃクルトまだ姫様に直接会ってねえや。クルトどんまい。

「我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ」

「やれやれ。相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」

ナギさんはやはりかつこよかった。

世界を救うと豪語する姫様に騎士として膝をつく姿はすごく絵になっていた。

まさに英雄という姿だった。

師匠がこれやつても絶対に似合わないだろうな。

くねぐねも口に出さないように注意しつつそう思った。

そして、紅き翼の反撃が始まる。

第二話 忘れられてる哀れな子（後書き）

すかっとなんてさせない。

ヒロイン丸わかりな件について。

だってそう言うものでしょう。

テオドラが好き過ぎるから仕方ない。ヒャッハー！

テオドLOVEってタグつけてみるか。

新しいけど、皆引きそうだからやめとこう。

第三話 いろいろな出来事の終わり（前書き）

呼び方が変わるのは、
呼ぶ相手の役職や好感度、尊敬度が変わっているためです。

第三話 いろいろな出来事の終わり

簡単とは言い難いが、紅き翼の反撃はとにかく順調だった。

姫様と（認めたくないけど）テオドラのおかげで見方も徐々に増えたからだ。

そして紅き翼なら、誰が敵でどこに拠点があるかさえわかれば、ケタ違いの火力で殲滅することができる。

だからこそどんどん敵を追い詰めていくことができたのだ。

俺か？

俺は師匠に戦場に連れてかれるか、テオドラのお守りをしてたりとかだ。

あのお転婆王女は普段からとてつもなく危なっかしいので、俺が面倒を見ると言われたのだ。

何故俺が、と言うと、アルさんに小一時間ほど『OHANASHI』されて仕方なく頷いた。

理詰めの説教と言う物ほど厄介な物は無いと実感した。

結局、俺はテオドラのお守りで帝国にまでついてった。

毎回思うんだが、俺を交渉の場に連れてっても全く意味無いと思うんだけどね。

10代前半なガキに何を期待してるんだ。
やれやれだぜ。

第三話

そんなこんなで六カ月が去った。

その間には、俺がテオドラに引つ張り回されてストレスで寝込む程の苦労があつたが、面倒なので割愛する。

とにかく大変ではあつたが、それだけの苦労をした甲斐はあつた。遂に敵を追い詰めたのだ。

……俺何もやってないんだけどな！

だつて偶に師匠に戦場に連れていかれても、やることなんてほとんどない。

せいぜい師匠が倒さなかつた余りを倒すだけだ。テオドラと一緒にいてもぎゃーぎゃー言い合つてるだけだし。

まあ、タカミチも活躍してなかつたので良しとしよう。

そんなこんなで紅き翼とその味方となつた帝国・連合・アリアドネーの正規兵以外で作られた混成部隊が結集し、オスティアの奥深くにある『墓守り人の宮殿』で決戦が行われようとしていた。

で、俺が何してるかと言つと……

「何でここにいろんだろうねえ俺達。タカミチもそう思わねえ？」

「仕方ないよアリウス。僕たちが言つても足手纏いにしかならないんだから」

「まあそうなんだけどね」

待合室つばいところでソファーに座ってだべる俺と、心配そうに部屋をうろろろするタカミチ。

決戦の予定時間をあらかじめ聞いていて、既に間に合わないかわかったから焦ってやがるな。

焦ってもしかたないというに。

俺はウロウロするタカミチの横で紅茶を飲みながらそう思った。

それからしばらく経ってテオドラが部屋から出て来た。

そしてそのまま突進&ダイブをかましてきた。

角が腹に刺さった。打撃的な意味で。

「な、に、を、しやがるっ！」

「説得成功じゃ！ 妾たちも出陣するぞ！」

「急げばまだ間に合う時間だ！ アリウスも出発の準備を！」

「タカミチお前少しは俺を心配しろよ！」

「いつものことだし、大丈夫でしょ？」

案外ひどいなお前！

最近じゃ慣れっただけださ！

まあいい。とにかく説得は成功したんだろう。さっさと行こうや。

「行くぞお主ら！ ついてくるのじゃ！」

「へへへ、行きますよーっと」

「今行きますす！」

どうでもいいがタカミチ。
お前は熱過ぎる。

そして戦場へ着く直前。

「決着はもう着いたと?」

「そつみただけど……様子がおかしいよ」

「……嫌な予感バリバリだ」

「奇遇だね。僕も感じるよ」

今日はタカミチと気が合う日だ。

そして一気にモニター内で変化が起こった。

ナギさんや師匠がいる『墓守り人の迷宮』に、巨大な光球が発生したのだ。

このまま放っておくと世界が滅亡するらしい。

微妙に手遅れだったようだ。

「え!?! どーすんだよコレ!」

「心配はいらぬぞアリウス。そのために妾たちは来たのじゃからな」

無駄に自信満々なテオドラ。

言われてみればそうだった。そのために来たんだよ。

デツキにいる人達も頷いている。

「ハハハハッ！ 行くぞ皆の者！ 力を合わせてあの光球を止めるのじゃ！」

「ハハハッ！ 姫様！」

各国の艦隊が一丸となって協力し合い、その光球の膨張を止めるために数多くの魔方阵が展開される。

そしてその魔方阵によって光球は抑え込まれて次第に収縮していく。

こうして世界は救われた。

他でもないこの世界の住人の、みんなの力で。

「師匠！？ 腕！ 腕どうしたんですか！？」

「ああこれか？ ちょっと怪我した」

「ちょっとってレベルじゃないだろそれ！ 包帯グルグル巻きで！ 腕吹っ飛んだって聞きましたよ！？」

「今はくつついてるから問題ねえだろ」

「絶対に問題あるって！ ていうか治るのはええよ！」

「気にしねえでアリウスも飲め！ 師匠命令だ！」

「子供に酒飲ます気が！」

酒場にてパーティーが行われて、俺は師匠に無理矢理酒を飲まされた。

俺は元々酒に強かったのか酔っぱらうことは無くて幸運だった。酔っぱらったら何されるかわからんし。

とにかく世界の危機は去ることになったし、大戦も終わって記念式典まで即座に行われた。

タカミチは何か思うところがあるみたいでアルさんにいろいろ質問しているが、俺は興味ないので大人しくジュースでも飲んでることにする。

ジュースを飲んで周りを見回していると、ナギさんが妙に沈んでいる。

何かあったんだろうか。

「おう、どうした英雄さんよ。暗えな。……女か？」

「ちげーよバーカ」

師匠空気呼んでください。

そこ話しかけるとこじゃねえと思う。

「あーハイハイアリカ姫な。アリカ姫じゃしょーがねえ。そーだろそーだろ。ありゃいい女だ、無理もねえぜ。照れるな少年素直になれよお？」

ピキッ

ナギさんがついに師匠を殴った。
当たり前だ師匠。自重しろ。

「……おめえ、残ってもいいんだぜ？どーせメガロにや義理もねーし。正式には俺達まだお尋ね者だしよ」

「ちげーつての」

……なんかシリアスな空気が入り始めたので退散しよう。
聞いたらまずい事まで耳に入れそうだ。

まあ……あのお姫様の父王が『完全なる世界』の傀儡で、姫様がク
ーデターみたいな形で女王になったっていうのは聞こえてきしまっ
たけど……それくらいならいいよな。

俺は酒場を出ることにした。

なんか酒臭くて酒臭くてしょうがなかったのだ。
鼻が良すぎるというのも大変である。

ガヤガヤとそこら中がうるさい街を抜け、式典が行われた宮殿の方
までやってきた。

離宮とはいえ、宮殿と言っただけあつてすばらしく立派だ。

ここまで来るとさすがに人の喧騒も聞こえなくなり、紙吹雪やらが
舞っている街の景色がよく見える。

「あゝ落ち着く。やっぱ外は風が気持ちいいな」

戦争も終わってワタワタと動き回るようなことも無いだろうしな。
でも、戦争が終わったら俺は何をすりゃいいのかね。

修行くらいしかないか。今は少しでも強くなつて――

「おお！ アリウス、お主こんなところにおつたのか。何しておるんじゃ？」

「……テオドラか。別に何もやってねーよ。皆酒臭くて居づらくなつたから外に出てきたんだ。それでここで景色でも眺めようと思つてな」

「ほ、ほう。そうなのか。大変じゃつたの」

「俺は鼻がいいからな。余計にだ」

タカミチは今頃酔わされてるかもしれないけどな。

俺は黒い笑いを心の中で浮かべた。

最近俺の扱いがひどかった仕返しだ。ざまみろタカミチ。

「ところで、これからお主らはどうするのじゃ？」

「わからん」

「いや、わからんってないじゃろっ」

いつの間にか俺の横で手すりに体を預けるテオドラに即答する。それに対して反論されるが、本当にわからんのだから仕方ない。

「俺は修行をつけてくれる師匠についてくださ。他に行く場所なんてどうせないしな」

「行く場所が無いとは……それはどういうことじゃ？」

「そのまんま。故郷の村が焼かれたからね。まあ一度は出て行った村だけど、俺も一応戦災孤児ってことになるのか」

「……悪いことを聞いたのう」

「気にしなくてもいいぞ。両親が死んだのはもつと昔のことだから、村が焼かれたことに関しては余り気にしてないからな」

「それならば、よいのじゃがな……」

俯くなテオドラ。

景色が……というか空気が重くなる。

「俯くのをやめてくれ。お前が元気を出してくれないと困る。せっかく外に出てきたんだぞ？」

「……うむ。すまんかったの。妾も休憩にとここまで来たのじゃ。暗い気分でおつては確かに損だし」

「わかりやあいんだよ」

顔をあげたテオドラと二人で街の景色を眺める。

紙吹雪が舞い、生命の輝きがあふれる、眼下にあるそんな街をただ眺める。

「と、ところでアリウス。お主に褒美があるのじゃ」

「褒美？」

「うむ。お主は戦争中ずっと妾のそばにいてくれたからのう」

「まあ……そうだな」

「それでじゃ、お主になら妾の初めてのパ『姫様っ！』クティ……
なんじやいいところで！」

「オスティアの全島が崩落し始めています。まず間違いなくオスティアは亡びること！」

「「何だ（じゃ）と！」」

「この離宮島も危ないかもしれません。急ぎ離脱を！」

オスティアが落ちる……？

あの光球を防いで世界が終らなくても、近くの場所には影響があったってことか？

タカミチとかならもつと詳しく推理するだろうが……

「テオドラ！ 俺はタカミチ達と合流する！ お前さんはさっさと逃げるんだな！」

「待たぬか！ 妾はお主に褒美を——」

「後回しにしてくれ！ 貰えるもんは貰う性格だから絶対に後で取り立てに行くから覚えとけよ！」

テオドラの答えを聞かずに街へ飛び出す。
空を飛んでいた船は全て消えている。港へと向かって人々の回収でもするんだろう。

とにもかくにもナギさんや師匠、タカミチのところに行かなきゃ……

俺は耳と鼻を最大限に働かせ、さっきまで皆がいた酒場まで一目散に駆けた。

あの後無事に紅き翼の面々と合流した俺は、今まで使ってきたボロ船に皆と乗り込んでオスティアを脱しようとしていた。

ズズンとか、ドドドドとか、何かが崩れ落ちる音が絶え間なく外から聞こえてくる。

クルトの姿が見えないが……どうせアリカ姫（今では女王か）のところにいるんだろう。

アリカ様の船と通信を繋ぎ、ナギさんが怒鳴った。

「ゴルアアーツ！　こんのバカ姫！　やいアリカてめえっ！　どういうこったコレは！？」

『ナギ……』

ナギさんはオスティアが崩落することを知らず、アリカ様はそれを知っていて、その後に自分がどうなるかもほとんどわかっていたのだろう。

アリカ様がナギさんを突き放すような言葉を言い、通信を切って去ろうとする。

それを見て、モニターの傍らに写っていたクルトがあわててこちらに言った。

曰く、今はアリカ様の言うとおりに。身を隠して事態が好転するのを待てと。

こうして、空中王都オスティアは地図から消えることになった。

それから二ヶ月後。

アリカ女王は逮捕拘束され、即座に二年後の処刑が決定した。

ガトウさんが言っていた。

それはメガロメセンブリアの爺さん連中の陰謀であるが、同時に不毛な戦争に疲れ果てていた人々は、全ての不満と憎しみをぶつけられる生贄として彼女を選んだのだと。

そして、更に二年の歳月が過ぎた。

紅き翼（俺達）は各地の紛争地域を回って人々を救うことに従事していた。

俺もこの二年でかなり強くなったので、前線に立たせてもらえるようになった。

さすがに師匠ほどのアホみたいな強さは無いけど、今では昔の自分では考えられないほど強くなることができた。

どれくらいの敵なら倒せるのか聞いてみたところ、竜種の上位種なんかも今なら勝てるんじゃないかね？とのこと。

強さを数字で表すというのがあったけど、言わないで置いてもらっ

た。

少なくとも自分が強くなったと確信できるようになるまでは、そういうのは保留しておきたい。

そんな各地を飛び回っている毎日の中、シルチス亜大陸の紛争地帯に來ている時にクルトから連絡があつた。

あいつはずっと本国の方アリカ様を助け出す機会をうかがおうと働いているらしい。

そんなあいつが掴んだ情報は、アリカ女王の処刑の日についてだった。

「アリカ様の処刑が10日後に行われる！？ それは本当かクルト君！」

『ハ、ハイ……』

モニターに写るクルトは必死な顔をしている。

本当に焦り、なんとかしなければと思ひ悩んでいる顔だった。

『おそらくアリカ様は……自らの選択を今も悔い、絶望の底にいるのだと思います』

そしてクルトがアリカ様の言葉を伝える。

【妾が多くの憎しみを引き受けて処刑されることで、世にある不幸を少しでも減らせるのなら本望じゃ。このまま……捨て置いてくれクルト……】

どうやら姫様はクルトの言ったとおり諦めてしまっているようだ。それを聞いてナギさんの方を見る。

どう反応するだろう。

この二年、ナギさんは微妙に心ここにあらずと言った感じだった。それにはたぶんアリカ様が関係しているはずだ。

「なるほど……あのバカ姫らしいセリフだな……」

『!?!』

クルトの顔が驚愕に歪む。

『「なるほど」って……ナギ！救出に行かないつもりですか！』

「クルト！」

クルトが激高するのをタカミチが止めようとするがクルトは止まらない。

ナギさんが「女一人を救ってる暇があったら一人でも多くの無辜の民を救う」とアリカ様に言われて、それを実行すると言ってもクルトは怒りがおさまらないようだった。

『見損ないましたよナギッ！ あなたの今の力と名声があればもっと大きく世界に関われるはずですよ！ それをなぜこんな地味な活動を続けるんです！？ それで世界の何が変わえられるというんです！』

クルトは大战終結の間際では姫様のサポート役としてずっとそばにいた。

だから色々汚いものやらを見てしまったんだろう。

どうでもいいけど、怒鳴ってるクルトの顔はレアだ。

そんな珍しい顔を最後まで変えることなく、クルトは通信を切ったのだった。

ナギさんは黙って怪我をした女の子の治癒を。
タカミチはモニターがあつたところを見つめ。
詠春さんは渋い顔をして目を瞑っている。
クルトの事で思うところがあるのか、姫様の事で思うところがあるのか。

十日後の、処刑の日になったらどうするかはもう決めてあるそうだが、クルトには伝えるのが遅くなってしまうそうだが。
クルトも難儀なもんだな。全く。

そして十日後。

アリカ女王処刑の日が遂にやってきた。

場所は谷底で魔獣が蠢くケルベラス渓谷。

谷底では魔法も気も使えず、さらには魔獣が蠢いているため、死の谷とまで呼ばれている。

そこにアリカ様を突き落とそうというわけだ。

現在、俺は兵隊に変装して谷底へと落ちていくアリカ様を見ている。
谷底にはナギさんがいて、ギリギリで救出するだろう。

まあ不確定要素が多すぎるかもしれないが、俺はナギさんならやるだろうと思う。

さて、そろそろ師匠が動きだすだろう。

「よおーっし、こんなモンだろ」 録れたか？ ちゃんと録れたか？
よおーし御苦労ッ♪ おーいおっさん、これ生中継とかじゃ

ねえよな？」

「な……無礼者！ 何者だ貴様、名を……」

「おっさん」

ガツシイ

突然に一人の大柄な兵士が喋り出し、それを注意した偉そうな魔法使いの頭を鷲掴みにした。

中身は、大体言動とかで察しが付くだろぅが我が師匠である。

「ぬぐう！？」

「録画はここで終わりだ。で、今からここで起きることは「無かった」ことになる。わかるな？ おいアリウス！」

「わかった」

録画のためのマジックアイテムを持ってた魔法使いをぶん殴って、それを取り上げる。

「き、貴様らは……」

「ぬんっ！」

着る前から暑苦しいと言っていた鎧を一息で吹き飛ばし、中から姿を現す師匠。

ついでに上半身の服まで吹き飛んだ。

「せ、千の刃の……ジジャ……ジャックラカン……ッ!?」

さらに続々と姿を現す紅き翼の面々。

「青山……詠春ッ!」

「アルビレオ・イマ!」

「ガ……ガトウ!」

「紅き翼……馬鹿なッ! では谷底の女王は……」

今頃ナギさんが助け出してるだろうよ、爺さん。

うまくいってると思ってたのにどんでん返しされるとかどんな気持ち?

ざまあみると言いたい。言わないけど。

「ぐ……。だがいかな千の呪文の男とはいえあの谷底からは生きては……」

「それはどうかな? 魔力も気も使えないくらいで奴が死ぬかよ!」

同感です。

あの人、前にその使用を禁止して手合わせしてもらったのに、負けたのは俺だった。

種族的にも俺の方が身体能力高いはずなのに、だ。

まあそんなわけだから俺は一片たりとも心配しじゃない。

「捕えよ反逆者だ! 谷底の二人も逃がすな!」

「おおつとやるのか？ いいのかよその程度の戦力で」

「フ……その程度の戦力だと？ 愚か者が。このイベントの警備はここに見えるだけではない。周囲数十キロ二個艦隊三千名の精鋭部隊が包囲している。いくら貴様らでもこれを……」

「だから、その程度の戦力で、いいのかって聞いてんだよ」

「なっ……何!？」

偉そうな魔法使いが驚愕の声をあげた途端、辺り一帯がはじけ飛んだ。

吹き飛んだと言った方がいいかもしれない。比喩表現無しに。

俺も跳びあがって無かったら結構危なかったよ。

「アリウス！ お前もやれると思ったら少しはやれよ！」

「わかってるよ師匠！」

俺も鬱憤を晴らさせてもらおう。

強さはまだまだ師匠達には及ばないが、こいつら相手なら十分おつりがくるからな。

張り切ってやるかあ！

大量の狗神を両腕にまとわりつかせ、俺は近くの兵に向かって攻撃を開始した。

しばらく経って、敵を殲滅し終わって一件落着と言ったところ。

ナギさんは無事にアリカ様を救出しているのを確認した。
だのにクルトはまだ納得いかないらしい。

「しかしっ……僕は納得できない！ これではアリカ様の名誉も！
MM元老院の虚偽も不正も！ 正されることは無い！

そう叫んで岩に拳を叩きつけるクルト。

俺もタカミチも互いに離れた位置でそれを見つめている。

「でもクルト、処刑執行日の前にアリカ様を助けてしまつては全て
元の木阿弥。ここで助けるしかなかったんだ」

「そうそう。まゝお前に伝えることができなかったのは悪かったけ
どさ」

「この二年間ナギだつて胸が張り裂けるような思いだったはずだよ。
アリカ様だつて……」

「僕はそんなことを言ってるんじゃない！僕は……」

「クルト、それは僕たちでやるんだ」

む？

タカミチの声がいつになくまじめだ。

段々こいつも雰囲気ガトウさんに似てきたな。

「おいおいタカミチ。そんなこと言われても俺は頭悪いから何もで
きないぜ？」

「元から期待してないよ」

「ひでえ！」

「アリウスはただ強くなってくればいいのさ。僕たちの中で一番強いんだから」

「そいつはありがとよ」

実際そうだしな。

修行に取れる時間が一番多いのは俺だったし。

はあ、でもあの言い方は無いだろうタカミチ。

「まあとりあえずクルト。今は悩んでも仕方ねえと思うぞ？」

「そうそう。いいじゃんか、今日のところはさ。ハッピーエンドってことで」

「……はあ、そんな風に考えられる君たちがうらやましいよ」

「そんなに褒めるなって」

「褒めてない！」

まあ、これでやっと平和に過ごせるってもんだな。

平和に修行漬け……あつてるのだろうか？

そっぴやテオドラから褒美をもらい忘れてたな。

まずはあいつのところにも行ってやるか。随分長いことあって無
い気がするし。

すこしは大人になってるといいんだがね……

おまけ

「アリウスには期待してないけど、帝国とのパイプには期待してるからね」

「はあ？」

「だってテオドラ様と……いや、言わないでおくよ」

「わけわからん」

第三話 いろいろな出来事の終わり（後書き）

あとがき

暴走天元突破。

主人公は鈍感です。

すごく鈍感です。

そしてバカです。

どしどしご感想をお書きください

第四話 仮契約とその後（前書き）

へ……

いい事を教えてやる……

仮契約ってのはなあ……原作でバカみたいにちゅっちゅやってるけどどう考えても重要なものはずなんだ！

第四話 仮契約とその後

アリカ様救出から三ヶ月ほどが経過した。

ナギさん達は詠春さんの故郷である旧世界の京都と言ったところに行くんだそう。

俺は師匠と魔法世界に残ることにした。

まあ京都の料理がうまいと聞いたので名残惜しくはあったが、魔法世界の闘技場で拳闘大会が開かれると聞いたので一時別れることにしたのだ。紛争も今のところは落ち着いているし、紅き翼もやることに無いわけだから。

ところで、皆と別れた後は師匠といたのだが、師匠はいつの間にか消えていた。

置き手紙にはちよつと旅に出ると書いてあったが、大丈夫だろうか。

……まあ大丈夫だろう。

拳闘大会のエントリーはまだ済ませてない。明日そのことで色々あるのだが……はあ。

今日はもう寝るか。

今俺は帝国の王都にある一軒家で暮らしている。

テオドラに交渉した結果、タダで手に入れた物だ。

なかなか快適な大きさの一軒家で、小型の竜一体が入るくらいの大きさはある。

タダじゃなかったら大変な値段だろう。王都で一軒家とか普通は買えないからな。

そんな俺は今テオドラに会いに来ていた。

「よう久しぶり。元気にしてたか？」

「……10日ぶりじゃのうアリウス。もう少し頻繁に訪れてくれると嬉しいんじゃないが」

「無理言つなよ。お前一応王女だろ？」

「一応は余計じゃ！」

「そう怒るなつて」

第四話 仮契約とその後

三ヶ月ほど前――

アリカ様救出作戦終了後、俺はテオドラに会いに行った。なにせその時は2年ぶりに顔を合わせた事になったので、「久しぶり」と声をかける前に出会いがしらで突進された。

まあ、2年の修行を経た俺は倒れずにそれを持ちこたえたが、さすがに痛かった。

そして何とかひき剥がすとテオドラから説教を食らうハメになった。「何で一回も連絡を取ろうとしなかった」だの、「少しは顔を見せて来い」だの、散々に言われまくった。

正直、会いに行くのを忘れてたとは言いだせなかった。

なんとかテオドラを宥めた後、俺は本題を言った。

「褒美をくれるんだろ？ 二年越しにだが貰いに来たぜ」

「……覚えていてくれたんじゃない？」

「当たり前だ。貰うものは貰うって言っただろ？」

「うむ、そうじゃな。そうじゃったな」

嬉しそうに頷くテオドラ。

何を喜んでいるのかわからんが、褒美は貰えるらしい。
それならいいんだ。それなら。

「で、褒美って何なんだ？」

「うむ。妾と仮契約をするのじゃ」

「……それが褒美？」

「うむ。光栄じゃろう？」

「帰らせてもらうわ」

「まっ、待たぬか！」

俺が背を向けてスタコラサッサと逃げ出す前に服を掴むテオドラ。
いや、仮契約って意味わかってるのかテオドラ？
だいたい俺は褒美って言ったらもつと金銭的な物とかを想定してたんだぞ？

「待て、わかったから。服を離してくれ」

「本当じゃな？」

「ああ」

服を離してもらったので大人しくテオドラに向き合う。

さすがに二年前に比べて体つきが女性らしくなり、背も伸びている。それでも二年の間に伸びた身長は俺の方が多かったらしく、俺よりも若干背が低い。

とどのつまり、文句なしの美少女が上目遣いでこちらを見つめてくるわけで。

「はぁ……それで、何で俺と仮契約なんかしようと思ったんだ？」

「お主以外に、妾のパートナーとなるにふさわしい者はおらんと思ってたからじゃ」

「……ストレートすぎるぞお前」

「アリウスが二年も待たせるのが悪いのじゃ」

それは確かに悪いとは思ってるが……

そうだと知ってたら待たせなかった……はずだ。

まあ、あの頃はまだまだ俺は弱かったから逆によかったのかもしれないが。

「俺はお前に認められるようなことをいっさいしたつもりはなかったんだが？」

「普段から努力を怠らず、それでいて妾が話しかければそちらを優先してくれたじやろう？ 何より、妾を王女ではなくテオドラとして接してくれた。だからこそアリウスならと思ったのじゃ」

「お前の事を王女だと思ってないのは結構いる気がするんだが……うちの師匠とか」

「あれは子供扱いしてるだけじゃ」

「……そうだな」

というより子供をからかうのが大好きなんだろうな。誰でも構わずからかうのはアルさんの役だし。

……ふむ。パートナーねえ。

「アリウスは妾が相手では嫌なのか？」

「……嫌じゃないさ」

そもそも散々しゃべくり合って喧嘩しあった仲だ。喧嘩と言っても他愛のない内容だったし、彼女と過ごす時間は楽しいものだった。

まあ少なくとも、親友であるタカミチとだべる時間と同じくらいかそれ以上に楽しかった。

これはテオドラが俺に対して抱く感情と同じものなのかはわからない。

だが、好きか嫌いかで言ったら迷わず好きだと答えよう。

「ならアリウスは妾の事が……す、好きなのか？」

「嫌いかどうかで言うなら、好きだ」

「なら、褒美を受け取ってくれるかの？」

「ああ。俺はテオドラとの仮契約を、褒美として受け取ろう」

「……意地悪じゃな」

「何とでも言えればいいさ」

今はまだ、はつきりしていない。

だが、関係が続けることでそれがわかるのならば、それはきつととてもいいことのように思える。

テオドラも今は『褒美』でいいということだろう。そう言ったのだから。ならば俺もそう答えておく。

「じゃあこの魔方陣の上に乗るのじゃ」

「……簡易型の使い捨て仮契約用魔方陣？　そういえばどつかで売ってるの見たな」

「さすがに王宮の専用施設を使うわけにもいかんからの」

「そうだな。王女がこっさりそういうことしたら大事件だ」

軽くおどけるように言って、部屋の中央に用意された魔方陣の上に立つ。

それに続きテオドラも俺の前へと移動する。

すると、魔方陣が淡く光り始めた。

仮契約の陣には微弱的興奮作用があると聞いたが、鼓動が早まるの

は本当らしい。

見ればテオドラも頬を赤くしている。

「それじゃあ……」

「う、うむ……いつでも良いぞ！」

少し背の低いテオドラに顔を近づけ、目を瞑った彼女と口付けをかわす。

「ん……」

「んむ……」

唇が触れあった瞬間、魔方陣から光が溢れる。
そして、口付けを終えた彼女の手には契約の証となるカードが姿を現していた。

「これでアリウスは私のパートナーじゃな！」

「まだ『仮』がつくんだけどな」

「そのうち『それ』は無くすつもりじゃ」

「……俺は何も聞かなかったことにしとく」

ああそうだ。

王女がそんなまずい発言したことなんか知らない。

俺が遠くを見ている間にテオドラはカードを二枚に増やしていた。

「ふむ……それより、仮契約カードじゃ。ほれ、コピーカードを渡しておくぞ」

「あ……ああ、ありがとう」

「それより、お主は凄い姿でカードに描かれておるぞ」

「はあ？ うわ、確かにこりやすげえ」

ニヤリと笑った口からは犬歯が覗き、焦げ茶色の髪は腰まで伸びて同色の犬耳が頭から生えている。

最近さらに顕著になった筋肉質の上半身を晒し、左手をズボンのポケットに突っ込んで、ところどころ罅が入った巨大な斧を地面に突きたてている。

この斧がアーティファクトってことになるんだろうが……ヒビが入っているはずなのに脆そうに見えない。不思議だ。

室内じゃあ出せないな。検証は家帰ってからにしよう。

「称号は……『力を体現する猛犬』……合ってる、のか？ まあアーティファクトに期待しとこう」

「ふふふ。これでアリウスは妾のパートナーじゃな」

「そうだな。これからよろしく。ついては一つ頼みがあるんだが…

…」

「なんじゃ？」

「戸籍と、住むための家を用意してくれ」

「は？」

あの時からアーティファクトの大斧『ディアボリックフアング』は愛用の品となった。

効果は斧に込めた気や魔力の増幅。

斧から気弾を放てば倍の威力となるし、直接近接攻撃をすれば更に数倍の威力となる。

放出は2倍。付与して使うなら3〜4倍と言ったところか。

王女からもらった物だけあってなかなかヤバイ性能である。

まあ、師匠とかアルさんとかのに比べるとあんまり凄くは無い。あんまり珍しくは無い増幅系のアーティファクトだしな。

だが、込めることのできる気や魔力に制限が無いというのだけはヤバイ。

気を込め過ぎて自壊するということが絶対にない。

それ故に確実に威力が跳ね上がるのだ。

込めた『チカラ』がそれほどでもないならあまり変化は無いが、広域殲滅魔法クラスの『チカラ』を込めても、それを確実に倍加させる事が出来るのだ。

単純に考えても火力が2倍。そして普段の2分の1で自分の力を発揮できるのだから、ある意味耐久も2倍である。

テオドラには感謝の念をいくら送っても足りんのではないだろうか。そんなこと言ったら何をさせられるかわからんから言わんけど。

しかしだ。

そんな武器を手に入れても、俺が主に使う武器は己の拳である。理由としては、師匠が『武器を持つてゐるよりも素手の方が強い』という理由からである。

師匠は俺にとつていつか超えるべき存在なので、そういうのだけは譲れないのである。

そして話は冒頭に戻る。

俺は現在、帝国の王宮にあるテオドラの部屋で紅茶を飲んでいた。正直前に飲ませてもらった緑茶の方が美味かったが、口には出さない。

王宮の物だけあつて充分に美味しいな。

「で、用意はもうできてるのか？」

「うむ。拳闘大会に出るのはこれが初めてなのじゃろう？ 妾も見た事が無いからせつかくだし見に行こうと思つての」

「……まあ、来るのはいいけどな。あとで困ることになつても知らねえぞ？」

「大丈夫じゃ。事務は全て部下に任せてきたからの」

「……あの侍従さんか。かわいそうに」

今頃、執務室で忙しく腕を動かしていることだろう。女性なのに大変なことだ。そう考えて俺は紅茶の入ったカップを勢

いよく傾けて、残りを全て喉へと流し込んだ。

「じゃあ行こうぜ。お前が買った飛行艇なんだからさぞかし早いんだろうな？」

「当然じゃ！ 余程遠いところでなければすぐに着くはずじゃ！」

「んじゃあ……え〜と、地方大会からだっとな。グラニクスってこだ」

「それならば……半日程で着くはずじゃ」

「あつちに着いたら夜か……まあ、寝るのはこの船の中でできるし大丈夫だろ」

「じゃあさっそく出発じゃな」

「おう！」

二人同時に席から立ち上がり、部屋を出る。

そのままテオドラの後を歩いて王宮の廊下を進み、飛行艇まで案内してもらった。

見たところ性能重視なフォルムで結構気に入った。
これならば速そうだ。

「さーて。行きますか」

「うむ。出発進行じゃー！」

第四話 仮契約とその後（後書き）

あとがき

新オスティアがいつ誕生したのかは知らないが、この時点では誕生していることにする。

女王の処刑は『された』ということに世間ではなってるから、たぶん問題は無い。

だから、2年前にアリカ様が逮捕された時から復興が始まっていたと考えれば、たぶん問題は無い。

2年の間に生まれ変わって、観光都市的な扱いになっても問題ない。（無論、小規模ではあるが）

そして人を集めるという名目で、拳闘大会の全国決勝……むしろ終戦記念祭が新オスティアで行われても全く問題ない。

祭りがいつ開始されたのかは考えないでほしい。

この話の1年前の時点でやってたかもしれないし、今年が1回目かもしれない。

とにかくそういうのは考えなくてくれ！

ちなみに、アリウスのアーティファクトである、
『ディアボリックフアング』は、どこかの英雄殺しが持ってた斧と
同じような外見です。

仮契約カードの詳しい設定書くべきかな？
方位とか、徳性とか。

一応、感想を待ってます。

ところで読者のみなさん、アリウス君というオリジナル主人公にブ
ッ飛ばされる転生主人公（笑）とか見たくない？ あ、見たくない
ですかそうですか。

第五話 拳闘大会と拾いもの（前書き）

エロは必要だろうか。

月詠みたいなキャラとか……

需要があるなら書くけど、要望があればどうぞ。

第五話 拳闘大会と拾いもの

「パートナー？」

「ああ。拳闘大会ではタッグを組んで出場するんだが……お前は無理だな」

「何じゃと！ お主のパートナーは妾じゃと……『ビシッ』あいたっ」

「いやいや、王女が大会出れるわけないでしょうが」

「うっ」

無事にグラニクスに到着した俺は、拳闘大会のエントリを終えた。終えたのはいいが、タッグ戦だなんてことは知らなかったので少し困っていたのである。

で、変装として深くローブ（認識阻害付き）を被ったテオドラに、街にあったカフェで飯を食いながら相談をしていたのだ。

そしてパートナーの事で騒ごうとするテオドラをチョップで黙らせたところ。

「ま、別にパートナーはいなくても一人で出場できるからな。できるだけ頑張るさ」

「当然優勝をしてくれるのじゃろっな？ 無様な姿など見せるでな

いぞ？」

「当たり前だ。誰がお前に俺を弄る機会など与えるか」

「ふふふ、それならいいのじゃ」

上機嫌で笑うテオドラ。

おい、笑うのはいいけどあんまり大声を出すなよ。

認識障害が効いてるからいいけど、もし気付かれたら大変なことになるぞ。

お祭り騒ぎ的な意味でだけど。

「さて、この街に来るのは初めてだったよな？ 案内してやるよ」

「ん。ありがとうなのじゃ」

俺達は手を繋いでその場を後にした。

テオドラにいろいろ買ってやるとして、金が足りるだろうか……

第五話 拳闘大会と拾いもの

『さあ今季も開催されましたグラニクス夏季大会ミネルヴァ杯！
第一試合、西方はフリーの拳闘士として最近話題のアリウス・ウィ
ンダート選手！ 未だ幼さを残す彼ですが、実力は本物とのこと！
今大会ではパートナーをエントリーしていませんが、一体どこま
で勝ち進むことができるのか！』

放送席にいる審判の声が魔法で拡大されて、闘技場に響きわたる。闘技場が歓声に包まれる中、俺は闘技場の中央に立って対戦相手と対面していた。

「なんだあ？　こんなガキが相手かよ」

「油断するな。ここに相方も見つけずに立つという事は腕が立つからのはずだ」

「お前ビビってんのかよ？」

「お前こそ油断し過ぎだ」

戦士系っぽい獣人族の男と、黒マントを羽織った人間族の男の二人組。

それがこの大会での一番初めの相手になるようだ。

『対する東方は、ヘカテスの傭兵拳闘士の二人組。カイル・スロート選手とリイル・フォートレス選手！　大戦では前線で戦っていた実績もあるベテランです！』

大戦を生き抜いた実力者、か。

それなら相手にとって不足は無い。

とにかく、勝つことを考えないとな。

一回戦目で負けたとあつてはテオドラに合わす顔が無い。

『さあルールは皆さまご存じの通り！　ギブアップ戦闘不能で決着！　武器・魔法に使用制限無し！』

アーティファクトは呼び出さないでおこう。

臨機応変に立ち回るには素手の方がやりやすい。

相手は典型的な前衛と後衛のタッグだとは思うが、油断は禁物だ。相手が前と後ろに別れて構えを取るのに合わせて、こちらも拳を構える。

——相手が魔法使いなら先手必勝で仕掛けるのみ。後は何とかやるしかない。

『開始！ <インキピテ！>』

審判の宣言と共に俺は地を蹴り、相手へと瞬動を発動した。

同時に『狗神分身』を発動。ほぼ同密度の分身（それでも出力は7割まで）を1体作り出して、魔法使いの方へ向かわせる。

「魔法の射手・火の13矢！」

相手のリイルとかいう魔法使いが無詠唱の魔法の射手を放ってくる。無視だ。分身の方に任せてカイルとかいう戦士系の男に向けて攻撃を仕掛ける。

瞬動に反応してカウンターをあわせてくるが、その拳をかわして殴りつける。

それをまた相手がかわしたために、何回か拳を打ち合うことになった。

「やるじゃねーかガキ」

「あんたもな」

答えた後で、俺は狗神を纏わせた拳で打撃を雨と降らせた。

それをカイルはなんとか防いでいるが、そのうちのいくつもが相手の体へと吸い込まれていく。

次第にダメージを蓄積していったカイルは、起死回生を狙って今までの最大の一撃を放ってきた。

なるほど。

確かに今まで戦ってきた中では最大級の力だ。

だが力だけでは、速いだけでは、攻撃を当てることなどではしない。

なにせ身体能力や気の量は、全てこちらが勝っているのだから。

「クソッ！ リイル！ そっちは準備できたか！」

「ああ。もちろんだ！」

「む？」

分身はいつの間にかやられてたようだ。やられたら狗神をまき散らして爆死する分身に設定したから……まあ、かぶってたフードが吹き飛んでるからダメージは与えられたっばいな。

一瞬手を休めた隙に、目の前のカイルとかいうのが地面を思い切り殴りつけて後ろへと退却した。

フード男のリイルとかいうのは、それを見て呪文詠唱を終えようとする。

「……火と硫黄・罪ありし者を死の塵に……」

「……これはさすがにまずいか。『来れ』」

火属性の広範囲殲滅魔法。

正面から撃ち破るならこれしかない。

そう判断した俺は自分の武器を呼びだした。

即座に自分の出力全開の気を込めて相手へと向ける。

「燃える天空！」

相手の詠唱が終了する。

俺は迫る爆炎の壁に向かって思い切り斧を振り下ろした。

「狼牙破天弾！（テオドラ命名）」

巨大な気を纏った斧が振り下ろされ、こちらに向かって来ていた炎を吹き飛ばした。

さらに、振り下ろした後で放出された気弾が相手を吹き飛ばした。闘技場のフィールドも地面が大変なことになっている。

「……やりすぎたか」

『えーと、リイル選手とカイル選手が気絶！ よってアリウス選手の勝利です！ これは番狂わせ！ というか予想外の凄まじい強さですアリウス選手！ 今まで無名だったのが信じられません！ それではこれから勝利者インタビューを……』

とりあえず腹減った。

テオドラのところに戻って飯でも食つか。

俺は観客席の中でも特別観覧席で見ていたテオドラのところまで戻った。

観客席の一番階層が高いところにあるとこで、オーナーを『説得』したら借りれたらしい。

……まあ、相手が王族なんてなったら貸すしかないだろ。驚いたろうな。

「アリウス！　すごかったのじゃ！　いつのまにあんなに強くなったのじゃ？」

「一緒にいた人たちが全員アホみたいに強かったからな……強くなるのはあたり前だ……」

「そうなのか！　妾とのアーティファクトも役に立っておったのう！」

「……まあ、助かってるよ」

実際、今回はあそこであれが無かったとしたら、俺はもうちょい無理をしなきゃならなかった。

分身を複数出して突っ込ませた後に、その分身を爆発させてその穴を無理矢理通って接近したりとか。（狗神を基礎に作った分身だからある程度操れるのだ、爆発とか色々）

ラカン師匠直伝気合い防御で防いだりとか。（未だ完璧ではない）だから助かってるっちゃあ助かってるのだ。

「それで、アリウスの試合はもう終わったんじゃろう？　だ、だからの、これから一緒に買い物に行かぬか？」

「いや、買い物なら昨日……」

「まだ行っていない場所があるのじゃ！……いいじゃろ？」

「……ハア。仕方ないな。わかったよ。でも、ちゃんとローブは着るんだぞ？」

「わかつておるわ」

で、今日は昨日も行っていない裏街の方まで来たわけなのだが。

「……どうする？　これ」

「放っておくわけにもいかんじやろ」

「だよなあ……」

裏街を歩いている中、チラリと視界の隅に何かが写った。

そちらの方へと行ってみると、なぜだから歳くらいの子供が倒れていた。

なんでこつも運が悪いんだ、俺は。

こつというのは普通師匠とかの役目だろう。

俺はまだ十代だぞこの野郎。

「しゃーない。連れて帰ろ」

「そうじゃな。気絶しておるし」

服装がボロボロなうえに、全身傷だらけ。
妙な魔力を感じる首輪まで付けられている。
確実に厄介事だ。

だが見てしまった以上放っておくわけにもいかないし……

「ほれ、早く行くぞ。お主はその子を背負ってこぬか」

「わかったよ」

テオドラが珍しく真剣な顔つきしてるしな。
手伝わないわけにもいかないだろう。

……やれやれ。

Side:???

「ん……」

「お、起きたか？ テオドラー！ 目を覚ましたぞー！」

「本当か！ うむ、水を用意するから少し待つのじゃぞ」

目が覚めると、私は温かいベッドに横になっていた。

ここはどこだろう。

聞こえる声は一体だれの声？

「どこか痛むところはあるか？ 腹減ってたりするか？」

「え、あの……」

「落ち着かぬかアリウス！ ほれ、水じゃ。飲めるか？」

「あ、はい」

おねえさんが差し出してくれたコップから水を飲む。
冷たくておいしい。

「落ち着いたか？ 聞きたいことがあるんだが」

「……はい。だいじょうぶです」

「俺の名前はアリウス。こっちはテオドラだ。君の名前は？」

「ふれいあ、です」

「フレイア？ いい名前だ。そんじゃ質問。何であんなところにいたんだ？」

おにいさんが私に聞きました。
私があそこにいた理由？
そうだ。私は。

「逃げだしたの」

「逃げた？ どういうことじゃ？」

「テオドラ、ちょっと黙っててくれ。たぶん俺の方が詳しい。フレ
イア、どこから逃げ出したんだい？」

「わかんない」

知らない間に連れてかれた。

そんな場所を覚えてなんかいない。

逃げ出せたのもみんなが囿になってくれたから。

「他に人はいたか？」

「いたよ。いっぱい」

「いっぱい……人攫いか奴隷商人か。……面倒だな」

「そんなことを言うでない！ ほらフレイア、もう大丈夫じゃぞ」

「あう」

おねえさんがおにいさんをたたいて抱きしめてくれました。
とてもきもちいーです。

「いってーな。面倒つてのはそういう意味じゃねえよ！」

「ならどついう意味じゃ？」

「いや、首輪をはずしたのこっちに戻ってからだろ？ 一応遠くに

投げ捨てたんだが、探知されてるかもしれない」

「つまり……」

「場所がばれてるってこつた！ 伏せろ！」

おにいさんが私とおねえさん突き飛ばしました。

まっかなほのお。

かがやくこおり。

くろいかたまり。

いろんなものが見えました。

「おい、アリウス！ 妾も……」

「があああああ！ てめえら皆殺しにしてやる！」

おねえさんと私を地面に伏せさせたおにいさん。

からだに毛をまとった姿になってかけだしていきました。

とても力強くてかつこいい姿でした。

安堵した私は、おねえさんの腕の中で気を失ってしまいました。

第五話

拳闘大会と拾いもの（後書き）

あとがき

オリの登場人物はともかくとして。

どうして初の主人公以外の視点がこのキャラになったあああああああ
あああ

……まあいいか。

どうせなら主人公に拳闘士団でも作らせてみるか。もしくは賞金稼ぎ結社。

で、原作の魔法世界編でトサカを注意して、『あ！ 座長の友人の！？ 何でここに！？』みたいな。

ちなみに技名は格ゲーで有名な病人の、『グラ。ト』さんの魔神破天弾から頂きました。

これからも頂くことがあるかもしれない。

だってカッコいいんだもん。

『ざんくうてんしょーけえーん！』でもいいかもしれない。

第六話 一件落着とまさかの帰結（前書き）

ちよと短い

どうしてこうなった

第六話 一件落着とまさかの帰結

部屋が爆発しそうになった時、俺はテオドラとフレイアを突き飛ばして、強化した自分の体で全て受け止めた。

気合い防御と獣化を同時に発生させたおかげで、ダメージは無い代わりに俺の服がボロボロになってしまった。

「があああああ！ てめえら皆殺しにしてやる！」

獣化させた上にさらに狗神を全身に付加して思い切り叫ぶ。

両手に狗神を凝縮させながら既に崩壊した壁を通って外に出る。

夜中だからって不意打ちしやがって！ 中の二人が怪我してたらどうするつもりだ！

「くっそ！ 一張羅が台無しだ！ てめえら覚悟しやがれ！」

掌の上に狗神で炎を作り出す。

詠春さんの故郷の日本で、狐って動物が狐火使うって言うから犬でもできるだろうと教えてもらったのだ。

そしたら見事に成功した。名を『狗蓮^{グレン}』

完全に当て字ではあるが……それ以来これを使っている。

「吹き飛んじまえ！」

相手のいる場所を察知して、その方向に向かって純度の高い狗蓮を思い切り投げつける。

気配は3つ。両手の2つを全力で投げつけ、残りの一つの気配に瞬

動を発動する。

投げつけた狗蓮は、銃弾を遥かに超えた速度で飛んで行って爆発した。うまく防げば死ぬことは無いだろう。どうでもいいが。残りの一つの気配の目と鼻の先に俺は現れた。

「こんばんは。死ね」

「なっぐほあっ！」

驚愕している男に、死なない程度に加減したパンチを思いっきり腹部にぶち込んだ。

その結果、胃液やらなにやらを口から吐いて足元で悶絶することになった男を俺は踏みつけた。

そして自身の仮契約カードを額に当てる。

「無礼者は鎮圧した。あっけなさ過ぎだったけどな」

『警備の者と呼ぶ。そやつらをこちらに連れてくるのじゃ』

「了解。フレイアと……お前は怪我してないか？」

『大丈夫じゃ。心配せんでもよい。そんなに心配ならさっさと帰ってくるんじゃない』

「わあったよ」

最近、あいつの扱いが難しくなってる構わん。やれやれだ。

痛みが消えてきて足元で動き始めた男を蹴って止める。さって、さっさと捕まえに行きますか。

残りの二人は死んでるかな？

第六話

結論、死んで無かった。

なんでだよコンチクショウ。死ねばよかったのに。

「お主、思考が漏れておるぞ」

「え？ マジ？」

「うむ。色々ただ漏れじゃ」

「そいつは失礼」

ん、んんっ！

これでいいか。

さて、現在の場所は警備の詰め所とも言っべきか。
そんなところで襲撃犯から聞き出してゐるわけ。

「結果はどうだったのじゃ？」

「ああ、（尋問の）結果では、いきなり魔法をぶつ放したのは、あの部屋のまわりに結界が張ってあったからだそうな」

「そつえば……」

「張ったよなあ……うん」

テオドラがいるとバレたらまずいので、万が一のことも考えて結界を張っておいたのだ。

それも物理的要因で無きや壊せない結構強めのを。盗聴や透視に対して。明らかにおかしいよな。考えてみれば。

「で、場所が割れたんで俺も行くことになったんだが……」

「妾も行くぞ」

「いや無理だから。何考えてんだよ」

「フレイアも連れてゆくぞ」

「いやいや。意味わからんから。何考えてんだよ？」

「ここに残しておいて襲撃をかけられたらどうするつもりじゃ？」

……なんかすごい、ナギさんの気持ちがわかった気がした。

アリカ様と一緒に基地を壊滅させた時はこういう気分だったんではないだろうか。

たぶんだけど。

「ぐだぐだ考えてもしゃーない！ もう今回だけにしてくれよ？」

「それはわからんのっ？」

「はあ……」

狗神を大きな狼の形で出して、それに乗るように指示する。
まあ、付かず離れずな感じで守れば大丈夫だろ。

「で、その子はまだ寝てるのか？」

「うむ。随分ぐっすりと眠っておるようじゃ」

「そら疲れてただろうしな。……お前ももう少し物分かりがよかつたら」

「何か聞こえたような気がするのう？」

もういいや。

足に気を溜めて長距離瞬動の準備をする。
すでに奴らのアジトには先行部隊が攻撃を仕掛けてるはずだ。
さっさとしてさっさと終わらせるぞ。

「おいテオドラ、しっかり捕まっとけよ！」

「了解じゃー！」

30分後。

「こいつで最後だー！」

「ぎゃああああ！」

遠距離から狗蓮を5発位一度に撃ち込んでボスっぱいのを倒した。それで終了だった。なんとも情けない。ともかく、後は処理をするだけだ。

やっぱりあいつらは戦後に沸いて出た人攫い組織の一つだったらしい。

2年前までの紅き翼による大粛清でずいぶん減ったと思ったが、残っていたようだ。

まあ、シヨボ過ぎて残っていたんだろう。

ボス以下30名にも上る組織のメンバーは全員逮捕。

俺が殴ったおかげで、牢屋に入る前に治療を受けることになった。骨が折れてたらしい。しかも全員の。

悪さをした罰があたったんだ。もしくは自業自得だろ。

そして捕えられていた女子供に労働者たちは無事に全員解放された。獣人族、竜族から小人族まで、よくぞまあ集めてきたもんだ。彼らは無事に故郷へと変えることになった。

これにて一件落着というわけだ。

が、そうは問屋がおろさない。

「のうアリウス、この子はどうすればよいかのう？」

「さあね、もう頭がパンクしそう」

「おねえちゃん？」

「いやいや、なんでもないのじゃよ。ぐっすり眠れ」

「はあ……」

手元に残ってしまったのである。
フレリアというあの少女が。

身元不明。

本人にどこかに住んでいたという記憶なし。
しかもどこにも行くところが無いと喚く。
一体どうしろってんだ！

「簡単じゃ」

「じゃあ言ってみろよ」

「お主が育てればよいのじゃ」

「……『お前が』じゃなくて『俺が』育てるのか？」

「まあ、別にフレリアも父親代わりを求めているわけでもないじゃ
ろ？ 兄として当たればいいのではないか？」

「俺、まだ10代何だがね」

「妾もまだ10代じゃ。別に妹分として可愛がってやればよからう」

人事だと思つてやがるな？

育てるってことがどんなに大変かわかつてねえだろコイツ！
生きるって大変なんだぞう！

「お前がやれよ！」

「王宮に連れて帰れると思つておるのか？」

「……無理だな。女官としてなら……若すぎたよチクショ！」

「お前に頼むしかないというわけじゃ。別に他の者に頼んでもよいのじゃが、妾にとつて一番信用に足る者はお主じゃからな。妾にとつての妹分を預けるのにはお主しかおらん」

フレイアをいつのまに妹分にした。

会話の流れで何となく言つただけだろうお前！

「とにかくそういうわけで頼むのじゃ」

「帰る場所が無いってのは俺もつらさをよく知ってるからな。わかつたよ」

「そう言つてくれると思つておつたわ」

引き受けるってわかつてやつてるからタチが悪いよなあ……
ぐっすり眠ってるフレイアが羨ましいぜ全く。

「とりあえず今日はもう眠らぬか？ ふあ……色々ありすぎて疲れたのじゃ」

「そう、だな……俺も眠い。もう眠ろう。おやすみテオドラ」

「おやすみなじゃ」

そう言ってベッドにもぐりこむテオドラ。しっかりとフレイアを抱きかかえている。息できるようにしとけよ。頼むから。

さて、俺も自分のベッドに入るとしよう。ふあゝあ。眠くてたまらん。

思えば今日は色々あり過ぎたよ。それじゃあおやすみ。

第六話 一件落着とまさかの帰結（後書き）

あとがき

技名が厨二っぽくなった。

まあいいや。

『狗蓮』

気を燃焼させるイメージで狗神を発生させれば、この炎が完成する。詠春さんが言うには、神鳴流の奥儀の雷鳴剣で発生する雷に近いらしい。

普通は黒色のはずなのに、炎の色が赤茶色。

やり方が違うから気と狗神が混ざって変な色になってる、との見解。ゼクト曰く、効率はいいらしいので続けている。

銃弾を超えた速度とあるが、居合拳よりはかなり遅いよ。

ラカンの『波乗りラカン』よりもずっと遅い。

約37.35kmを約30秒↓波乗りラカン〃約1245m / s

狗蓮投擲速度〃だいたい600m / s くらい

第七話 カットしてほんわかぎゅっ ♪（前書き）

ゞ（。ω。）ノ <ミニキテクレテアリガトー

主人公の行動理念はストリートファイター？のリュウっばいけど、そこにケンを足して二で割った感じです。

俺より強い奴に会いに行く！ でも色々他の事にも手を出すぜ！

そんな感じ。

第七話 カットしてほんわかぎゅっ ♪

「おにいちゃんおかえり」

「おお、遅かったのう」

「ただいま…… ってか、テオドラ。王宮はどうした」

「また休暇じゃ」

「侍従さんに謝って来い。頼むから」

フレリアを預かって1か月とちょっとが過ぎて決勝戦が迫ってきた。あの事件の後テオドラは3日ほど滞在して王宮に帰ったのだが、結構盛大に怒られたらしい。

まあ、やんちゃしまくって事件に巻き込まれれば当然である。

俺の名前を出して何とかしたと聞いたが、どういう風に何とかしたのか怖くて聞きたくない。

そして今、決勝戦に際して場所を復興した観光都市『新オスティア』へと移したところで、またもやテオドラが遊びに来たのである。

フレリアに関しては今後のために簡単に勉強を教えているが、そもそもの俺の知識が乏しいのが問題だ。

もうちょっと育ったらアリアドネの魔法学校に通わせる必要がある

だろう。

せめて10才にはなって、ある程度の強さは身につけてもらわないと。

戸籍についてはテオドラに用意してもらえばいいだろうし。

「で、相手はどんな奴なのじゃ？」

「なんか強そうな奴」

「……それでいいのか？」

「いいんだよ。地味だったし」

決勝戦の相手は地味だった。

うん。特に表記する必要もないくらい地味だった。
だから正直どうでもいい。

「それでテオドラ、今日は何の用だ？」

「用が無ければ来てはいけないと申すのか？」

「いや、別にそうは言っていないが……」

「おにいちゃん、おねえちゃんが買い物いこうだって」

結局、テオドラは遊びに来てることぐらいお見通しだ。
フレリアが今こんなこと言わなくてもわかってたさ。

「そうだな。テオドラもこのオスティアには初めて来ただろうから
案内してやるよ」

「うむ。頼んだぞアリウス！」

「ありがとうおにいちゃん！」

こいつら……いやフレイアはいいんだ。

テオドラも少しは感謝の意というものを……こういう奴だから仕方ないか。

「それじゃ、出発するかあ！」

第七話 カットしてほんわかぎゅっ♪

「これ食つか？」

「食べる〜」

「アリウス！ これはなんじゃ！」

「それは……なんだ？ 竜の牙を加工した工芸品……か？」

珍しいものが売ってるもんだ。

観光都市だから人が結構集まるし、それも当然か。

2年前のあの時程じゃないけどなかなかの盛況ぶりだ。

まあ……まだ復興途上にはかなりのものだろう。

拳闘大会も明日が決勝ということで、俺も相当有名になってしまった。

本当なら認識阻害付きフードの使用を考えていたんだが、それだと買い物ができない。

だから年齢詐称薬を飲んで祭へと繰り出したわけなんだが……

「こうしていると親子みたいじゃのう」

（言っと思ってたよ）

「おにいちゃんがおとうさん？」

「……ああ。そうだよ」

「やった〜」

なんで俺こんなことしてるんだろう……

ふと思っただけど、俺まだ15だよな。

長命種の血を引いてるから周りより若いけど、どう考えても親代わりにはなれねえよ。

例え外見が青年になってたとしてもだ。

「のうアリウス。妾たちは周りにもそう見えておるかのう」

「……そうだな。そう見えるんだろうな」

「ならもつと夫婦らしくせんとな〜」

体を押し付けるな顔を近づけるな吐息が当たってるんだよ顔に！
年齢詐称薬使った途端にミニマムボディからボンキュボンなボディ

に変化しやがって！

どう考えても反則だろ！ 変わり過ぎだぞテオドラ！

……でも将来的にこいつこうなるかもってことでもあるのか。

「フレイアはできたらこうならなくてくれよ……」

「？」

首を傾げてこっちを見るフレイア。

ニツコリ笑って何を思う。

「おねえちゃんばっかりずる〜い」

「フレイア、お前もか」

確実にテオドラの影響なんだろうが……

フレイアが変な子にならないことを祈ろう。

「さあ、次はあっちに行くぞアリウス！ 案内せぬか！」

「おにいちゃんおねがいね〜」

「了解。しっかり手を握ってるよ。迷子にならねえようにな」

ひとまずはこの祭りを楽しむことにしよう。

そして夜。

散々に遊び疲れてはしゃぎ疲れたフレイアが眠ってしまった後。
俺とテオドラは元の姿に戻って、フレイアの眠るベッドの脇に座っていた。

「ずいぶんぐっすりと眠っておるのう」

「それだけ疲れたんだろうさ」

「そうじゃな。本当に喜びはしゃいで飛び跳ねておったし……」

「普通の子供時代つてのをこれまで送って来れなかったんだ。今が
楽しくて仕方ないんだよ」

こうやって話している間も、それが確信できる。

だって寝言でも俺とテオドラの名前を呟いてるんだ。

それだけ慕われてる俺らは幸せなのかね。

「戦争で孤児になるつてのは大変だからな」

「アリウスもそうなんじゃろ？」

「俺の場合は親と死に別れた後だからな。故郷に戻ったところで戦
争が起こって全て無くした。この子の場合はまた違うだろう」

「……そうじゃの」

「どうした？ そんなに俯いて」

急に声のトーンを落としたテオドラに話しかける。

こいつがこういう仕草をするのは本当に珍しい。

たいていの事は笑い飛ばすくらいの性格をしてるからな。

「妾はそういった立場にはなったことが無い」

「？ そりゃそうだろ」

「じゃからこの子の事を本当にわかってやれる自信が無いのじゃ。何しろ王宮で不自由なく暮らしておったからの」

「あゝ。でもそれは仕方ないだろ？ だいたいお前は一回捕まったし、戦争だって経験したんだ。それも大きな責任を感じる立場でな。それにこいつはお前に懐いてる。既に理解してやってることになるだろう？」

「そうなのかのう……」

「そうだって。信用できないならこの子に聞きゃあいいんだ。絶対に大丈夫だからな」

「……………」

「ん？」

ずっと俯いたままのテオドラを見る。
さつきから微動だにしないが……

「……………」

「寝てやがる！　せつかくシリアスに話してたのに！」

「アリウス……ありがとなのじゃ……」

「お前寝てるのか寝てないのかはつきりしろよ！」

結局寝てた。

初めは眠りかけ、途中で寝て、最後は寝言だった。
正直腹が立ったので朝に一発はたいてやった。

ザマミロ。

地味な決勝戦の相手を倒した俺は優勝した。
ちよつと飛ばし過ぎたか？

でもな、地味な相手の事なんか書いてもつまんだらう。

これまで戦ってきた相手の中で強かっただけで、師匠みたいにハチ
ヤメチャな強さを持つてなかったのだ。

おかげで攻撃しまくる俺と耐え続ける敵という退屈な攻防になって
しまったのだ。

そんなもん聞いても別に楽しくないからな。

観客は盛り上がったけど。

優勝賞金を頂いて宿に帰れば、待っていたのは小さなパーティーだ

った。

参加人数が俺を含めて3人というのはいささか少ないが、家族同然の人間から褒められればさすがの俺も嬉しい。

ついでに俺が自身の力で『称号』というものを勝ち取ったの日なのだから嬉しいに決まっている。

まあ金についてはフレイアの服やら何やらを買うのに全部消えそうだが。

俺自身そう金を使うことなんてないから問題ないだろう。

パーティー自体は素晴らしかった。

大量の食い物を買いかんでくれていたようで、食っても食っても無くならないくらいだった。

予想外にフレイアが食べまくるのだが、まあよしとしよう。

竜族の子だから余計に腹減るんだろう。たぶん。

ただあれだ。果実酒なんか買ってくるのはどうかと思うな。

「ふにゃ〜アリウスウ〜」みたいなテオドラと、「もつきゅもつきゅもつきゅもつ（ry……zzz」なフレイア。

正直とても面白かった。

俺も調子に乗って飲み過ぎてダウンしたんだけどな。

翌日。

二日酔いで痛む頭を抱えつつ片づけを終えて、朝食を食べた後。これで休暇が終わったということでテオドラは王宮へと帰ることになった。

「たまには会いに来るのじゃぞ。絶対にじゃからな！」

とまあこんなセリフを残して。
それでフレイアは俺の下に残って色々勉強兼修行をすることになった。

本人曰くまだ6歳だそうだが、俺だってそれくらいの頃には修行を開始してた。問題は無いだろう。

竜族なんて才能が有り余ってる種族だ。

魔力も結構多めの量があるようだし、大人になれば充分な物になるだろう。

鍛えようによつては俺より……いや、さすがにそれはやだな……
ともかく、一人で生きていけるくらいには強くなってもらいたいものだ。

「うん、フレイアがんばる！」

「まあ、とりあえず祭りが終わるまではここにしような。服も買ってやるから」

「ありがとうおにいちゃん！」

さて、どう鍛えていこうか。

第七話 カットしてほんわかぎゅっ ♪（後書き）

あとがき

予定ですが、かわいいフレシアはこの後成長してとんでもない娘になります。

どの辺がとんでもないかというと、。。。。。。みたいに。。。。。。と言って。。。。。。くるようになります。

記号（ー、」「）なども。。の中に入ります。

／（、・ω・、、 ちょうちょまってえ ↑今はフレシアはこんな感じ。

ここまでの主なキャラ紹介（だんだん更新）（前書き）

一区切りついたので。

ここまでの主なキャラ紹介（だんだん更新）

アリウス・ウインダート

タカミチと同じ孤児。

旧世界出身の狗族と魔法世界出身の長命種の女性とのハーフ。
タカミチより少し年上。^{らしい}

外見：過去時代：焦げ茶の髪と犬耳をもつ目つきの悪い少年。子供
にしては若干筋肉質。

原作時代：まだ

戦災孤児だったがラカンに拾われ、憧れて一緒に行くことに。

強さ：タカミチやクルトよりは絶対に強い。

理由：時間をタカミチが教師や任務に使う間、彼は修行に使えたため。

ラカンが原作で、『40年前に帝国の少年奴隷剣闘士としてデビュー』そして『20年前の大戦ではナギ並の強さ』だとするなら、20年の修行があればラカンクラスに行けると推測。

アーティファクトは『ディアボリックファング』という名のバトルアクス。

まんまバルバトスさんの斧です。

効果は魔力や気の増幅。

この斧を起点に力を使えばパワーが2〜3倍に増幅される。その分体にかかる負担も2〜3倍になるが。

フレイア・バゼール

竜族の女の子。

倒れているところをアリウス達が広い、人攫いから助け出したことになる。

その後はアリウスとテオドラの妹分として、アリウスと一緒に過ごすことになる。

アリアドネーの魔法学校へ。

外見：過去時代：赤毛の幼女。テオドラとはまた違った鋭い角が生えている。（原作での『調』に近い。もっと鋭角的）

原作時代：まだ

テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア

言わずと知れた褐色お転婆王女。

この作品においてもそれは全く変わっていない。

若干、お転婆ぶりが悪化してるような気もするが、それはアリウスの影響です。

アリウスとの仮契約のマスター側。

ジャック・ラカン

アリウスの師匠。

いわゆる一つのバグ。

n e x t c o n t i n u e . . .

仮契約カード

アーティファクト：『ディアボリックファング』

CCCCXI 411

名前：アリウス・ウインダート

称号：力を体現する猛犬

色調：赤と黒

徳性：勇気

方位：北

星辰性：流星

next continue...

ここまでの主なキャラ紹介（だんだん更新）（後書き）

これ以降の話も楽しみにね。

ちよつと時間が飛ぶけど。

第八話 奇想天外な宝物庫（前書き）

オリ展開上等！

さあどうなるのか。

第八話 奇想天外な宝物庫

アリアドネー。

それは知を求める者ならばたとえ死神でも受け入れる学術都市国家。そこはどんな権力にも屈しない故に、知を求める者にとっての安息の地でもある。

「というわけだが、質問は？」

「私も来週からそこに通うんでしょ？ お兄ちゃん」

「その通り。気の使い方とか固有技能の使い方とか感覚とかは教えられたが、魔法はどうにもならんしな。せっかく魔力があるのに使わないのはもったいないだろ？」

「そうだね。お兄ちゃん教え方が感覚的だもん」

「言っなフレイア。頼むから」

俺だって何かしら専門教育受けたわけじゃないんだから仕方ないだろ！

……俺もちょっと魔法かじってみるかな。

早いものだが5年がたった。

特にこれと言った事件は無かった。

俺が毎年のごとく拳闘大会で優勝を搔つ攫っていくのが有名になったりしたが、あんまり問題は無いだろう。

ちゃんと姿は隠してたし。黒ローブに仮面を付けて。怪しかっただろうけど。

年々気の量も増えて扱いもうまくなっていくので、アーティファクトを使う機会が減った。

アーティファクトを使わなければそうそうばれることもないだろう。これで問題なしというわけだ。

ん？　なんで正体を隠すのかって？

有名になり過ぎたら色々と困るだろ？

俺は現在、フレイアに修行を付けながら魔法世界を回っている。

俺の修行のためもあるんだが、やっぱり樹林の中でドラゴンとかと戦うと心が躍るといふか。

遺跡探検でたまにマジックアイテム見つけた時の喜びといたらもう堪らない！

そろそろ20歳になるんだが、そういった好奇心はいつまでも薄まらないものだ。

フレイアもそうだ。

遺跡探検の後の宝を発見した時など飛び跳ねて喜ぶ。

まあ、女性がキラキラ光る宝石を見たら誰しもこうなるのかもしれないけどな。

5年間、基礎を教えることができたおかげというべきか。

物覚えのいいフレイアはどんどん強くなった。

瞬動と、簡単な体術、気の扱い方を覚えてくれた。充分過ぎる。

女の子にしては充分過ぎる。
少なくとも魔法学校にいる同年代の平均的な生徒よりかは強いだろう。

1か月ほど前、修行が一区切りついた俺はアリアドネーの魔法学校にフレイアの入学手続きを行った。
今は入学金も何もかも全てを済ませて、あとは行くだけという状況だ。

現在、俺とフレイアはヘラス帝国の王都にいる。
ここからアリアドネーまではそう離れていないから一人で行かせるのもいいだろう。

思えばずっとべつたりで離れた事なかったしな……

「というわけでいってらっさい。手紙は無理だから、あの水晶玉使って連絡してくれ」

「うん。一月に一度、必ず連絡するようにする！」

「……一人で寂しいからって寝れないとかないよな？ 友達作れよ？」

「大丈夫だから！ 心配ないよ！」

そう言う奴に限って心配になるんだ。

フレイアに限ってそんなことは無いだろうが……

後ろ盾に帝国第三王女がいるなんてこと、バレたら大騒ぎだ。

「残念ながらテオドラは今日は忙しくて来れないんだ。まあ、侍従

さんに散々ぎゃーすか言って困らせたみたいだが」

「そうなんだ……」

「まあ、あっちこっち行ってる俺よりはテオドラの方が連絡取りやすいだろう。すぐ会えるさ」

「……うん！」

大量の荷物を入れた、不思議トランク（大量の物が入る）を持ってフレイアがアリアドネー行きの船へと乗り込んだ。
振り返って手を振ってくるのに、こちらも手を振って答えてやる。

「いつてきまゝす！」

「おう。またな」

……はあ。

また一人旅か。

次はどここの遺跡に行こうかね。

さて、アリアドネーにフレイアを送って数週間。

俺は現在、ヘラスの王都から遠く離れた龍山山脈へと来ていた。この山の頂に結界で隠された遺跡への転移ポートがあったり、山脈地帯の地下に遺跡が作られていたりするのだ。

やたらとたくさんさんのゴーレムやトラップが配置されてる事もあって、来る人間が少なく、結構掘り出し物が見つかることもあるのだ。まあ、とどのつまりは穴場ってことだ。

まあその分危険であるということになるのだが……俺にはそんなのどうってこと無い。

「オラアッ！」

『ガッビッ』

思い切りぶん殴ると、へんてこりんな機械音声もどきを残してゴーレムが吹き飛ぶ。

常に全身を気で覆った状態でいるので、トラップがあろうと関係なしに奥に進めるのだ。

……これ、他のトレジャーハンターは怒るやり方だろうな。

今いるのは未だに3階層までしか確認されてないという遺跡だ。

俺は既に地下5階まで来ているが、なるほど確かに敵の層が厚かった。

生半可な奴ではここまでこれないだろう。

その分、奥にある宝に期待が持てる。

例えば、前にケルベラス大樹林の奥深くにある遺跡で見つけた指輪

がある。

魔法発動体として優れている上に、フレイアもかなり気に入ったのでプレゼントすることになった。

邪魔にならない程度の宝石がついていて装飾品としても相当のものだったし、魔力を通して発動すればオートで治癒がかかるマジックアイテムでもあった。

まあ、あそこまでの物を望むわけではないが、結構期待をしているのである。

「しっかし深いな……次で6階層目だろ？　どんだけあるんだ？」

戻るのがだるく感じてしょうがないだろうな。これ。

それにあたりは埃まみれなくせに、トラップだけはちゃんと発動するとかふざけんな。

トラップも風化して故障しちまえばいいのに。

「こりゃ街に戻ったら服をクリーニングにでも出さんとだめだな」

ここまで潜る間に少し埃っぽくなっちまってる。

やれやれだぜ。

『シンニユウシャ・シンニユウシャ』

「なんで旧世界のロボットみたいなんだよ」

狗蓮を投げつけて黙らせる。

すると壁に穴があいてそこから追加のゴーレムが現れた。

『シンニユウシャ・シンニユウシャ』

『シンニユウシャ・シンニユウシャ』

『シンニユウシャ・シンニユウシャ』

「うわあつざつてえ」

とりあえず吹き飛ばすか。

腕を前に出して魔法の矢もどきを撃ってくるけど、んなもん効くか！
俺は両手に狗蓮を出してそいつらをまとめて吹き飛ばした。

さつさと奥に進むとしよう。

そして一時間後。

「やたらと綺麗なとこに出たな。オイ」

あれから更に2時間ほど経過して、俺は（たぶん）10階層くらいまで降りた。

そして奥に進んだところにあつた無駄に仰々しい扉を無理矢理開けて中に入ると、そこはとても遺跡の中とは思えないほど綺麗な真っ白な部屋だった。

中に入ると背後にシャッター（仮）が落ちてくる。

「ベタだな」

まあ扉が機能しなくなっただけから仕方ないか。
扉をぶち壊した俺が言ってもそれこそ仕方ないけど。

『No.6 最終認識ゲートノ不正解放ヲ確認・最終防衛システム起動・侵入者ヲ排除シマス』

「お？」

俺が真つ白い部屋の入り口でシャッター（仮）をコツコツ叩いて確認していると、部屋の中央に魔方阵が出現した。
そしてそこから何か妙な気配の女性が……

「どわっ！？ 何しやがる！」

『侵入者ハ破壊シマス』

「自動人形の類か……？ レアすぎるぜ全く……」

しかも限りなく人に近い。

一体全体、いつの時代のものだ？

しかもこの戦闘力は……どこから魔力を得てやがる。

そうこう考えてる間に腕の中から銃口を出現させたドールもどきが、そこに魔力を集中させて砲弾のような魔力の球を放ってくる。

『魔法の矢』みたいに精霊を役役するのではなく、純粋な魔力の球を飛ばしてきているようだが……

「チイツ……… 狗蓮ッ！」

一発の威力が半端無い。

普通の魔法の矢の50本分くらいの威力はあるぞ。

しかも次々と撃つてきやがる。

それに対応してこちらでも掌から狗蓮を撃ちだして相殺していく。

「にしても、一体全体どこからこんなに大量の魔力を持ってきたんだか……」

これまでの攻防の間に軽く広範囲殲滅呪文数発分は消費しているはずだぞ。

いくら自動人形でも、自分の蓄積しておける魔力には限りがあるはずだと思っただが……

人のように精神があるわけじゃないから、外部から取り込むには誰かに魔力を注いでもらわなければならんはずだし……
どういう仕組みだ？

「まあ俺なんか考えてもわかるはずないだろうが……」

とりあえずぶん殴って止めるか。

だが……ぶん殴って止まるのか？ あれ。

人形だしなあ……

『対象ノ危険度ヲ変更・ALICEノ防衛レベルヲSランクニ上昇シマス』

「……なんか嫌な予感」

お、銃口をしまった？

今度は何をする気……ぬおあ！？

「危ねえ！」

瞬動使っていきなり殴りかかってきただど！？
むしろ瞬動を使ったことに驚きだがそれどころじゃねえ！
接近戦もなかなかつよいぞコイツ！

「ぶほっ！　いつてえ！　くっそ顔面ばかり狙いやがって！」

足の裏に足場を作って空中で意味不明な軌道とりながら殴りかかってくるとか反則だろ。

あんまり効かないけど、顔面はさすがにちょっと痛い。

だが、これだけの防衛措置が取られているということはだ。
奥にある宝にはかなり期待が持てるな。

さて。

「そろそろ遊びは終わりだ」

変則的な動きをいくらしても、しばらくすれば慣れるというものである。

そもそも俺の防御力は最上級の竜種に匹敵するからな、たぶん。
そう簡単に深いダメージは通らない、はず。

顔面に向かって放たれた蹴りをそのまま受け止めて掴み取る。

「よつと。必殺……」

思いつきり壁に向かってえ〜と……アリスだっけ？を投げつける。
そのまま投げつけた方向へと拳を振りかぶる。

「狗蓮我道拳！」

気弾とか拳圧とか狗神とかを飛ばして、未だ空中を壁に向かって吹き飛んでいるアリス？に叩きつける。

まあなんとなく考え付いて放ってみた技だが、威力は十分といったところか。

アリス？だかは壁にめり込んでいる。

しかし硬いな。戦ってる最中にも思ったが、めり込みながらも動くうとしている上に損傷なしか。

一体なんでできてるんだ。いや、表面に浮かびあがっている呪紋は……？

「とにかく、動けないようにしとくか」

まあがんじがらめに縛りつけとけば大丈夫だろう。

壁にめり込んだ状態で影に沈ませれば動けないはずだ。

色々になるところはあるが、先に奥に行かせてもらおうという。

アリス？を縛った俺は、白い部屋の奥にある扉を開け放った。
するとまた物凄いものを見つけた。

「こりゃあ……一体なんだ？」

機械か、魔法か、ロストテクノロジーの一種か？

横の壁いっぱい呪紋が書き込まれていて、その下に怪しく光る機械のようなものである。

そして正面には小さな机と……ポッドに入った少女？

「なんでこんなとこに女の子が転がってるわけさ」

『私は少女と言われる年齢ではありません』

「おおう!？」

さっきまで聞いてきた機械音声とは違う少女の声が聞こえてきた。
状況から考えて目の前のポッド少女なんだろうが……

「あゝつとだな。……一体お前は何者だ？」

『私はこの宝物庫を統括する総司令官です』

「司令官？」

『はい。私の名はエクセル。四百三十八万飛んで十三時間二十五分
三十六秒前に製造されました』

…… よんひゃくさんじゅうごまん？

ええい！ とにかくすっごい昔だってことはわかった！

『あなたの名前は？』

「は？」

『名前の確認です』

「俺の名はアリウス・ウィンダートだ。……答える意味あるのか？」

『対象名“アリウス・ウィンダート”確認しました。新規のマスター登録に基づいてマスターと認定します』

「どういうことだ？」

いや本当に。

『前マスターは私の前に次に現れる者が新たなマスターであると設定しました』

「つまり？」

『あなたが私の新たなマスターです』

「……………」

「命令を」

いや、んなこと急に言われても。
んじゃあそつだな……

「とりあえず外にいる奴を止めてくれ」

『Yes・Master・ALICEは行動を停止。防衛解除。
新たなマスターです』

「止まった？」

『はい。大丈夫です。彼女を呼びますか？』

「まあ……拘束は今解除したから呼んでくれ。殴ったけど壊れたりしないのか？」

『自動修復機能は機能しています。そう簡単には壊れません』

「ならいいんだが……」

一体どうしてこうなったんだ。

ひとまずこの状況の説明が欲しいな……

この遺跡が今まで行ったことのある遺跡に比べて特異過ぎる。横の壁にある呪紋も見た事が無いし……

「とりあえず、ここは何の宝物庫なんだ？」

『ここはエリゴール・アーグシュタインという人物の宝物庫です』

「……見たとこ何もないが？」

『彼にとつての一番の宝が私たち最後のホムンクルスであり、体や壁に施された呪紋が知識においての一番の宝だったからです』

「説明ありがとう」

正直聞いても意味なかったがな。

はてさてどうするべきか。

マスターって急に言われてもどうしようもないんだがなあ……

「じゃあとりあえず聞くけど。お前らはここを離れても大丈夫なの

「？」

『はい。魔力の充填を行ってもらいさえすれば動けますから』

「んじゃあそうだな。……とりあえず、ここを出ようか？」

『了解しました』

まあ、外に出れば何とかなるだろ。

遺跡はまた後回しでもいいわけだし。

それに何時間も潜っていたおかげで腹も減ったしな。
そつえばこいつらって飯食えるのか？

第八話 奇想天外な宝物庫（後書き）

あとがき

オリ展開になっても自重しない。

新キャラを登場させるのは楽しい。
伏線を張るのもすごく楽しい。
でも設定が難しい。

ネタバレになるが……

この主人公アリウスはそのうちダンになります。
サイキョー流的な意味で。

というかゲームが違うというか漫画が違う。
そんな展開になりつつあるヨッ。

ところで友人が彼女できたと報告してきたんだが……

（#^ω^）：おい、嫉妬マスク呼んでやろうか。

俺は従姉にしかモテないのに……

第九話 人間らしいけど人間らしくない（前書き）

わかりやすく説明するために。

エクセルとアリスが着ているスーツは、マヴラブの衛士強化装備だ
と思えばよろしい。

最終的なアリウスの強さ ↓ < () ・ ω ・ () < ∨

第九話 人間らしいけど人間らしくない

俺はなんとなく気になった事があったので質問してみた。

「なあ、ところでそのポッドの中に入ってることに意味はあるのか？」

『この宝物庫全体に仕掛けられた罠やゴーレムの管制を行うためです。意識をシンクロさせて操作を行います』

「とりあえず外に出るからポッドから出てきてくれないか？」

『わかりました。しばしお待ちを』

エクセルがそう返事をすると同時に、ポッドの中の彼女に呪紋が浮かび上がる。

そしてポッドの前に魔法陣が出現して光があふれる。

次の瞬間、ポッドの中から彼女の姿が消えて魔法陣の上に現れた。

「ふう。自分の足で立つのは本当の本当に久しぶりです」

そら八十何万年ぶりならそうだろうよ。

ところで後ろの……

「名前はアリスでいいのか？」

「……コクッ」

首肯だけで返すアリスとやら。頼むから口を開いてくれ。

アリスはさっきの白い部屋からこっちの部屋に入ってきてから全然口を開いてないけど、何も言わずに立たれるとすごい気まずい。

せめてもう少し何か、待機するならするでメイド服着るとか……ハッ！ 俺は何を！？

「外に出るからには普通の衣服がいると思うのですが、それはどうしましょう？」

「……そういえば、そのスーツじゃ外には出れんな」

体の線が完全にわかるくらいピッタリとしたスーツに、金属製の肩当てやら何やらがくつついたような服装だ。

そのまま外に出るといのはさすがに子供たちの教育に悪いといひかなんというか。

ともかくダメだろ。これ。

「まあ、服なんか用意してあるわけないしな。とりあえず俺の予備のマントを羽織れば問題ないだろ」

「はい。大丈夫だと思います」

「じゃあこれ。ほれ」

仮契約カードに登録してあった衣服を呼びだしてそれを渡す。

ゆったりめの黒いマントで、彼女たちの体格ならば全身をカバーできるだろう。

……この機能ってマジで便利だな。

「この地は廃棄した方がよろしいですか？」

「どういうことだ？」

「私たちが去る以上、もうここには何も残っていませんので」

「そういえばそんなようなこと言ってたな」

さてどうするか。

まあ、正直この遺跡には来ることもないだろうから放置でもいいんだが。

「この部屋だけは破壊してった方がいいだろ。壁に書かれた呪紋が
どういう効果か知らんが、悪用されたら面倒だ」

「了解しました。アリス、お願いします」

「……コクッ」

「それではマスター。私たちはこの部屋を出ましょう」

「何するんだ？」

「ただ壊すだけですよ。問題ありません」

「なら、いいんだがな」

これで完全にこの遺跡には価値というものが無くなるわけだが……
次にここまで来れた奴は無駄足だな。

可哀そうに。

「よっし。じゃあアリスが戻ってきたら出発だな」

「そうですね。外の世界に行ったことが無いので楽しみです」

「……あ、一つ聞いとく事があるんだった」

「はい？」

「お前ら飯は食えるのか？」

「もちろん可能です。私たちは成長する必要が無いので魔力だけで動いていますが、食事によって人間の取る栄養と同じものを摂取すれば、多少の成長が可能となります」

わーお。

そいつはすごい。

ホムンクルスとか言ってたけど、人形じゃなくて人間に近いわけだな。

今度、美味しい料理でも食わしてやろう。

第九話 人間らしいけど人間らしくない

だからどうして俺はこうも運が悪いんだろうな。
いや、むしろ俺に不幸が襲いかかった分他人も巻き込んで不幸にし

てるのかもしれないけど。
目の前の状況に目を向けるか。

「よう、わざわざ奥まで潜って御苦労さん。おら、宝をこっちに渡しな」

「はあ……」

「どうしますかマスター」

「……チャキツ」

こらこらアリス、なんか物騒な音がマントの下からしたぞ。自重してくれ。

それよかどうしようか。

おそらく俺が入ったのをどっかで見てて、出てくるのを待ってたんだろう。

にしても30人くらいで、3人を囲むとか恥ずかしくないんだろうか。

人の物を奪い取ろうとする時点で問題ないのかも知れんが。

「もう一度聞きます。どうしますかマスター」

既にエクセルとアリスは完全に臨戦態勢だ。

どうせ弱い奴らばかりなので、俺は腕を組んで溜め息吐きつつ立ってるだけだが。

このメンバーなら、というか俺だけでも負ける気はしないが……と
りあえず返り討ちにしよう。

「それじゃあ、お前らに任せてもいいか？　というかエクセルも戦

えるのか？」

「はい。私は後衛型ですが、戦闘能力は持っています」

「ふん」

「やいてめえら！ 何を話してやがる！ さっさと宝をよこしな！」

「別にここには何のお宝もなかったぞ」

「ああ！？ 見え見えの嘘つきやがって！」

「いや、別に嘘じゃねえぞ？」

「てめえら！ やっちまえ！」

人の話聞けよと言いたい。

まあ馬鹿に何を言っても無駄か。

せっかくやたらと喧嘩腰のアリスと戦わずにすむように言ってやったのに。

アフロヘア吹き飛ばしてやろう。

アリスは遺跡内で戦っていたので強いとは知っていたが、エクセルも普通に強かった。

攻撃魔法を使用して相手を吹き飛ばしている。死なない程度に手加減しているけど結構な威力だ。

その際、マントの隙間から光が漏れている。おそらく呪紋が光っているのだろう。

あれはたぶん魔力を使用するためか、精霊を使役した攻撃を行うための物だと思っただが、どうなんだろうか。

「エル・シイル・セイル・シュトルム、来れ　虚空の雷　薙ぎ払え……アリス、回避を。　雷の斧！」

アリスも何気にタイミング察知して、エクセルが注意を促すと同時に相手の体勢を崩してバックするとかコンビネーションちゃんとできてるし。

頭いいんだろうな。俺と違って。

羨ましいいったらないね。5年も修行やら旅やらをしてやっとだつてのに。

あれか、年季が違うって奴か？

うまくアリスが回避したところで、エクセルの発動した“雷の斧”が敵を数人吹き飛ばした。

ギャー、とか悲鳴をあげて吹き飛ばならず者。

だから初めに警告したのに。

“雷の斧”を避けたアリスが特大魔力弾を撃って敵が更に吹き飛ばす。ついでに俺も自分の方に来た奴に向かって拳を構える。

「そおい！」

気を込めた拳一発で自分に向かってきた敵を一気に吹き飛ばす。まあこれくらいなら師匠なら軽くやってみせるし、別に師匠じゃなくてもできるのはいるからな。

まあ一言で表すならば、こいつらじゃ相手にならんということだ。

「ったく、人の話は聞きましようつてのを習わなかったのかねえ…

…」

俺には今は亡き母がきちんと教えてくれたぜ？

人の物を掠め取るうなんて輩には何言っても無駄だろうがな？

「死傷者はいないか？」

「はい。死亡している者はありません」

「ならいい。遺跡の中ならともかく、外で30人も人が死んでたら迷惑だからな」

「同感です」

さして帰って飯だ飯。

腹が減って仕方ないぜ。

「お前らマジで食えるんだな。美味いか？」

「もぐもぐ……はい。食事は初めてですが、いいものですね」

「……美味しい」

アリスが喋った！

というか普段から喋ってくれ、少しは人間らしくしてくれよ。
食事がそれだけ新鮮だったということなんだろうか。

「すみませんマスター。アリスは防衛用のホムンクルスなので、言葉話す機会が無かったのです」

「……そうか。まあ、これから慣れればいいさ。絶対に騒がしくなるからな」

「そうなんですか？」

「ああ。確実に。……特にテオドラとか」

不思議そうに首を傾げるアリスに言う。

実際どうなんだろうか。

こいつら二人を俺の家に置いとくとして、テオドラがどういう反応をするか。

正直気になるけど、それ以上に面倒そうだ。

ま、面白そうだからいいか。

現在俺達は龍山山脈の近くにある村にいる。

ここは設備が意外に整っている穴場で、龍山山脈近くの遺跡探索の時にはここに泊っているのだ。

思えば、その時から遺跡荒らしの連中に目を付けられたのかもしれ

ない。

まあ、警備の連中に連絡したからもう今頃は捕縛されてるだろうが。

「茶もどうだ？ 結構お気に入りなんだが」

「……そうですね。美味しいと思います」

「本当か？」

「ええ。それにアリスなんて、食事ができることが本当に嬉しそうです」

「……そうか？」

俺には相変わらずの無表情にしか見えないが。

「嬉しがってますよ。そうですね？」

「……コクッ」

「ちよつと納得した」

頷いた瞬間だけ可愛い顔が見える。

あの顔を見たら納得せざるを得ないな。

「とりあえず一晩越してから俺の船で王都の俺の家までいくぞ」

「了解しました。夜はどうしますか？」

「は？」

「なんならアリスに相手でもさせましょうか？」

「……冗談はやめい」

「いえ、そういう機能も付いておりますし。なんなら私でもよろしいですが」

「そういうのはあまり言わんでくれ。頼むから。特にあっちに行ったら。俺がテオドラあたりに殺されかねない」

「あ、ちなみに私たちは卵子を精製することもできるので妊娠も可能で……」

「誰もんなこと聞いてねえ!？」

「ですが……」

人間としての教育を受け直さなきゃならんこいつら……

とりあえず王都に言ったら子供用の情操教育とかの本でも買っべきか!？

とんでもねえ奴らを拾っちゃったぜ……

「あ、私たちもちゃんと性感が得られるので心配ならいりませんよ?」

「もうお前ら家に着くまでまで口聞くな！」

第九話 人間らしいけど人間らしくない（後書き）

あとがき

はっちゃけた。

後悔はしていない。

さて次回は、『アリウス。会社を作る』

『流派サイキョー流創始』

『アリウス、旧世界へ』の三本です。

お楽しみにね！

実際どうなるかまだ未定です。

第十話 麻帆良へ……第一章、タカミチ（前書き）

キングクリムゾン！

1990年から

1995年へ飛ぶ！

そして様々なフラグを立てまくる！

第十話 麻帆良へ……第一章、タカミチ

キングクリムゾン！

1990年から

1995年へ飛ぶ！

そして様々なフラグを立てまくる！

――

「で、急に何だテオドラ。そんなに慌てて」

「お主が拳闘大会で優勝し続けるからじゃ！
じゃろう！ 少しは自重せぬか！」

あれじゃ面白くない

「えゝ」

「少なくとも後五年は出るでないぞ！」

「まったくしゃあねえなあ……」

「テオドラ様。紅茶とお菓子の準備ができました」

「おお。すまんのうエクセル。アリウスが何かしておらぬか？ その、変な事とか……」

「いえ、マスターはそういった事に興味を示してくれませんので」

「そ、それならいいのじゃ……む？ アリスはどこじゃ？」

「アリスなら買い物に出ました。紅茶がちょうど切れてしまったので」

「あれ？ ここに置いた酒は？」

「マスター。昨日飲んでたじゃありませんか」

「そうだったけ？」

「おお、そういえばタカミチじゃったつけ？ 手紙が来ておったぞ」

「マジ？ 久しぶりだな……」

「どれどれ、一体何事だ？」

「そう思つて手紙を開いて再生ボタンをポチッと押すとそこにはタカミチの立体映像。」

「ずいぶん成長したなお前。十年もたてば当然か。」

「最後に見た時よりだいぶ背の高くなつたタカミチは驚愕の出来事を語り始めた。」

第十話 麻帆良へ……第一章、タカミチ

アリウス、元気にしているかい？

君の事だから毎日のようにテオドラ様をからかっているんじゃないかな？

君と別れた後は色々とあって大変だったよ。京都では大昔の鬼が復活したりしたしね。

さて、本題を話すよ。

できたらでいい。旧世界にある麻帆良学園を訪ねに来てくれ。

僕は今NGOで仕事をしてはいるけど、基本的にはそこで教師をしているからね。

この10年で本当に色々な事があったんだ。

皆で助けたお姫様を覚えているかい？

アリカ様じゃなくてアスナちゃんの方だけど、わかるだろう？

彼女を連れて移動していた時の事だ。

悪魔からの襲撃を受けたんだ。

その時はガトウさんと一緒にいたんだけど、察知できない程の不意打ちだね。

未熟な僕にはどうする事も出来なかったよ。

そこでガトウさんは死んでしまった。

その後で僕たちは麻帆良学園に向かったんだ。

詠春さんの義理のお父さんが学園長をやっているんだ。

僕もしばらくそこで学生をしていたからね。あそこは安全だと知っているし。

そういえば詠春さんは結婚したって知ってたかい？

君の事じゃナギさんが死んだって公式情報として流れている事も知らなそうだな。

まあ、僕は信じていないけど。

今はそこでナギさんが封印した吸血鬼のエヴァに修行を付けてもらっている最中さ。

少しでも強くなりたいといけないと実感したんだ。

ちなみに、彼女とは同級生だった事もあるんだ。詳しいことは会えたら話すよ。

本当の事を言うからね。

僕も何から話していいかわからないんだ。

正直、空元気ってやつさ。

クルトはもう会える状況じゃないから、アリウスと会って話をしたいんだ。

会えるのを楽しみにしてるよ、それじゃ。

乾いたような笑いを残して手紙の上からタカミチの映像が消える。

「……あリやまずいな」

「うむ。相当まいっておるようじゃの」

俺がこつちで好き勝手やってる間にそんなことになっているとは……悪いことした気分になるな。

「テオドラ……そのだな」

「わかっておる。ゲートの事じゃったら手配しておくから心配するでない」

「ありがとなテオドラ。恩に着る」

そう言つてテオドラに頭を下げる。

「べつ別に頭を下げなくともよい！ 調子が狂うではないか」

「そりゃ悪かつたな」

柄でもない事をしたつてのはわかつてるさ。

親友の今にも倒れそうな顔を見てちよいと動揺しただけ。やれやれ。

10年越しに連絡したかと思えば心配掛けさせやがって。

「……それで、いつ出発するつもりじゃ？」

「まあできるだけ早めにな。準備ができ次第行くよ」

「フレイアはどうするつもりじゃ？」

「あゝ。そういえば今度帰ってくるって言ってたな……どうしよう？」

マジックアイテム越しに会った時もこっちに来るのをやたら楽しみにしてたし……
どうすっかね。

「ハア……フレイアの事は妾に任せよ。どうせお前の事じゃ、しばらく帰ってこないに決まっておるからの」

「マジで助かる。いつも悪いな。俺がお前になんかしてやれることないか？ 少くくらは報い無きや悪いだろ？ 王女さんよ」

「そのようない方はしないでほしいと言うとろつが……そうじゃな。では、今度妾とデー「ただいま戻りました」……アリスめ、何故今帰ってくるんじゃ」

テオドラが何か言いかけたところでアリスが帰ってきた。

切らしてたのは紅茶だけじゃないみたいで、巨大な袋を背中に背負っている。

そういえばこいつらが家族になって5年も経つな。

アリスは最近やっと人間らしさを見せるようになった。趣味を得た結果だろう。

「では、紅茶を入れます」

「おう、頼む」

アリスは紅茶を入れるのと、掃除洗濯が趣味となった。
変わっているが、やらなくて済むから大変助かっている。
料理だけはなぜかできないが。
どうしてだろう。

「マスター。そういえば会社の方からも連絡が来ていましたよ？
私が対処しましょうか？」

「ああ、頼む。というか俺がこっちにいない間は管理はエクセルに
任せるよ」

「了解いたしました」

エクセルはそう言って二階へと上がっていった。

会社というのは、2年ほど前に立ちあげた賞金稼ぎ結社の事だ。
事務能力が高いエクセルにほとんど任せているが、なかなか儲かっ
ているらしい。

主にやってることは、社員への情報提供とか技術提供とかだ。

会社名は『黒い猟犬』で、エクセルが決めた。

もうほとんどエクセル任せだな。

長きに渡って宝物庫を管理してたノウハウはだてじゃないと言っべ
きか。

「というか詠春さんが結婚するとは……羨ましい」

「ア、アリウス？」

「なんだテオドラ」

「い、いや、おぬしもそういった事に興味があるのかと思つての?」

「そりゃ男としては結婚に興味を持つに決まつてるだろ。身近だった人間がしてたなんて聞いたら特に」

「だいたい、その相手が詠春さんだぞ？」

あの真面目で女になんて興味全くないような詠春さんだぞ？興味を持つに決まつてる。

「俺もあっちに行くための荷物をまとめてくる。あと頼んだぞアリス」

「わかりました」

テオドラの対応はアリスに任せて自室へと向かう。
あっちにいくなら何がいるだろうか。

……とりあえずトランクに全部詰めよう。そうしよう。

「はぁ……ここまで言っておるのに、何で気付いてくれないんじやろうな……」

「テオドラ様」

「なんじゃ」

「マスターは鈍感。直接的な言葉で攻めるのを推奨します」

「っ！？　うるさいわ！　余計な御世話じゃ！」

「でけ〜な……あれが世界樹か」

テオドラにゲート解放を頼んで1週間。

俺は旧世界は日本の麻帆良学園を訪れていた。

いくら認識障害の魔法が働いてるからってこんな木があるんじゃ怪しまれると思うんだがな……

俺に耳を隠せと言う前にあの木をどうにかしろよ。

指示されたとおりに女子中等部前の駅で降りる。

時間帯が昼だから人がほとんどいないのが救いだな。

なんで女子中等部に学園長の部屋があるんだよ。おかしいだろ。

「アリウス！」

「お、タカミチか。久しぶりだな」

「待ってたんだよ！　来てくれてありがとう！」

「抱きつくな気色悪い」

会っなりダッシュで抱きついてくるタカミチを引き剥がす。

スーツ姿のいい男が抱きついてくるとかやめてくれ。
これがスーツ姿の美女とかだったらよかったんだが。

「十年ぶりだね……元気にしてたかい？」

「ああ。魔法世界で遺跡発掘とか拳闘大会で優勝とか色々が無茶や
つてたさ。そっちは……大変だったみたいだな」

「……うん。大変だったよ。でも、相変わらずなアリウスを見て少
し気が紛れたかな」

「そりゃよかった。学園長のところに行かなきゃだめなんだろう？
案内してくれ」

「わかった。こっちだよ、ついてきてくれ」

タカミチに案内されて学園長室の前まで辿り着いた。
なんでだろうな。

タカミチの横に立って歩いてるのに、生徒たちがすごい目でこっち
を見ていた気がする。

そりゃ焦げ茶で長髪の目つき悪い男が、タカミチみたいないかにも
真面目そうな先生と一緒にいたら怪しむか。

「学園長、失礼します」

「お邪魔するぜ……ってうおお！？」

ドアを開けて中に入るとそこにはやたら頭の長い爺がいた。
これがジャパニーズ妖怪という奴か！？

「あんだ人間か！？」

「失礼じゃぞ。ワシはれっきとした人間じゃ」

「嘘だ〜」

「のう、タカミチ君。アリウス君はいつもこんな感じなのかの？」

「え〜と、そうなんです………すいません学園長！」

「別にタカミチ君が謝る必要はないぞい」

悪かったな。

でも人間としてありえねえだろその頭は。
魔法世界でも珍しいぞ。

というか人間族でそんな頭の奴はいねえ。

「それでアリウス君。タカミチ君と色々話したいことはあるじゃろうが、その前に決めとく事があるんじゃない」

「なんだ？」

「そうじゃのう………君はここにどれくらいいるつもりじゃ？」

「わからん。長いかもしれんが、短いかもしれん」

「アバウトじゃのう………」

「うるせい」

だいたいタカミチに会うために来たんだから滞在期間とか決めてないっつもの。

……まあしばらくは帰ってこなくてもいいって言われてるから長居することになるだろうけど。

「最低でも一年はいるんじゃないか？」

「そんだけ長ければ十分じゃ」

「俺に何をさせようって？ 俺はタカミチみたいに頭良くないから教師って言われても無理だぞ？」

「それはもうタカミチ君から聞いとるわい。頼むのは警備員じゃよ」

警備員？

そんなもんの人数が足りないのかよ。

大丈夫かこの学園。

「君、変なこと考えたりせんかったかの？」

「いんや、別に？」

「この学園には色々と守るべきものが多くてのう……特に魔法関係じゃが」

「そつなんか？ タカミチ」

「え？ あ、うん。 そうなんだよ。 それで警備員ってのはね、 学園に襲撃をかけてくる外の魔法使いから学園を守るって意味での警備員なんだ」

「へ」

まあ世界樹とか、 やたらとあちこちから魔力を感じるし。 守るべきものは多いんだろうな。 護衛の仕事だったら結構やったことあるから大丈夫だろ。

「それで、 受けてくれるかの？」

「ああ。 一年以上ここにいるんだ。 仕事くらいしないとな」

「報酬は……こんなところでどうかの？」

学園長が報酬金額を書いた紙を渡してくる。

……一年でこの金額なら十分か。 金に困ってるわけでもないしな。

「引き受けるよ。 じいさん、これからよろしく」

「おお、それじゃあ頼むぞい」

手を差し出して握手を交わす。

この爺さんも相当強いんだろうな。

魔法学園のトップって言うからには。

まあいいや。

今の優先事項はタカミチに話を聞くことだ。 さっさとこの部屋を出よう。

「それじゃあ学園長。僕はアリウスにこの学園を案内します」

「うむ。それではまたの」

「じゃあな、じいさん」

「アリウス！ 一年もここにいてくれるのかい！？」

「ああ。実を言うとテオドラに拳闘大会の出場を禁止されたんだ。だからあっち行ってもあんまりやること無いんだよ」

「何でまたそんなことに？」

「優勝し過ぎたんだよ」

「……そう、なんだ。アリウスらしいね。テオドラ様がアリウスに構ってほしいからかと思ったんだけど」

いや、それはそれで怖いけどな。

だいたい、そんな心配しなくてもあいつは休みの旅に訪ねてくるから問題ないと思うぞ。

それにそんな露骨な反応されたら気付いちまうだろ。

「羨ましいとか思っただろ」

「え？ いや、そんなこと思っでは……」

「嘘つけ。わかるんだよ。俺達親友だろ？ それくらいわかるさ」

ガトウさんが死んだ時に力の無さを実感したみたいなことってたしな。

実際そうなんだろう。

俺も悪いこと言ったかな。

「まあ深くは追及しないさ。今日の晩は飲もうぜ！ 嫌な事全部忘れてさ！」

「……ああ！ そうだね！ 十年ぶりの再会を祝って！」

これで元気が出てくれればいいんだが……

第十話 麻帆良へ……第一章、タカミチ（後書き）

あとがき

麻帆良、第一章はここまでです。

次はサイキョー流に入ります。

前に書いた次回予告と順番が狂いましたね。

ところで、あるモブな人物の魔改造計画があります。

学園祭で出現した気を使う男四人、あのうちの一人が改造の対象です。

アンケートを取ってもいいですけど、とりあえずご意見ある方は感想で。

原作キャラとの恋愛兼師匠フラグも一本だけあります。

天狗のお面付けたMr・サイキョーが山で会えるのは……一人しかいませんね♪

第十一話 吸血少女と忍者少女（前書き）

ちよつと強引なところもあるけど、
問題ないと思いたい。

第十一話 吸血少女と忍者少女

「タカミチ、誰だこいつは」

「あはは……エヴァ、彼はアリウスと言って僕の親友で……」

「なあタカミチ、なんだこの少女」

「あのねアリウス、少し黙っててくれるかい？ 彼女は同級生のエヴァで……」

「誰が少女だこの駄犬が！」

「ああ！？ どう見ても少女じゃねえかてめえ！ とても中学生には見えねえな！ 俺の妹分の方がよっぽど女らしい体してるわ！」

「なんだと貴様！ この変態が！」

「やんのかコラア！」

「もう二人とも黙ってくれよ！」

翌朝、タカミチに連れられてログハウスへとやってきた俺は、エヴァという少女と思い切り口げんかした。
なんか昔のテオドラみたいな感覚で喧嘩したな。
ところでこのエヴァとやらはタカミチの新しい師匠役みたいなものらしい。

こいつが持つてる別荘……ダイオラ魔法球のことだが、それを使って1時間を1日に変えて修行をしているらしい。
どうりで顔が老けるのが早いわけだ。

「君は若すぎる気もするけどね」

「長命種の血が混じってるからな。老化が遅いだけさ」

「犬の上に混血か。タカミチ、こいつは何者だ」

紅茶を飲みながらタカミチに尋ねるエヴァ。

現在俺達はエヴァの別荘の中にいる。

俺が入った事のある魔法球の中とは全然違う。

あつちは無人島だったのに……こっちはまさに別荘といった感じだな。設備も整ってるし。

「アリウスは……どう紹介すればいいかな？」

「本人がいる前でんなこと聞くなよ」

「そうだね。あ、ヘラス帝国の王女様と仲がいいよ」

「そんなこと聞いてるんじゃない！ お前の同僚で紅き翼にいたと聞いた。強いのか？」

タカミチ、お前もアホな紹介するなよ。
幼女が怒ってるじゃないか。ククク。

それにしても俺どのくらい強いんだろう。
まだ師匠には届かないとは思っけど。そこそこ強いという自負はあるからな……

「10年前の時点で随分強かったよね。実は僕もアリウスが今どれくらい強いのか気になってたんだ」

「少なくともまだ師匠には届かんぞ」

「おいタカミチ、こいつの師は誰だ？」

「アリウスの師匠はラカンさんだよ。戦闘スタイルもよく似てたから……だっけ？」

「そうそう。今は師匠は無責任にどこかに行っちゃったけどな」

「ほう……貴様の師はジャック・ラカンか」

そう言うとジロジロとこつちを見るエヴァ。

さすがに師匠の名は有名だから俺の事が気になるかね。

どれくらいの力を持っているか……俺的には師匠レベルの人じゃない限り負けない程度に強いつもりだけどな。

ナギさんに負けて封印された『闇の福音』ねえ……

「よし！ん？」

「ど、どうしたんだい？二人とも？」

俺とエヴァが同時に声を出したことにタカミチが驚いた。
俺も驚いたけど、どうやら考えた事は一緒だったようだ。
思惑は違っただろうが。

「手合わせ願おうか」

「吠え面かいても知らんぞ？」

「幼女こそな」

「幼女言うな！」

「タカミチ、貴様もよく見ておけ。貴様の親友がどれほど強かろうが、お前ら若造などまだまだだということを教えてやる！」

「はっはー！ 言ってるよこの野郎！」

「アリウス、言っとくけどエヴァは本当に強いよ？」

「心配すんな。いざとなりや奥の手を使う」

それに、だ。

最近自分より格上の奴と戦うなんてことは無かったからな。

別に俺がこの後負けるって言うてるわけじゃないが、それでもこういった経験は貴重だ。

思いっきりやらせてもらおう。

「よっしゃやろうぜ！」

「まあ待て、貴様は全力の私とやりたいのdarou?」

「む？ まあそうだけど……」

「私はこの後もタカミチに修行を付けなきゃならんし、魔力を無駄にしたくないからな。幻想空間でやらせてもらう。そちらの方が私も全力を出せるぞ？ どうだ？」

「願ったり叶ったりだ！」

「それでは私の目を見る。タカミチもだ。見る事もまた修行だぞ？」

「わかったよ、エヴァ」

俺とタカミチはエヴァが見開いた目を覗きこんだ。
何かに引き込まれるような感覚が体を襲う。

次の瞬間、俺はまたエヴァの別荘に立っていた。
見た目全く変わってないが、ここは幻想空間なんdarou。

「タカミチ、貴様は離れて見ている！ さあアリウス、準備はいいか？」

「もちろんだ！　いつでも来い！」

「フ……その勢いだけは称賛してやろう！」

言うなりエヴァが拳を構え、体を魔力で強化して突っ込んできた。
チツ！　なんて魔力だ！

こちらも右手に気を込めてエヴァの拳を相殺するために拳を叩きつける！

「ふっ……」

「ぬぐ……ガッ!?」

相殺したと同時に足元が広く粉碎され、体が軽く埋まりこむ。
すぐさま抜け出て反撃する前に、エヴァの回し蹴りが首へと叩きこまれて俺は吹き飛んだ。

「チイツ！　名は伊達じゃないか！」

「ハッ！　当然だ。……さあ、長く持つてくれよ？」

エヴァが天へと手をかざすと掌に氷が集まって巨大な球になった。
それをこちらへと思い切り投げつけてくる。

「そっちこそ俺を舐めんじゃねえ！」

片手に気弾を作り出して思い切り投げつけて氷塊を砕く。
キラキラと氷の欠片が舞う中を、こちらに向かってくるエヴァに向かって突進する。

「ウラアアアアア！」

思い切りぶん殴るが障壁でガードされる。
薄笑い浮かべやがって。

今度は本気で左手に狗蓮を纏わせて思い切り殴りつけた。
障壁が砕け散ってエヴァが後退する。避けられたか。

「ほう……やるじゃないか」

「舐めんなって言ってたろ」

「そうだな。ではこちらも少し本気を出そう」

言うなり右手に絶対零度の刃を作り出す。

エクスキューなんたらだっけか。誰かが大会で使ってたな。
もともと、威力が段違いなうえに無詠唱だが。

「武器はつくれないんで勘弁しろ……来れ」

「アーティファクトか……斧？ そんな鈍重な武器が当たると思
うのか？」

「やってみなけりゃわからんだろうが」

「ククツ………違うない」

体を獣化させた俺と、さらに魔力を纏ったエヴァが激突した。

「ったく、広範囲殲滅呪文は反則だろう」

「結局それを打ち破ったのはどのどいつだ？　ククク……タカミチに比べて随分と強いじゃないか」

「エヴァ！　それはアリウスが僕たちが色々と調査してる最中も修行してたからだって言ったじゃないか！」

「ククツ、そうだったな。だが、こいつの才能は十分な物があると思うぞ？」

「褒めて頂いて恐悦至極……なわけねーだろ」

幻想空間だったからってハチャメチャやりやがって。

見た事ない魔法も使ってくるし、出力は異常だし、斧でぶっ殺したのに死なないとか。

一度は『フアング』の能力に面食らって殺したのにすぐに能力を予測して対策立てるとか……ロリババアめ。

「そっぴがむな。この私を一度でも殺したのだ。褒めているのだぞ？」

「うるせー。負けは負けだ」

「フツ……面白い奴だな。お前は」

けっ。幻想空間から出た今も精神的な疲れがひどいつつの。散々ぶん殴ってくれやがって。

「すごいよアリウス！ 本当に強くなったね！」

「いやタカミチお前少しは落ち着け」

目をキラキラさせんな。
キモイから。

「ところでお前は誰と仮契約してあのアーティファクトを手に入れた？ いや、そういえばヘラスの皇女と仲がいいと言っていたな……
…そいつが相手か？」

「……そーだよ」

「ハッハッハッハッハ！ 面白い！ 随分な逆玉の興じゃないか！」

「うるせえ！」

「で、どーだ？ どこまでいったんだ？ やったのか？」

「あ、僕も気になるね。親友の一大事だし」

「てめえら……」

俺の事を弄ってそんなに楽しいかよ！

ええコラァ！？

そんなこと言うなら俺にも考えがあるぞ。

「そういえばタカミチ、お前アスナちゃんと同居中だろ？ この口リコンが」

「なっ！？ 一体何を言うんだい！？」

「ヒカルゲンジ計画ってのがあって前にアルに聞いたことがある。まさにそれだろタカミチ？」

「アルさんも余計な……じゃなくて！ そんなんじゃないから！」

「お前ら本当に面白いな」

俺達がどつきあつのを笑って眺めるエヴァ。

こんなの10年前は日常茶飯事だったんだけど、他人が見るとずいぶんおもしろいらしい。

そつえばアルさんも笑ってたな。

「それで、結局テオドラ皇女だったか？ やったのか？」

「しつこいぞ ロリババア！」

「……ほう？」

「あ」

「ア、ア、アリウス！ なんて事を！」

やっべ。

いきなり空気が絶対零度変わった。

キレました？

「フハハハハ！ 死ね！」

「どわー！」

「うわー！」

その後別荘内で5時間ほど追いかけられるハメになった。
口は災いのもととはよく言ったもんだ。
やれやれ。

「あー疲れた。やっぱり山は落ち着くね」

現在俺は山奥の小川沿いにいた。

あれからエヴァの別荘を出た俺は、どうせ暇だからと山に籠ることにした。

日本の山が興味深かったというか、たくさんの木々を見ていたら昔を思い出したというか。

警備員の仕事は……まあ戻ったらやることにする。

どうせまだ住むところ決まっていな。

「しばらくはテント暮らしってやつを楽しませてもらうか」

俺は石に腰掛けてつりざお片手にフィッシングの最中だ。
最近はやバイバルもほとんどやって無かったしな……悪くない。

「お、来たな……フィーーーーッシュ！」

大きめの魚をゲット。

今日の晩飯ゲットだぜ！

これで9匹目だけど、俺は大食いだから問題ない！

「この調子でどんどん釣ってやるぜえ！ フィーーーーッシュ！」

ハッハッハー！

魔法世界と違って大きさ10mの化け物魚が釣れる事もない！
ああなんていいところだ旧世界！

「大漁！ 大漁！ 今日はツイてるな！」

その後しばらくして、場所を変えつつ大量の魚をゲットした俺はテントの場所へと戻った。

火の準備もちゃんとしてある。

焼き魚パーティーだぜ！

で、数分後。

「こっち……お……う……いが……じゅるが……」

「なんだ？」

遠くからこっちに向かって近付いてくる声。
誰か来たのか？ でもこんな山奥に？

「タカミチでも来たか？ でも仕事だつて言つてたしな……」

マジで誰だろ。

「おいしそうな匂いの元はここでござるか！」

「……ガキ？」

糸目少女？

何だその忍者ごっこみたいな恰好。
怪しすぎるぞ。

「こんなところに何の用だ？」

「森の中から煙が上がってたから危険と思ったのでござるが……」

幼女は心配は無かったようでござる、とか言いながら串に刺さった
魚を見る。

まさかとは思つが……

「お前もしかして腹減つてるのか？」

「っ！？ そ、そ、そんなことは無いでござい」クウゝゝゝゝっ！
？」

話してる最中にお腹が鳴る音がした。

そして目の前の幼女は顔を真っ赤にしている。

「腹減ってたんだろ？」

「ち、違うでござるよ!？」

「減ってたんだろ？」

「……うん」

「あゝ、別にいじめるつもりは無いんだ。ほら、食うか？」

俺は言ってちようどできあがった魚の串焼きを差し出した。

なんで山に来て知らない子供に泣かれるんだ。

若干涙目ながら串を受け取る幼女。

「うまいか？」

「……うん」

機嫌が直ったようで何よりだ。

とりあえずこの幼女が何者だか知らんとな。

「名前はなんていうんだ？」

「……人に名前を聞く時はまず自分から名乗るものでござる」

「ちっさいのにしっかりしてんな。俺の名はアリウスだ。で、名前は？」

「……長瀬楓でござる」

勝手に焼いている串を取りながら幼女が名乗る。
俺は別に食っていいとは言っていないんだが……
いや、別に食うなってわけじゃないけど。

「カエデか。いい名前だ」

「ありがとでござる」

ちよつと俯いて礼を言う楓。
そんなことよりアレだ。
すごく気になる事がある。

「なんで楓はそんな恰好でこんな山奥にいるんだ？ ジャパニーズ
ニンジャってやつか？」

「ゲホッ！？ ちつ、違うでござるよ！ 忍者ではないでござる！」

「おい、過剰反応し過ぎだ。落ち着け。それじゃあバレバレだぞ？」

ほら、大丈夫か？

魚を喉に詰まらせて死ぬとかシャレにならないぞ？

「これだけは秘密に！ お願いでござる！」

「だーいじょうぶだって。誰にも言わないから」

「本当でござるか！」

「ああ。ホントホント」

言っても仕方ないだろ。

というか俺が誰に言うと思ったんだ？

言う相手がいないだろうに。

さて、改めてなんでこんなところにいるのか聞いてみることにした。

「つまり、カエデは忍者の修行してたのか？」

「そうでござる」

「大変だな」

まあ俺も同じくらいから闘技場で戦ってたけど。
女の子がねえ……

「アリウスはどうしてここに？」

「え？ 俺は……」

ただの暇つぶしだけ。
そうだな……よし。

「サイキョー流の修行をしてたんだ」

「さいきょーりゅう？ なんてござるかそれ？」

「サイキョー流ってのは……あゝ、どんな凡人も習い続ければ強くなれる流派だ」

「？」

「いや、いい。戯言だから気にすんな。手っ取り早く言っとだな、山籠りをしてたんだ」

ちよいとふざけすぎだな。

うん、アホな事言うのはやめよう。

「つまりアリウスは強いのでござるか？」

「……まあな。結構強いぜ？」

「それなら拙者に修行を付けてほしいでござる！」

「修行……ねえ？」

忍者にどう修行を付けろと？
それも幼女に。

「お願いでござる！」

「まあ……頼まれたからにはやらせてもらっさ」

分身の術とかだったらできるし。

山の中での動き方とか、気感覚の掴み方とか。
そついうのを教えるくらいはできるだろう。

「カエデには学校があるだろう？ 週末にこの場所に来い。そうすりゃ簡単な修行だったらつけてやるよ」

「本当でござるか！ ありがとうでござる！」

目をキラキラさせてこっちを見るカエデ。

まあ、この年齢でもこんな山奥に来れるんだ。きつと鍛えれば強くなるだろう。

「とりあえず食え！ 子供のうちはたくさん食ってなんぼだぞ！」

「かたじけないでござる」

とか言って食ってんじゃねえか。

はっはっは。やっぱり子供の相手をするのは楽しいな。

うむ、来週の修行が楽しみになってきた。

まずは気からだな。

任せとけ！ 俺がカエデを強くしてやるぜ！

第十一話 吸血少女と忍者少女（後書き）

あとがき

子供時代のロリ楓はかわいい。異論は認めない。

東京に来てからマガジンの立ち読みができなくなった。

故に作者は単行本でしか知識を補充できません。

アリウス「なん……だと……」

でもその代わりに何とか長引かせたり外伝を入れたりしてやっていこうと思います。

その辺はご注意ください。

ところで、アリウスが作った傭兵会社が原作に出てくると気付いた人はいたのでしょうかね……

第二二話 1995年、麻帆良にて色々とする（前書き）

沙耶の唄というゲームを友達に薦められてやってみた。

グロかった時、俺は友達の思いつきり頭をひっぱたいてやった。

クリアした時、俺は友達の母性の中で泣いた。あれは感動するわ。

ちなみにこの作品にはあそこまでグロい要素はありません。

ただしラブはあります。

第二二話 1995年、麻帆良にて色々とする

「師匠！ 魚が取れたでござるよ！」

「よし！ 次はあの山だ！ 蜂蜜取りに行くぞ！」

「わかったでござる！」

「山は天然の修行場だ！ 自給自足してるだけで訓練になるんだ！」

俺もむかし近所のじいさんにそう習った！

ただ魔法世界の山や森はここよりずっと危険だったけどな！

第二二話 1995年、麻帆良にて色々とする

カエデは中々というかなんかなり筋がいい。

まだ子供だから頭に入りやすいんだろう。

分身の術はさすがにまだできないけど。できたら泣いてやる。

一週間に一度だから、宿題として気を自覚して操る方法何かを教えるんだが。

中々うまくいつてるようだ。

これがうまくできれば瞬動とかも楽になるからな。

あれも足に気を集中させる早さとか気の量とかで完成度が違うしな。かくいう俺もまだ完全な縮地はできんし。

カエデなら後5〜8年でかなりのレベルにいくんじゃないか？

そうそう、師匠という呼び方は俺が言ったからじゃない。

カエデが自分から言い出したのだ。

俺もそう呼ばれるのは気分がいい。

うむ。師匠、いい響きだ。

修行と言えば、この前に学園を回ってたら一人の少年を見つけた。

やたら落ち込んでる美少年だったので、話を聞いてやったら容姿がまあイケメンだからいじめられたそう。

ちなみに彼は体に筋肉がつきにくい体質で喧嘩も弱いから落ち込んでる、と。

ひどい話だ。

だから俺は強くなるための方法を教えてやることにした。

強くなるうとする意志があるのなら――

まあ鍛えてやるのもやぶさかではない。

まあかといって俺にもカエデの修行とか最近の警備員の仕事がある。だから付きつきりで修行とかは無理だ。

というわけなので……

「誰？」

「俺の名はMr・サイキョーだ。お前を強くしてやろう」

「は？」

時間が無いなら影分身を使えばいいじゃない。

同一人物が二人いる事がバレないように、俺は天狗のお面をかぶって彼の前に姿を現した。

どうせ近くで学園広域指導員もやらされてるんだから、分身が消えない範囲で見回ればいいのだ。

まあやらせることなんてアレだ。

普段から筋トレをやるようにして、気を感じ取る方法を教えて、魔法世界の住居で書き上げたサイキョー流教本なんか渡してみたりした。

まあ後は本人の努力次第だろう。

そう言えば……名前聞き忘れたな。どうでもいいか。
頑張って強くなれ少年。

「タカミチよ」

「なんだい？」

「アスナちゃん、昔に比べて随分感情豊かになったねえ」

「そうだね。とてもいいことだと思うよ」

「俺は主にお前さんのおかげだと思うんだがどうだろう？」

「いやいや、同い年の女の子の友達ができたからだと思うよ。最近
はクラスの委員長と喧嘩してるみたいだけどね」

「あゝわかったぞ。喧嘩するほど仲がいいってやつだな。俺とクル
トみたいな」

「……まあ、そんなとこだね」

夜にちよつと遠出してタカミチと酒を飲む。

今は飲み始めてしばらく経ったというところ。

つまみを食いながら積もる話をしてるところだ。

ちよつとアスナ嬢が元気になったという話をしてるんだが、面白い
話が次々出てくる。

まさかあの無口&無表情が感情露わに喧嘩とは……

「アリウスはいつのまにかテオドラ様と仮契約してたしねえ……」

「してちゃ悪いかよ」

「僕たち、元々孤児だったのになあと思ってね」

「お前まで逆玉の輿とか言うつもりか？」

「違うよ。テオドラ様もアリウスもそういうことを気にするとは思
ってないしね」

「紛らわしいこと言うなってーの。そういうお前こそモテるんじゃないか？」

タカミチくらい真面目なイケメン教師ならさぞモテるだろうと思うんだが。

俺とは違って面倒見もいい奴だし。

未だに誰とも仮契約してないのが不思議なくらいだ。

「そうそう。なんでお前誰とも仮契約しないんだ？ いいのが出ると思うが」

「僕は道具欲しさに仮契約なんかしたくないよ」

「えー。でもモテるだろ？ 彼女でも作ればいいじゃねえか」

確かやたらと巨乳な新米教師がいた気がするが……
誰だっけ？

「君に言われたくないよ……僕が君に手紙を送った時にテオドラ様からただ文句を言われたか……」

「は？」

「全部君が鈍感なのが悪いんだ。さっさと手を出してくれれば僕も苦労しないのに」

おいタカミチ、目が据わってるぞ大丈夫か？
というか言ってる事メチャクチャだぞ？

「お前酔ってるだろ」

「僕が酔ってるわけじゃないか！　いいかい？　そもそもアリウスは……」

「絶対酔ってるから！　水飲め！」

「ゴクツゴクツ……ふう」

「ふうじゃねえ！」

その後も酔ったタカミチの猛攻は続いた。

タカミチを酒に強い俺と同じペースで飲ませたのが悪かったか。今度から気をつけよう。

「こんにちはアスナちゃん」

「おじさん……誰？」

「お、おじさん、だと……？」

「ええっとねアスナ君、彼はアリウスって言って僕の友達なんだ」

「タカミチの友達？」

「そうだ。ちなみにおじさんじゃねえぞ」

「そう。じゃあアリウスとタカミチ、私学校行くから」

「ああ、いつてらっしゃい」

「いつてらっさい」

ほとんど話せなかったじゃねえか。

まあまともな人間らしくなってたのは確かだが。

「おじさんはひどいよなあ……」

「まだ初対面の年上の男性に対しては慣れてないんだよ」

「でも見た目的にお兄さんだろ？ 普通」

「うーん。確かにそうなんだけど……」

「複雑だねえ……ま、これでもう言われないだろう」

それにタカミチはこれからどんどん老けるだろうし。

あんな修行してるから当然ともいえるが。

俺はアレを使うのはほどほどにしたいほづがいいと思うんだけどな。

「早死にするんだろうね……」

「なんか不吉なこと言わなかったかい？」

「気のせいだよ」

強さを得るために寿命減らすくらいなら強さは切り捨てるけど……ま、価値観の違いってやつだな。

「さて、今日は俺もタカミチの訓練に協力するぞ」

「え？ 本当かい！？」

「相手がいた方がいいだろう？ 俺もお前と戦いたいしな」

「お手柔らかに頼むよ？」

「任しときな。軽く揉んでやるぜ」

無音拳……ガトウさんが死んだ今は、タカミチくらいしか使う奴はいないだろう。

俺もちよつと真似してみたかったり……まあ無理だろうけど。タカミチが完成してから戦うのが楽しみだ。

月の綺麗な夜。

雲がかってはいるが見事な満月だ。

こういう日は月見でもしながら酒を飲むに限る。

「そう思うだろう？ あんたらもさ？」

「がっはっは。おもしろいのう兄ちゃん」

「師匠もこうというのが大好きだったからねえ」

麻帆良近くの森の中、大勢の異形を前に月を眺めつつ酒を飲む。異形たちの先頭にいる大鬼は少しは話のわかる奴であるようだ。

「悪いがここから先には通せないんでね。悪いが帰ってくれ」

「そういうわけにはいかへんのや……兄ちゃん、邪魔するんやったら死んでもらうで？」

わざわざ警告する大鬼。

なんともまあ優しい。

そんな気遣いは微塵もいらんけどな。

「ふん……目撃者は殺すだけだ」

そうそう。

こういったストレートすぎる奴の方が楽でいい。

一瞬で目の前まで移動して斬りかかってくる。

カラスみたいな見た目の剣士……烏族か。

「シェイツ！」

「よつと」

気合いをこめた声と共に振り下ろされる剣を、気を込めた右の掌で正面から受け止める。

そこそこの威力はあるんだろうが、とてもじゃないけど俺と戦えるレベルじゃあない。

この前戦ったエヴァなんかと比べるのは失礼だろうが、まああれだ。弱過ぎる。

驚愕の顔を浮かべる烏族の剣士を左の拳で吹き飛ばした。

「……お前ら油断すんなや。この兄ちゃんアホみたいに強いでえ……」

「わかってるなら諦めればいいってのに」

「これも命令や……兄ちゃんも大人しく相手したってーや」

そう言つて異形が全員身構える。
難儀なもんだね、どーも。

「はぁ……オラ、かかってきな。地獄の底までぶっ飛ばしてやるぜ」

一斉に向かつてくる異形に拳を構えてかつこつけたセリフを言う。
ゲームで見て以来一度やってみたかったんだよな。
よっし、派手に行きますか！

「オラアッ！」

パンチ一発で一度に数体の異形を吹き飛ばす。

「『『『『『ギヤオオオオオオオ！！！』』』』』」

こんな調子で一度に何体も消えるおかげで、楽々と制圧を完了した。まあやり過ぎたというかなんとか。

地形を変えちゃったな。これは弁償しなきゃなんのだろうか？

さて、報告の電話〜っと。

「帰ったら焼肉行くぞ。焼肉。じいさん、そこらへん皆に連絡付けてよ」

『嫌じゃ。というか何でそんなことしなきゃなんのじゃ』

「一人で焼肉って微妙だろ？」

『……君、そういうこと気にするって初めて知ったわい』

「失礼だなぶっ飛ばすぞ爺」

『とりあえず地形の事に関しては君の給料から引いとくからの』

「冗談きついで爺さん！……切りやがった。チッ」

別に給料引かれても問題ないくらい金はあるからまあいいけど。気分的になんかやなんだよな……

いいや、この時間帯じゃコンビニに“アイツ”がいるだろ。

ちょっと寄ってやるか。

「や」

「あーっ！ アリウスさん！ 久しぶりです！」

「こんばんはサヨ。久しぶりだな」

俺が麻帆良へ来て数日後に出会った相坂さよという少女。
少女というか……いや、少女である事に違いは無いのだが、ただの少女ではない。

なんと、50年以上も昔に死んだ幽霊であるという。

で、あるくせに夜の教室が怖いからコンビニに避難しているのだが。
幽霊なのに夜の教室で怯えるとか不思議でしょうがない。

「来てくれたんですねー！」

「まあ、暇だったしな。お前もコンビニばかりいないで他の場所に行ってみたらどうだ？」

「うう……だって夜道は危ないですよ？」

「幽霊のくせに何言ってるんだ」

「怖いものは怖いんですよ!」

誰にも触られないくせに何を怖がる。

というか俺が気付くまで誰にも気づかれないうって嘆いてたじゃないか。

まあ俺が気付けたのは動物の勘みたいなものだが。

「うう……じゃあ今夜のお散歩に連れてってください」

「別にいいけどな。サヨ、俺はここにずっといるわけじゃあないぞ?」

そもそも1年契約だし。

それ以上はいても2年は無いだろうし。

「ええっ! そうなんですか!」

「だから一人で夜の街歩けるくらいにはだな……」

「そんなことよりも! 本当に行っちゃうんですか! せつかくお友達ができたのに……会えなくなるなんて嫌ですよ!」

泣かないでくれ頼むから。

というか幽霊なのに泣けるのか。

むしろ幽霊で触れないはずなのにどうやって俺に抱きついて泣いてるか説明してくれ。

「あゝ。そのな? 落ち着いて聞いてくれ」

「ぐすつ……なんですかあ？」

頭に手を乗せて撫でる。

おい！ サヨに触れるぞ何故か！

まあ好都合だからいいけど。

「別に行つたらずつと帰つてこないわけじゃないし、別に今すぐ行つちまうわけじゃないから」

「……本当ですかあ？」

「ああ！ 俺は嘘はつかないぞ！」

「約束ですからね！」

いや別にここを去るまで後一年以上あるから約束するの早いと思う。そこんどこだろう？

「とりあえず街を歩かないか？ 今夜は月が綺麗だ」

「お月さまを誰かと眺めるのは初めてです！」

「50年も幽霊やつてるのに？」

「誰とも話せなかったんです！」

「ごめんごめん。そいじゃあ行こうか」

「はいっ！」

俺はしっかりとさよの目を見てそう言った。

にしても50年も一人ぼっちか……周りに人はいてもコンタクトが取れないってのはきついだろうなあ……

まあ、俺が友達になつてることが少しでも救いになりやいいけど。

ところで、ポケットの中に手を突っ込んでサヨと連れ立って歩く俺の姿は、他人には一体どう見えるんだろうか。

……サヨが見えないから俺が一人で歩いてるように見えるんだろうな。

「はあ」

「どうしたんですか？」

「なんでもないさ」

ま、気にする事でもないか。

今はサヨと月見でも楽しもう。

第二二話 1995年、麻帆良にて色々とする（後書き）

あとがき

なぜかサヨとフラグが立っていた。

何を言っているかわからねえと思（ry

久しぶりにマガジンを読んだ。

ネギ君何言ってるん？

フェイトと友達っておま！

自分の生徒を殺害未遂でござえますよ！？

途中経過がわからんから俺はまずこつという意見を出した。

そして結論……この作品のアリウス君は白き翼にも完全なる世界に

も味方しません。

次回×10位の予告『チートな転生オリ主だ？ そんな奴らの幻想
は、この俺様がぶっ殺す！』(噓)

第十三話 来訪、。。。となった妹分（前書き）

原作読んで気づいたんですが、ラカンと詠春（昔）は実力同じくらいなんですネ。

弱点がラカンの方がはるかに少ないだけで。

隅から隅まで単行本読んで初めて知りました。

今は圧倒的に実力違うでしょうが。

第十三話 来訪、。。。となった妹分

麻帆良へ俺が来て1年が経った。

タカミチが一年で3年分くらい老けたけど、それ以外には特に変わりは無い。

うん、というかマジで老けたな。

煙草を吸う姿も様になっていて、雰囲気ガトウさんに似てきた。そして実力の方も……

「一年でめっさ老けた代わりに強くなったな」

「……本当は少し気にしてるんだけどね」

「まあ、ガトウさんに似てきてるからいいんじゃないかね？」

「それなら別にいいんだけどね。師匠に近づけるなら……」

なんか黄昏つつ煙草を吸うタカミチ。

なんだろう。

渋い。渋すぎるぞタカミチ。

お前まだ20代なのにそんな……

「ところでアリウス、フレイアって子から手紙来てたよ」

「……もう読んだ」

読まなければ叫び出す手紙なんて誰がつくったんだ。
製作者を殴りたい気持ちでいっぱいだ。

「へえ……何だつて？」

「早く会いたいから一度こっち来るって」

「え？ でも竜族の子だって聞いたけど？」

「偽装するってさ」

なんで角を偽装できるのか……不思議でならん。
まあエヴァという幼女がナイスバディな美女を偽装できる世界だ。
なんとでもなるんだろう。

……なんか悪寒がした。今日は家に帰ろう。

第十三話 来訪、。。となった妹分

天気が良すぎて蒸し暑く感じる道を、俺はとある店に向かって歩いていた。

フレイアが来るというからその喫茶店で待ち合わせをしたのだ。

まあ、地図も渡したから大丈夫だろう。

場所も駅から世界樹までの一本道の途中にあるし。

問題ない……はずだ。

いや。

「問題があるとすれば……あいつの性格か」

しばらく前に会った時は変貌に驚いたけど、もしあのままなら早く
会わなきゃヤバイ。

少なくとも俺が話しかける前に誰かがあいつに話しかけたりすると

……

本当の意味で大爆発が起きかねない。

「ちょっと急ぐか……む？」

向こうで人だかりが……

まさか。

俺は急いで人だかりに向かって走った。

すると聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「その程度の腕で私をどうこうしようなんて百万年は早いですわ！」

「……アチャー」

積み重なった不良っぽい生徒たち。

その横に立っている、腰に手を当てて胸を張った赤毛の少女。
既に少女という体ではないが、一応16歳のはずだ。

うん、とにかくあの不良達死んでないよな？

……うん、ピクピク動いてる。

大丈夫だ、生きてる。

そのまま少女が観客を見回した。

「あ……」

目があった。

すぐさまこっちに走ってくる。

おい観客！ 何故道を開けるんだ！ おい！

フレイアがどう変わったのかは何年か前にすでに確認している。フレイアは……

「お兄様あああああああ！」

「うばっはあああ！」

瞬間のようなスピードで鳩尾に突っ込んできたフレイアに俺は押し倒された。

そう！ こいつはアリアドネーで何に影響されたか、変態レベルに俺の事を好くようになってしまったのだ。

こんな衆人環視の中で馬乗りになってキスを迫るなこの変態がああああ！

「すげえ疲れた」

「すみませんお兄様。少し暴走してしまいました」

紅茶を飲んでケーキを食べながらフレイアが言う。

アレで“少し”なのか。

じゃあすごい暴走したらどうなるんだ。
想像したくもないことだが。

それにしてもさつきから周りの視線が鬱陶しい。

さっきの喧嘩の現場からそれほど離れてない場所の喫茶店だとはいえ、なんでこうも視線が向けられるのか。

やっぱり髪の毛の色か？ それとも見た目完全に外人のフレイアを珍しがってるのか？

「ふふふ……お兄様の彼女だと思われてるのかしら……嬉しいですわぁ……」

何か聞こえた気がするけど気のせいだ。

そうに違いない。

「そっちはどうだ？ アリアドネーでも成績優秀だって聞いてるけど」

「お兄様がこちらに来てしまって会えないのだけが辛かったです」

「いや、そうじゃなくて」

「冗談ですわ。あちらの生活は充実しています。魔法も効率的な運用を学べて色々な見かたができて興味深いですし」

「そうか」

もう確実に魔法に関しての知識は俺より上だな。

基本知識なら負けても経験による知識では負ける気はないが。

「にしてもまた背が伸びたんじゃないか？」

「そ、そうですね？ 成長したのは背だけじゃないのですけど……」

「魔力も増えたか？ この感じだと」

「……もういいです」

そう言つてそつぽを向くフレイア。

何だ、俺は何か嫌な事でも言つたか？

「気にしないでいいですわ……それより、お兄様のお友達に会いたいですわ。タカミチというお方でしたっけ？」

「あゝ、別にいいけど顔の事は言つてやるなよ？」

「何かあつたんですか？」

「魔法球の中で修行し過ぎてちょっと老けたんだ。年一っしか変わらんのかなあ……」

「……自業自得じゃないですか？」

「そついうことは言わないようにな？」

この前に同僚の先生に一気に老けましたねつて言われてへこんでやがったんだ。

これ以上あいつになんか言つたらトラウマになっちまう。

まあフレイアも言つた通り自業自得なんだが。

本人はガトウさんに似てきたからいいとか言って自分を慰めてたけどそれでいいんだろうか……

ま、それでもモテるあいつは何なんだろうかと思っけど。

俺も少しはモテたいね。

少なくとも人に怖がられないようにはなりたい。

くそうタカミチめ、仮契約もしてないくせに……はあ。

「お兄様は十分にモテてますわ。拳闘大会で何度も優勝してますし」

「有名なとモテるは違うんだよ……」

(……お姉様だっているじゃないですか……それに私だって……)

「もういい！ さつさとタカミチのところ行こう！ ついでにここを案内するよ」

(……あ、でもアリスさんやエクセルさんもライバル？ でもお兄様なら皆引きつけてくれますわよね……)

「おいフレイア、おいてくぞ？」

「あ、はい。今行きますわ」

——アリウスは自分が他人にどう映るのかはつきり分かってない。

——まあだからこそ人に好かれるのだが……それを理解するのはいつになるのだろうか。

（あ、そついやエヴァに訪問の事言つてたっけ？　まあタカミチが言ってるからいいか）

「お兄様、どうかしたのですか？」

「いや、何でもない。行こう」

「フハハッ！　若いのにやるではないか！」

腕の一振りで巨大な氷塊が宙を飛ぶ。
それに追隨するは強大な魔力を纏う黒き吸血鬼。

「お兄様を誘惑する吸血鬼は私が裁くのです！」

腕を前に突き出して、紅蓮の炎を矢と飛ばす。

吸血鬼に向かって飛ぶは灼熱の炎を纏った紅き竜人。

氷が溶け、炎が静まる音と共に両者は激突する。

今回の勝者は当然黒の吸血鬼。

「うう……お兄様あ……負けてしまいましたあ……」

「普通負けて当然なんだから元気出せって」

「でも……でもお……」

ぐずって泣きつくフレイア。

大きくなってもこれだけは変わらなかったようだ。

「ほう、アリウス。そいつは貴様の女か？ 皇女はどうしたのだ？」

「黙っててくれエヴァ！ 話がややこしくなる！」

「なかなかの強さを持っているのでな、多少興味がわいたのだ。竜族とは珍しいものを見た」

「つたく……あれ？ タカミチは？」

「私とそいつの戦いを見て部屋に引きこもりおったわ」

……何か悪い事した気分になるな。

まあフレイアがかなりの戦いをして見せたからな。

年下に負けた……みたいな気分になもなってるのかね。

そんなに落ち込んでもフレイアとタカミチが戦ったらタカミチが勝つと思うんだけどねえ……

今は何言っても無駄だろう。

「お兄様あ……浮気なんか許さないんですからあ……」

「事実無根だ」

「ほれほれ、どうだ？ 気になるんだろ？ 幻術と知ってはいても目が行ってしまっただろう？」

「悪ノリしないでくれ！」

そもそもどうしてこんなカオスな事になったかと言えば……全部エヴァが悪い。間違いない。

あれはタカミチに言われたとおりに午後一時ピッタリにエヴァの別荘に入った時の事……

「待ちかねたぞアリウス、それで、その女がそうなのか？」

「お、お、お、お兄様！？ この女は誰のですか！ 事と次第によつては許しませんわよ！」

「ふむ……アリウス、ちょっとこっちに寄れ」

「お、おい？ エヴァさん？」

怪しい笑いを浮かべたエヴァが何故だか体を寄せてきたので思わずさんづけにしまった。

というか別荘に入るなり幻術で姿を変えたエヴァが出てきたのは何でだ。

そして錯乱する俺とフレイア、怪しく笑うエヴァ。

一体何がしたい。

「毎回思うが幻術のくせに感触あるのは反則だよな」

「フフ……反則か。そうだろうそうだろう」

「お兄様！ さっさとその女から離れてください！」

「ああうん。わかってるけど」

なんか怪し過ぎてすげえ怖いし。

むしろ現在進行形でフレイア、お前が怖いし。

「お兄様を誘惑しないでください！」

「別に私は誘惑してはいないがなあ……」

「うるさいですわ！ お兄様にすり寄る悪女は私が焼いてさしあげますわ！」

「ふふん、やってみろ」

なんで挑発にすぐ乗るんだろうな。

そういうところは俺に似てしまったんだろうか。

そして物の見事にフレイアが返り討ちに会って現在に至る。

「お兄様あ……私、強くなりますわあ……もっともっと強く……」

「お、おう、頑張れ」

「そしてあの吸血鬼にリベンジを果たすのですわあ……」

「……頑張れ」

その代わりすんごく苦労することになるぞ。

俺だってまずはエヴァと互角に戦えるレベルになろうとしてるんだ。もっともその先にはバグという名の師匠がラスボスとして配置済みだが。

……というか師匠とエヴァ、どっちが強いんだ？

まあ師匠だろう。理論抜きで意味不明な強さを持つてるし。エヴァさんは理論で戦うからな。

横でいろんな意味で燃えてる妹分に負けないために俺も修行を頑張ろう。

さて、現在の俺の強さは魔法世界のランク付けで表せばSランク相当に当たる。

これは最上級の竜種とか（古竜種など）とおんなじくらいの格付けだ。

希少らしいので実際には戦った事ないが、鬼神兵がA A Aランクだとするならば俺は自分で納得できる。

俺は鬼神兵相手に3体同時撃破が可能だからだ。

3年ほど前に遺跡に行った時に、幻想空間の中で戦わされたのだ。

ドラゴンも出てきたが、全部返り討ちにした。

アーティファクトの力が無ければ危うい部分もあったので、Sランク相当だと言われたのだ。

誰にかって？

たまたま茶を飲んでる時にエクセルに聞いたらそう言われた。

そういえばエクセルもアリスもかなりの強さだ。

普通にA Aランク以上の強さがあるはずだ。

ホムンクルスゆえか、見切りも狙撃も誤差がほとんどないし。

そんな二人とも会社設立の際に仮契約を結んだのだが、まあ今はいいだろう。

フレイアは発展途上とはいえ今もかなり強い。

それはエヴァと一応戦えたことからわかるだろう。

今はまだタカミチよりも弱いが、才能は確実にある。

竜族の能力もあるのだ、将来は確実に強くなる。エヴァ以上になるのはかなり難しいだろうが。

アレを越えようとするなら、アホみたいに才能があるか、子供のころから死線を越えるような訓練をしなければだめだ。

後者はもちろん俺である。師匠の訓練はひどかった。本当に。

今はそのおかげで強くなれて万々歳だが、当時は本当の本当に死ぬかと思ってしまったのだ。

旧世界の森に過剰に癒されたのは、魔法世界の森にトラウマがあったせいなのだ。そうに違いない。

話がそれたな。

いつになったら師匠の域に追いつけるのか。

それはまだわからないけど、これからも頑張ろうと思う。

第十三話 来訪、。。。となった妹分（後書き）

あとがき

久しぶりにアラジン見てたら山ちゃんのジーニーが楽し過ぎた。
でも出演させたらバランス崩壊するからできません。

でもF a t eの二次創作に出演させるのを考えた事はある。

自由になった後のジーニーさん召喚みたいな。

令呪が3回の願い事の代わりなわけです。

それで昔ほどの力はないけど令呪で願いを叶えられるみたいな。

発想だけはおもしろいけど俺の力が足りずに鎮座した。

別にアラジンさん召喚でもいいんやけどね。盗賊王の息子さん。

ゼロの使い魔でジーニーさんのランプ召喚した話を書いたけど、ハ
チャメチャ過ぎてやめた。

今作のネギま二次創作では神鳴流の奥儀にいくつか見慣れないもの
が出てくると思いますが、『まぶらほ』とかに出てくるのでそちら
の資料をお読みください。

あとは、ネタがいくつか混じってますが気にせずに。

面白ければ作者が考え付いた時点でどんどん混ぜますので。

こうだったら面白い！とかあったらぜひご意見を！

ではどう。

おおかみのがいでん一話（前書き）

あとかきのアンケートは終了いたしました。
内容を改定しましたがご勘弁を・・・

あ、この外伝は本編に関係ないですよ。

あ、でもやっぱり少しは関係ありますよ。

おおかみのがいでん一話

「暇じゃのう……」

「テオドラ様、紅茶などいかがですか？」

「いら〜ん。エクセルよ、アリウスはまだ帰ってこんのか〜！」

「はい。マスターはまだ旧世界から帰ってきていません」

「うう〜。あやつ、浮気などしておらんじゃろっな……」

「大丈夫でしょう。マスターはおばかさんですから」

「……そうじゃな。うむ、帰ってきたらちよつと誘ってみるかの」

「それがいいと思います」

おおかみのがいでん一話

Chapter・1 アリス・ミュリエール

その日、アリスは街へ出ていた。

食材や酒などの買いつけは彼女の仕事だからだ。

そんな理由で街に訪れた彼女は実に目立っていた。

着ているもの自体は、黒の丈長ワンピースにメイド服姿で白のヘツドドレスにエプロンという普通のメイドスタイルだ。

だが、その背中にはありえない程巨大な荷物が背負われていて、さらには両手にも野菜やら何やらが詰まった袋を持っている。

具体的に言くと直径2メートルはありそうなくらいで、周りの通行人の邪魔なくらいである。

何故そんなにたくさんさんの荷物を持っているかというと、ダイオラマ魔法球の中にある倉庫に大量に保存しておくためだったりする。

普通そんな迷惑をされれば大変な事になる。

だが、近くに住んでいる人は既に慣れてしまっているので問題ないのだ。

皇女であるテオドラがたびたび訪れる家のメイドだから仕方ない、という思いもあるが。

そんな奇妙な風体のアリスは大通りを通り過ぎて裏街まで移動した。月に一度裏街のとある店で魔法薬を買う、今日はその日なのだ。

さて、ここで一度確認しておくが、アリスは奇妙な風体であるとはいえ容姿は美しい銀髪の女性だ。

そして裏街には、アリスがどうという人物か知らないゴロツキどもが

ゴロゴロしている。

だから、彼らがアリスの事をただの力の強いメイドとかと勘違いすることがたまにあるのだ。

今回も、とあるゴロツキのグループが“不幸にも”勘違いしてしまった。

「……チッ」

不機嫌そうに舌打ちをするアリス。

先程から彼女の周りを柄の悪い男たちがうろついているのだ。おまけに自分の事をいやらしい目で見てきている。

アリスは正直不快で仕方なかった。

「……蹴散らすかな」

ボソリとそう呟く。

アリスにとって自分の上位にいる男性は、己のマスターであるアリスしか存在しない。

アリウスの友人ですら同位に考えるあたり、他人の事をどう思っているかがわかるだろう。

ちなみにテオドラは既にマスターの暫定的な配偶者みたいな位置として認識されている。

そして勿論、知り合いですらないゴロツキなど彼女にとって最底辺の存在である。

10分後、魔法薬を買って店を出たアリスは先程の考えをさっさと

実行しなかった事を後悔していた。

店を出て数分もしないうちに周りをゴロツキどもに囲まれたのだ。きつとエクセルくらいにしかわからないだろうが、彼女の顔には今しつかりと怒りが現れている。

「なあアンタ、どこのメイドか知らないがこんなところに来るなんて運がグゲアッ！」

無駄に顔のデカイ男が声をかけてくるだけで不快だ。

そう思ったアリスは男の腹に蹴りを叩きこんで吹き飛ばした。

それを見たゴロツキの仲間連中は、驚きを顔に浮かべながら拳を構えた。

「ふむ」

荷物があるから面倒だけれど、全員蹴り飛ばせばいいだろう。

そう判断したアリスがゴロツキ連中に向かって足を進めた時だった。

「おい！ お前らやめろ！」

横道から無駄に派手な格好した少年が飛び出してきた。

「なんだてめえは？」

「こんな綺麗な女の人を囲んで何をする気だ！ 大丈夫ですか？」

そう言つてこっちに笑顔を向けてくる。

正直うざりたい。なんか相手をしてくれるらしいのでちょうどいいからこのまま帰ろう。

アリスはすぐさま瞬動を発動してその場から消えた。

実際のところいつでも瞬動で逃げさせたが、そこまでやるのもどうだろうと思っていたのだ。

そんなところに変な子供が出てきたから実行に踏み切ったのである。

そして驚いたのはゴロツキやら割り込んだ少年の方である。

何しろ襲おうとしていた相手が消え、守ろうとした相手が消えたのだ。

どちらも口をポカンと開けてその場に突っ立ってしまっている。

「何故だ……ここで助けてメイドさんが俺にラブラブな作戦だったのに……」

「おいてめえ！ ガキが何の用だ！ 邪魔しやがって！」

愕然とする少年と、実力の差を全く分らずに女性を襲うのを邪魔されたというゴロツキ。

あのまま襲っていたら全員病院送りだったろう。その点では彼らはその少年に感謝してもいいんじゃないだろうか。

いやまあ、正直どうでもいいことだろうけど。

「ただいま」

「お帰りなさいアリス。……どうしました？ 嫌な事でもありましたか？」

「はい」

「そうですか……ちょうどテオドラ様が来ていますので、皆で何かあったか聞いてあげましょう。お茶の準備をしてくれますか？」

「わかりました。エクセルはテオドラ様のところに戻ってください」
「わかりました」

Chapter・2 エクセル・ミュリエール

トントンと書類を揃えてファイルに収める。

新しく下から上がってきた報告書の整理を行うエクセル。

会社本部はシルチス亜大陸の町中に普通に建っているが、実は社長室がある真の本部はアリウスの家にあるのだ。

それにここならばテオドラから、政府が賞金首に認定した情報をすぐに貰うことができる。

管理能力があるエクセルはその処理を行っていたのだが……

「これは……？」

なんだかおかしい内容の報告書を発見した。

とある賞金首が頭をやっていた組織を賞金稼ぎ部門の第12部隊が襲撃したところ、既に襲撃を受けた後だったそうだ。

賞金の受取所の方に確認を取ると、十代の少年少女の五人組が賞金首を捕えてきたとのこと。

「これは……調査の必要があるでしょうか？」

アリウスが社長を務める『黒い獵犬』には、賞金稼ぎ部門の他にも情報部門と営業部門がある。

その全ての管理はエクセルが行っていて、不審な情報があればすぐに彼女に検査されることになる。

今回もそんな情報の一つが発見されたわけだ。

ちなみに今エクセルがいる部屋の中には、彼女のアーティファクトで作り出した人形たちもせわしなく書類の整理を行っている。こついつた報告書がエクセルの元まで来ることは結構珍しい事なのだが……

「まあ、一応情報部にでも回しておきましょう。後は……」

そう呟きながらも彼女の手は一向に止まらない。

並列思考を行って、思考と作業を同時にこなすエクセルだからできる芸当だ。

実質、エクセルが会社の社長と言ってもおかしくないくらいの事務能力なのだ。

テオドラが公務を手伝ってくれというのも理解できるというものだろう。無論、その時はさすがにまずいだろうと止めたのだが。

「それにしても、マスターはいつ帰ってくるんでしょうか……」

はあと溜め息をつきながら彼女は己のマスターの事を想う。

自分たちの事を『所有物』として扱っていた前のマスターと違い、現在のマスターであるアリウスはそうではない。

自分たちの持つ知識も求めようとはしないし、食事をさせたり服を買ってくれたりなど、普通の人間として扱ってくれる。

エクセルは自分の精神が、何も刺激の無い長い時を経て摩耗してしまったのを知っている。

その精神が、アリウスの手によって蘇ったのだ。

それは同時に、彼に対するただならぬ感情を持つてしまうことと同義だった。

エクセルにとつてのアリウスは、ただのマスターではなく『かけがえない人』でもあるのだ。

勿論、感情を表に出さないアリスも心の奥底ではそう思っている事をエクセルは知っている。

だから長い間会えないことに不満を感じてもいるのだ。

「今日はテオドラ様が来ると言っていましたし、催促してもらおうように頼んでみましょう」

それがいいとばかりにうんうんと頷く。

こつちから手紙を送っても報告書と同じような返事しか返ってこないし、従者の立場だから帰ってきてくれなんか言えない。

だからテオドラ様に頼んでしまおう。そんな思考である。

さすがエクセルというべきか、なかなか悪知恵も働くのである。

それによってアリウスがテオドラからのとばかりを受けけるのは、まあご愁傷さまといったところである。

おおかみのがいでん一話（後書き）

あとがき

アンケートは終了しました。

第十四話

ちいさいきつね（老）とおおきなおおかみ（若）

前篇？（前書き）

アンケートは現在も続行中です。

完全にオリ展開です。

さあ出るぞ当初から考えていたキャラが。

きつと今後書く小説にも出そうなキャラが。

ヒントは栃木県です。

第十四話　ちいさいきつね（老）とおおきなおおかみ（若）　前篇？

『お兄様、早く帰ってこないとどうなっても知りませんわよ？』

そんなメチャクチャ気になるといつか、怖い事を言ってフレイアは魔法世界に帰った。

それが一か月前だ。

今は俺も帰る準備を進めているところである。

思えば初めから一年くらいの話だったし、せつかく忠告してくれてるんだからテオドラが怒らないうちに帰った方が身のためだ。

出発は一週間先だが、挨拶回りでもしておいた方がいいだろうか。

ジリリリリン！…ジリリリリン！…ガチャッ！

「はいもしもし？」

『アリウス君じゃな？　頼みたい事があるんじゃないか？…』

「俺は帰る準備で忙しいんだ。じゃあな」

ガチャッ！…ジリリリリン！…ジリリリリン！…ガチャッ！

「しつこいぞじいさん！」

『お願いじゃよ。君にしか頼めない事があるんじゃ』

「……一応聞くよ。その代わり金は貰うぞ」

『うむ。感謝するぞい』

「早く内容を言ってくれ」

『うむ……関東魔法協会に依頼されたものなんじゃが……手が足りなくての。お主しかいないんじゃよ』

「だから早く内容を言えって!」

『わかったわい……一応聞いとくが、殺生石って知ってるかの?』

「セツショウセキ? なんじゃそりゃ?」

『はあ……一から説明するぞい……』

第14話 ちいさいきつね（老）とおおきなおおかみ（若） 前
篇?

「……よくわかった」

『本当じゃろっな?』

「ああ。つまりあれだ。バラバラになって復活しないと思ってたら、いつの間にか不完全ながら復活してた？」

『そうじゃ。後から確認したんじやが、いつの間にか各地に封印されていた殺生石の破片が回収されとった。どこの誰がやったのかはわからんがの』

「で、その復活した大妖怪とやらはどこにいるんだ？」

『復活に気付いてからすぐに結界を強化しておる。おかげで妖怪の本体が封印されておった石があった場所から移動できておらん。すぐにそこに行つて退治してもらいたい』

「そんな強い妖怪の倒せるのかよ？ 伝説級の妖怪とか言ってるくせに」

『言つたじやろう。まだ復活は不完全なんじや。各地に封印されとった石は、妖怪の本体ではなく力を封印しておった。それらの一度散り散りになつた力を元に戻すには時間がかかるんじやよ』

「つまりだ。弱いうちなら安心しろつて？」

『決して弱くはないんじやよ。ただ、力を取り戻す前ならば本来の力はないじやろうと……それだけの話じゃ』

「実際、本来の強さはどのくらいなんだ？」

『ナギ達が封印したりヨウメンスクナ……あれよりは弱いが、鬼神兵よりは遥かに強い』

「ふうん」

『……何を考えておるんじゃ？』

「いんやゝ別に何もゝ？」

『くれぐれもじゃぞ！　ワザと力を取り戻させたりなんてことは……』

「じゃ切るぜゝ」

ガチャッ！

「フッフッフ……いい力試しの相手が出てきたじゃないか」

帰り支度を進めていたカバンをソファへと放り投げ、さっそく出かける用意をする。

じいさんから聞いた通りなら……行き先は栃木のなにかって山だ！　レッツゴー！

栃木県那須郡のとある山。

現在、その山全体が結界によって覆われ、中にいる妖怪を閉じ込め

ている。

そして山を取り囲むように多くの魔法使いが配置されていた。彼らが妖怪を外に出さないように結界を張っているのだ。

そこに一人の男が現れた。

関東魔法協会理事長が書いた依頼の委託状を持って。

彼は結界に穴を開けてもらって中に入っていた。

無謀であると魔法使いたちは思う。

中にいる妖怪——白面金毛九尾の狐は、並の魔法使いではいくら束になっても勝てない強さを持つ。

それを強さに自信があるとはいえ一人では……

彼らは馬鹿な男の背中を見送った。

「ハッ！　なんだこの空気？　澱み過ぎだろ」

学園に攻めてきた妖怪どもが出してた空気とはまるで違うな。

あいつらは本当に軽い空気だったが、これは煙みたいに濃い。

これがマジもんの妖気ってやつか？　魔力とか気とかじゃなくて。

「で、アレがその狐の妖怪か。……随分でけえな」

全身金色の毛に覆われた九尾を持つ大きな狐。

あんまり強そうには……うん。見えるな。

纏つてゐる空気とか魔力とかが尋常じゃねえし。前に見た本気のナギさんとかエヴァ程じゃねえけど。

これ、勝てるのかね？ しかもどう見ても復活が不完全とは思えねえんですが？

「まあ何とかなるだろ。おいこらキツネ野郎！ 俺がぶつた押してやるから覚悟しやがれー！」

『……野郎？ 野郎ってなんだよー！』

「お？」

なんか威厳があるような無いような女の声が聞こえてきた。そして巨大な狐が立ちあがってこつち見た！？

『あたしは女だ！ 野郎なんかじゃないぞー！』

「あ、そうなの？」

『そうだ！ そこんとこまちがえないよーになー！』

そーなのかー。

でも男だろうが女だろうが知ったこつちゃねえや。

というか口調のせいで段々イメージが崩れてるんだけど。

「いやまあどつちでもいいけど、俺に倒されてもらうぞ」

『な、なんでだ？』

「いやなんでって、お前がいると困るんだとさ。とりあえず封印さ

れとけ」

俺がこいつをボコって弱らせたところを封印って手はずらしいからな。

消滅させられるならさせてもいいらしいけど。

『いやだぞ！　もう封印何てされたくない！　せっかく外に出てこれたのに！』

「まあ諦めろ、九尾の狐とやら」

『人間ごときが、調子に乗るなー！』

ついに怒って口から火を吐いてきた。

そんなこともできるのかよ……　つと気合い防御！

「効かんな！　師匠！　技を借りるぜ！」

——ラカン・インパクトオ！

『きゃー！』

なんかやたら可愛い声あげて吹っ飛んだけどお前ホントに皆から恐れられる大妖怪なんだろうな？

少し不安になってきたんだけど。

でも感じる力が強いのは確かだしなあ……

「そんなデカイ図体じゃただの的だぜ？」

『うつ。ならこうだ！　変化！』

「はい？」

そんなことできるの？

まあじいさんから聞いた話じゃ人に化けて悪さしてたらしいし、出来ても全然不思議じゃないのか？

幻術ならエヴァ相手に散々見たし。

「ふっふっふ。これならば図体が大きいなどと言わせないぞ！」

「そうだな。まあ俺としちゃ人型サイズの相手の方が楽しめるからいいけどよ！」

「なんだと〜！ だいたいあたしの体を見てなんとも思わないのか〜！」

「何が？」

「こんな美女なんてみたことないだろう？ ふふ〜ん」

「いや、何回もあるけど？」

「なんだとー！？」

金髪のナイスバディってエヴァで散々見たし。

美人な女性なら周りに結構いたしな。テオドラはまああれだ。じゃじゃ馬だけど。

「うるさいうるさいうるさい！ 死んでしまえー！」

「げっ!？」

紅い着物を着た金髪美女になったキツネ女が頭上に両手を翳すと、そこに巨大な炎の球が出来上がった。

狐火ってやつだろうか。多分間違っていないだろうな。

「死んでしまえっ!」

「ぬわっっ!」

俺が気合い防御をすると同時に、炎の爆発が辺り一帯を飲みこんだ。

S i d e : きつねっ娘

せっかく封印が解けて外に行けると思ったのに、魔法使いの連中が結界なんて張って邪魔をしてくる。

あたしが結界を破ろうとしているところにそいつは現れた。

狗族と人間の混じり者のくせに、こともあろうにこのあたしを野郎だなんて!

失礼なことばかり言うし!

でも怒って炎を吐いてみたのに全然堪えてない!

他の奴らはみんな倒せたのにずるいぞっと思ってたら思い切りパンチされた。

結構痛くてびつくりしたけど、そいつはバカだった。

このあたしに大きすぎるから攻撃があてられると言ったのだ！

あたしは昔よくとっていた人の姿になった。

それにこいつは男だからこの姿になれば、のっそりされてしまうはずだ！

うううう！

こいつはあたしの事見ても全然反応しない。

美女ならいくらでも見てるなんて、あたしの方がずっと綺麗のはずだ！

「死んでしまえ〜！」

「ぬわ〜〜〜！」

思わず本気で狐火を出して攻撃してしまった。

なかなか面白い人間だったのに殺しちゃうなんてもったいなかったかな〜。

でもあんな失礼な奴死んじやっても別に……

「し、死ぬかと思っただぜ……」

「ええええええ！？」

なんで死んで無いのだ〜！

くっそ〜！ 本気の本気で行くぞ〜！

なんか涙目になってる金髪キツネ耳女妖怪。
精神年齢低すぎないか？　どうもおかしい。
というか俺の気合い防御を破ってダメージが来るとは……
いやはや、噂に偽りなしだったってことか。

「あたしの真の姿を見よう！」

「何いつ！？」

まだ変身を残しているのか！？

旧世界に来てから読んだマンガじゃあるまいし、さらに強くなると
かないよな？

……ありそうで怖いな。

というか真の姿ってあのデカイのじゃないのか？

そんなこと考えてたら煙と共に変身終わったようだ。

別に煙はいらないと思うので威厳を出したかったんだろう。
そして煙が晴れると……

「なんだ幼女か」

「なんだとはなんだ！」

だってどう見ても威厳が微塵も見当たらないんだけど？
さっきの方がまだマシじゃねえか。

「ふっふっふ」あたしを本気にさせたな！　くらえあたしの本気

パワー！」

「この世界の少女は……どこかおかしい」

そう言つて炎の球を投げつけてくる……しかもさっきの出力をさらに上回るか……

ふざけてる場合じゃねえな。

エヴァといいこいつといいマジで少女強過ぎだろホント。

「あんまり使いたくないんだけどなっ！ 来れ！」

「食らうがいい！」

「てめーがなっ！」

本気で気を纏わせて『フアング』で水平になぎ払う。

それによつて炎の球は全て消え去つて余波がキツネ少女に向かうが

……

「ふんっ！ こんなもの効かないもんね」

「腹立つな〜いちいち」

「あっかんべ〜」

「こいつ長い時を生きる大妖怪とか絶対嘘だろ！」

「永遠に若々しいだけだも〜ん。うりゃ！」

子供なだけだろうが！

そう怒鳴りたかったけど右頬をぶん殴られてキャンセルさせられた。いってえええええええ！ やりやがったな！

「もう容赦しねえぞ！ オラアッ！」

「ふっふっん！ まだまだ甘いぞ！」

『フアング』をしまつての激しい拳の応酬……なのだが。

出力的には現在本気の俺が勝ってるはずなんだが、なにしろ相手の体が小さいうえに、腕の長さが俺より短いため攻撃間隔が短い。そのせいで結構な数を防がれてしまっている。

くっそ……。一発の威力の勝負に持ち込めば『フアング』使って……いや、できるだけ素手で倒さねえと強さの証明にはならねえな。ちっ……とりあえず限界ギリギリまでやってみるしかねえな！

「はっ！」

「わたたっ？」

殴り合いをしつつ右手を目の前に突き出して狗神を破裂させて距離を取る。

「どうよ。このままじゃ埒が明かないからここらで大技を出し合うつてのは」

「なんだと？」

「負けるのが怖いんじゃないんだぜ？」

「調子に乗るな！」

はっはっは。

あいつ俺よりもバカだぜ。
まんまと乗せられてやんの！

「いくぜえ！ 右手に気！ 左手に狗神！ なんちゃって咸卦法ア
レンジだっ！」

ぶっちゃけ狗蓮の強化版だけだな！ 漆黒の炎を食らいやがれ。
出力だったら負けねえぜっ！

「ふん！ あたしの力の前に恐れおののくがいい！」

そう言って両手を俺の方に向けると、巨大な炎の球が現れた。
今度は色が青いぞ。おまけにパワーもさっきよりかずっと上だ。
とにかく勝負だ！

「ウルフフアングッ！」

「狐火最大火力っ！」

ドンッ！ ガガガガガガッ……

青い狐火と黒い狗蓮が思い切りぶつかりあう。
そこからさらに右手に全ての力を集めて思いつきりぶっ放す。
体の中にある力を絞り出すイメージでえ……放とう！

「はああああああ！ 吹き飛ばええええええ！」

「ちよつ！ やめろ！ ちよつと待てバカ！ なんだそのデータ
ラメな力は！」

今までも滅多に出したことがない程のパワーが体から湧き出てきた。

それとも久方ぶりに命をかけたギリギリの勝負（変な空気だけど）に興奮しているのか？

とにかく全力全開の俺のパワーにキツネ幼女は驚いているようだ。
んじゃまあ……

「今更止まらねえぜ！　食らいやがれえええええ！」

ドカアアアアアアアアン！

爆発音と共にキツネ幼女が吹き飛んだ。

これにて一件落着、か。

「勝手に殺すな！」

「生きてた!？」

なぜだか後篇に続く。

第十四話

ちいさいきつね（老）とおおきなおおかみ（若）

前篇？（後書き

あとかき

タマモちゃんの容姿はアルカナハートのアンジェリカさんです。
エヴァに次ぐ第二の金髪幼女ですね。

彼女の強さは、いくら大妖怪でもリョウメンスクナは一応神様という
ことも考慮し。

強さはスクナよりワンランク下です。

数値的には5000です。

ちなみにアリウスは現在6000〜7000はあります。

あと7年でラカンの自称12000まで辿り着けるのか。
まああれって全部例えの話らしいですけどね。

まあネギ君が恐ろしい速さでラカンと喧嘩できるまでに強くなるん
だから、結構才能があって20年も修行したらラカンまで辿り着く
よね。アリウス頑張ってー。

こんな強いんじゃないやアリウスにしか頼めませんしね〜。
詠春さんもいいさんも忙しいですし。

エロティックなヤツが欲しい人はぜひご意見を。
できたら反映します。

20話くらいまでには原作はいります。

それまでには日常編とイチヤコラ編が入ります。

ご期待ください。

アンケートの結果、『2：ハッピーエンド』で行きます。

この作品を舞台にして何かやらかすことはあるかもしれませんがね
……
もしくは登場人物で……

ラカン「いつそのこと子供作っちゃえばいいのによ」

作者「あと七年じゃ色々キツイ。まず結婚してねえ」

ラカン「つまんねーな」

作者「伊集院先生の子供とか、もっと小さくても活躍してるから出しても活躍しそくだよな。ダイオラマ魔法球とか使えばさらに」

アリウス「あんたらは何人の事勝手に……」

作者「既に外伝的な物を作る話が持ち上がっているぞ？　アリウス

君が早いうちに結婚して子供作って、その子供が麻帆良に先生しに行くという外伝が」

アリウス「……せめて完結してからにしてくれ」

タイトル詐欺だったかな……

第十五話　ちいさいきつね（老）とおおきなおおかみ（若）　後篇？

「へへ。名前はタマモ？」

「お前はアリウスと言っのか。強いから子分にしてやるぞ」

「断固拒否する。というかなんでこんなのんびりしてんだ？」

「戦う力なんて残ってないからだぞ！」

「偉そうに言うなって。いやまあ俺もそうなんだけどさ……」

第15話　ちいさいきつね（老）とおおきなおおかみ（若）　後篇？

倒されずに封印されてただけあつてさすがにしぶといようだ。

このキツネ幼女……もとい九尾の狐はタマモというらしい。

一番最近使ってた名前で、一番愛着がある名前なんだそうなの。

で、なんでバトってないかという俺達は二人とも疲れ果てていたのだ。

で、暇だから自己紹介とかやってたわけだ。

「その少女の姿は何なんだ？　すごい気になってたんだが」

「ふふん。気になるのか？　仕方ない。教えてやろう！」

「なんでそこまで偉そうに……」

「この姿は無駄をいっさいなくした姿であり、あたしの精神と一致した姿でもあるのだ！」

「あのデカイ狐はなんだったんだ？」

「あれは遙か昔のあたしが妖怪じゃなかった頃の姿だもん。今はこのプリティーな少女の姿が真の姿なんだよ？」

なんでも、妖魔となった時点で魂の形が変わるらしい。

で、現在の魂の姿に当たるのその少女姿だと。

精神と一致するのはそういう意味なんだろうなあ……

「でも昔随分悪さしたって聞いたしなあ……」

「あれはちよつと悪戯しただけだもん！」

「例えば？」

「暇つぶしに子供の振りして人間に育てられたりとか、道を通りがかった悪そーな顔した奴らをパクツと」

「食ったのかよ!？」

「違っう！ を加えて思いっきり遠くへ放り投げただけだ！」

「余計にひでえよ！」

絶対に死んだらそいつら。

いやまあ遙か昔のことなんて今更何も言わんけど。

見た目ただの幼女だし、性格もエヴァに比べてずっとマシだし。

ちよっとわがまま過ぎるところがあるようだけど、エヴァよりマシだろ。

大事な事なので二回言いました。

ん？ なんか寒気が。

「で、どうする？」

「なにを？」

「お前、このままじゃどの道封印されるけど」

「なんだとっ！？」

だって元々それが目的なわけだし。

俺と戦って力も出しつくしちゃったみたいだし。

「お前！ なんとかしろっ！」

「えっ」

「あたしの子分にしてる！ だから役に立て！」

「……それ、普通お前が子分にしてくれというんじゃないか？」

「そ、それは……ううー！」

駄々っ子のようにしているタマモ。

うーうー言っても俺は子分にはならんぞ。

「し、仕方ないな！ それならあたしがアリウスの子分になってあげない事もないぞ？」

「言い方がな……」

「むうー……あたしが子分になってやるって言ってるんだぞ！」

「お前封印されても知らねえぞ？」

「それはいやだー！」

どうしよう。

こいつこれほどまでにからかって面白いとは。

十分強いし、ここで死なせてしまっ（封印させる）には惜しいかもな。

悪い奴ってわけでもないし。

「で、どうする？」

「もう暗い石の中にずっと閉じ込められるのなんて嫌なのだー！ だからお願いアリウスー助けてー！」

「お、おう。そこまで言うなら……」

「ホントか!」

「あ、ああ……」

「というかマジ泣きするなよ。」

いくらなんでも幼女の姿をした奴に泣かれるのはキツイ。昔にフレイアに泣かれた事を思い出す。似てねえけど。

「まあお前はあれだ。これからは俺の使い魔的な?」

「待て! 子分じゃないのか?」

「おんなじようなもんだろ」

「ん。そうなのか?」

タマモは首を傾げた。

悩んでるようだが大丈夫、俺も実はわかってない。

「問題はじいさんに説明する方法だが……」

「じいさんって誰?」

「関東魔法協会の理事長。お前さんを退治するようにつて俺に言ったじいさん」

「そいつがあたしのことを封印しようとしたんだな! ふつとば

してやる〜！」

「待て待て待て。んなことすんな」

というかするまえにお前が吹っ飛ぶぞ。

あの人もなかなか人外みたいに強いから。外見も人外だけど。パワーが無いお前じゃ絶対無理だって。

「この恨みはいつか晴らすぞ！ 絶対だ〜！」

「まあそれは置いてだ。お前を封印しないでいい名案がある。聞くか？」

「早く言え！ じらしても意味なんかないだろ〜！」

「そうだな。題して——“おじいちゃんあたらしい子なの大作戦”だ！」

「お前実はバカだろ〜〜〜！」

ハッハッハ。

今頃気づいたか。

じゃあその作戦に決定だ。行くぜ！

「というわけだじいさん」

「お願いだぞ！ あたしは本当はいい子なんだ！」

「……正直、何と言っていていいかわかんない」

だろうな。

俺も未だにおかしいとは思ってる。受け入れたけど。

「のうアリウス君、この子本当に九尾の狐であってるんじゃないかな？ とてもそうは思えんのじゃが……」

「戦ったらメチャクチャ強かったからあってるはずだぜ？ 本人もそう言ってるし」

「ふふん。私以上に強い妖狐などいないぞ！」

「ほら」

「うつむ……確かにそうらしいのう。それに報告通り、悪事を働くというより悪戯を働きそうじゃな」

「実際ここに大人しく連れてくるのに寄り道しようとするこいつを3回は止めたぞ」

「御苦労じゃったな」

全くだ。

俺は幼稚園の先生になった覚えはねえぞ。その百倍は疲れた気分だけだな。

「もう彼女が……玉藻じゃったか？ 悪事を働かないというのであれば、ワシ個人としては封印は必要ないと思う。ただ……」

「他の連中だな？」

「そうじゃ。そういった事を理解しない魔法使いたちにとっては彼女は脅威じゃ。排除しようとしてくるじやろう。彼女をここに置いとくわけにはいかぬぞ？ エヴァでさえ未だに文句を言う奴らがいるのじゃからな」

「そういうことなら大丈夫だ。俺がこいつを魔法世界にと連れてく。俺の家においときゃ大丈夫だろ」

「まあ、そこらへんは任せるわい」

「まあ任しときな」

なんか扱いに慣れちまったからな。
俺に任せとけば大丈夫だぜ。

「というわけだタマモ。俺と一緒に来てもらうぞ」

「仕方ないな！　そこまで言うならついて行ってやるのではないかい！」

「いきなり偉そうに……」

「……もう一度聞くんが、本当に大丈夫なんじゃな？」

「心配すんなって！」

「そこが心配なんじゃよ。はぁ……」

老い先短いのに溜め息吐いてたらさらに寿命減るぞ。

最近孫の話ばつかしてるくせに寿命減らすのはやめた方がいいんじゃないか？

「お前さんに注意される事でもないわい！ 全く……」

「じゃあ挨拶回りしたら俺は魔法世界に帰る。手続きよろしくな」

「わかったわい。また会える事を祈っておるぞい」

「こつちこそな。行くぞタマモ」

「あつ、おいコラ〜！ あたしは荷物じゃないぞ〜！」

俺は机の上にあった菓子を食うタマモを持ちあげて部屋を出た。

こいつ、あっちに行ってもわがままに動き回るんだろうか。

エクセルにでも教育させるかな。

……うん、そうしよう。

さて、こいつを部屋に放り込んだら挨拶回りだ。

今は夜だからまずは……

「ぐすつ……ついに行っちゃうんですかあ……」

「泣くなつて。幽霊だろう？」

「そんなの関係ありませんよう。幽霊になつて初めてのお友達なのに……」

夜の校舎の屋上で、呼び出して帰る事を告げるなりぐすぐすと泣き出してしまったサヨの頭を撫でる。
なんで触れるかって？

気合いだ！ と言いたいところだが、ちょっとしたコツがあるのだ。ポルターガイストのように幽霊がモノを動かせるのなら、こっちも幽霊に触ることが出来るはず。

むしろ触れないはずが無い！ 結局は気合いだ！

「大丈夫だ。そのうち帰ってくる」

「……そのうちっていつなんですかあ？」

「……あゝ」

「うわゝん！ 嘘なんですねゝ！」

「いや！ 嘘じゃねえって！ 帰ってくるぞ！ 絶対だ！」

別にずっと魔法世界にいなきゃいけないわけもない。

ただ、こちらに来るほどとなると、テオドラあたりが許さんだろう。この1年ちよつとも休暇で来てみたいもんだ。

正直、次来れるのはいつになる事やら……

「絶対ですよ？ 絶対に戻ってきてくださいね？」

「わかってるさ。時間は作れる。まあちよつとうるさいのがいるけど、なんとかなるさ」

「……前から話に出てきてたから気になってたんですが、そのうるさい人って誰なんですか？」

「俺の友達……じゃねえな。パートナー兼マスター……か？ 一応俺が従者なわけだし。ってサヨ？ なぜ睨む」

テオドラと俺の関係をちよつと考えながら口に出して見ると、なぜかサヨが膨れっ面に。

月の光に照らされてよく見える。こりゃあ怒ってる顔だ。俺はなにかサヨを怒らせるようなことをしてしまったようだ。

「そのパートナーって？」

「えーっと、互いを支え合う契約をかわした相手？ まだ仮契約なんだけども」

そんな感じであってるはずだと思っただが。

エクセルに詳しい説明されたことあるけど難しいんだよね……

「仮契約……それって誰とでもできるんですか！？」

「そうじゃないか？ できなかったって話は聞いたこと無いが」

「それなら私ともしてくれますかっ！」

「え!？」

俺地雷踏んだ!?

いつ選択を誤った!?

というか意味わかつとりますか!?

「そうすればアリウスさんも絶対ここに戻ってきてくれるでしょう?」

「いやまあそりゃそうだろうけど……じゃなくて!」

「私はアリウスさんのパートナーになりたいです!」

「待て待て待てっ! もう少し考えてだな、行動するべきだぞ?」

「だって幽霊になってから初めての友達なんです! それにアリウスさんはこの一年間ずっと夜になったらお話しに来てくれました!」

それは夜行性な俺が、夜の暇な時に話相手がサヨかタカミチくらいしかいなかったからだ。

サヨが幽霊になって過ごした思い出を話したり、俺がした遺跡探検とかの話にサヨが笑ってくれたりした。

思えば、結構仲良くなっていたのかもな。

「だから私は、アリウスさんが好きになっちゃったんです! 幽霊ですけど!」

「……ええ!？」

「だから仮契約しましょう！」

「あ、うん」

強い言葉に思わず頷いて懷から簡易仮契約のマジックアイテムを取り出す。

これは起動すれば地面に一回限りだが仮契約の魔法陣が現れるという優れたものだ。

何故持っているかというと、フレイアが置いて行っただ。理由は知らんけどな。

「せっかく告白したんだから何か反応してくださいよう……」

「ちょっと驚いたというかなんというか。いや、サヨがな。うん」

うゝむ。

こつこつという経験はずっと前のテオドラと仮契約した時以来か？

ぬぬぬ……

どう答えればいいんだ？

「俺は……」

「いいんです。言わなくて」

「でもな……」

そこでまた涙目になったサヨが、顔を近づけてきた。

……微妙に泣きそうな顔だな。

「私は幽霊です。だからちょっとだけ諦めてます」

「……俺はサヨの事は嫌いじゃないぞ。むしろ好きだ」

「嬉しいです。じゃあ、仮契約してくれますか？」

「ああ。こちらこそ頼むよ」

ついついそう答えてしまう俺。

やれやれ、俺はもしかすると女に弱いのかもしれない。

そんなことを考えていると笑顔を取り戻したサヨが俺に聞いてきた。

「仮契約ってところでどうやるんですか？」

「え？ 簡単なやり方……ていうか俺の持つてるやつじゃキスしかないぞ」

「へ？ キス？ ……キスですか!？」

「お、おう。そうだけど」

サヨは一瞬目をまん丸にしてすごく驚いた顔をして、すぐに俯いてしまった。

とても暗い雰囲気漂っている。幽霊だけに。

「私、幽霊ですから、キスなんてできません。通り抜けちゃいます」

「そんなことねえよ。気合いで何とかなる!」

「そもそも幽霊の私なんかと仮契約することができるんですか？」

「……っ！？ お前はそんなこと心配しないでいいんだよ！ 全部俺に任せろ！」

だから頼むから泣くな！

仮契約のルールとか知ったこっちゃねえ！

そう思いながらマジックアイテムを足元に落として起動させる。そうすると俺とサヨの下に仮契約の魔方阵が浮かび上がった。

「行くぞ。安心しろ。心配することなんて何一つないぞ」

「あ、あの……わたし実は初めてで……」

「俺もあんまり経験ないぞ」

「あ、あんまりってことは何回かんむっ……」

なんか騒ぎだしそんなサヨの口を俺は自分の唇で塞いだ。

というかマジックアイテムの制限時間も30秒と非常に短いのだ。

キスをした瞬間、仮契約の光がその場に溢れ——俺の手にカードが現れた。

「……うん。ほら、仮契約は成功したぞ？」

「んあ……本当ですか？」

「ほら」

出現したカードをサヨに手渡した。

すると何やら不思議そうな顔をしている。

「人魂が背景に写ってますよ？」

「たぶん仕様だろ。サヨが幽霊だからその特徴じゃないか？」

「あゝそうですね。うふふふ」

「なんかそういう笑い方されると不気味だな」

正直似合っていない。

だが、サヨがニヤけた顔をすぐにやめたから俺も言うのはやめた。今度は本当に寂しげな顔だ。

「これで……大丈夫ですよ。帰って来てくれますよね」

それは既に何回も聞いた問いだった。

「約束は守るさ」

「絶対ですよ！ 嘘ついたら針千本飲ませちゃいますからね！」

「そいつは怖い」

さすがの俺もそれは経験したこと無いな。

死ぬんじゃないか？ それ？

ええい、そうじゃないだろ俺！

「このコピーカードの方は、お前に預ける……でも幽霊だしな。持てるのか？」

「大丈夫です！ ちゃんと私だけの場所にしまっておきます！」

「それなら大丈夫だな」

胸を張ってカードを受け取ったサヨを見て安心した。
まあこの分なら大丈夫だろう。

エヴァだつて一応口添えしとけば悪いようにはしないだろうし。
もしかしたら面倒見てくれるかもしれない。

「えへへ……」

「ん？」

ごちゃごちゃと考えていたらサヨが抱きついてきた。
ポルターガイスト現象なんて便利なもんだな。

「忘れないでくださいね。私がアリウスさんの事を好きだつてこと」

「記憶力は悪くない方だな」

勉強は嫌いだけど。

そう心の中で追加する。

というか女との約束は守れと遠い昔に母に教わった。

あと女に優しくする事も。

だから俺はこう答える。

「今晚は朝になるまでお話しできるぞ。最後だしな」

「ぐすつ……はい」

「明日には帰っちまうんだ。そんなに泣くな。心配させないでくれ」

よ
」

「もっと撫でてくださあい……」

夜の校舎の屋上で、ひたすらにサヨと語り明かした。
これでサヨは大丈夫だろう。

次は弟子——楓だな。

気が重いなあ……

あとがき

この世界のたいていの事は気合いでどうにかかります。

特にアリウスはラカンの弟子だから余計に。

というかまさかの告白一人目がサヨという流れ。

この作者をもつてしても読めなかった……この作者、一生の不覚！

というか今回で麻帆良から出るはずだったのに出て行かない！

なぜだあああああああ！

次回！

『忍者とちぎるロリコうわなにをするやめ（ryガ——
むしろ節操なしじゃうわあ殴らないでごめ（ry』

第十六話 忍者、深夜、帰還にて（前書き）

テオドラ「で、どうしてこうなったのじゃ？」

作者「作者の都合です」

エクセル「このあとの展望は？」

作者「見えてません」

アリス「……」

作者「無言が一番怖いです本当に！」

アリウス「やつべ……カエデにあらかじめ帰るって事を教えてねえや」

作者「あ……」

今回はキャラ崩壊注意ッス。

実はこの作品、作者がテオドラ登場まで読み進める（26巻あたり）までは、シスターシャーケティ or 葛葉 刀子をヒロインに据える予定でした。もしかしたら今後、書くかもしれませんね。

あ、あと今回のあとがきも読むようにしていただけないでしょうか。お願いします。

第十六話 忍者、深夜、帰還にて

彼女はそのことを自らの師から聞いた時、いつも細めている目を見開いて愕然とした。

「ごめんな。俺はこの麻帆良を去らなきゃならん」

「ど、どうしてでござるか！」

「あゝ。ちょっと帰らなきゃうるさい奴がいるというか……」

「……その方は、女性でござるな？」

「う」

なんで子供なのにそんな鋭いんだよと言う彼を前に彼女は考えた。彼女にとって彼は、この一年自分に色々な事を教えてくれた相手だ。それこそ強くなるための修行だけでなく、森での楽しみ方とか釣りのやり方とかいろいろ。

彼は幼い彼女にとっては本当に頼れる存在であり、師であり、そして――初めて親しくなった異性でもある。

故に、彼女は言った。

「本当に帰って来てくれるのでござるか？」

「ん……まあな。そう約束した奴もいるし、お前もいるしな」

「約束……どうせその約束も女性としたのでござろう？」

「ぬぐあ」

胸と頭を押さえて、芝居のように上を向く彼。そんな苦笑いする彼に向かって彼女は言った。

「それでは、行く前に拙者と『ぱくていお〜』でござったか？　していつてもらうでござる！」

「お、覚えてたのか……」

前に修行の途中、川で魚のつかみ取りをしていた彼の懷からカードが落ちた事があった。

まあ油断してたから落ちたのだろうが、それを彼女はしっかり見つけて彼にそれが何なのか問いただした。

しぶった彼だが、結局それが仮契約——パクティオーの証であるただけ告げたのだ。

「おいおい。さすがにそれは……」

「ダメでござる。絶対にしてもらうでござるよ」

「でもなあ……」

彼は思う。

サヨは幽霊で50年くらい過ごしてるからまだしも、楓は子供だろ？　いいのか？

そんな葛藤が彼の中で渦巻いている。

無論、彼女の知った事ではないが。

「それとも……拙者とするのはいやなのでござるか？」

「それは違うぞ！ いやというかなんというかな……あゝ」

彼女が悲しげに俯くと、すぐに彼が誤解を正す。
彼だつて彼女の事が嫌いなわけではないのだ。
故に正直に言う事にする。

「仮契約な、方法がキスなんだよ」

「キ……せ、接吻でござるか！？ いや、でも拙者も師匠なら初めてを捧げても……」

「そう言ってくれるのは嬉しい。問題はあれだ。年齢だ」

「それは……」

確かに彼と彼女の年齢は開いている。
むしろ開き過ぎと言つていいだろう。

実際には、彼が長命種のおかげで20歳以上も離れていても10才くらいしか離れてないように見えるんだが。

それでも成人男性が幼女にキスするというのは、彼の精神にちよつとキていた。

まあ既に彼は幽霊中学生相手にキスしているのだが。

「拙者は気にしないでござる！ それに師匠は十分に若いでござるよー」

「いや、どつちかっていうとお前の容姿が問題だ」

「……拙者は可愛くないでござるか？」

「お前は可愛いぞ。そうじゃなくてだな。ほら、お前はまだ小さいな。大人の俺がそんな力エデとキスするというのは……」

「むう……誰も見てないからいいでござろう」

ようするに照れているのだろうと彼女は結論づけた。

それはある意味あっている。

人前でなけりゃあいいというものではないと彼女は理解できていればだが。

「お前とキスすること自体が嫌なわけじゃあないぞ？　ちよつとアレなだけで」

「……なら力づくでござる！」

「何……んむっ！？」

彼女がそう言った時、彼は横を向いていた。

そして顔を小さな手で掴まれ、彼女の方へと向かされ、唇を押し付けられる。

いつの間にやら彼の手の中から仮契約のアイテムが抜き取られて、地面には仮契約の魔法陣が浮かんで光を放っている。

そうして彼の手にカードが現れた。

「ぶはっ！　強引だぞおい。子供のくせに」

「多少強引にと教えたのは師匠でござるよ」

「そりゃそうだが……ハア」

というか彼もここまでやられるとは思ってなかったのだ。

予想外だったのは彼との修行の間に、彼に対する遠慮が無くなって
いたことだろう。

まあ要するに親しく接し過ぎて、彼女がアタックするようになった
ということでもある。

「これで仮とはいえパートナーでござるな」

「……そうだな。なんか罪悪感があるけど」

「気にすることはないでござる。拙者が師匠としたかったのでござ
るから」

そう言つて彼女は曇りの全くない笑顔を見せた。
思わず彼は頬を赤らめ、自分の頭を殴りつけた。

「いやいや、俺は“そう”じゃないぞ……」

「どうしてでござるか？」

「気にすんな。それより、ほら」

彼は彼女にカードのコピーを手渡した。

そこには幼い彼女が、忍者服を着て背中に巨大な葉団扇を背負って
いる絵が描かれている。

「これがお前のところにあるなら、俺はお前のところに戻ってきて
やるぞ」

「約束でござるよ！」

「ああ。せいぜいお前の成長を楽しみにするさ」

そう言って別れた男女が再び会うのは、実に7年ほどたったころの事である。

勿論彼らはそれを知らない。

第16話 忍者、深夜、帰還にて

「そうか、今日の夕方には帰っちゃうのか。寂しくなるなあ」

「男に寂しがられても困るわ。それがたとえ親友でもな。タカミチよう」

「あはは。そう言わないでくれよ」

煙草を片手に笑うタカミチとエヴァの家へと歩く。

カエデとの一軒の後、タカミチの家へ行った俺はそのままエヴァの家に向かっているのである。

挨拶だけじゃなくて、サヨのこととか頼めるかもしれないしな。

「ところで、もし結婚式をするんならちゃんと呼んでくれよ？ 友達の晴れ姿はちゃんとみたいしね」

「はあ！？ どうしてそうなんだよ！」

「だって君、テオドラ様とラブラブじゃないか。逆玉の輿だね」

「おいお前絶対タカミチじゃねえだろ！？ 誰だお前！？」

「僕は僕だよ？ 変なこと言うなあ、アリウスは」

変なのはお前だ！

酒を飲んだというわけでもないだろうし……

一体全体どうしたというんだ！

「何かあつたんだな？ 何かあつたんだろタカミチ！」

「ハッハハ、何も無いってば」

「嘘つけー！ 絶対なんかあつただろ！ 今気付いたけど目が虚ろだぞー！」

一体全体こいつに何が……

こいつがこんな風になるなんてよっぽどの恐ろしい事が……

「話してみる。聞いてやるから、な？」

「……実は」

「うんうん？」

「うんうん……」

「何いッ!？」

驚愕の真実だ……

まさか……まさかこのタカミチがっ！

「告白されて振ったら泣かれちゃったと？」

「声が大きいんだよっ！」

「うーっ！」

油断しているところに咸卦法パワーのパンチが頭に直撃して俺は氣絶した。

やりすぎだこのやろう。

意識を取り戻した俺にこいつが言うことには。

段々おっさんぽくなりつつあるとはいえ、まだまだ爽やかな先生であるコイツに誰かが告白したらしい。

その誰かがもうすぐ卒業する中学三年の女の子だそうで、泣かれちゃったと。

そしてたいしたフォローもできなくておまけにエヴァに散々からかわれるわで大変だったらしい。

「ご愁傷さまだな」

「少しは慰めてくれてもいいと思うんだけど？」

「え〜」

「……ああそうか。アリウスはモテモテだもんね。森で小学生とキスしてたもんね」

「ぶほあっ!？」

何故貴様それを知ってるんだ!

あれは一種の黒歴史……

「え? まさか本当に? 週末になんかやってるから仲良いなとは思ってたけど」

「うえ? いやいやいやそんなわけねえだろ。あるわけねえよなあ!」

「……まあそういうことにしといてあげるよ」

ちよつとした弱みができたっばいな。
だがしかし、こいつの元気が多少出たみたいで良かった……わけねえだろ!

「まあいい。タカミチが女の子を振ったのはタカミチの問題だ。俺は知らん」

「……そうだね。僕の問題だ」

「というわけでエヴァの家行くぞ。そら行くぞ」

俺はなんか雰囲気暗いタカミチを引っ張ってエヴァ宅へと向かう。
今日で俺はこの麻帆良を去るんだが、情緒不安定なタカミチは大丈夫なんだろうか。

まあエヴァさんに任せりゃいいだろ。

でもあの人に俺が去る事伝えても何もなさそうだな。

せいぜい『そうか、じゃあ達者でな』とか、もっとひどい可能性もあるけど。

……考えても仕方ない。行きゃわかるか。

「せいぜい元気でな。タカミチが言ってたが、結婚するならタカミチを呼べ。私への手土産を持たせるようにな」

「もっとひどかったか」

「なんだ？」

「なんでもない」

エヴァにそう答えて紅茶をのどに流し込む。

普通土産は結婚する側が貰うんじゃないか？

というか誰も結婚するとか言っていないぞ。まずテオドラがそんなことしないだろう。

いきなり結婚しようとか言ってみろ。まちがいなく顔をパンチされる。

俺の場合はその後、頭に蹴りを入れられるかもしれない。
おお、こわいこわい。

「タカミチの修行相手がいなくなると、楽ができなくなるな」

「それくらい自分でしろっつーの」

「面倒だろう。タカミチは今が一番中途半端だから面倒なんだよ」

「ああ……」

現在のタカミチは咸卦法もうまくできるようになってきて、軌道に乗り始めたところだ。

こつからは強くなるのも早いかもしれないが、逆になりにくいかもしれない。

こいつの事なら努力で何とかしそうだかな。

「ただ、この姿を見ると……」

「うむ……少々からかい過ぎたかもしれないな」

「ケケケ。女ノ扱いモナツテネエガキダツテ事ダロ。シカタネエジヤネエカ」

「そう言うなチャチャゼロ。こいつはまだ未経験らしいしな」

「何を……と聞くのはやめとく。幼女がそういうこと言っのを想像したらゾツとした」

「幼女言うな!」

「御主人、ソウイウ所ガ幼女ツポイツテンジャネエノカ？」

「お前まで余計な事を言うなチャチャゼロ！」

俺達の前には何故かまだショック受けてるタカミチ。

一体全体どうしてこんなになったのかわからなかったが、エヴァとチャチャゼロの会話のおかげで理解できた。

こりゃショック受けてもしかたねえや。

「まあいいや。今日は挨拶しに來ただけだからな。そろそろ準備とか時間もヤバいし行かせてもらう」

「うむ。今度来る時には土産も忘れんようにな」

「上等ナ酒ヲ頼ムゼ？」

「わあーったよ。タカミチが正氣に戻ったら改めてよろしく言っていてくれや」

「ふん……一応言っておいてやるよ」

おお、初対面の頃のエヴァとは思えない言葉だ。

一年も密に過ごしてれば少しは親しくなれたってことか。ま、そうならいいがね。

今度来るときもまた仲良くしてくれる事を祈るところ。

俺はコップの紅茶を飲みほしてエヴァの家を後にした。

さて、イギリス行きの便は次か。

魔法世界へのゲートくらい日本にも作つとけよな全く……

「おいアリウス」

「何だタマモ？」

「どうしてあたしにこんな恰好させたんだ？」

「子供料金で済むだろ？」

現在のタマモは白いワンピースを着た姿のため普通の女の子にしか見えない。

見栄張るために大人バージョンに変身しようとしたので俺がやめさせたのだ。

家に一回帰ってからこいつはやけに素直だ。

油揚げが効いたんだろ。じいさんに狐の話を聞いたよってよかった。

「あたしは子供じゃない！」

「静かにしろ。あんまり騒ぐと怒るぞ」

「むぎゅ」

俺がかぶっていた帽子を勢いよくタマモの頭にかぶせる。目のあたりまで入って頭を振っている。

「うっ！ 前が見えな〜い！」

おまけに帽子が脱げない。

俺が上から押さえているからな。ふあっはっはっは。やっぱりこいつはからかってると面白い。

お、電光掲示板の表示が変わった。

ついでにアナウンスも流れてる。

「飛行機の間だ。タマモ、行くぞ」

「うおとっ……ま、待て〜！ 置いて行くな〜！」

タマモの頭から帽子を取り上げて乗り込み口に向かう。
さあ……久しぶりの我が家に帰ろう。

あいつら何してるかね……

「何か危機感を感じたのじゃ！」

「私も、マスターが何かやらしたかのような感覚が……」

「……お仕置き決定」

「アリウスめ〜もし浮気しておったら……」

「どうするんですか？」

「するの？」

「……うううう教えてやらん！」

「照れてますね」

「ね」

「お主ら……もう、少し放っておいてくれ！」

第十六話 忍者、深夜、帰還にて（後書き）

あとがき

楓「拙者はこんなに強引ではないでござるよ」

作者「作者の都合です」

タカミチ「僕って結局何を言われたんだい？」

作者「禁則事項です」

タマモ「あたしのあつかいがひどいぞー！」

作者「仕様です」

とりあえずヒロインは全部出尽くしました。

メインヒロインはあくまでテオドラです。それをお忘れなく。

しかし……意見がある人はどうぞ。

色々なご意見をお待ちしております。

第十七話 暴走！……したのは作者と主人公。（前書き）

主人公の関係見たらイライラしたので。

第十七話 暴走！……したのは作者と主人公。

「のうアリウス……？ これは一体どういふことかのう……？」

「あゝあゝ。なんというかアレだ。そのな。なんというかな」

「なんじゃ？ 言い残す事があるならば聞いてやろう」

「すんませんでしたー！ー！」

「土下座なんぞで許してたまるものかー！」

ボグシャア！ 「うべえ！」

「ああ、テオドラ様もかわいそうに。マスターが浮気なんかする人だとは思いませんでした」

「この小さいのは何？」

「あたしは玉藻だ！ 小さいのとか言うな！」

第十七話 暴走！……したのは作者と主人公。

家に帰るなり俺は捕えられた。

テオドラとエクセルとアリスに。フレイアがアリアドネーに行つて
なかったら燃やされてたな。

でも燃やされた方が楽かもしれないと思う。

家に入った時に後ろからタマモまで入ってきたせいだ。

間違いない。

「何を現実逃避しておるんじゃ。このカードは何だと聞いておる！」

「あ、あは〜」

「笑つてごまかせるとでも思つておるのか？」

懐からカードを抜き取られた時のテオドラ達の表情はすごかった。
なんというか、燃え盛る炎とか凍てつく吹雪とか、そんなかんじで
逆の例えだけど逆じゃないんだこれが。

そして土下座して謝つて殴られて冒頭に戻るわけだ。

「つまり、その娘たちもお主の事を慕つておつたと？」

「はい」

「それで、カードがあるということはキスまでして帰ってきたとい
うことでいいんじゃない？」

「……はい」

そして尋問タイム。

俺とテオドラは二人きりで部屋に入って顔を合わせている。互いにソファに座ってすぐ前にテオドラがいる形だ。

アリスとエクセルはタマモの監視で他の部屋だ。

テオドラの声が今まで聞いたこと無い声色だ。

うむむ……なんか悪いことしたという気分になってきた。

「のう、アリウス」

「なんだ？」

「お主は、私の事が好きか？」

「急に何だよ」

「頼む。それだけ、答えてくれればよいのじゃ」

珍しく萎れた感じのテオドラが小さな声で聞いてくる。

とても不安そうな声だ。

……俺はやっぱリダメなやつだな。

「当たり前だろ。俺はお前が好きだ。面と向かって言うのは初めてだったか？」

「……うん」

やたらと静かなテオドラに顔を近づける。

ああ、やっぱり綺麗だ。

改めて確認するまでもないことだが、再確認したらやっぱりそう思った。

だがその顔が不安に覆われているのはいただけない。

そしたらついテオドラを引き寄せていた。

「んっ！んんっ！」

目を見開いて驚いている。

俺自身驚きだ。

テオドラの雰囲気暗かったから自然に体が動いていた。

「ぷはっ！ あ、ありうす！？」

「嫌だったか？」

「い、嫌ではないぞ。というかそうではなくてだな」

「なら別にいいだろう？」

「おっ、お前本当にアリウスか！？ 絶対におかしいのじゃ！」

確かにおかしいかもしれない。

だがしかした。

一年間も直接会っていなかった影響は大きかった。

それに、あんなにストレートに好意を告げられては意識するのもやむない事だ。

そして俺はテオドラに好意を告げられているにもかかわらず、自分はちゃんと言っていない事に気付いたのだ。

「今まで悪かった。もっと早く言つべきだったな」

「……」

「俺と結婚してくれ」

「アリウス……ぐすっ、おそすぎじゃ……ばかものお……」

「返事は？」

「良いに決まっておるじゃろう！　ぐすっ……」

涙を流して抱きついてくるテオドラを抱きしめる。

ずっと返事を返さない俺が、他の女と仮契約をして帰ってきた時の彼女の気持ちを思うと、本当に悪かったと思う。

そして同時にテオドラを無性に愛おしく思う気持ちがあふれてくる。

「今日はもう絶対に離さないぞ」

「そ、それは……」

「嫌か？」

「……ううん。アリウスになら、構わんのじゃ……妾の初めてを……」

……」

（規制されました。続きを読みたい方はわっふるわっふると）

「ああ。これでテオドラ様も幸せになれますね。よかったです」

「見ていて可哀そうでしたから」

「ああいうのも悪くな……危ない危ない。あたしはあいつのことなんて何にも……」

「これで私たちも心置きなくお情けを頂けますね、アリス」

「……別に嬉しくなんかない」

「そ、そういうことならあたしも……ハッ！ 違う違う……」

「昨晚は、お楽しみ、でしたね」

「おおいアリスウ！　なんだそのあからさまな棒読みのセリフは！」

「テオドラ様はまだお眠りになつていますか……随分お盛んだったようで」

「エクセルもちよつと黙ろうな！？」

翌朝、俺が居間にやつてくるなりこのセリフだ。

ひどいものである。でも事実なので否定できないのも事実だ。

テーブルについて朝飯を食べているタマモの隣に座る。

朝っぱらから大量の飯を食う幼女……まあいいか。

「本当においしいな！　もつと作ってくれ！」

「エクセル、俺の分も頼む。腹が減って仕方ない」

「今はこれで……後もう少しで追加が出来上がります」

そう言つてエクセルが追加の料理をテーブルに出した後キッチンに戻っていく。

旧世界の料理もなかなかのものだったが、やっぱりこちらの料理もうまいな。

「つておい！　それは俺のだぞタマモ！」

「取ったもん勝ちだもんね〜！」

「なら俺はこれを頂く！」

「あゝ！ それはあたしが残していた……こんにゃろゝ！」

で、騒がしい朝飯タイムも終わった後。

「ふわあゝ……おはようなのじゃ……」

「お、やっと起きてきたか」

「テオドラ様、今朝食の準備をいたします」

「うむ……すまんの……」

半分寝てるような顔をしてテオドラが居間へとやってきた。
というか、だな……

「まともな服着てから降りてこい！」

そう、現在のテオドラの格好は非常にアブナイ。
旧世界土産の襦袢の上だけを

「ふあ？ ……ーッ!?」

理不尽な事にテオドラは俺に向かって椅子を投げつけて居間から出ていった。

自分が寝惚けていたのが悪いと思うんだが。

「いえ、マスターが昨日頑張りすぎたからでは？」

「黙れアリス！　そういう時だけ喋るな！」

「やれやれです」

この一年の間にこいつら更に人間っぽくなってやがる！
しかもいいとも悪いとも言えない方向で！

「……とりあえず、テオドラのご機嫌でも取るか」

さて、お昼御飯の時間まで飛んだわけであるが。

「なあ、俺はお前の親父さんに挨拶しに行った方がいいのか？」

「そうですね。マスターはすぐにでも行くべきだと思いますよ。と
いうかもっと前に行くべきでした」

「うつさいエクセル！……で、どうすつか？」

テオドラに再度問いかける。

議題は『結婚』であつたりする。
なんでか特急で進むな。

「い、いきなり結婚などと……」

「でも昨日……」

「言つでないバカ者！ 恥ずかしいじゃろうが！」

「悪い悪い。じゃあ改めて……結婚してくれテオドラ」

「うむ……じゃなくて！ そうじゃないじゃろうが！」

「え？ 確認だろ？」

「も、もうそれでよい。それで、父上に挨拶をするんじゃろう？」

「いや、した方がいいのか？ と」

「あたりまえじゃろう。妾は第三とはいえ皇女じゃぞ。というか皇女でなくともあいさつはするものじゃろう」

「あー、そついやそつだな」

一緒にいるとテオドラが王女だつてことを忘れちまうんだよな。きやすく話せるから余計に。

「じゃあちよつと行つてくる」

「は？」「はい？」

テオドラとエクセルが聞き返した時、既に俺は家を飛び出していた。目指すは王宮！ テオドラの親父さんのところへ！

——この日、前代未聞の襲撃者が現れたという事件が起こるが、それは誤報だったという。

謁見の間の正面入り口をバンと開け放ってその男はあらわれた。

全身を濃密な気で覆う、狗族と思しきその男。

衛兵をことくなぎ倒した彼は王様の前に歩み寄るところ言った。

「あんたが王様だよな！」

「うむ、儂がそうじゃ」

周りの者がビクリしつつも会話は進む。

「今日は一つ言いたい事があって来た！」

「言ってみるがよい」

未だに会話が続けている事に皆驚くが、襲撃者が何を言うのか皆聞こうとする。

「テオドラと結婚させてくれ！」

「よかるうー！」

・
・
・

「え！？ いいの！？」

「お主の話は前から聞いておる。大戦の頃から娘と共にあったとな」

「はあ……」

「正直言つとこの一年ばかり元気が無かったのな。心配しておつたのじゃが、お主が来てくれて一安心じゃ」

「何か拍子抜けした……」

「お転婆だから結婚相手も見つからんしのう。お主がいてよかった」

「そりゃどうも……」

「結婚の事なら問題はないぞ。あの子は第三皇女じゃ。王族であるとはいえ、第三皇女じゃから政治的には問題ない。相手が紅き翼に所属していた者ならばなおさらのう」

「それじゃあよろしくお願いします」

「はっはっは。任しておけい。王宮の防御をいとも簡単に破つてくるほどの猛者を息子にできて良かったわい」

・
・
・

のちにこの事件は、英雄のひとりであるアリウスがまさに漢であったという話として語り継がれることとなる。

どっとはらい。

第十七話 暴走！……したのは作者と主人公。（後書き）

あとがき

どうしてこうなったんだかわからねえけどすっげえや。

おでれえたなあ。おでれえたなあ。

さあてもうすぐ原作時期だ。

腕が鳴るぜ！

でもその前にエロだぜ！

テオドラ可愛いぜテオドラ。

第十八話 H a p p y W e d d i n g (第壹部 最終話) (前書き)

さあ、原作前の最後の章となりそうです。

次からはめっちゃ原作にかかわってきますよ！
ていうか書いてて砂糖吐い（ry

あとがきにて募集もしてます。何かってそれは（ry

第十八話 H a p p y W e d d i n g (第 壹 部 最 終 話)

アリウスが王宮に乗りこんでから一年もの月日が流れた。

そして今日。

王都は異様な賑わいを見せていた。

第十八話 H a p p y W e d d i n g

アリウス達が住む王都にある、王家御用達の巨大な礼拝堂。

そこである男女の婚礼の儀、つまり俗に言う結婚式が執り行われようとしていた。

大勢の人間が集まるその場所のとあるテーブルでは、一人の竜族の美女が着慣れない赤いドレスに身を包み、嫉妬半分嬉しさ半分といった顔で隣のスーツ姿の男と会話をしていた。

「ああ！ お姉様とお兄様が遂に結ばれるのですね！ ……どうして私もじゃないんでしょう」

「いや、フレイア君？ それは無理があると思っただけだね？」

「独身老け男は黙っててください！」

「どっ……老け……っ!？」

グサグサと心にダメージを受けて倒れるタカミチ。
最近さらに老けたからかなり気にしている。
そんな彼に一人の人物が話しかけた。

「本当に老けましたね、タカミチ？」

「っっていうかクルトまで呼ばれてたのか！」

「ハッハッハ。どのみち王族の結婚式にはメガロメセンブリアのお偉いさん方を呼ばなきゃならないんです。だから代表して私が呼ばれたんですよ。彼のあっちでの知り合いは私くらいですからね」

「……納得したよ。アイツはそういうのとは縁が無いからね」

「そうだろう？ でも、そんなアイツが王族と結婚とは……想像すらしていなかったよ」

最近になってクルトはメガロメセンブリアでの位置を高め、若くして元老院にも抜擢される予定……である。

彼はすでに新オステイアの総督になることも内定しているので、この結婚式に招かれたのである。

「クルトは知らないかもしれないけど、あの二人は前から怪しかったからね」

「おや、そうなんですか？」

首を傾げるクルトに、近くにいた女性二人が話しかける。

「ええ、お二人はここ3ヶ月ほどエロエロでした」

「毎日激しかったです」

「それはそれは……お二人のお名前はエクセルとアリスでしたか？」

「はい」

珍しくメイド服ではなくドレスを着ているエクセルとアリスがそこにはいた。

さすがに結婚式場でメイド服はちょっと……という理由からだ。

「まあここは素直に二人を祝福しようよ」

「独身のタカミチさんにはいい事を言いますわね」

「だめですよフレイヤ様、そんなことをおっしゃられては」

「気の毒です」

「ハッハッハ。タカミチもお気の毒に……おや、準備ができたようですね」

クルトが発したその言葉に全員が前を向いた。

礼拝堂の祭壇の前に、緊張した面持ちでアリウスは立つ。

いつもは無造作に後ろに流している髪を整髪料を使って整えて、婚礼用のタキシードに身を包んでいる。

普段はだらしのないアリウスも、ちゃんと着飾っている今は凛々しい姿に見える。

そんな彼は珍しく緊張して顔をこわばらせていたりする。

まあ、そんな顔にも幸せそうな雰囲気が見え隠れしているが。

そんな彼の前に対になるようにしてテオドラが立っている。

いつもの彼女とは違うその雰囲気は、今まで苦労してきた侍女が涙を流すほどだ。

テオドラは笑顔を浮かべながら、花嫁にのみ着用が許される純白のウェディングドレスに身を包んでいる。

そしてその頬を緊張や恥じらい、なによりも喜びで朱に染めていたヴェール越しの彼女の顔は見るもの全てを魅了するかのような美しさを秘めている。

そしてそんな二人が今、教会司祭の言葉と共にそつと唇を交わした。

大勢の人間がそれを祝福する。

帝国の王様——テオドラの父親なんて涙をぼろぼろ流している。

タカミチやクルトは友人の幸せを笑顔で祝福した。

親しい人たちは皆アリウス達に拍手を送る。

壇上の二人はそれを聞いて更なる笑みを浮かべるのだった。

時刻は変わって夜。場はパーティー会場へと移る。

「おめでとうアリウス！ スーツ姿も似合うもんだね」

「うるっせえぞタカミチ。スーツなんてあれだ。息苦しくてかなわん」

「私やタカミチは普段からいつもスーツなんだけど、慣れてしまいましたからね。普段からお気楽でいられるアリウスが羨ましいですよ」

「んなら政治家なんてやめりゃあいいだろ」

「そういうわけにもいきませんよ」

アリウスは親友二人と酒を飲みながら語り合っている。

彼らがいるテーブルでは次々に食べ物が消費されていく。

アリウスはもちろんたくさん食べるし、タカミチもクルトも普通に結構食べる方だ。

まあ、酒の勢いというのもあるのだが。

そしてその隣のテーブル。

そこにはアリウスと親しい女性陣が集まっている。

「見事な晴れ姿でした姫様！」

「姫様にこんな日が来るなんて！」

「普段は殿下殿下言ってうるさいのに豹変しましたね」

「エクセル殿は黙ってください!」

「私たち、信じられない気持ちでいっぱいなんですから!」

「信じられないって言っちゃだめだと思う」

「全くじゃアリス。こやつら、宴の席だからと言ってちと言いすぎじゃ。許すのは今日限りじゃぞ」

グラスを持って仕方なしと侍女たちに言うテオドラ。
そんな彼女に後ろから抱きつく人物がいた。

「ああっ! テオドラお姉様あっ!」

「ちょっ! フレイヤ! やめんか!」

「だってお姉様とお兄様が結婚されたのが嬉しくて……もちろん私は側室に入ってもいいんですよね!」

「そんなことを結婚式の日に言うでないわ!」

「あいたあっ!?!」

抱きついてきたフレイヤに拳骨をくらわせて撃退し、テオドラは夫となった者の元へ向かう。

そこには親友二人に加えてあまり見かけない人の姿があった。
アリウス達以上の長身で、全身が筋肉におおわれた男。

スーツが全く似合っていないその男。紅き翼と共に行動していたテオドラ達にとっては見知った相手である。

「ジャック!? アリウス! ジャックを呼んだとは聞いておらんぞ!」

「そつえば言っでなかったな」

「普通は言っもんじゃこのバカ!」

「ワツハツハ。喧嘩すんなって。さっきは二人ともお似合いだったぜ?」

そう言いながら二人をどつくラカン。

大笑いしながら実に楽しそうである。

一方でアリウスもテオドラも叩かれた肩を摩りながらも、ラカンに久しぶりに会えた事を喜んでいる。

「というか師匠はどこにいたんですか? 俺も結構世界を回りましたが一回も会えなかったすよ?」

「俺か? 別に、ちょっとした別荘でのんびり暮らしてただけだぜ? たまに旅とかに出てたけど」

「というかジャック、さんざん探そうとしてるのにこういう時だけ来るのはどうしてなんじゃ?」

「タダメシ食わせてくれるってのに行かないのは損だろうがよ」

「師匠ならそんなこと言うと思ったよ」

わっはっはと笑いあう二人をテオドラは見つめる。
こいつら馬鹿じゃろう、と。

同時に、そんなアリウスに惚れた自分も馬鹿なのかも……いやいや
そんなはずは……という葛藤があったりした。

そんな彼らをタカミチとクルトが見ていた。

「それで、クルトは最近どうなんだい？」

「最近？」

「新オスティアの総督になるって聞いたよ」

「ああ……ある意味目標の一つが達成できたわけだからね」

「ふん」

「タカミチの方も強くなったそうじゃないか。最近はNGOの活動を
良く聞くようになったよ」

「それほどでもないさ。まだまだアリウスには及ばない」

「あの馬鹿は私たちが忙しくしてる中もずっと修行してましたからねえ……フフフ」

「そうだね……僕たちはずっと忙しかったのに……フフフ」

暗い笑みを浮かべている二人の前のテーブル。

そこには二人が飲み干したと思われるワインの瓶が数本空になっていた。

パーティーが終了し、テオドラとアリウスは今日泊る部屋にやってきた。

そこに来るまでに、従者コンビや妹分のドラゴン娘なんかに散々言われたりした。

テオドラは二人で一緒に来るのが恥ずかしかったのだが、何を恥ずかしがる必要があるんですか夫婦なのに、という感じだったのだ。

……というか言われてみればその通りなのだが。

「酒飲み過ぎで気持ち悪いぜ……」

「アリウス、少しは自重せぬか」

「いや、だってよ。久しぶりに師匠とかクルトに会えたもんだからつい……」

「全く……」

笑顔で謝るアリウスに、テオドラはもはや諦めていると言った感じに笑う。

親しい人に会えたことで喜ぶ自分の夫の無邪気さなどがますます好ましく思えた。

「アリウス……」

「おう、そういえばテオドラ？」

「なっ、なんじゃ？」

ベッドで突っ伏していたアリウスにいきなり話しかけられてテオド
ラは飛び上がって驚いた。

それを見たアリウスはニヤニヤしながら言った。

「お前はもう人前で強い酒を飲まない方がいいぞ」

「っ！？」

それを聞いて顔を真っ赤にしつつテオドラはアリウスの方を見る。

「あれだ。みんなの前で深いヤツをするのは俺は構わないんだがな。
見せつけるの大好きだし」

「うう……」

今でこそ素面のテオドラだが、酔っていた時の記憶はすっかりあつ
た。

皆の前でディープなヤツを何度もやってしまった事ももちろん記憶
に残っていた。

「ううゝ！」

「普段より可愛かったなゝ痛っ 普段からああなら……痛っ。叩くな
って」

「お主はそんなに妾をからかって楽しいのか！」

「もちろん」

ニヤニヤ笑いをやめないアリウス。

基本アリウスは人をおちよくったりからかったりするのが好きな性格である。

今は酒が入っているのでいつも以上にそれが顕著になっていた。

で、大胆になったアリウスがどうしたかというと。

「それでなテオドラ」

「うん？ …… んんっ！？」

アリウスはキスをしてベッドにテオドラを押し倒した。

顔を真っ赤にしたテオドラは胸をドキドキさせながらアリウスを見上げる。

「酒を飲んだお前が魅力的すぎるのが悪いんだぜ？ 観念しな」

ニヤリと笑ってそういうアリウスに、テオドラは弱弱しく抵抗する。ほとんど力の入っていないそれを気にも留めず、アリウスは最愛の人にもう一度口付けをした。

「んむ……ぷはっ……アリウス」

「なんだ？ テオドラ」

「そのじゃな、今日は結婚式じゃったわけじゃし、その、あんまり
激しいのは……」

「ごめん無理だ」

「あつ、やめんかあ、バカ者っ！」

彼らの夜はまだまだこれからである。

第十八話

Happy Wedding

(第壹部)

最終話

(後書き)

あとがき

書いてたら

俺の心が

有頂天

アリウスたちのイラストを書いてくれる人がいたら嬉しいかもという……、願望。というわけでダレカーココヨー

第二部開始前のキャラ紹介（前書き）

原作キャラのが一番困った。

というかいつの間にかPVアクセスが200、000、ユニーク
ケースが25、000
を超えていたな。

これからこの作品をお願いします。

第二部開始前のキャラ紹介

アリウス・ウィンダート

タカミチと同じ孤児。

旧世界出身の狗族と魔法世界出身の長命種の女性とのハーフ。
タカミチより少し年上。

外見：過去時代：焦げ茶の髪と犬耳をもつ目つきの悪い少年。子供にしては若干筋肉質。

原作時代：肩の少し下あたりまである焦げ茶色の長い髪を持っている。背はけっこう高い。190cmくらい。ムキムキではない。細身で筋肉質。

戦災孤児だったがラカンに拾われ、憧れて一緒に行くことに。

強さ：タカミチやクルトよりは絶対に強い。

理由：時間をタカミチが教師や任務に使う間、彼は修行に使えたため。

ラカンが原作で、『40年前に帝国の少年奴隷剣闘士としてデビュー』そして『20年前の大戦ではナギ並の強さ』だとするなら、20年の修行があればラカンクラスに行けると推測。

アーティファクトは『ディアボリックファンゲ』という名のバトルアクス。

まんまバルバトスさんの斧です。

効果は魔力や気の増幅。

この斧を起点に力を使えばパワーが2〜3倍に増幅される。

その分体にかかる負担も2〜3倍になるが。

テオドラと結婚した今では周りの者が砂糖を吐くくらいのラブラブっぷり。

ちなみに、アリスやエクセルやフレイアや玉藻など、家に住む者全員から好かれている。

本人は『テオドラが一番好きだが、他の奴らも好きだ』などと言っているらしい。

そのせいか、他の者に寝込みを襲われても受け入れている。

ある意味、凄い男である。

テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア

言わずと知れた褐色お転婆王女。

この作品においてもそれは全く変わっていない。

若干、お転婆ぶりが悪化してるような気もするが、それはアリウス

の影響です。

アリウスとの仮契約のマスター側。

20年の間にナイスバディになった。

アリウスの事が大好き。

メインヒロイン。

フレイア・バゼール

竜族の女の子。

倒れているところをアリウス達が広い、人攫いから助け出したことになる。

その後はアリウスとテオドラの妹分として、アリウスと一緒に過ごすことになる。

アリアドネーの魔法学校へ。

外見：過去時代：赤毛の幼女。テオドラとはまた違った鋭い角が生えている。（原作での『調』に近い。もっと鋭角的）

原作時代：騎士鎧とスーツがよく似合うナイスバディな美女。赤毛はポニーテールに。

アリウスを見ると『お兄様あ！』と言って飛びつく習性がある。

エクセル・ミュリエール

500年前に製造されたホムンクルス。
アリスの姉妹機にあたる。姉の方。
管理能力、事務能力に優れている。料理もできる。
中身が人間にかなり近い。

外見は短い金髪の少女。

かなり遅いけど食事によって成長可能。

アリス・ミュリエール

500年前に製造されたホムンクルス。
エクセルの姉妹機にあたる。妹の方。
戦闘能力、家事能力が優れている。
中身が人間性が結構薄い。

外見は短い銀髪の少女。

かなり遅いけど食事によって成長可能。

相坂 さよ

麻帆良中学3階A組教室最前列窓際の席に憑いている地縛霊。
死んだあと何十年も話し相手がいなかったので、友達を欲しがっていた。

アリウスが麻帆良へ来て数日後、夜のコンビニで彼に発見され、それからアリウスが麻帆良を去るまではずっと話相手になってもらっていた。

アリウスが麻帆良を去る時に仮契約を行った者の一人。

アリウスが去ってから、偶に思い出の場所である夜の学校の屋上で星を眺めたりしてアリウスを思っている。

長瀬 楓

いつも細目の忍者。

どう見ても中学生には見えない見事な肉体を持つ。

幼いころに森の中でアリウスに出会い、一目惚れしている。

だが、自分ではその気持ちに気付いてない。

そのまま一年間修業をつけてもらい、憧れから好きに変わっていった。

アリウスが麻帆良を去る時に仮契約を行った者の一人。

現在、アリウスにパートナーがいるということを知ってもまだ彼の事を思っている。

その裏には、自分は忍者だから仕える形でもそばにいられる……という打算があったりなかったり。

玉藻

長きにわたって封印されていた大妖怪、九尾の狐。

……のはずだが、普段はやたらと子供っぽい。

真面目にやろうと思えばやれるが、アリウス達の前ではやろうとは思わない。

封印から解放されたところを倒しに来たアリウスと出会い、戦う。

そして敗北し、話しているうちにアリウスが面白い奴だと思ってついて行くことにした。

六年経つうちに更に懐いたというか好きになっちゃったみたいだけど問題なし。

ジャック・ラカン

アリウスの師匠。

いわゆる一つのバグ。
バカっぽい。

n e x t c o n t i n u e . . .

仮契約カード

アーティファクト：『ディアボリックファング』

効果：気・魔力の増幅効果。

放出するよりも纏わせた方が効果が高くなる。

番号：411

名前：アリウス・ウインダート

称号：力を体現する猛犬

色調：赤と黒

徳性：勇氣

方位：北

星辰性：流星

マスター：テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア

アーティファクト：???

番号：600

名前：フレイア・バゼール

称号：情熱の紅き竜

色調：赤

徳性：愛

方位：東

星辰性：火星

マスター：アリウス・ウィンダート

アーティファクト：創生連環

番号：662

名前：エクセル・ミュリエール

称号：冷静なる統率者

色調：金

徳性：知恵

方位：北

星辰性：月

マスター：アリウス・ウィンダート

アーティファクト：神秘的奉仕服

番号：663

名前：アリス・ミュリエール

称号：奉仕者の鏡

色調：銀

徳性：信仰

方位：南

星辰性：月

マスター：アリウス・ウィンダート

アーティファクト：???

番号：632

名前：相坂 さよ

称号：少女な地縛霊

色調：白

徳性：勇気

方位：中央

星辰性：月

マスター：アリウス・ウィンドアート

アーティファクト：???

番号：620

名前：長瀬 楓

称号：隠密の偵察者

色調：青

徳性：節制

方位：西

星辰性：水星

マスター：アリウス・ウィンドアート

アーティファクト：???

番号：666

名前：玉藻

称号：九尾の妖狐

色調：金

徳性：信仰

方位：北

星辰性：金星

マスター：アリウス・ウインダート

next continue...

第二部開始前のキャラ紹介（後書き）

さよさんが一番困りました。

原作では仮契約してないし……色調が白なのは幽霊だからです。

ちなみに楓の場合、マスターとアーティファクトのみ変更ですかね。

第十九話

近況報告、そして麻帆良へ……（前書き）

短いんだぜ。

第十九話　近況報告、そして麻帆良へ……

「幸せだ！　俺は今幸せの絶頂にいるに違いない！」

男が日のよく当たる部屋で大きな声で言った。

「アリス！　紅茶を入れてくれ！」

「わかりました」

男が言うतずぐさま現れて、デスクの上のカップに紅茶を注ぐ銀髪の美女。

そして共に入ってきた銀髪の美女と同じ顔をした金髪の美女。

「マスター。その、今夜は私も混ぜて頂けないかと……」

そこへ更に竜のような角と尻尾を生やした赤毛の美女と、キツネ耳と九つの尻尾を持つ金髪の美女が駆け込んでくる。

「抜け駆けは許しませんわ！」

「そうぞー！　こいつは皆の物だー！」

そして静かに扉から入ってきた褐色の肌の美女がその二人の頭を思いつき叩いた。

「お主ら何を言っておる！ アリウスは妾の物じゃ！」

それを見た男は更に大声を出して笑い声をあげた。

「わっははは。テオドラ、俺がなんだって？ もう一回言ってくれ」

「お前は妾の物じゃ！ 誰にも渡さん！」

「愛してるぜテオドラ！」

抱き合おうとする二人が歩み寄った時、巨大な破裂音と共に部屋の壁が吹き飛んだ。

「てめえら黙つてればイチャイチャしやがって！ せっかく来てやつてんだからさっさと来やがれ！」

今日、たまたまアリウスの家を訪れていたジャック・ラカンが怒りの声をあげた。

アリウスがテオドラと結婚してから、実に六年の月日経っていた。

第十九話

六年が経ち、彼らの容姿や日常は大きく変化していた。

アリウスはこの六年間の間にさらに強さを増し、たくましくなった。雰囲気は未だバカっぽいが、包容力が増したとでも言えばいいのだろうか。

そしてテオドラもかなりの成長をしていた。

結婚した当初はまだ子供っぽい所が抜けきらない体だったが、そういうところが完全になくなっている。

頻繁にラブラブしているおかげか、大人の色気というものが出てきたようだ。

つまりはただのバカップルである。

普通でないとところと言えば、テオドラが王族であり、そこに婿入りした形のアリウスも王族の仲間入りという事。

そしてアリウスが、そんなの関係ないとばかりにあっちこっちへ飛びまわることだろうか。

外見的に一番大きな成長をしたのはエクセルとアリスだろうか。

アリウスの元に来てから成長を始めていた二人は、この六年間で素晴らしく成長した。

ついでにエクセルが時たまはっちゃけるようになり、アリスが前より少し饒舌になった。

ついでに、傭兵会社『黒い獵犬』の運営は完全にエクセル任せになった。

アリスはメイドとして毎日働いている。

おいアリウス、仕事しろ。

フレシアといえば、どこに出してもいい程の絶世の美女になった。だが、テオドラとアリウスを見ると飛びつく癖は直っていないので嫁の貰い手などいない。

「というか未だに「私は第二夫人になります！」とか言ってるからタチが悪い。」

現在はアリアドネーの魔法学院で副総長をやっている。

経緯は……総長であるセラスがフレシアの実力を見てこれならと思つて、ついでに帝国ともコネがあるからちょうどいいと思つたとかどうか。

一番はたぶんアリウスがフレシアを褒めたからだろうが。

魔法学院で多くの男子生徒やら男子教員がフレシアにアタックしたらしいが……結果は語らずにおこう。

そして玉藻。

外見的にも変化はしない彼女がどうなったかというと、ニートである。

働きもせずに普段からアリウスとずっとくっついて行動している。

玉藻曰く、退屈を感じない、だそうだ。

ただ、テオドラが忙しくてアリウスに会えないのにべったりしていると、テオドラから制裁を受ける事もある。

そんなこんなで色々と変わったが、アリウス達は概ね平和な日常を送っていた。

そんなところに一通の手紙が届いたところから新しい物語は始まる。

「タカミチから手紙？」

「はい。これがその手紙になります」

俺が居間で紅茶を飲んでいると、アリスが手紙を渡してきた。
にしてもタカミチか、そういえば最近は連絡取って無いつけな。

とりあえず中身確認すつか。

〈中身確認中〉

端的に言つと、麻帆良においでよ。だとさ。

なんでも、ナギさんの息子さんが来て教師やってるらしい。
子供いたんだあの人。

ナギさんのライバルだつて言つてた師匠はそつち方面では完全に負けたな。

俺も結婚したし、詠春さんも随分前に娘が生まれたつて言つてたし。
師匠とアルさんとタカミチと……クルトはどうだろ。最近連絡取っ

てねえしな……。でも結婚するなら連絡あるだろうし。
……うん、ちょっと怖くなってきたから下手な事は言わない事にしよう。

「手紙にはなんと？」

「ナギさんの息子のネギ？とやらが麻帆良で先生をしてるらしい。それで、会わせたいから来てくれってさ」

読み終えた手紙をテーブルに置いて紅茶を飲み干す。

最近のアリスの紅茶は本当にうまいな。王宮のメイド長にも引けを取らないぞ。

「行くのですか？」

「ん〜。暇だから時間はあるけど、うるさくならんかと心配だな。一応、俺王族に入ったし？」

「全然、一応じゃありません」

「そうだな。まあ、そんなわけで行っても大丈夫なのかな、と」

無理にあっち行ってタカミチとかに迷惑かけるわけにもいかんし。というかまずテオドラが許可するかわからん。

「別によいぞ」

「いいのかよ！」

「お主があつちに待たしておる者がおるのじやろつ？ 挨拶でもしてきたらどうじゃ？」

笑みを浮かべながら言うテオドラ。

これはあれか。結婚した故の余裕か。

……たぶんそうだな。じゃなきゃあこいつが頷くはずが無い。

「でも大丈夫なのか？ あれだ、その、政治的に」

「……のうアリウス、お主は結婚してから一度でもそういうことを気にしたことがあつたかのう？」

結婚してから毎日楽しく暮らしてたよな。

あつち行ったりこつち行ったり、テオドラを連れているんなところに……

「そつえば無いな。王宮とか気にした事」

「じゃろ？ ならば今更そんな事を気にするでない」

「そうだな」

じゃあ心置きなく出かけてくる事にしよう。

今度は一年もあつちにいるわけじゃないから気が向いたら帰ってくるし。

……一応、姿は変えていくかな。

「エクセルに会社任せとけばいいだろ。アリス、ついてくるか？」

「はい。旧世界には少し興味があります」

アリスが『興味がある』と発言するとは珍しいな。

人間らしくなってくれて何よりだ。

そんなことを俺が考えた時、窓から一人の女性が飛び込んできた。

「アリウス！ あたしも連れて行け！」

金色の長い髪と、それと同じ色の狐の耳と九つの尻尾を持つタマモである。

確か、散歩に行ってたんじゃないか？

「てか、窓から入るなよ」

「別にいいだろ！ それよりあっちに行くんならあたしも……」

「いや、だめだから」

「なっ、何故だ！」

「だってお前、自分の正体忘れたのか？」

こっちに来るって言うから封印だの討伐だのされなかったのに、あっちいったらダメだろ。

さすがに怒るんじゃないか？

「そんなのバレ無きや問題ない！ 絶対に行くからな！」

「……はあ。勝手にしろよ。バレ無きやいい問題だしな」

結局はそこに落ち着くわけだ。

来たいって言うなら来ればいいさ。あっちもなんとか言ってくれるだろう。

「その代わり、その姿はやめろよ。子供姿でな」

「……わかった。それくらいならいいぞ！」

「俺も姿変えなきゃならんしな……やれやれだぜ」

「私はメイドとして付き従いますので、このままの姿でいいですか？」

「ああ。むしろ姿を変える理由が無いしな」

テオドラからも許可貰ったし、フレイアにも手紙送つといたし、後はもう大丈夫だな？

エクセルにも休暇をやりたいけど、そうすると仕事が停滞するしな

……

「問題ありません」

「うおっ！ ビックリした……エクセルか」

いきなり扉を開けてエクセルが出現した。

というか話聞いてたのかよ！

「で、問題が無いってのは？」

「はい。会社に休暇を出しました」

「え？」

「どういうことだ？」

「長期休暇というものを会社全体に出してみました」

「……いいのか？ それ？」

「問題ありません。だから私も行きます」

「いや、別に来なくても……」

「行きます」

俺が別にいいと言おうとするのに、語気を強くして言うエクセル。
ふむ、これはやはり……

「そんなに行きたいのか？ 旧世界」

「ええ。それに、アリスだけ連れて行って私をおいて行くというのは不公平ですよ、マスター」

「……まあいいか。お前もいた方が楽しいしな」

「はい。お供させていただきますね」

嬉しそうに告げるエクセル。

さて、手紙の通りじゃあつちからタカミチが迎えが来るらしい。
それまでの間は家族サービスに努めるとしよう。

「よう、タカミチ。元氣してたか？」

「もちろんさ。そっちも元氣そうで何よりだよ。テオドラ様は？
誘つていてんだけど、よく君一人で行かせる氣になったね」

「あゝそりゃあ……」

「というか考え付いたならやめとけよタカミチ。
上手くいったからいいものの、ダメだったら大変だったぞ。」

「妻としての余裕、らしいですよ。タカミチ様」

「そうなんだ。エクセルさんもアリスさんもこんにちは。アリウスの世話は大変だろう？ 昔からだし無かったけど今はどうなんだい？」

「今もマスターはだらしないです」

「おいアリス！ 余計なことは言わなくていい！」

「はっはっは。相変わらずだね」

大口開けて笑うタカミチ。

腹が立つので俺も言っただけだ。

「お前も相変わらずじゃないか。老け顔タカミチ」

「うぐっ！ ア、アリウス？ ちょっとひどくないかい？」

「本当の事言っただけだろう。タマモもそう思わないか？」

「昔見た陰陽師のおっさんみたいな顔だぞ」

「くっ……具体例を出されると余計に痛い……」

お前、六年の間に老け過ぎだ。

ガトウさんそっくりじゃないか。あと、旧世界の映画だっけ？

銃撃戦ばかりな映画に出てくる登場人物のおっさんみたいになつてゐるぞ。

「まあそんなことはともかくだ。ネギ君ってどんな子なの？」

「そんなこと……まあいいや。ネギ君はすごく真面目な子だよ」

「……あのナギさんの子供が？ 冗談だろ？」

気まぐれに犯罪組織をぶっ潰して、気まぐれにお姫様を連れだすよ
うなやつだぞ？

……お姫様を連れ出すのは俺も同じか。

「ほら、ナギさんが行方不明だからさ。その分大人びたんだと思うけど」

「あの人死亡扱いだもんさ。ま、簡単に死ぬはずないからどうかで生きてると思うけど」

「そうだね……さて、あっちに行く準備はもうできてるかい？」

「もちろんだぜ！」

ポーズを決めてタカミチに応える。

せっかく旧世界に行くんだから準備は万端だ！
変装用の『準備』もバッチリさ！

「マスターは自分のお酒だけを用意していました」

「残りは全部私とアリスです」

「あたしは手伝ったぞ！ な！」

「いえ、自分の服を用意した後に屋根の上でお昼寝しました」

「うがー！ 言うなよー！」

……今のカットで。

「相変わらず楽しいね」

「そりゃどうも」

「楽しいことは何よりさ。じゃ、行こうか」

「OK！ みんな、行くぞ」

タカミチの案内の元、旧世界へといざ発進だぜ！

第十九話 近況報告、そして麻帆良へ……（後書き）

あとがき

ついに原作に入ります！

と言っても、途中からなんですけどね。

さうて。

修学旅行より前か後ろか……

他の転生者とか妨害者いるなら修学旅行前でもよかったんだけどね、アリウスの強さから言うと。

でもそうでないならパワーバランス崩壊でおかしなことになるから修学旅行後かね？

作者はさびしがり屋なので感想をたくさん頂けると嬉しいです。

どなたか、アリウス君を転生者とかが出る作品で使いませんか？

使っていただけたらその方に150キヂリン差し上げます。（嘘）

第二十話 麻帆良（前書き）

グダグダだっていいじゃない
み〇を

第二十話

麻帆良

「久しぶりの麻帆良だ……でもなんか騒がしいな？」

「もうすぐ学園祭だからね」

「それ先に言っとけよオイ」

「ごめんごめん」

「祭があるのか！？ りんご飴が欲しいぞ！」

「祭りの時に買ってやるよ」

「周りの服装から考えるに、私たちがメイド服でいても問題なさそうですね」

「いやいや、結構問題あるだろうが」

「どんな服、着てほしい？」

「アリスが着たい服を着ればいいよ。メイド服でいたいならそれでいいさ」

「……アリウス、一応彼女たちが変なことしないように見ててくれよ？」

「わかってるよ」

俺だって祭りは楽しみたいからな。

こいつらだって頭はいいんだから大丈夫さ。

……たぶんな。

第二十話

麻帆良

麻帆良に着いて駅から学園の方を見ると、やたらと騒がしい。
学園祭か……なかなか楽しめそうだ。

「タカミチ、美味しい飯が食べるところはないか？ 酒もあればもつ
といい」

「ねえアリウス？ 君、今の姿で酒を飲もつていうのかい？」

「……ダメか。なあ、やつぱり戻っていいか？ タカミチが俺より
も背が高いとこ見ると腹立ってくる」

「ハハハ。それくらい我慢してくれよ」

いやだね。お前が俺よりも背が高いとかふざけんな。
いくら俺がガキの姿とはいえ、屈辱的だ。

「まあいい。とつと俺の家に案内しろ」

「わかってるよ。荷物を置いてこなきゃいけないしね」

「その後で飯だからな。美味しいところに案内しろよ」

「わかってるつて。とっておきのところに案内するよ。その頃にはちょうど晩御飯の時間だろうからね」

「おう。期待してるぜ」

麻帆良に来るのもかなり久しぶりだから流行りの店なんて知らんしな。

……そう言えば、さや楓もここにいるんだろう。そのうち会いに行かんとな。

「ところでそのお店というのは何という店ですか？」

「とても気になります」

「あたしも気になるぞ！　どんな料理が食べられるお店なのだ！」

「中華料理が有名だね。学生がやってるんだよ。若いのにとってもおいしい料理を作るんだ」

「お前がそういつてことはだいたい教え子だったりとかするんだろっ」

「わかるかい？」

「なんとなくだ」

とりあえずそんなことはいいから家に行こう。

四人でしばらく居座るからな。そこそこの家でないと満足しないぞ。

主にエクセルとアリスが。

「こっちだよ。ついてきてくれ」

タカミチ偉そうにすんな。

――

さて、とりあえず学園長の挨拶も済んだし荷物を置くのも終わったしという事で晩飯の時間です。

昼飯は駅弁だったので晩はまともな物が食べたい。

でもその駅弁も結構おいしかった。さすがは旧世界の日本。

まあ中華料理が楽しみなのでさっさと行こう。

というか……

「楽しみだなー！ な！ アリウス！」

「はいはい。わかったから少しは大人しくしような」

タマモがさっきから興奮しすぎなのだが。

いやまあ仕方ないと言えば仕方ないだろう。旧世界出身のこいつが

その文化を楽しめるとわかればはしゃぐのはわかりきってたし。
まあこいつが楽しみたいっていうなら付き合ってやろう。
こいつも俺の大切な家族だからな。

「――で、どうしたんだ二人とも？」

「早くいきましようマスター（クイクイ）」

「早くいきたいですマスター（クイクイ）」

「ええい！ 服を引つ張るな！」

何故だかメイド二人まで騒がしいのだが。

おかしいな、いつも静かなキャラのはずなのに。

やはりあれか。エクセルは料理大好きだったりするからで、アリスは……以外と食事が好きだからか。

中華料理という未知の領域に興奮でもしてんのだろうか。

まあいい。本格的な暴走が始まる前にタカミチに案内を頼もう。

「へえ、なかなか混んでるな」

「かなり有名だからね」

「よし頼んだぞタカミチ。教師権限を発動しろ」

「そんなことなくても席は空いてるよ……ほら、そこに座ろう」

「冗談が通じねえ奴だなオイ」

まったく……まあそこがタカミチらしいというか。
そう思いながらタカミチが指示した席に座る。

この店の名は超包子というらしい。

メニューにもレパートリー豊富に色々書いてあったので、面倒だし
タカミチに頼むことにした。

中華料理とかあんまり詳しく知らないんだから仕方ない。

それで注文してしばらくすると料理を持った口ボ娘がやってきた。
というか注文を取った時も口ボ娘だった。

……口ボ？

「なんで口ボ？」

「エヴァの従者なんだよ」

「へ」

「マスター、あの娘から何か近いものを感じます」

「私もですマスター」

「これがろば……うむむ。人じゃないのはわかるんだけどな！」

偉そうに言つな馬鹿。

一周回って馬鹿に見えるぞ。

「あの……高畑先生、こちらはマスターの知り合いですか？」

「アリウスはエヴァにあつた事があるよ。他はアリウスの……あれ？ 従者でいいんだよね？」

「ああそ『もちろんです！』おい、俺が話してるのに『あたしもまあ従者として数えられてもいいぞ！』だから黙れこら！」

「まあそついうわけだね。アリウスは僕の親友だね。もうすぐお祭りだから招待したのさ」

「そうですか……では、私は仕事ですので」

そんな感じで色々と喋くり合い、最後にタカミチと一言三言話し合つて屋台の方に戻つていった。

ぬう……雰囲気からいってエクセルに似ている……ロボとは恐ろしいものなのだな。

ホムンクルスレベルの人間らしさを生み出せるとは……むしろ作つた奴が凄いのか？

「とにかくメシだ。美味そうだからさつさと食おう」

「餅は熱いうちに食べ、ですね」

「アリス？ それを言うなら鉄は熱いうちに打て、ですよ」

「ごちゃごちゃいってないでさつさとあたしに食べさせろー！」

「そうだな。食おう。いただきます」

……タマモを連れてきたのは間違いだったか？

いや、大丈夫だろ。飯食えばすぐに寝るし、おこちゃまだし。

酒は……甘酒しかないけど酔ってくれるかな？ 酔わせて眠らせればすぐ寝るからな。

「うめえな。エクセルの料理より美味いんじゃないか？」

「……負けました」

美味しそうに食べてはいるけどエクセルが微妙に落ち込んでいる。どうやら自覚しているらしい。

中華料理だからいいじゃないか。

「美味しいです」

「うまいぞ！ おかわりじゃ！」

「お前食つのはええよ！ タカミチ、すまんがもうちょい注文してくれ」

「了解。やっぱり君といると楽しいね」

「むしろ疲れると思うんだが」

ここらへんはお前と俺の感性の違いか。
まあ、退屈はしないと思うが。

「おっし！ 俺も気合い入れて食うぞ！」

「ほどほどにしといてくれよ?」

「わあってるよ!」

そんなこんなで1時間後。

「思ったんだが、ああいう屋台で1時間も居座ったらずいよな」

「マスター、気付いていたのならもっと早く言いましょう」

「うるせえぞエクセル……よつと、こいつ一人だけ眠りやがって」

俺はタマモを背負って道を歩いていた。

エクセルとアリスを引き連れて、未だ騒がしくしている連中がいる中を家に向かって歩いていく。

タカミチは明日何か用があるとかでとつと帰ってしまった。
まったく、友人を家まで送ろうとは思わんのか。

「マスター、私が背負いますか?」

「いやいや、女にそんなことさせるわけにはいかねーよ」

「私に仕事任せておいて今更な気がします」

「それはそれだ! 力仕事だろこれは! 事務は任せた!」

「それでこそマスターです」

……なんか馬鹿にされたような気がする。
気のせいかな？ 気のせいだよな。

これから麻帆良でまともな生活できるのかな……トホホ。

心配で仕方ないよ。

とりあえず明日からの生活に備えて早く寝たいなあ……

それよかタカミチもタカミチだ。どうせなら祭りの日に呼んでくれればよかったのに。

はあ……

そういえば、サヨやカエデは元気にやってるかねえ。

あれから数年、あいつらはどう変わったのかな。

第二十話

麻帆良（後書き）

あとがき

これはつなぎの回です。

だからggggでも気に住んな！

はやくラブコメが書きたい！

幕間兼30万ヒット記念(前書き)

小話まとめですね

幕間兼30万ヒット記念

第一フェイス……タカミチ観察

「フフフ。やはりデートか。面白い」

俺は今タカミチをストーカーしていた。

理由は暇だからだ。

子供姿のせいで酒も飲めないし、やたら話しかけられる。

まあそれはともかく、俺はアリスと一緒にタカミチをストーカーしていた。

「あの方にも彼女がいたのですね」

「だが待て。デートはデートかもしれないが付き合っているかは分かんぞ」

眼鏡をかけた巨乳な女性と茶を飲んでいるタカミチ。

どこかに出かけるというので尾けてきたがこれはデートだろう。

まあ仲間内で俺が結婚してるんだ。

奴も焦っているのだろう。ふはははは。

というかやたら桃色空間を……じゃなくて和やか空間が作り出され

ている。

親友である俺としてはこっそり応援してやりたい。

「がんばれよ親友……行くぞアリス」

「はい」

俺達はその場を後にした。

第二フェイズ……遭遇？

「……さーん！ どうしたんですかー？」

「ん？」

「？」

タカミチから離れてすぐの時。

誰かが誰かを叫びながら追いかけるのが見えた。

追っかけてる方が妙にナギさんに似てる気がするけど……

まあ気のせいだろ。

「あれ？」

「どうしたの桜子」

「なんかメイドと歩いてるイケメンが……」

「ホントだ……」

「さっきのネギ先生に似たイケメンといい、なんかあるのかな？」

「偶然でしょ。偶然」

「だよね」

第三フェイズ……茶

「旧世界のお茶も美味しいですね。茶葉をもらっても？」

「はい。そちらの茶葉も頂けますか？」

「ええ。後で家から持ってきてましょう」

エクセルと茶々丸はエヴァの家で茶を飲み比べていた。

魔法世界の茶を持ってきたエクセルが茶々丸に茶を飲ませ、茶々丸も同じようにエクセルに飲ませる。

ついでに料理についても話し合っていた。

「色々レシピがあるんですね。これでレパートリーが増えます」

「こちらこそ、エクセルには感謝しています」

「茶々丸も従者仲間ですもの。主は違えどね」

「はい」

この二人、境遇と言うか環境と言うかかなり似通っていた。おかげで、会って1時間も経たないうちにすぐさま友情を結んでいた。

今日の晩は互いに増えたレパートリーから料理を作るだろう。

第四フェイズ……勘違い

「寝坊したからと言ってあたしを置いてくなんてひどいぞ！」

頬を膨れさせながら歩く玉藻。

寝坊した彼女は起きた時に周りに誰もいなくて不貞腐れていた。それでもしっかりと準備されていた朝食は食べていたが。

街を歩き……そして犬耳が映えた相手を見つけた。

「アリウスー！」

「へ？ なんや？」

「とおっ！」

「ぶっ！」

振り向いた少年の顔に炸裂した飛び蹴り一発。
そこで玉藻は気付いた。

「あれ？」

「……………」

「背も低いしタフじゃない……………間違えた？」

「一体なんなんや……………」

耳がはえてるのは同じだけど小さい。
ついでに色々と違う。

「間違えた！」

「はあ？ っていうかいきなりなんなんや！」

「うゝむ。犬っぽいのは似てるのに……………アリウスはどこにいったんだ！」

「無視すんなや！」

「うるさいぞ！」

「がつ！」

またも少年の頭を強打した玉藻はアリウスを呼びながらその場を去った。

第五フェイズ……再会

美しい月が出ている夜。

女子中等部の校舎の屋上にて。

「……………」

カードを胸に抱いて空を眺める少女が一人。

そこに歩み寄る一人の男。

「よう」

「へ？」

自分が見えないと思っていたのに声をかけられ、彼女は思わず振り返った。

ずっと聞きたかった声に似ていると思い、月の光に照らされた男の顔をはつきりと見た。

「久しぶりだな」

「あ……」

そして相坂さよは愛する人と再会を果たした。

第六フェイズ……嫉妬？

「じゃあ結婚式あげちゃったんですか？」

「あ、ああ……」

「じと〜」

「うぐあああの視線はやめてくれ！」

不機嫌そうにしているさよと視線を受けて悶えるアリウス。
さよが不機嫌なのは、当然アリウスの結婚云々の話を聞いたから。

「学園祭、付き合ってくださいよね？」

「お、おう。勿論だ！」

笑顔とは本来威嚇のためにあるのだ。
それをヒシヒシと感じる笑顔だった。

「じゃあ今日もいっぱいお話ししようね!」

「ああ。色々と話せる事はあるからな」

屋上に二人で座り込み、夜空を見上げながら話しあう二人の姿。
それは、さよの姿を見る事が出来る人が見れば、仲睦まじいカップルにしか見えなかっただろう。

番外フェイズ……何か感じる

とある少女が、突然イラッと来てドアの方を向いた。

「……………」

そのまま無言で睨んでいると、同室の少女達から声がかかった。

「どうしたのかえで姉?」

「なにかあつたですかー?」

「いや、何か無性に腹がたつたのでござるが……うゝむ」

腕を組んで考えるが答えは出ない。

「変なかえで姉だな」

「変なかえで姉です」

「うゝむ……」

その後しばらく長瀬楓はうなり続けた。

幕間兼30万ヒット記念(後書き)

あとがき

大体9巻までを終わらせたかったわけだ。

第二十一話

オラ、なんだかワクワクしてきたぞ。

「で、顔合わせをしろと？」

「そうだよ。アリウス達にとっても他の魔法先生と顔を合わせるの
はいい事だと思うけど」

「やだよ。俺が紅き翼の一員だって知った瞬間に騒ぐに決まってる」

「そう言つと思つたよ……」

第二十一話

オラ、なんだかワクワクしてきたぞ。

「それじゃあ子供の姿のままでいいよ」

「良くないだろ。どう考えても」

「知り合いの子ってことでなんとか……」

「なるわけあるか！」

今日の朝、朝食を食べ終わってのんびりしてたらタカミチが訪ねて

きてからこの調子である。

せっかく祭りも明日まで迫ってるのになんだって言うんだと、話を聞いてみればこれである。

「べつにーじゃん。アリウス」

「タマモがそんなことというのは怪しいから駄目だ」

「う」

ううう言っても聞かないぞ。

「でもマスター？ そのネギという子が来るのなら会った方がよくないですか？」

「そうなんだけどさあ……」

「問題ありますか？」

「なんか凄くうるさそうだし」

タカミチの話しの通りだと……

俺が紅き翼にいたって聞いたら絶対に聞きまくってくるだろ。面倒くさいぞそんなの。

「とりあえず来てくれればいいよ。僕の知り合いつてことにしとくから」

「さっきも同じ事……他の先生と顔を合わしたら面倒になるだろ？ ブラブラしてるから学園長とだけ会わせろ」

「諦めましたね」

「うるさいぞアリス」

これはタカミチがうるさいから仕方なくなんだからな。
ついでだから学園長にタマモが全然良い奴だってことを言っておこ
う。

「じゃあ今から行こうか」

「今からだったのかよ!？」

世界樹前の広場へとタカミチの案内で歩く俺達。

犬耳少年と狐耳 & amp・狐尻尾の少女。更にメイドが二人。そし
て渋いおっさん一人。

かなり目立つメンバーだと思うのだが、目立たないのは周りもさら
に凄い格好だからだろう。

「アリウス！ あそこ！ 怪獣みたいなのがいるぞ！」

「飛行船ですか…… あちらのお祭りを思い出しますね」

「……スライム？」

「一々歩くの止めるなよ。アリスも変なのを見てないでこっち来い」
タマモと手を繋いでぐいぐい引つ張り、抵抗されても無理矢理引きずる。

エクセルは飛行船を眺めてるし、アリスは謎の生物をじっと眺めている。

正直タカミチが迷惑そうな顔してるので早いとこ行きたい。

「まあ半ば予想してたんだがな」

「あはは……学園祭の一日前だからね。面白いものもたくさん見られるから仕方ないよ」

タカミチはそういいながら煙草に火をつける。

こいつが温厚な奴でよかったぜ。

師匠ならとくにキレてる。

いや、師匠なら初めから殴って気絶させて連れてくか。

とにかく引つ張ればいいだろう。

「とりあえずひきずってきや大丈夫だ」

「ああ、うん。もう慣れたよ」

変な顔してどうしたんだよタカミチ。

まあ、いつものことか。

お、あそこにある焼きトウモロコシ、美味そうだから後で食ってみよう。

「だから断固拒否する」

「そこをなんとかならんかのう」

「嫌だね。俺は祭りを楽しみに来たんだぞ。ネギとかに会ったりするのはいいでだ」

「アリウス、ラカンさんそっくりになったね。主に性格が」

失礼な。それを言ったらタカミチこそガトウさんそっくりじゃないか。

主に外見の老け具合が。

まあともかく。

「とりあえず俺は祭りを満喫するから。注意事項とかある？」

魔法バレについてとか。
何かが潜入してるとか。

「ああ、それなら……」

「うむ。協力は期待しておらぬが、一つ言っておく事があるわい」

「なんだよ。聞いてやるから早く言いな」

「うむ、世界樹についてなのじゃが……」

くじじい説明中く

「願いが叶う木だあ？」

「おお、そう言えばあたし聞いたことあるぞ」

そういうことは早く言えロリババア狐。

この二本で長生きしてたんなら知ってるだろうが。

「22年に一度、願うが叶う木ですか。ロマンチックですね」

「でも、人の心に作用する願いだけですか」

「だから告白はしないようにってか？」

お生憎様。こちらら告白とかいう段階はとっくに過ぎてるんでね。そういう方面に掛けては絶対に迷惑にはならないぜ？

「できればそういう子を見かけたら止めて欲しいんだけど……」

「ハ。嫌だね」

「面倒くさいんですよマスター」

「それもあるが……アレだ。うん、告白なんてのは個人の自由なわけだし？」

「正直に言えないんですねマスター」

ああハイそうですよ。

ったくうちのメイドたちは鋭くていけないな。

「そんじゃあ俺達は行くからな」

「どこへだい？ まだ祭りは始まってないよ？」

「チツチツチ。甘いなタカミチ」

祭りってのはな……

「準備の時から始まってるもんなんだぜ？」

それじゃあ皆、さっき見つけた焼きトウモロコシでも食いに行こう。

「むう……焼きトウモロコシ。さすがに美味い。こちらの焼き鳥もすごく美味しい」

大量に食い物を買って込んで、カフェに居座る俺達。

別にジュースとかコーヒーとか頼んだからいいだろ？

「りんご飴〜りんご飴〜」

「わたがし〜わたがし〜」

タマモが変な事言ってるからアリスまでおかしくなってる。
美味そうに食ってる事だけは確かだが。

「フ、フランク「いや、お前までやらんでいい。というか語呂が悪い」……そうだったんですか」

エクセルまでやろうとし出す始末だ。

いくら目立たないといっても、体を揺らしながら食べ物の名前を連呼しだすメイドがいたらヤバいだろ。
もう一人いる時点でヤバいと思うけど。

「それで、今日はどうします？」

「ん〜。そうだな〜」

正直あんま考えてないんだが……

「おろ？ アリウス、上を見よ」

「マスター、建物屋上にて魔法の行使を確認しました」

「……確かになんか感じるな」

朝に俺にあんだけ言っといっていきなりトラブルか？

あの爺さんいきなりすぎるだろ。

「戦闘のようです。エクセル」

「わかったわ。映像を出します」

エクセルは偽造用のノートパソコンを取り出して、その画面に遠見の魔法で見ている映像を映し出した。

……影魔法の使い魔か。

数から考えれば使ってる魔法使いは『そこそこ』レベルだな。

それを迎撃してるのは……おお、俺と同じ犬耳少年がいるじゃないか。

同族か？ まだこどもだからそんなに強くはなさそうだが……

「おお、あの犬耳は」

「知ってるのか？」

「ただぶつかっただけ」

「オイ」

期待させんな！

「別にいいだろ！ あっちのデコ娘は神鳴流剣士だな。昔見た事がある」

「へー。そっぴや詠春さんが持ってたようなカタナを持ってるな」

案外詠春さんの持ってた奴だったりしてな。

ハハハハハ。腕前は……どうだろうな。見たところ普通じゃないか？
ちなみに基準は。

ダメダメ↓そこそこ↓まあまあ↓弱い↓普通↓なかなか↓結構やる
↓強い↓いいねえ↓極上↓俺より強い
タカミチは修行ばかりしてるわけにもいから極上まではいかな
いだろうな。

ちなみにエクセルとアリスは結構やる。タマモは強い。今はいない
けどフレイアはいいねえレベルまで行くな。

そして迎撃組の中でも一番の注目。

「ナギさんに似てるな。主に顔立ちと髪型が」

「そうなのですか？」

「ああ。メガネかけてるからそっくりじゃあないが」

アレが無ければかなりそっくりだと思っぞ。
なんか知的な雰囲気纏ってるから駄目かもしれんけど。

「どうしますか？」

アリスが完全に戦闘モードで話しかけてくる。
全くお前は……少し落ち着けよ。

「無関係な事に首を突っ込んで仕方がないだろ？ お前はわたがし
でも食ってるよ」

「むぐ……甘い」

まだ手に持ってたわたがしを口に突っ込んで空気を変える。

祭りが始まってもないのにこんなトラブルが起きるとは……
なんか、より一層楽しめそうな気がしてきたぜ。

第二十一話

オラ、なんだかワクワクしてきたぞ。

（後書き）

あとがき

35万ヒットはええよ！

ご愛読ありがとうございます！ これからもよろしく！

わたくしウルフガイは、皆さまからの感想をお待ちしております！

第二十二話 幽霊少女と祭りにて（前書き）

間はカットですが、始まりと終わり良ければそれでよし。

第二十二話 幽霊少女と祭りにて

さあ祭りだ！

とまあそんなわけで学園祭を回る。

今日は午後からサヨと回る約束もあるので、タマモ達とは別行動だ。

まあ、『幽霊でも活躍できそうなお化け屋敷をやってるんですよ』とサヨが言ってたし、3-Aを見るだけ見てみるか。

この年だし、お化け屋敷で怖がるようなもんでもないしな。繁盛してるかどうかくらいは見てみよう。

そんなわけで女子中等部の教室に向かう。

すると、階段付近まで続いている行列を発見。

「……まさかな」

3-Aがなんでそんなに大繁盛してるんだというか、お化け屋敷がそんなに繁盛するのかどうか知らないしな。

本物も幽霊もいるからなんだろうか？

そういえばサヨがクラスにすごいメカっぽい人がいるって言ってたし、なんかそういう装置でも作ったんだろうか。

そんなこと考えながら行列の横を歩いて行くと、物の見事に3-Aに到着した。

むう。確かに入り口もそれっぽい感じだ。

お化け屋敷か……子供の頃に入ったら楽しめたんだろうなあ……

なんか昔に見知った気配が中からするが……サヨだろう。

カードを使って連絡を取ってもいいが、さすがに一般人の目が多すぎる。

一段落するまで待つか……ん？

出口の方から子供がパンツ一丁で飛び出してきたが、あれはネギ？
だっけか？

そして飛び出してきたかと思えば、どこかで見た気がする髪型の女子生徒の胸を揉んでる。

最近の子供ってのは進んでるんだな……

「あんたは、なんてカッコでなんてトコをもんでんのよーっ！」

「みぎやーっ！」

……前言撤回。

やっぱり進んでるわけでも何でもない。

ナギさんがアホっぽかったように、あのネギとやらも違った意味でアホのようだ。

頭を思い切り殴られても文句は言えまい。

その後しばらく、近くの喫茶店をやってるクラスでサヨの担当する時間が終わるのを待つ。

仮装していてもいいということで、俺の本来の耳と尻尾を隠さなくていいのは素晴らしいな。

恰好も魔法世界でいつも過ごしている普段着で済むし。

祭り万々歳だなおい。

とりあえず周りの人が少なくなったのを確認してカードで念話を行

う。

『サヨ。聞こえるか？ 返事はしにくいだろうから気にすんなよ？
俺は近くのクラスでやってた喫茶店にいるから自分の番が終わっ
たら来てくれ』

そんな風に念話を終えてしばし待つ事にする。

……鼻がむずむずするな。どこかで誰かが俺の事噂してるんじゃない
いだろうな。

——その頃、とあるメイド^{アリス}二号。

「こんにちはエヴァンジェリン様」

「ん？ ああ、アリスの従者だったか？」

「はい」

「ケケケ、オマエモ人間ジャネエミテエダナ」

「ですが、チャチャゼロさんよりは人間に近いと思います」

「チゲエネエナ」

「アリスはどうした？ いつもは一緒にいるじゃないか」

「マスターはデートです」

「ほう」

「ケケケ、浮気カヨ」

「テオドラ様公認です。他の方に余裕を見せたいようです」

「ふはは。あの皇女もなかなか面白いな」

――

大方、どこかをうろついてるメイド二人だろう。
タマモは目をキラキラさせてあっち行ったりこっち行ったりだろうし。

「アリウスさん、おまたせしました！」

「ん、おお。そんなに待ってないから気にしないでいいぞサヨ」

紅茶を飲み終えたところで、ちょうどよくサヨも来た。
うむ、それじゃあ店を出るか。

――その頃、とあるメイド^{エクスセル}一号と狐娘

「おお、あの方が『相坂さよ』ですか。確かに幽霊ですね……珍しい」

「あたしは何百年も生きてる妖怪だから見えるのはわかるけど、エクセルが見えるのはなんでなんだ？ あ幽霊、相当薄いぞ？」

「ふっふっふ。ホムンクルスを舐めないでください。私たち姉妹の初代マスターは、パラケルススというそれはもうすごい人だったんです。幽霊くらい見えます」

「理屈がわからないけど……すごいならしかたないな」

「マスターに見つからないようにこっそりとデートを見守るのです。テオドラ様からも言われてますし」

「あたしはあっちにあった『飛行船』というやつに乗りたいたんだけど……」

「そんなの後です！」

「……アリウス達が乗ってくれたらいいな」

パレードの横を歩きながらどこへ行くともなくぶらぶらと歩く。
俺は横を歩く（というか浮く？）サヨに話しかける。

「サヨのクラスもずいぶん繁盛してたな。本物の幽霊がいるからか？」

「えへへ。私も頑張りましたけど、皆が頑張ったからですよ。学校に居残ってまで準備してたんですから」

「そりゃあただ単に間に合わなかっただけじゃないか？」

「今でもあのカードは持ってるのか？」

「当たり前ですよ。不思議な事にあのカードだけは普通に触れるし服にしまえるんですよ！」

「そのまま壁通り抜けたりとか？」

「はい！」

……カードごとつてのは、不思議だな。

「サヨだからか？ 持ち主に適応したんだろうか。」

「ま、いいや。まずはどこに行く？ 俺はこの学校に来たって言っても結構前だからな。サヨに案内してもらえると助かるんだけど」「もちろんですよ。私なんてずーっとここにいます。案内なんてちよちよいのちよいですよ！」

「そうか。助かるよ」

「それじゃあ案内します！」

俺はサヨに手をひかれて世界樹の方に進んでいった。

ちよつと視線を感じるが、サヨが見えないからだろう。そんなもん気にしないさ。

結婚式とかその他の行事に無理やり出された時とかで慣れてるさ。

さて、その後。

隠れた古本屋とかフェリーとか飛行船とか世界樹の下にあった喫茶店とか。

まさに昔からある名店とかイベントとかを紹介されて、俺としてはかなり嬉しかった。

実を言くと、魔法世界で遺跡巡りをしていたおかげで、俺は古くて良い物というのが大好きなのだ。

……途中、何度も魔力を感じた気がしたが、知ったこっちゃない。

まあ、店の中にいる時間よりも一緒に話しながら歩いてる時間の方が多かったのだが。

たぶん、サヨも文句を言わなかったし、文句はないのだろう。

店の中を見るよりは、祭りを回りながらサヨと話す方が楽しいわけだし。

そんな楽しい時間を過ごすと、あっという間に日が沈みかけていた。楽しい時間は早く過ぎ去る物である。

場所、世界樹のてっぺんにて。

俺はサヨを連れてひとつ飛びし、そこに立っていた。

「いい景色だな」

「そうですね。あっちの方に花火も見えますし。飛行船もキラキラ光ってますよ」

サヨの指さす方向に目を向ければ、確かに花火が上がっているのが見える。

てっぺんだけあって眺めもいいし良い風が吹いている。

「今日はこれからお友達の手伝いがあるんです。だから私はここまです」

「そうか。ま、友達が多い事はいいいことだよ」

「えへへ。今度みんなを紹介してあげますからね。楽しい人たちなんですよ」

「楽しいか。そりゃあいいな。すごくいい」

俺も紅き翼の皆がいた時はすごく楽しかったしな。

クルトもタカミチもいい親友だし。師匠達も馬鹿やる人が多かったし。ツッコミ役の詠春さんもいたし。

「ああ、そう言えば言っとく事があつたんだ」

「へ？　なんですか？」

「えつとだな。俺が結婚したのは皇女様なんだよ。それは言っただけ？」

「言ってますん！ そうだったんですか！？」

おおっ、すごい剣幕だ。

普段おとなしめな雰囲気なだけに余計に迫力がある。

「あゝ。それでだな。俺も今となつては王族の仲間入りと言っわけだな」

「……それでなんだっていうんですか？」

「そう怒らないでくれよ。つまりな、奥さんがもう数人いてもいいらしいんだよ。ついでに言つとテオドラも連れてきたければ連れてこいって言ってるしな」

「え……」

たぶんあれだ。『妾が正妻じゃ』とかそんな感じで言つかもしれないけど。

「俺もサヨの事は好きだし、仮契約もしたしな。一年後に正式に卒業式迎えて魔法世界に來いよって言おうと思つ、たん、だが……どうした？」

「……だつて、不安だったんです。あたりまえじゃないですか」

サヨがいつの間にか涙を流していた。
そんなに衝撃的だったか？

「そりゃ……悪いことしたな」

「でも、ちゃんとアリウスさんも私の事を好きなんですよね」

「当たり前だろ。俺はそういう嘘はつかないぞ。だから泣かないでくれよ」

俺はサヨの頬を指で触れて涙を拭いてやった。

サヨはいつもの笑ってる顔の方がずっといいからな。

「はい。もう泣きません。私もアリウスさんの事が大好きです！」

「ああ。俺もだよ」

サヨが飛びついてきたので受け止めて抱きしめる。

そこらは気合いだ。そうだろ、師匠？

サヨが幽霊かどうかなんかも関係ない。

人は心だ。

……そう思うだろ？

第二十二話 幽霊少女と祭りにて（後書き）

あとがき

パラケルススが製作者だと言うのは年代を見てて思いついたネタ。
ついでにかなり重要な伏線でもある。
31巻を読んで思いついた。

第二十三話 武道会に現れた怪人（俺）（前書き）

四十万アクセスありがとう！

そしてこれからもよろしく！

第二十三話 武道会に現れた怪人（俺）

サヨに聞いたところ、この後神社でやる格闘大会の司会役の奴の手伝いをするらしい。

……一般の格闘大会に俺が出るのは反則だけど、見るだけなら問題ないよな。

さて、そんなこんなで俺は麻帆良武道会予選会場にやってきた。

「で、なんでお前らまでいる？」

「ぐ、偶然だぞ？ もちろん」

「はい。タマモさんの言うとおりですよ」

「いえ、マスターの尾行をしていたそうです」

「「アリス！？」」

こいつら……アリスはグツジョブだが。

でもよく考えたらアリスも尾行してたってことじゃないか？
まあ別に怒らないけど。

「マスターは出場するんですか？」

「いや、さすがに一般の大会に出ちゃダメだろ」

絶対気合いだけで吹っ飛ぶぞ皆。気でも使えない限りは。

この学園ならそんな奴ざらにいそうな気もするが。

俺の相手をまともにできる奴ってこの学園じゃタカミチとかエヴァ（本気）とかそんなくらいじゃなかるうか。

気の使用無しで出場しても面白そうだが……

「あの、マスター？」

「なんだエクセル」

「先程、タカミチさんを会場内で発見しましたよ？」

「……何？」

「一千万に目が眩んだかタカミチ！？」

「……いや、それはないか。あいつそれくらいなら簡単に稼げるだろうし。」

「まあいいや。その、タカミチを見たつてところまで案内してくれ」

「はい。わかりました」

「タマモ様はあつちに行きましょう」

「あたしも行……ちょ、アリス、なにをする？」

「邪魔になるから」

「邪魔って……うゝわゝ」

よしナイスだアリス。そのまま遠くに引っ張っていけ。」

そしてエクセルの案内でしばらく行くとタカミチを発見。
受付の真っ最中だ。マジで出んのかこの野郎。

エクセルを後ろの方で控えさせてタカミチに声をかける。

「おいタカミチ、なんでこんな大会に出るんだいこの野郎？」

「あれ？ アリウス？ 君までいたのかい？」

『まで』ってなんだ。おい。

他にも誰かいたのか。

「いちゃ悪いのか？ なんか面白そうだから来てみたんだけど」

「ああ……実はね」

「タカミチ説明中」

「へえ」。エヴァもでて、ナギさんの息子のネギも出るって？」

「そうなんだよ。ネギ君がどれだけ強くなったのか知りたかったし、ちよっとお仕事関係の方もあるしね」

「さっきのアレか？ なんか、呪文詠唱だのなんだのって主催者のガキが言ってたけど」

「うん。あの子も要注意人物だね。最近は問題も起こしてるようだ

から」

そう言って煙草を吸うタカミチ。
しかし、あれだ。顔から笑みが消えてないぞ。

「……実際はネギつてのと戦いたいだけじゃないのか？」

「あはは。まあお楽しみの方では確かにそれが大きいかな」

ポク、ポク、ポク、チーン♪

「OK。俺も出るぜ」

「え？」

「実は明日から暇っぽくてな。誰かと約束したわけでもないし。俺としちゃお前と戦えれば楽しそうだし」

「……そう言えば、アリウスとはなんだかんだであんまり戦った事ないよね」

「まあ、そういうわけだ。……でも、この大会って他の魔法使いも見てるのか？」

「え？　そうだけど……」

「俺の事知ってる奴がいると騒がれるかもな……むう、顔を隠して出場すれば……」

幸い仮装したままでもOKっぽいし。
お面とか……ひとつ走りして買ってくれば……

「あの、アリウス？」

「ん？　なんだ？」

「出ることは決定済みなんだよね？　一般人も見てるからできるだけ控え目にしてくれないかい？」

「……努力するよ」

その点、タカミチは便利でいいよな。

無音拳って、何やってるかわからんから本気出しても問題ないじゃないか。

ずるいぞ。咸卦法も出力アップ効果だから問題なく使えるし。
まあそんなくらいで負けはしないが。……たぶん。

「じゃ、俺も受け付けますか」

顔を隠す……顔を隠す……天狗だと耳と尻尾が似合わんな。
かつこつきたいし……ん？

「なんだあのフード男？」

やたら不思議な気配だが……そうか、フードでもいいのか。
なら、こっちはミイラで行くか。（！？）

「よしエクセル！」

「はい」

「包帯を出せ！」

「……はい？」

『大変なことになりました！ G組に犬耳と尻尾をつけた謎のミイラ男が出現！ 正直どっかにしろと言いたいですけど謎の威圧感を放っております！ ていうか濃すぎるでしょ！』

ふっ。さすが俺、すごい目立ってる。

でも横にいるロボ男もすごい目立ってるな。
対立してるのか？

俺以上にガタイがいいな。ロボだからか？
でも見せかけだけだろうな。ロボだし。

そして人数がそろったので試合開始。

ロボがロケットパンチをぶっ放した。

なんか旧世界のアニメで見た事あるんだけど、実際に見ると感動的だな。

かめ。め波とかやっても『気だよ』って言ってごまかせるか？
ロケットパンチがあるなら大丈夫そうだが……まあ、無難にいくか。

「そおいつ！」

パンツ！

手を広げて思いっきり床に叩きつける。
そこから円状に気を放出する。もちろん、軽く吹き飛ばすレベルで
だ。

……他の奴らはほとんど吹っ飛んだけど、2人残ってるな。
ロボはあれか？ 重かったからか？

あと一人なぜか胴着の奴が……

「烈空掌！」

「む？」

気弾を飛ばしてきたので右手で受け止める。

「やるな不気味な奴！」

不気味……ミイラは不気味だな。

ロボよりも俺の方が倒しやすいと思ったか？

「烈空双掌！」

「温いぜ！」

両手からの気弾をあわせて放ってくるが、その気弾ごと右手から放
った気合いで吹き飛ばす。

そしてそのまま場外へ。

うむ。なかなか修行をしてたみたいだが火力が足りない。
ついでに言っなら相手が悪かったな。

『謎のミイラ男、不思議な技で本編出場――！』

別に不思議でもないんだがなあ……。

『――では、大会委員会の厳正な抽選の結果決定したトーナメント表を発表しましょう！』

タカミチはエヴァと同じ組だったらしい。

うむ。横目で見てたけど、エヴァは楽してたな。タカミチが無音拳で周りのを倒しちまうから楽だったろう。

最後に一人の敵を投げ飛ばしたのは驚いたけど。ああいうのも出来るんだな。ババアなだけはある。

他にも見所あるのがたくさんいて面白そうだ。

……やたら背が高い糸目がいるな。

いや、俺の知る糸目はもつと小さかった気がするから別人だろう。

『こちらです！』

司会者の少女の声と共にトーナメント表が発表された。

俺はアリウスじゃなくて偽名の『アルス・ウィダーツ』で応募したが……

相手の名前。これ、『長瀬 楓』ってオイ。

そして、さっきからこっちを見ている糸目の背の高い少女。

糸目だし、忍者っぽいし、まさかというか、やっぱりか？

まあ、あの時に比べてどれだけ強くなったのか。
しっかりと確かめてやるうじゃないか。

……… ついでに、面白いサプライズ付きで。

第二十三話 武道会に現れた怪人（俺）（後書き）

あとがき

A r i u s ・ W i n d e r t

アリウス・ウィンダート

A r u s W i d e r t ↓ i と n を 抜 い た だ け

アルス・ウィダーツ

かなり適当です。

クウネル・サンダースよりずっとマシだろ？

ちなみに、主人公のミイラは「ソウルクレイドル・世界を喰らう者

」の、ゲシュタルさんからです。

覇王の死体だけあってすごく強かった……ネギまには関係ないが。

……よく考えれば、いつからなんだろうな。

『ネギま』の二次創作で、オリ主が警備員をやるのが主流になったのは。

後は、紅き翼のところに突然現れるってやつも。

誕生して一から強くなるって二次創作、あんまり見ないよな。

初めから馬鹿強いのはよくあるけど。

なんでやる？

第二十四話 知らず知らずに師弟戦（前書き）

書いてたらごっちゃになった。

徹夜はきついよ。でも、キャラの性格と立場を吟味するところになったんだ……

第二十四話 知らず知らずに師弟戦

さて、瞬動を連発して家に帰って寝た翌日。

俺はアリスに起こしてもらって快適な朝を迎えた。

そしてエクセルが作った料理を食う。

うむ、さすがに美味い。

「それじゃあ今日の朝8時からって言うし、行ってくるな」

「私達はタマモさんを起こしてからゆっくりと行きますので」

「……ま、いいけどな」

別にいつでもどこでもついてこいって言うてるわけでもなし。

あのバカ狐は寝起きが悪いからな。しっかり起こしてから来てくれ。

さて、会場に到着。そのまま控室へと入る。

俺は随分と早く着いたようだが、そのままミイラ姿のままで待つて皆が揃うのを待つ。

カエデも途中で控室へと入ってきたが、さすがに正体に気付いちゃいないようだ。ちらちらとこちらを気にしてはいるようだ。対戦相手だからだろう。

最後にネギ少年を先頭にした集団が到着し、主催者と司会者が説明を開始した。

反則の説明で呪文詠唱の禁止をもう一度言う当たり、要注意生徒と

いうのは本当らしい。

ま、詠唱なんてのは得意じゃないから使わないけどな。
自分の試合が来るまでは楽しませてもらおう。

さて第一試合。

タマモが間違えてぶつかっただとかいう犬耳少年、イヌガミコタロー
ってのと。

大人しそうな顔の女子生徒、サクラメイの対決だ。

正直言つて、コタロー少年の方が戦闘慣れしてそうだから勝つだろう
うと思つてたら、一瞬で決めて勝ってしまった。

少女がアーティファクトを呼びだして、それを使う前に左からの掌
底打ち上げの風圧だけで吹き飛ばした。

あのメイって子、泳げなかったんだな。

観客にはアッパーに見えてるらしいが、当ててないから怪我はない
だろう。

続く第二試合。

どっかで見た事あるようなフード男のクウネル・サンダースと。
なかなか個性的な顔をしたダイゴウインポチってやつとの対決だ。

まあ、確実にクウネルってのが勝つだろう。

雰囲気とか『あの人』そっくりだし。一晩寝たら思い出した。

ポチってのは始めは頑張つて攻めてたが、普通にカウンターを決め
られて倒れてしまった。

予想は変わらずクウネルの勝利。

正体まで予想通りとしたら今の俺でも勝てるかどうかからんぞ。
あの人のアーティファクト反則だし。
俺のアーティファクトはこの大会じゃ出せないし。
まあ、そんなことより今は目の前の相手に目を向けなきゃな。

|| || || || ||

長瀬楓は微妙な胸騒ぎを覚えていた。

なんとなく似た響きのする名前を見たからだろうか、それともその
選手の包帯からのぞく髪の色が『思い人』に似ていたからか。

彼女にとつての『思い人』とは、幼いころに自分を鍛えてくれた人
物に他ならない。

しかし彼女は、数年前に『思い人』がこの地を去ってからずっと姿
を見ていないのだ。

そんな彼女が未だに思い続けている理由とは、自分の部屋に大切に
しまつてあるカードにあるのだが……

最近になって彼女は思い人が『魔法使い』かそれに準ずる何かなの
だろうと知った。

それには彼女が最近巻き込まれた事件で、魔法使いという存在を知
り、更に自分もこっそり持っているカードの正体を知ったからなの
であるが……そこは割愛しよう。

彼女なりにその包帯男が気になって探つたのだが、全く読めなかつ
た。

選手席に座つてじつと試合の方を眺めているだけだったのだ。

わかった事といえば、強いだろうという事だけである。

故に彼女は胸騒ぎを抑え込み、一切の油断なく試合開始に構えた。そして、司会である朝倉が開始の合図を告げた。

『それでは第三試合……Fight!』

開始と同時にアルス？が右腕を上げると楓のいた場所が爆発し、彼女の体が宙に吹き飛ばされて水に沈んだ。それを見てアルス？は困惑しながら腕を組んだ。クールな感じで泊ってはいるが、内心では、

（やつべ。加減、間違えたかもな……）

とか思ってたりする。

しかし、そんな心配は全く必要が無かった。

「いやーすごい威力と速度でござるなあ……ただ気を飛ばしたただでこの威力とは、恐れ入るでござるよ」

「っ！？」（気配が全く感じられなかっただと！？）

いつの間にやら4人に分身した楓がアルス？の周りを取り囲んでいたのだ。

そしてそのまま彼女が攻撃を仕掛けようとしたところで、アルス？が大量の気を纏って自分を中心に放出した。

掌から放つのを全身から放つのに変えたただだが、そのような手段で来るとは想像していなかった楓が吹き飛んだ。

しかし吹き飛ぶ途中で体勢を立て直して、そのまま舞台に着地する。

4人で囲もうとした場所から、距離だけが遠のいた形だ。

（やるじゃねーか）

そのままアルス？が両手を上げて構えをとり、そこに楓が4方から飛び込んだ。

アルス？は両腕と片足で楓の攻撃を受け流し、上半身を逸らして攻撃をかわした。

そのまま両腕で攻撃を続ける分身を二体弾き飛ばし、右足でもう一体を蹴り飛ばす。

そして残った楓の本体に向き直って距離を詰めようとし、トンと背中中に手を添えられた。

「拙者も、この密度の分身は4体が限度でござる」

「ぬ……」

そして左手を添えられたまま、楓は気を込めた右腕を叩きつけた。

『これは凄まじい！　なにが起きたかはわかりませんが、凄まじい攻防の末に楓選手がアルス選手を地面に叩きつけました！』

——その頃、選手席。

「楓君、本当に強いね」（アリウスが一撃もらってるよ。手加減してるのもあるんだろうけど）」

いつもどおりに煙草を吸いながら、内心ではかなり感心しているタカミチ。

そんなタカミチから離れたところでは学生組が批評中。

「楓姉ちゃんもすごいけど相手の変なのもやるな」

「そうですね。楓を相手にあそこまであしらってしまえるとは……不意打ちにも反応していましたし」

「あのミイラ、たぶんまだやられてないアルヨ。……おそらく楓よりも強いアル」

「あの楓さんより……」

そして謎のフード男のクウネル・サンダース。

「フフ……あれはアリウス君ですか。ヘタな変装をしたものですね。しかし、このまま行くと私の相手は……」

フードの奥で微笑を浮かべ、彼は己の計画について考えるのだった。

「手ごたえはあったでござるが……しかし、今の攻撃が効いたかどうか……」

楓は己の叩きつけた相手の方向を見ながら呟く。
命中したという手ごたえは確かにあった。しかし、ダメージが通ったかどうか。

そして煙の向こうから、上半身の包帯が若干剥がれてはいるものの、平然と歩いてくる男の姿が見えた。

「やはり、ほとんどダメージは無しでござるか」

（いやいや、結構びっくりしたんだけどな。真面目に）

「少しは反応してくれると嬉しいんでござるがなあ……」

「それはすまないな」

「いやゝ、本当に反応してくれるとは思わなかったでござるよ（昔に聞いた声に似ているような気がするでござる）」

アルス？は試合開始時と同じように腕を組み、楓と相對する。
そしてこう言った。

「残り五分まで耐えてみる。そうすれば、包帯を取ってやる」

「……どういうことでござるか？」

「秘密だ（ちょっとしたサプライズだよ。カエデが思った以上に強かったからな）」

所詮行き当たりばったりな彼の頭の中には、顔バレとかそういう考えはない。

ついでに言うなら、バレたら逃げればいいのだから。

そしてアルス？がついに手加減をやめた。

|| || || || ||

いや、やっぱり楓はすごい奴だった。

俺が手加減をやめても大丈夫だと思えるくらいに強くなっていた。
だから俺はサプライズをすることに決めた。
残り5分になったら感動的な再開と行こうじゃないか。

(というわけでガンガン行くぜ)

全身に『狗神』を纏って楓を吹き飛ばし、追撃を加える。
すると、空中で受け身を取ってそのまま分身してこちらへと瞬動をしてきた。

『虚空瞬動』まで使えるとは、面白過ぎるね。
フレリア並みに才能がある。いや、むしろあいつ以上か？

そのまま複数の楓の分身体を弾き飛ばして、本体に向けて気弾を飛ばす。

あちらも多数の分身が同時に気を放ってくるが、そんなしょぼい攻撃じゃ通らないぜ？

まあ、包帯はところどころちぎれてるが、顔さえ隠れてりや問題ないだろ。

異常な速度で拳を振るい続け、向かってくるすべての物を弾き飛ばして楓の本体に近付いて、上空へと蹴りあげる。
なおも体勢を立て直す楓にちょっと感動しながら、自らも上空へと向かう。

そろそろ１０分くらいだな。
一発大技を出してみるとしよう。

俺は楓の右腕を左手でつかんだ。

「防いでみる」

そして楓に聞こえるようにと言って、そのまま右の拳を振りかぶる。

『グレン・インパクト（１０分の１）』

師匠の技をそのままパクったが、狗蓮を使うのは俺のオリジナルだから問題ないだろう。

そしてその技が楓にヒットし、その場が爆発の煙に包まれた

|| || || || ||

楓は最後の１撃をうけてもなんとか立っていた。
最後の１撃が放たれる直前、フリーだったで左手にを攻撃し、体をずらした上で攻撃を少しだけ受け流す事に成功したのだ。
だが、半分近くはダメージをそのまま貰ってしまった為、すぐに動

くことはできない状態だった。

そこへ、上半身の包帯をほとんど吹き飛ばした状態のアルス？が現れた。

「少々やり過ぎちまつたかもな」

「おや、心配してくれるのでござるか？」

「そりゃあな。一番初めの弟子だし（フレイアは妹分だから違うしな）」

「は……？」

「おお、そっぴやまだ包帯取れてなかったな。爆発で吹っ飛んだと思っただが」

そう言つて未だ煙が立ち込める中、アルス？は包帯を取り除いていく。

ビリビリと無理矢理に破つて投げ捨てていき、その素顔があらわになった。

「よう、弟子一号。久しぶりだな。元気にしてたか？」

「し、し、師匠！？」

「名前で呼んでくれてかまわねえぞ？」

そう言つてにやりと笑う男の顔は、確かに昔見た『思ひ人』の顔であつた。

|| || || || ||

『おーっと、煙が晴れてきました！ 長瀬選手が膝をつき、そしていつのまにかアルス選手の包帯が取れています！ 意外とイケメンです！ なんで包帯で隠してたんでしょうか！』

「意外とは余計だっつーの」

俺はたぶんイケメンのはずだぞ？

「ワイルド系です！」ってフレイアが言ってたし……いや、あいつの言葉は当てにならないな。

うん、深く考えるのはやめよう。

「なぜこんなところに師匠が……」

「まあ、細かい事は気にすんなよカエデ。こういつのはあれだ。感動の再会って言うんだろ？」

「いや、知らないでござるが……」

「ともかくだ。時間も少ないしな。師匠として弟子に稽古をつけてやるんだ。もう少し頑張ってみろよ」

「……承知でござる」

おう、それでこそカエデだ。

『おっと、長瀬選手立ち上がった！　まだやれるようですよ！』

おう、司会者。

こいつは意外と根性あるからな

これくらいじゃあへたり込むような奴じゃないさ。

「さあ来いよカエデ。最終ラウンドだ」

「応！」

第二十四話 知らず知らずに師弟戦（後書き）

あとがき

戦闘描写、拙い物でしたがどうだったでしょう。

というか、『偽名？ そんなもん無かったんや！』みたいになつてますがね。

こうにでもしないと丸くおさまらなかつたんだ。仕方ないだろう。

立場とかで色々と考えて性格とかも吟味した結果、アリウスならここで弟子とのサプライズを選ぶんです。

熱い男で、何より適当ですから。

第二十五話 試合が終わって……（前書き）

書き始めると止まらなくなって徹夜してしまう。
もう三日ほど……カップラーメンしか食ってないんだ。

第二十五話 試合が終わって……

——観客席にて

「マスター、結局包帯取るんなら始めからしなければいいのに」

「え？ あれって何か意味あったのか？ あたしはアリウスがふざけてるだけかと思ったんだけど」

「それもある」

その横の横の横の方にある解説席

「いやーこんなに早くこんなハイレベルな試合が見られるなんて思ってたんですけどよ」

（さすがは高畑先生のご友人ということでしょうか……）

茶々丸はロボだからすぐに変装を見破ってたりした。

そのすぐ近くの眼鏡少女、長谷川千雨は盛大に愚痴っていた。

「いや、分身とか色々とおかしいだろ。なんで誰もおかしいと思わないんだ？」

気にしたところで無駄である。

そして選手席。

「あの、楓さんがすごく驚いてるように見えたのは気のせいですか？」

「知り合い……かもしれないね」

「楓姉ちゃんの知り合いやったら強いのも納得やけど」

「手合わせをお願いしたいアルネ」

ちよつと離れたところのタカミチ。

（そう言えば昔に山で……そりゃ驚くのも仕方ないかな）

自分の親友の無神経ぶりに少しため息をついていた。

|| || || || ||

残りの五分。

全力で来るようにカエデを促して拳を構える。

かなり完成度がほぼ最高レベルの瞬動で向かってくるカエデにカウンターの拳をあわせる。

さっきはカエデがここまでできるとは思ってたから油断したが、もうしないぞ。

一応、結婚した時に解禁された闘技大会に出場したり、各地の遺跡やダンジョンに潜ったりで、超高速な動きをする相手なども経験済みなのだ。

一番いい例は師匠なんだろうが。

イチャイチャしてたら喧嘩になったりするし。

カウンターを予測していたらしいカエデが、その拳を右掌で受け止めながら後ろへ飛び退る。

飛び退りつつ放った気弾を弾き、左の腕を振って狗神を奔らせる。

カエデは俺が放った狗神の半分を新たにはなった気弾で吹き飛ばし、残りの狗神を腕を交差して受け止めた。

防御に移って動きを止めたところで、カエデの後方まで瞬動で移動し、カエデを舞台の周りの水の中へと叩きつける。

「はっは。さっさと出てこいよ」

でなきゃあ追いかけて水の中に入らなきゃあいけなくなる。

上半身は既に包帯が取れて裸だが、ズボンまで濡れるのは嫌だから。

……まさか、気絶とかしてないよな？

「む？」

「ふっ！」

水の中で瞬動でもやったのか、カエデが拳を構えて飛び出してきた。避けられなかったので気を集中して腹で受け止める。

「……それはちょっと反則でござるよ」

「まあ、要努力ってとこだな」

「む、まだまだでござるよ」

そう言うならもつと頑張つて見せるんだな。

虚空瞬動を連続で行つて舞台上数メートルでカエデと何度も交差する。

やっぱり昔から知つてる相手が強くなっていると面白いな。

そいつと戦うのはもつと面白い。

カエデも昔はあんなにちっこかったのになあ……

本気じゃないとはいえこういう試合での手加減抜きでここまで頑張れるなんて面白過ぎる。

数度の交差を経てもまだ大丈夫そうだ。

やっぱりいいな。うん。

でもまあ……そろそろ時間があるし、とっておきで終わらせてやろう。

師匠が弟子に負けるわけにもいかないしな？

っ！わけでちよいと本気出すぜ？

「セイツ！」

「ぐっ……」

交差した瞬間に狗神で絡め取つて上空に投げ飛ばす。

気を渦のように掌から発してそれを両手で球体を掴むように腰だめ

で構える。

そしてカエデが投げられた状態から立ち直ってのを見てから両手を突き出す。

「くらえ……必殺！ 旋風氣！」

気の光が渦を巻いて炸裂し、カエデに殺到する。

……ハイテンションだからノリでやっちまったが、大丈夫だよな？

「選手席からの目が痛いし……」

タカミチまでやれやれって感じに首振ってやがる。

あのロリコン野郎が。

……つて、やべえ。カエデが落っこちてきた。

が、舞台にしっかりと着地にしたから大丈夫だろう。

「ボロボロだな、大丈夫か？」

「心配は無用でござる。いやはや……師匠がここまで強いとは思わなかったでござるよ」

「まあ、お前の師匠だからってことにしといてくれや」

「そうでござるな。さすがは師匠でござる」

膝について言うカエデだが、確かにそこまでの重傷じゃないな。控え目だったし、防御する猶予もあったからか。

「それで、降参か？ カエデ？」

「……あい。拙者の負けでござる」

『ここで長瀬選手ギブアップ！　しかしそれもしかたないでしょう！　さっきのなんか物凄い攻撃で体中ボロボロです！　第二回戦に進むのはアルス選手です！』

「ところでアルスってなんでござるか？」

「ああ、そっぴやそっぴちで登録してたな。偽名だよ偽名。ちよいと有名になり過ぎたからあっちの方でもこの名前で大会に出たりしてるんだよ」

「なるほど……」

「そら、立てるか？」

俺はそう言っつて、未だに膝をついているカエデに手を差し出す。

「いや、一人で立てるでござるよ……」

「遠慮すんな……よつと」

立ち上がるうとしているカエデの腕をつかんで引つ張り上げる。

「おつと………必要ないでござるのに」

「うはは。まあ、そう言っつな。師匠としちゃ、十分強くなつてくれた弟子に大喜びつてとこなんだからよ」

そう言っつて俺は大笑いする。

いや、色々変わったようだが、カエデの表情の変化具合などが変わっていないのが面白い。

弟子って言ったら微妙に顔が変化したぞ。さっきの試合の時もそうだったよな。うん。

「とりあえず選手席に戻るぞ。ここにいちや邪魔だからな」

「了解でござる」

俺とカエデは選手席に戻った。

色々と積もる話もあったし、友達の方にも若干興味があったからだ。

「へ。お前がネギだろ？」

「え？ あの、僕を知ってるんですか？」

「いや、まあ一応な？」

そのままネギ少年の体を触ってみる。

まあ、そこそこ鍛えてはあるようだ。10歳なら上出来だろう。

「うむ、精進しろ少年」

「あ、はい。アルスさん、ですよね？」

「本名はアリウスって言うんだよ。実を言うとタカミチの親友だっ

たりする」

「そうだったんですか!？」

ヤケに驚く少年。

そして周りも驚いてるけどそんなに意外か？

「ところでカエデ、ここにいるのってほとんどお前と同じ年だよな？」

「そうでござるよ?」

「やけに身長にばらつきがあるな……そういうもんなのか？」

その褐色で背の高い奴とか、逆に褐色で背の高さが微妙な奴とか。むしろ、カエデと褐色の背が高い奴が規格外なのか？

「えっと、高畑先生のお友達なんですよね？」

「親友だぜ。えっと、確かアスナだったけ？」

「なんで名前知ってるんですか!？」

「いや、結構前に学園に来た時に会ってるからな。覚えてない？」

「……全然覚えてない。こんな面白そうな人なら覚えてそうなんだけど……」

カエデに会ったのはそんな時だから覚えてると思ったんだけど……まあ、会った回数も多いから仕方あるまい。

だからそんなに頭を振って思い出そうとせんでもいいぞ。

「アルス殿でよろしい力？」

「なんだ中国少女？ 名前は……あつと？」

「古菲アル」

「おう、古菲だな。カエデの友達だな？ よろしく」

「こちらこそアルネ。あと、今度手合わせをお願いしたいアル」

「あゝ、今度な。次、試合だろ？ 自分のできる事はガンガン出してけよ。対戦相手の褐色のつば娘はかなり強いと思うぞ」

「真名の強さは十分にわかってるアルヨ。でも、忠告はしっかりと受け取っておくアル」

うむ、礼儀正しいじゃないか。

さっきはなんか面白そうな雰囲気したけど、気のせいだったか？

「高畑先生のお友達ならあの強さも納得ですね」

「せやけど兄ちゃん、なんであんな恰好してたん？ どうせ取るなら意味ないやん」

「初めは理由あったんだけどな。やっぱりアレだ。子供の頃に会ったきりの奴と久々に会ったらノリで再会したくなるだろ？」

「……すごい方なのかわからなくなってきました」

「そーいうもんなんかな……どうなんやろ……」

少年、それは年食ってない奴が考える事じゃないぞ。
せめて後5、6年は年取ってから考える。

「っていつかさっきから楓ちゃんが師匠っていつてるのはなんなの？」

「そりゃあ俺がこいつの師匠だからに決まってるだろうが、なあ？」

「……師匠。あんまり頭を叩かないでほしいでござる」

「そら悪かったな」

ポンポンとあたまを叩いてやったが、あんまりお気に召さなかったらしい。

なんか周りがものすごく珍しい物を見るような眼で見てるが、気のせいじゃないなこれは。

「あっはっは。楓のそういう顔は初めて見るな。すごく興味深い」

「楓姉ちゃんの師匠やったんか」。そら強いに決まってるわ」

「子供の頃の楓ちゃんの師匠か」。それなら楓ちゃんがこんな顔するのも納得よね」

なんかさっきの褐色のつば娘やらコタロー少年やらアスナとかが力エデの顔がどうか言ってる。

「……なあ、俺には顔が見えないが、こいつ一体どんな顔してるんだ？」

「師匠には関係ないでござる」

いいじゃないか。少しくらい教えてくれても。

「こいつと会ったのは森の中でな。なんとも間抜けな事にカエデの奴って痛いなオイ」

「師匠が悪いのでござるよ」

「怒った顔も可愛いもんだ。慣れっこだね。俺はお前をこんなにちつこい頃から知ってるんだぜ？」

「……ずるいでござるよ」

大人ってのはずるいもんなのだ。うわははは。
さて、周りの奴らもいい加減こつち見るのやめろよ。
次の試合はどうした？

「しばらくはここで俺も試合見るか。面白そうだし」

「余計なことと言わないよう頼むでござる」

「善処しよう」

じゃあ、さっきの古菲と褐色のつば娘の試合だな。
さて、どうなる？

第二十五話 試合が終わって……（後書き）

あとがき

ここでアリウスが勝つことは後のクウネル戦の壮絶さをアップさせるための伏線です。（たぶん）

旋風気↓扇風機の当て字ですよ。

すごい昔の話だからこっさり書く。

『扇死ね』『ジエレミア×ヴィレッタが良かった』『扇死ね』

友達とギアスを全部通して見たんだ。そしたらどうにもこうにも。

今回、ミスがあつたら全部扇のせいですから。

皆さんも『扇死ね』と言ってください。

第二十六話 がんばれ少年（前書き）

書くのが大変だった。すごく。

第二十六話　がんばれ少年

「ところでそのオコジヨ」

「え？　俺っちに何か用ツスカ？」

「なんか、俺の正体を知ってそんな気がするけど、今は黙っててくれな？」

「え！？」

懐から昔にしたカエデとの仮契約カードを少し見せる。
絵柄はカエデがまだちっこかった時の物だ。

「色々とまずいし、自分で話したいからな」

「……わかったツスよ兄さん。絶対に言わないでおくツス」

「助かるよ」

もし言うんならタマモあたりに食べさせ……いや、鍋に入れなきゃならないところだった。

俺の終了後。

選手席にて次の試合を見物する。

クーフェイとタツミヤマナの試合。

マナって奴の方は雰囲気が違う、一番わかりやすい感覚なら傭兵の奴らか。

わかってたけど、あいつ相当強いぞ。

そして試合開始直後、マナが手の内からコインを弾き飛ばしてクーフェイを吹っ飛ばした。

……解説によると、羅漢銭というらしい。

上手くやりや気で応用できるかもな。小さな気弾を飛ばす感じで。

その後試合の経過は結構なものだった。

マナだけではなくクーフェイもなかなかの達人であつたようで、一度は連射されるコインをかわして接近することに成功した。

しかし、本当の強者にとっては距離はたいして関係ない。

だいたいがそういうものなのだ。

マナが接近された状態から見事に反撃し、クーフェイが舞台に倒れる。

しかしまだ終わつたわけではなかった。

「布の槍とは面白いもんを見せてくれるね」

旧世界にはなかなか変わった武術もあるようだ。

マナの腕を布で絡み取ったが、コインの連射で布を切断。

そのままコインの連射と布の槍で攻防を続け、左腕を犠牲にマナの体勢を崩して引き寄せる。

そのまま右腕に気を溜めて……あリゃなんだ？

外部から直接気を当てるんじゃないくて、接触した状態から防御無視の気の放射か？

さすがに耐えられなかったのかマナが崩れ落ちる。

勝者はクーフェイ。彼我の実力差から見ればかなり驚きだ。

まあ、限定されたフィールドだからこそかもしれないが、健闘をたたえるべきだろう。

……でも、次の試合はだめそうだな。左腕折れてるし。

俺が治癒術が得意ならよかったんだけどな……はあ。

二回戦目は試合なしかよ、俺。

つまんねえなあ……

エクセルかアリスに頼めば骨折くらいは何とかなると思うが……急に治ったら変だよな。
やれやれだぜ。

そして次の第五試合。

あのロボ男と（たぶん）魔法使いな女の試合。

ロボはタナカ、魔法使いの方はタカネというらしい。

「で、カエデ？」

「なんでござるか？」

「あれって強いのか？」

「どっちのことでもござるか？」

「あのタカネって奴の方」

「拙者は知らないでござる」

別に友達でもないから知らんということだろう。
うむ、まあ仕方ないな。

「じゃあ、そっちのメイってやつ」

「はいっ!？」

「タカネってのはどうなんだ？ 魔法使いとしては」

戦士って感じはしないからよくわからん。

魔法使いってのは戦いの経験が無くても魔法が上手く使えればそこそこ強いからな。

まあ、それだと本当に強い奴には勝てんのだが。

「お姉様は強いですよ。影魔法が……」

「ああ、もういい。影なら使いやすいしな」

「あ、そうですか……（さっき聞こえたアリウスってどっかで聞いたことあるような気が……気のせいですね）」

影魔法は簡単な呪文でも攻撃と防御のバランスが取れてるからなかなか強いんだよな。

なんだっけ？ カゲ……カゲタ……なんたらってのがずっと前に大会にいて強かった気がする。

と、そんなこと考えてたらいつの間にかタカネつてのが捕まっていた。

ロケットパンチか。やっぱり旧世界のロボットは面白いな。
こんどは口からビームか！？

「……ん？ あれ、服が燃えてねえか？

「師匠、目を閉じるでござる」

「いやでもだな、試合の勝敗が……」

「いいから閉じるでござる！」

「了解！」

俺は力エデに怒鳴られて眼をつぶった。

……いや、なんかすごい迫力だったからつい。

そのあと、悲鳴と共に何かをぶん殴るような『ゴッ！』という音がして、勝敗が告げられた。

「タカネつてのが勝ったのか、もう眼を開けてもいいいよな？」

「駄目でござるー！」

「痛っ！？　おい、目を叩くな！」

バチって感じで瞼の上から目を叩かれた！
試合終わっただから目を開けても構わないだろう普通！

「まだ服を着ていないでござる」

「へへへわかったよ。閉じてますよつと」

……あれ？

服着てないってことは観客にモロ見えなんじゃないかそれ？

まあ、知り合いつてわけじゃないからいいが。

うん、『もうお嫁に行けない』とか聞こえたけど気のせいだろう。

……さて、それでは本日のメイン試合。

タカミチとネギ少年の試合だ。

もうすぐ試合というところでタカミチを見つけたので話しかける。

「タカミチ、ヤケに楽しそうにしてるじゃん。そんなにネギ少年と戦いたかったのか？」

「もちろんだよ。ネギ君はこの麻帆良に来てから随分と成長した。それを確かめたいしね」

「それでも十分お前の方が強いから勝負にならんと思うんだがなあ……」

「大会ルールから出ない程度の本気しか出せないからね。正直、ネギ君が僕の想像以上の力を見せてくれるんじゃないかと思ってるんだよ」

「まあ、どっちも頑張れとしか言えないね」

「あはは。それじゃあ行ってくるよ」

俺は選手席に戻った。

舞台へとネギ少年とタカミチが並んででてきた。

ネギ少年の方はやたらにガツガチに緊張している。

……大丈夫か？

俺がそう考えて舞台の方を見ていると、後ろから話しかけられた。

「お前もここにいたのか、アリウス」

「お？　なんだエヴァか。あれ大丈夫なのか？　タカミチ相手に」

「問題ない。むしろここが坊やの正念場というところだ」

「……ま、お前が言うならそうなんだろ」

俺はネギ少年の事はあんまり知らないからな。

この前タカミチと話した限りじゃエヴァがネギ少年の師匠らしいし、全部任せちまおう。

横の力エデたちの話を聞いてみると、やっぱりネギ少年が厳しいって事で一致してるらしい。

……でもあいつ、お人好しだからな。ネギ少年が瞬動を少し習ったくらいじゃ崩されねーよな？

タカミチが位置についてポケットに手を入れて居合拳の構えをとる。そして司会の少女が試合開始を告げた。

先制したのはネギ少年。

顎を守りつつ瞬動でタカミチの後ろに回り込んだ。

おまけにもう一回瞬動でタカミチの普通のパンチをかわしてもう一度後ろに。

そこからは妙な動きの武術でタカミチを押していく。

前に聞いたことがある。たぶん中国武術って奴だろう。

上手くフェイントを取り入れた多彩な動きでタカミチに攻撃していく。

……タカミチが瞬動を連発しながら居合拳撃てばネギ少年に勝ち目はないが、あいつは本気出さないだろうしな。舞台が結構せまいってのもあるが。

さて、ネギ少年はあいつを接近戦のまま押し切れるのか？

「……あれは魔法の矢か」

無詠唱で3本拳に乘せて……でもそれくらいじゃな……

拳がタカミチにクリーンヒットして吹っ飛んだ。

吹っ飛んだので派手に見えるが、魔法の矢3本のうち2本もレジストされている。

いや、3本全部が当たったとしても駄目だと思うが……

「やっぱダメか」

予想通り、タカミチの防御を抜けなかったようだ。

平然とした顔で水の上をタカミチが歩いてくる。

……実力を押さえる前に水の上歩くとかやめろよな。俺はどうでもいいけど、お前が言ってたことじゃねーか。

さて、舞台に戻ってきたタカミチに弾き飛ばされたネギ少年は、タカミチの居合拳の範囲に入ってしまった。

打開しようと再度瞬動で近付こうとするが、軽くあしらわれる。

師匠とか俺とかなら、居合拳の方は無視して大きいだけかわすようにするがネギ少年には無理だろう。

それができるのは師匠と俺の鋼の肉体があるからだしな。

……ネギ少年も凄いではいるがいつまで持たせられるかね。

「っておいおいおい。アレやる気かよ」

「む……やはりアレを出す気か」

俺が気付いたと同時にエヴァも気づいた。

タカミチは咸卦法を使う気だ。

というかもう準備に入って……あゝあ。

そして威力のパフォーマンスに豪殺居合拳を舞台にドカン。

見事に大穴が開いた。穴くらは力エデとの試合で俺も作ったけどさ。

「どどどーすんのよーっ！ 本気の高畑先生があんなに強いなんて！」

「落ちて着け姉ちゃん冷静によく見ろ！ どんな技にも弱点はある！」

……あいつ、まだまだ全然本気じゃねーぞ。一応言っとくけど。その犬少年も、近接距離で使えない弱点なんて今更過ぎる事言っていないでもっとわかりやすい弱点を探してやれ。

まあ、そんな都合のいいもんがあったら苦労しないけどな。

「おまけにあの威力や！ タカミチさん観客を気にして真横に打ってへんやろ。今までの見えないパンチよりも扱い易い！ むしろチヤンスや！」

「……確かにそうでござるが……」

カエデがそう言った側から試合の方では居合拳をフェイントにして豪殺居合拳を放つ。

こうすれば、豪殺居合拳のデメリットを帳消しにする事が出来る。

「あ、やべえ。こりゃ負けだな」

「師匠。あまりそのようなことは……」

「すまん。だが……隙ができた。終わったな」

「っ！？」

ゴン！という音と共に、豪殺居合拳によってネギ少年が舞台に叩きつけられた。

……終わったかな？ 直撃したが、まだ立てるか？

司会は既にタカミチの勝ちだと決めつけているが……

「ネギーーッ！ このバカネギ！ 何やってんのよ立ちなさいよーッ！」

「……アスナちゃんは元気だなあ」

会場中に響き渡る大声で応援するとか、本当に元気だな。

「ネギ坊主ーッ！ まだイケルアル！」

「ネギ先生！」

と思ったら選手席のネギ少年の知り合いは全員が大声を出していた。
あの子もよっぽど慕われているらしい。

多くの人に慕われるところはナギさんそっくりだな。

「カエデ、お前は大声で叫んだりしないのか？」

「キャラじゃないでござる」

「おいおい」

「冗談でござる。ネギ坊主なら大丈夫だと思っているからでござる
よ」

俺としちゃ親友であるタカミチの強さも信じたいけど、今回はかり
はネギ少年を応援しようかね。

「頑張れよ、少年」

「タカミチ！ 最後の勝負だ！」

「……………いいだろう！ 受けてたとうその勝負！ 次が最後の一撃だ！」

『おおーっと両者フィニッシュ宣言！ 確かに試合時間も既定の15分が近付いています』

立ち上がったネギ少年は、魔法の矢を唱えながら向かっていった一度は水の中に沈み、今度は何かを狙って正面对決を望んだ。

タカミチと正面对決をして勝つだけの自信があるということだろう。

どのような手であいつに立ち向かうのか、期待させてもらうぞ。

「魔法の矢を体に乗せて瞬動……豪殺居合拳を風障壁で防御、そのまま突進か。だが、それくらいではタカミチは倒せないぞ」

煙で何も見えないが、今では倒せない事はわかる。

この状態からどうやってあいつを……？

「遅延呪文か……っ！ なるほど、復活時の突進の時に……」

魔法の矢九本を乗せた、ネギ少年の親譲りの魔力を全開にした拳。それが、激しい光を伴ってタカミチへと突き刺さった。

そして……

「君の勝ちだ。ネギ君」

タカミチが敗北を認め、ネギ少年が勝ち上がった。

選手席からエヴァたちがネギ少年を追って言ってしまったので暇だ。
俺は横に残っていた力エデに話しかけた。

「ネギ少年もやるな。タカミチ相手によく頑張った」

「そうでござろう？ 来たばかりのころと比べれば本当に成長した
でござるよ」

「俺も、ネギ少年がもうちょい強くなったら戦ってみたいな。面白
そうだし」

「師匠らしいでござるよ」

そりやどうも。俺の事をよくわかってるな力エデ。

「次の試合はアスナちゃんとあのサイドポニーの子だろ？ お前か
ら見るとどうなんだ？」

「刹那はアスナの師でござるからな。実力は刹那の方が上でござる
よ」

「……そりや驚きだ」

「？ どうしてでござるか？」

「いや、気にしないでいい」

アスナちゃんが真面目に修行すりや相当強いはずなんだがな……
まあ、修行を始めた時期がつい最近なんだろう。

それが、そのセツナって子にもかなりの才能があるのか。

まあ、次の試合も楽しめそうだ。

第二十六話 がんばれ少年（後書き）

あとがき

ある程度のスピードでかつ飛ばしてます。
だって、アリウスもその場にいますしね。

テオドラが空気だ。

はやく魔法世界編まで行きたい。

第二十七話 第一試合終了（前書き）

早くVSアルビレオまで進めたい。
いよいよ12巻つてとこですね。
ロープのあの人が登場です。

第二十七話 第一試合終了

『みなさまお待たせしました!』

「……なあカエデ、お前の友達の趣味は変わってるな」

「いや、さすがに趣味ではなく朝倉の差し金だと思っでござるが……」

司会者の声と共に出てきたのはメイド服のセツナとアスナちゃん。よくわからんが、司会者曰く今大会の華であるらしい。つまり一回戦を勝ち進んだタカネとやは華ではないらしい。

「神楽坂明日菜がやる気のようにだがどういっつもりだ？ バカかあの女は？」

「おいエヴァ、真っ向から否定しちゃダメだろう」

「言っているアリウス、あのバカと刹那では勝負にもならん。わかつたな刹那、ボコボコにしてやれ」

「い、いえそれは……」

セツナの方はエヴァに無茶言われて困ってる感じが。さすがに師匠やってるなら弟子をボコボコにしろって言われてもでkindだろう。

「確かにアスナでは無理アルかなー」

「そうでござるなあ……」

「実際の強さを知らん俺には何も言えんが、たぶんそうなんだろうな」

「フフ……そうとも限りませんよ」

今なんかすごい聞き覚えのある声がした気がする。

その場の全員が一斉にそちらを向けば、フード男のクウネル・サンダース。

何をするかと思えば、いきなりアスナちゃんの頭を掴んでわしゃわしゃと髪をかき回した。

「ちよちよちよつとイキナリ何するんですかー！？」

「……なっ！？ 貴様はまさか……？」

イキナリの行動にビックリするアスナちゃん。

そしてクウネルを近くで見たエヴァがその正体に気付く。

気付くのが遅いと思うけど、そんなにたくさんあったわけでもないから仕方ないかね。

「フフ……改めて間近で見ても信じられませんよアスナさん。人形のようなだったあなだがこんな元気で快活な少女に成長してしまうとは……」

そんなことよりは俺はあんたがこんな大会に出てることが疑問なん

だけどな！

「何も考えず、自分を無にしてみなさいアスナさん。あなたにはできるはずです」

「……あ、あんた、誰……？」

アスナちゃんが疑問に思うのも無理はないとして……

自分を無にするのは咸卦法の基本理論の一つじゃなかったけ？
使わないから詳しくはわからんけども。

まああのお姫さんなら使えてもおかしくないか。

「オ、オイ貴様！　なぜ貴様が今ここにいる！？　お前のことも散々探していたのだぞ！」

「いやエヴァよ、そんなこと言ってあの人が答えるわけ……やっぱな」

クウネルはくすりと笑って突然消えた。

どんな方法使ってるかはわからんが、あの人ならアリだろう。

「消えた！　何者アルか今の人！？」

「師匠、今の御仁は……」

「あの方は紅き翼の一人だよ」

「そう。つまり、奴はばーやの父親の友人の一人だ」

それを聞いてビックリする一堂。

まあナギさんがすげーってのは有名らしいから仕方ないか。その友人だな。

「んで、本当の名前は『アル——』」

「『クウネル・サンダース』で結構ですよ。トーナメント表通り『クウネル』と呼んでください」

「ぬおわ!？」

いきなり背後に現れたクウネル（仮）に俺は大袈裟に驚きの声を上げた。

「ふざけるな！ 貴様今までどこで油を売っていた！ それに貴様なぜ神楽坂明日菜について知っている!？」

「あれ？ 知らなかったのですか？ エヴァンジェリン、そうですかそれはそれは…… フフフフ」

あれ？ エヴァンジェリン知らなかったの？
俺ですら知ってるのに。

タカミチからのまた聞きのな部分も多いけどさ。
そこでクウネルから念話きた。

（アリウス君は知っているようですね）

（さすがの俺でもいろいろと話は聞いてますからね！）

（この場は黙っててくださいね？）

（はいはい。わかりましたよっと）

現在は知らせるつもりもないから黙ってるって事らしい。

「では……今しばらくはヒ・ミ・ツ。という事にしておきましょうか？」

「ぬぐっ」

エヴァが顔を歪ませてるのを見ると愉快だな。
なかなか新鮮だ。わはは。

「師匠」

「なんだ？」

「師匠は何か知っているのでは？」

「さうで。俺は難しいことはわからんよ」

「……師匠ならそう言っと思ったでござるよ」

まあそう言っな楓。

今はともかく試合を見守ろうじゃないか。

で、試合開始後。

「……十分に戦えてるな。実力差はそこまでじゃなかったのか？」

「いや……そんなことはないはずでござるが……」

楓も疑問を浮かべているようだ。

「というか、タカミチよりも密度が全然しょぼいから気付かなかったが、あれって咸卦法じゃね？」

「エヴァもそんなことやるとは思っていないから、アスナちゃんがしっかり戦えてることに怒鳴ってるけど。」

「フフフ。あれはアスナさんが元から持っている力ですよ」

「ぬぐっ貴様……」

「それよりもアリウス君、お元気そうで何よりですよ」

「そこで話しかけてくるんですかそうですか」

「ずっと昔に会ったきり、何年もあってませんからね」

「というか連絡を一度もしないあんたらが」

「確かに、君はそういう子でしたね」

「俺はもう子供じゃねーよ」

「ええい！ そんなことはどうでもいい！ 貴様さっきあの女に何かしたな！」

俺とクウネルが話してたらエヴァが割り込んできた。
まあそれは俺も気になってたのでついでに聞いところ。

「まさか、私は少しきつかけを与えただけですよ」

ということは元から咸卦法が使えたのを感じただけ思い出させたのか？
だとしたらタカミチがかわいそうだな。あんなに努力したつてのに。
まあ強さなら比較できないほどにタカミチの方が強いけど。

……まあクウネルとエヴァが何の賭けしようと興味ないから傍観しよう。

試合はなかなか白熱している。

技術面ではセツナの方が上なんだろうが、アスナちゃんは咸卦法で得た身体能力でそれを凌いでいる。

このまま凌いでいってもつまらんけどどうなることやら……
なにやら観客席のほうにいるらしいネギ少年に、アスナちゃんが愛の告白してるけど知ったこっちゃない。

と、そこでアスナから咸卦の気がフツと消え去った。

どうやらガス欠のようだ。

左手に魔力、右手に気……そんなことを呟きながら両手を合わせるアスナちゃん。

あんな簡単に咸卦法ができるの、たぶんアスナちゃんくらいだろう。
エヴァもギアース力言ってるように、咸卦法つてのはやたらに難しいからな。

雑念が多すぎたりふざけたりする俺やラカン師匠には向いてない技術だ。

……師匠ならできるような気もするけど、気と魔力のバランスが極端に気に偏ってるから無理だろう。

俺の場合は従者であるアリスたちからもらったりテオドラから魔力

をもらったりすれば可能かもしれないが……心を無にするのは無理だな。

再び咸卦の気を纏ったアスナちゃんとセツナがぶつかり合う。

飛んだり跳ねたりスカートの下が見えてるの気にしてないんだろうか。

……今感じた悪寒はいったいなんだろう。

「師匠、エヴァ殿とクウネル殿が何か話してるけどいいのでござるか？」

「ああ、俺は細かいことには興味ないからな。それよりあのセツナつてのは神鳴流だろ？ 奥義は使わないのか？」

「おそらく、まだ加減しているのでござろうが……そろそろ本気を出すようござるよ」

「お、そうかそうか」

まあ、無様に転ばされ解いて本気を出さないなんてのはダメダメだからな。

というか急にアスナちゃんの動きがよくなったりするのは何でだ？ たぶんクウネルがなんかやってんだと思うけど。

おや？ なにか様子が……

「おいおいおいアレはやばいんじゃないか？」

「な……何だあの剣は！？」

「いけません！」

何かアスナちゃんの雰囲気が変わったと思った瞬間に、手に持つハリセンが巨大な剣へと姿を変えた。

大会で刃物が禁止されてるとかじゃなく、あれはヤバイ。

神鳴流の奥義を受け止めて、獲物がデッキブラシとはいえ気で強化された物をガードしただけで真つ二つとかヤバ過ぎる。

しかもアレの場合単純な切れ味じゃなくて何か別の理由がありそうな気もする。

とにかくセツナってのがやばい……んだけども。

「おお、なんともないか。上手い投げ技だ」

力任せに振り下ろされた大剣をかわし、腕と足を相手の肩や膝に絡ませてそのまま回転して地面に叩きつける。

アスナちゃんの方はもうダウンだからこれでおしまいだろっ。

『なんの手品か神楽坂選手の手に巨大な剣が！ 判定員によればこれは本物！ せっかくの大奇術ですが、本大会では刃物の使用は禁止されています！』

「そっぴやそうだったけ？」

「そつでござるよ」

『よって、桜崎選手、勝利——！』

うむ。

なかなか見応えのある勝負ではあった。

ついでに言っと、横で騒ぐエヴァとクウネルの面白い姿が見れたので満足だ。

決して、クウネルが賭けとか言ってもどうせ意味ないんだろうとか、やたらと騒ぎまくるガキっぽいエヴァも面白いなあなんて思っちゃいない。

ああ思っていないとも。

賭けの内容に興味はないけど、俺の耳はいいから全部聞こえてたとかあるわけないだろ？

さて、クウネルからもたらされた情報。

それは彼が仮契約カードを持っているからこそ知ることができる情報だ。

『ナギは生きている』という情報。

……まあ俺とかタカミチとかは、というよりもナギさんをよく知っている人間はだ。

あの人がそう簡単に死ぬはずがないと、そう思ってるだろう。少なくとも俺はそう思ってる。

『それでは続きまして第八試合！ 『3D柔術』の使い手山下慶一選手対、麻帆中団碁部エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル選手！』

ところでエヴァンジェリンの雰囲気が変わってるのはともかくとしてだ。

相手のヤマシタケイイチ……どっかで見たことある気がする。確かにどっかで見たはずなんだが……うゝむ。

ここからは簡単な描写のみでお楽しみください

（外見で判断してはいけない。予選を勝ち抜いてきたのだ。ここは一つ慎重に……）

『それでは第八試合！ ファイト！』

司会者の朝倉が開始の宣言をした途端、山下の体は強く何かに縛られ、エヴァンジェリンのほうへと引き寄せられた。

それを彼が驚くまもなく、エヴァンジェリン自身が山下の方向へと素早く動いた。

そして山下がそれに対応するまもなく、エヴァンジェリンの拳が無防備な山下の腹へと吸い込まれた。

「ぐっ……くか……」

その攻撃で、山下は耐えられずに膝をついた。

「おや、まだ意識があったか。スマンな。一撃で終わらせるつもりだったのだが」

膝を突いて腹を押さえるにとどまった彼に、エヴァンジェリンの追撃が襲い掛かった。

小さな手で頭をつかまれ、一瞬で舞台に頭を叩きつけられる。

『一瞬でダウンを奪いましたエヴァンジェリン選手——！』

そして10カウントが数えられ、試合が終了した。

「 」「 」「 」

「 思い出した! 」

「 何がでござるか? 」

俺が大声で言うと、隣にいた楓が俺に聞いてきた。

それに対して俺はさっきから考えて思い出したことを答える。

「 いや、あのヤマシタとかいうのにいろいろ教えたことあるなって 」

「 …… 師匠、無責任でござるよ 」

なんか呆れたような目だな。 細めなのに。

「 いや、病弱少年があそこまで強くなれば十分だろ。 それに俺は責任はきっちり取る男だぞ 」

「 …… 師匠、その言葉を信じてるでござるよ 」

「 ? おう。 まかせとけ 」

頬を緩ませて、 一步こちらに近づいてきた楓にそう答えて、 俺は再び試合の舞台へと眼を向けた。

第一試合は全てが終了。 続いて第二試合。

現在はその試合の様子が映像として空中に映し出されている。
うむ。 やっぱり俺かっこいいな。 映像としてみるとまた違うもんだ。

第二試合の一回戦目はクウネルとコタロー。

正直言えば無茶無謀。実力に差がありすぎる。

俺もガチ勝負なら勝てるかもわからんけど、試合のルール内で破壊しないように最低限気をつけて戦うとなると、無理っぽい感じがする。

同じ狗族同士、がんばってもらいたいものだが……

「ま、根性しだいだな。久々に心が熱くなるものを見せてくれるといいが」

次の試合も楽しみだ。

おまけ

「うう…… なにか物凄く出遅れている気がするのじゃ〜!」

「私もお姉さま! せっかくこっちに帰ってるのにお兄様もいらっやいませんし!」

「妾は正室なのだぞ!? それなのにこんなにも出番がないのはなぜなんじゃー!」

「私だって結構優遇されてたと思っただけとアリアドネーにいる

んですよ！？ 外伝でも書いてほしいくらいですー！」

「アリス達が羨ましいのじゃ……」

「全くですわ……」

第二十七話 第一試合終了（後書き）

あとがき

伏線回収？

ハハハ。そんなものナイヨ。

元々病弱だった子が氣を使えるようになったってことだけで十分だ
と思ってください。

外伝……いやまあ、フレイアちゃんのアリアドネー日記みたいな感
じで行くかもね。

第二十八話 クウネル・サンダース（前書き）

60万アクセス達成。

100万アクセスまでには学園祭2日目は終わるはず。
いろいろとイベントがありますからね。

第二十八話 クウネル・サンダース

さて、第二回戦の一試合目。

楓がコタローに忠告してたので俺も言っておくことにする。

「おいコタローとやら」

「ん？ なんや兄ちゃん」

「一応言つとくけど、お前の対戦相手はかなり強いぞ」

「へっ！ そんなんわかつとるわ！ 楓姉ちゃんにも油断禁物って言われとるしな。兄ちゃんこそ準決勝で待つといてや！」

「……ま、格上だと考えて戦うように。それだけしか言えないな」

「おーきにな、兄ちゃん」

お礼を言われても困るんだがなあ……

コタローに勝ち目が全然ないからアドバイスできた気がしないし。あの人は完全な魔法使いタイプだけど、最強クラスになるとそついうのあんまり関係ないからな。

相手との力の差が大きすぎるほど、それが無意味になるし。

できればがんばってもらいたいが——さて。

試合は結局俺の予想通りとなった。

クウネルの勝利である。

試合開始直後の瞬動は見切られ、分身攻撃も意味を成さず、大技も効果なし。

まあ全く効果がないのは防御力とかじゃなくて別のタネがあると思うんだけど。

それで。

コタローが観客がいる中で獣化しかけたのを止めたのはいいけど、少々やりすぎだろと思う節もあるわけだ。

まあ俺は第二回戦の相手が怪我で戦えないので、次にはクウネルと戦うことになる。

あの人が相手だし、試合の中でできる範囲の本気は出させてもらおう。

そうでもしなきゃあ渡りあえんだろうし。

試合終了後、楓がコタローと話すことがあるというので、こっそりと後をつけることにした。

救護室ではコタローが寝ていて、目を覚まして自分が負けたということに気付くなり外へと駆け出していった。

楓がそれを追ったので俺も後を追う。

辿り着いたのは会場から離れた一際高い建物の上。

その端に座りこむコタローと、それに近づく楓。

俺は気付かれないように建物の陰に隠れることにした。そのまま耳

を立てて話を聞く。

話を聞けばコタローの悩みはこういったものらしい。

自分は弱い、だからネギ少年が自分のことを見てくれなくなるのではと。

正直言つて、あの真面目なネギ少年がそんなことするはないと思うが、問題はコタロー自信が自分が弱いと思い込み始めているところだろう。

クウネルも、もう少し考えて戦ってくればいいものを。

まあ、そういったスランプみたいなものは経験がある。

俺の場合は紅き翼といった強い連中ばかりが周りにいたから、余計にそう感じることもあった。

まあ自分が弱いからこそ強くなれると信じて疑わなかった結果、今の俺があるわけだが。

さて、楓がコタローに修行を一緒にしようと思ち掛けたので俺も出て行くとするか。

「待て！ 話は聞かせてもらったぞ！」

「……いつから聞いてたんや」

「初めからだ」

「さっきから師匠がいつ出てくるのかと思ってたでござるよ」

「やっぱばれてたか」

「当然でござる」

「兄ちゃんも何の用や。俺は話すことなんか無いで?」

そりゃそうだろう。

俺なんか突然現れたおっさ……じゃなくてお兄さんに違いないんだから。

「俺には用があるのさ。楓と修行するんだろう?」

「まだ決まったわけやない」

「だからこの俺様が楓共々お前の修行を見てやろつと思っただけだ
が」

「……兄ちゃんが?」

「師匠!? それはしばらくここに滞在するということでござるか
!?!」

疑わしげに聞いてくるコタローと、急に声を上げてこちらに詰め寄る楓。

とりあえず今はシリアスにいきたいので楓を押し退けて口を開く。

「まあそついうわけだ。お前はどつするコタロー。言っとくけど俺はめちやくちや強いし修行も結構厳しいぞ?」

「コタロー。拙者は師匠がいる間は師匠と修行を積もうと思つてござるよ。師匠が強いのはわかっていてござるつ?」

「そりゃそつやけど……」

「遠慮するなよ。自分と同じ奴に修行つけてもらえる機会なんてほとんど無いぜ？」

「……子供の頃は見なかった耳があるとか、拙者は突っ込まないでござるよ」

「わかった！ 楓姉ちゃんや兄ちゃんと修行する！ ……それでええやろ？」

「ああ。思い切りがいい奴は好きだぜ」

にしても俺は次にクウネルと当たるわけだよな。
非常にめんどくさいが、やらにやあなんのだよな。

条件付きとはいえあの人と戦えるんだから喜ばしいことではあるんだが。

「ちなみにコタロー、俺は次にお前の戦ったクウネルと戦うわけだが」

「ああ、そういえばそうやったな」

「師匠でもキツイでござるか？」

「あれはなー。うん。条件付きだしな。結構きつい。俺相手じゃ初めっから本気出してくると思うし」

「そうでござるか……」

「楓姉ちゃんに勝った兄ちゃんでも勝てないんか！？」

「言つとくけどな。会場じゃなかったら負ける気なんてしないからな！」

「……師匠、別にそこまでは言っていないでござるよ」

さて、コタローが元気を取り戻したところで会場に戻るとするか。
……そういや、あいつら会場に放っておいたけど大丈夫かな。

「俺は会場に戻るかね。お前らはどうする？」

「拙者も一緒に行くでござるよ。他の試合も気になるでござるしな」

「で？ コタローは？」

「……ちよつと頭冷やしてくから放っておいてや」

「まあ、そのほうがいいかもな。じゃあ行くぞ楓」

「了解でござる。コタローも落ち着いたら見に来るでござるよ」

「……わかつとるわ」

＝
＝
＝

「あ」

「どうしたでござるか?」

「いや、なんかな。第二回戦全部終わったみたいだぞ?」

「エヴァ殿の試合もでござるか? それは惜しいでござるなあ……」

「うゝむ。確かにな。まあ後で見る方法はあるから安心しとけ」

エクセルあたりが映像として残してそうだからな。

エヴァがどんなやり方で戦ったにせよ、結構興味があるのは確かだし。

「むう……一応聞いておくでござるが、それはどういった手段でござるか?」

「あ? 俺の連れが観客席あたりで魔法使って映像を残しといてくれるっつー感じたが……」

「……いや、師匠が鈍いのはわかってるでござるよ」

なんか楓がブツブツ言ってるけど気にしないでおこつ。何か考えることがあるんだろう。

「つと、次は俺の試合だったか?」

「忘れてたんでござるか?」

「いや、まあうん」

会場にいない間に他の試合が終わるなんて考えもしてなかったわけ

だが。

次はクウネルだったか。ちょいとばかり本気でやってやりますかね。

「っし！ 行ったるか」

「がんばるでござるよ」

「言われなくてもがんばるっつの」

さーで。どんな戦法で行きますかね。

「アリウスー！ 負けたら許さんぞー！」

……いや、観客の中からどこかの狐娘の声なんて聞こえなかったぞ。

『クウネル・サンダーズ選手対アルス・ウィダーツ選手！』

舞台に立ってクウネルと向かい合う。

「久しぶりですねえアリウス君。皇女様はお元気ですか？」

「元気すぎて困るくらいだ」

「フフ……いまだにお転婆というわけですか。夫婦仲はよろしいようですね」

「良すぎるくらいにね。ところで今までどこにいたんですか？」

「ここの地下ですよ。色々ありましてね」

「へへえ」

まあ、理由までは聞くこと無いな。
俺はそういうのには興味ないし。

「とりあえず、できるだけ全力で生かせてもらうぜ」

「ええ、あなたもずいぶん強くなったようですからね。私も楽しみです」

こうやって向かい合っていると気分が高揚してきた。

昔は俺が足元にも及ばなかった相手に認めてもらって、それと戦う
ということに俺は興奮していた。

さすがに周りの人が見ている中では獣化とか大威力の技は使えない
にしる全力で挑もう。

俺にはやっぱり、未だに子供心が残っているようだ。

『それでは準決勝 第十三試合…… Fight!!』

「強くなった君に免じてこちらも本気で……」

「シャアッ！」

「おっと危ない」

試合開始の宣言がされるなり、俺は瞬動を使って相手の頭上から踵落としを行う。

脳天直撃コースのそれは呆気なく回避された。そしてクウネルの代わりに俺の踵落としを受けた舞台がどうなったかというところ。

ズガン！という音と共に、舞台に半径3メートルほどの円形に穴ができた。

『これはあつ！？ ただの踵落として舞台に大穴が！ これがアルス選手の本気だというのかあ！（さよちゃんが言ってたけどいくらなんでも凄すぎでしょこの人〜！）』

「やっぱりアリウスさん強かったんだあ……」

視界の端っこに司会者の少女と一緒にいるさよが見えたけど、試合中なので無視をする。

今はそんなことを気にしている場合ではないのだ。

「ふむ……」

「ちっ！」

手を掲げて重力魔法を行使しようとするクウネルから瞬動で飛び退って虚空瞬動も交えて裏から急襲する。

しかし俺の右手はガツという音と共に結界によって防がれた。

「舐めんな！」

「む」

未だに結界に押し付けたままの拳から狗蓮を一気に打ち出して結界を無理矢理破壊。

そして左手によって思いっきりクウネルをぶん殴る。
が、全く手ごたえが無い。

「うわ面倒だなこれ」

「フフフ。本当に強くなりましたね」

「ツチ！？　ぶはっ！」

いきなり姿を消したと思ったら一瞬で横に現れ、重力魔法を乗せた掌底を思いっきり腹にぶち当てられた。

そのまま舞台へと叩きつけられるが、即座に跳ね起きる。

正直結構効いた。いや、まだまだ全然余裕で大丈夫だけでも。

いやそんなことよりもだ。

想像してはいたけどマジで厄介だぞこんにやろっ。

つかこの感覚はどうかで覚えがあるな。

まあ思いついたうちのどれかはわからんけど……

「本体持つてこないってのは卑怯すぎるだろうっ」

「ふむ。やはりバレましたか」

「皆と別れてからはずっと遺跡探検と拳闘大会出場ばかり繰り返してたもんでね」

「経験は十分というわけですか。さすがはアリウス君です」

「お褒めに預かりども」

くすくす笑うクウネルさんに軽く会釈して拳を構える。

……つかマジ卑怯くさいんだけどどうしようかねこれ。

「フフ……試合時間はまだまだありますよ。……それとも、諦めますか？」

「……ハ！　んなわけねえだろ！　行くぜっ！」

第二十八話 クウネル・サンダース（後書き）

あとがき

200行書いて酒飲んで残り100行かいた記憶が無い。
……うむ。

第二十九話 伝説は強し

無敵状態の実体ある幻を倒して勝利を得るにはどうすればいいか。
条件は、周りにいる観客に被害が及ばぬように完全な本気は出さない事と、その幻が自らと同じかそれ以上の戦闘力を持っているという事。

(さて……どうする?)

相手を押さえつけて大量の気で消し飛ばす……駄目だな。押さえつけても瞬間移動みたいに消えられる。

問答無用で大火力……その後ろにいる観客にまで被害が及ぶ、却下。せめてクウネルが自分の上にいれば空に向けて撃てるが。

結論……難しいこと考えるのが苦手な俺はとにかく戦ってみるしかない。

「うらあっ!」

「フフ……」

巨大な重力の球を思い切り殴り飛ばしてすぐさま瞬動。

思い切り気を込めてぶん殴るが、一瞬でその場から消え去って背後に現れた。

「……反則だコンチクショウ!」

「いえいえ、こちらが危なくなるような攻撃ですからね。避けなければ危ないですよ」

「もしかして褒めてる？」

「ええ、もちろんです」

「そりやどういたしまし、てえっ!？」

小さい重力の玉が無数に出現するのを大きく飛び上がって避ける。更に飛び上がった先に転移してきたクウネルの掌底にカウンターを合わせる。

「くっ」

「どわあっ!」

なんとかヒットさせられたらしいが、こちらも避けられずに舞台へと突っ込んだ。

思いつきり体がめり込んだが、そこまでのダメージはない。

俺はすぐに飛び起きて周りを探る。クウネルはどこだ。

「……驚きましたよ」

「ちっ、まだまだダメか」

平然と目の前に出現するクウネル。

やっぱりダメージなし。というか消えそうな気配がない。厄介な。

「いえいえ、そうでもありません」

「へ？」

「さっきは本当に危なかったですよ。危なくこの体が消し飛ばされそうでした」

「つまり、やっぱり俺も追いつけてきてるって事だな？」

「はい。ですから、これは貴方へのちょっとしたご褒美です」

……ご褒美？

なんかもう嫌な予感がしないんだが。

「私のアーティファクト、イノチノシヘンを知っているでしょう？」

「……アレ、まさか使うんですか？」

思わず敬語になってしまった。

というかアレ結構派手だけどそんなもん無視ってか！？

「すみませんね。私も決勝に行かなければならない理由がありますので」

「俺だってアンタっていう紅き翼のメンバーに勝ちたいっていう理由が……」

「ええ、わかってます。君の性格でしたらそういうでしょうね。だからこそ、ご褒美なのですよ——来れ（アデアット）」

少し離れた場所に立つクウネルの周りに、大量の本が現れた。

そして一冊の本を持ったクウネルが手に持っていた槲をを挟んで――
って待てよ。

もしや呼び出そうとしてるのって……

そしてそこに現れたのは、同じくフードをかぶっているが全く別人の英雄。

深くフードをかぶっているが、見間違えるはずもない。

あれは間違いなく、『ナギ・スプリングフィールド』だ。

「ご褒美……フハハ、やるしかないな」

師匠とはまた違ったプレッシャーだ。

が、別にそれは問題じゃない。

なんたつて俺は師匠にだって挑むつもりなのだ。

そつ、ここでへこたれてちゃダメなのだ。

もう戦えないと思っていた相手と戦える。

何故だか俺は、口の端から牙が見えるほどに笑っていた。

「まったく、最高のご褒美じゃないか」

俺は思わず呟いて拳を構える。

そして全速力で相手へと飛び掛った。

先制を食らわせようと右拳で思い切り殴ろうとし、超スピードでの蹴りで上空へ吹っ飛んだ。

すぐさま舞台に戻ろうとするが、すぐに上空までクウネル（ナギ）が追いついてきた。

そしてこつそりと呟かれる。

「彼の再生は僅か数分しかできません。その間にあなたを倒しますよ」

「……声だけナギさんで口調がそれだと気分最悪なんだが」

「おやおや、これは失礼」

目の前のクウネル（ナギ）に拳の先から巨大な気弾を撃ち放つ。

が、それ以上に巨大な魔法の矢の束をぶつけられて余波で吹き飛ばされる。

くつそマジで強い。

何度か交差を重ね、拳を交わす。それらの連撃を捌きつつ方向転換を繰り返して攻撃を繰り返す。

交差の果てに俺は吹き飛ばされ、足元に狗神を呼び出してなんとか体制を取り戻した。

すぐさまクウネル（ナギ）がこちらに近づいて放ってくる拳や蹴りをすべて相殺する。

蹴りを思いっきり放った後の衝撃で互いに吹き飛びつつ、すぐさま虚空瞬動で反転。

が、接近後の拳をふわりと避けられて思いっきり下へ蹴り落とされる。

そして……

「マジか」

落ちながら上を見上げれば、こちらに向かって思いっきり拳を振り

「出力では勝利できるまで強くなったんですね。こちらは無詠唱ですが」

「……じゃあ、俺の負けだ」

「おや、案外あっさりですね」

「うつせえ。まだまだ体力はバリバリ残ってるけど満足した。無詠唱相手にとはいえ、あの人相手に勝利できたしな」

「フフ……私には満足してないように見えますけどね」

「なんか、決勝でクウネルが何がやりたいのかもなんとなくわかったしな。邪魔はしないさ」

親子の再会とかそんな感じだろ？

まあ、ネギ君が準決勝で勝てただけだ。

「だいたい、俺は無詠唱とか関係ない師匠に勝たなきゃなんないんだ。無詠唱なんていうハンデを背負ったナギさんと戦っても意味ないだろ？」

「フフフ……言うようになりましたね」

「どっかの誰かのおかげですよ。司会者、俺の負けだ」

『激戦を繰り広げた両名でしたが、ここでアルス選手が自ら負けを宣言。クウネル選手の決勝戦進出が決定しました！』

「戦いがすごすぎて全然実況できなかったんですけどね」

（ちよつ、さよちゃん、それは言わないでよ！）

「アリウス君、伝言をお願いします。ネギ君に――と伝えてください」

「はいはい、わかりましたよ」

ともあれ、これで敗北か。

なんか楓には情けないとこ見せたかな。できれば勝ちたかったが、無理っぽいしな。

下手すれば師匠まで出してきそうだし。

あの攻撃に打ち勝てたからよしとしよう。

「アリウスー！　なぜ降参したんじゃー！　最後まで戦わんかー！」

にしても、タマモめ。

試合中ずっと叫んでいやがったのか？
後でお仕置きだな。

＝
＝
＝

「すまん。負けちゃった」

「いやいや、師匠がここまで強いとは思ってなかったでござるよ」

「……んだと？ 弱いつて思ってたのか？」

「いや、そういうわけでは……あいたたた！」

俺が不機嫌そうに楓にアイアンクローを食らわせていると、ネギ少年が駆け寄ってきた。

「あの、アリウスさん、あの人は……」

「おう、ちょっとした伝言があるぞネギ少年」

「え？」

「決勝で待つ、だとか。ま、準決勝もがんばれよ」

「……はい！」

うん。いい顔だ。

にしても、暇になっちまったな。

ネギ少年の試合は見るとして、この後どうすっかね。

「楓、この大会の後暇か？」

「とくに予定は入っていないでござる、が……」

「じゃあ一緒に回らないか？」

「へ？」

「祭りつてのは皆で楽しんだほうがいいだろ？ それに、久しぶりに会ったから色々と奢ってやるぜ？」

「も、もちろんでござる！ 一緒に！」

「おお。そんなに大声出さなくてもいいぞ」

ずずいと顔を近づけてきた楓に若干びっくりしながら言う。
糸目がちゃんと開いてるし、そんなに衝撃的だったのか？

『あゝ聞こえるか。こちらアリウス』

『なんですかマスター』

観客席にいるエクセルに念話を使う。
なんか凄く低い。主にテンションが。

『一体どうした？』

『タマモがうるさかったんです』

『まあいいや。俺はこの後用事ができたから、アリスたちも自由に
していいぞ』

『……ええ、わかりました。お隣にいる糸目の女子中学生ですね』

『ああ、楓って名前だな。そんで——』

『何も言わなくても結構ですマスター。仮契約カードの子ですね。
このロリコン』

『ちよつと待て！ 色々と誤解してないか！？』

『いえ、別に。それでは私達は自由にしますので』

なんか一方的に言われて念話を打ち切られた。

もしかしくなくても怒ってたな。

また後で、ちゃんと謝らなきゃなあ。

「ところで、次の試合はセツナつてのとネギ少年だろう？ 決勝で待つとか言っただけ、まずセツナって子を倒せるのかね」

「今はまだ、刹那の方がずっと強いでござるからなあ……ここまでの試合でネギ坊主がどれだけのことを学べたかにかかっているでござろう」

「つまりは、わからんってことか」

「そうでござるなあ」

神鳴流つてのは接近戦ならメチャ強いからなあ。

セツナも、さっきのアスナちゃんとの戦いと最後の投げを見る限りかなりのレベルのはずだが。

俺はネギ少年がどんでん返しを見せてくれるほうに期待したいけどな。

わかりきった結果なんてつまないし。

まあ、親父さんとの試合がかかっているからってそつちばつか気にするなんて事がないといいけど。

ただでさえ格上の相手と戦うのに、それじゃあ勝てるもんも勝てな

くなるしな。

楽しみに待たせてもらおう。

第二十九話 伝説は強し（後書き）

あとがき

やっとなさ細かい戦闘シーン書かなきゃならん部分が終わった。
後は楓とのデートと最終日イベントか。
タイムマシンの一週間後はカットです。

視点的に無理がありますからね。

楓やさよのアーティファクトはまた今度。

学園祭終了後のエヴァ修行編にて明らかに。

小太郎のパワーアップ化やアリアドネーの夕映とフレイアなど、魔
法世界編が楽しみで楽しみです。

第三十話 親子（前書き）

遅くなつてすまないといわざるを得ない。

第三十話 親子

さて、次の試合。

セツナVSネギ少年が始まった。

始めはネギ少年の先制攻撃だったが、セツナ相手には全く通用せず。まあひどい動きだったから仕方ないだろう。思い切りが欠けてたしま、ネギ君にセツナが色々言っているようだからなんとかなるだろう。本気を出してもらいたいみたいだし。それまでは負けるようなつもりもなさそうだし。

「やっとエンジンが入ったか」

「そのようでごさるなあ。目の色が違うでごさるよ」

「だな」

セツナの攻撃を受けて一度は倒れたネギ少年。

しかし、軽い深呼吸と共に息を吐き出した後で雰囲気が変わった。

その後は見事な動きを見せるネギ少年。

バトルしてレベルアップというのはゲームの中の話じゃなく、マジで起こりうるからな。

ネギ君がそれだけの才能の持ち主だったのもあるんだろうけど、さつきに比べれば格段にいい動きだ。

「む。師匠、ちょっと……」

「ん？ どした？」

「コタローも見に来たようでござるから、ちょっと行ってくるでござる」

「おーそうか。俺は面倒だからここにすることにする。なんかそっち行ったら嫌な感じするんだよな。勘だけど」

それにここからでも充分に試合の見物ができるしな。

あっち行くとなんか……そう、あの人が出てきそうな予感がする。

「む……まあ、師匠も思うところがあるのでござろう。でも、急になくなったりはしないようにしてほしいでござる」

「安心しろよ。この大会が終わるまではここで大人しく見物してるさ」

「それならいいでござるが……古、一緒に来てくれぬか？」

「ん、わかたアルよ」

古菲と一緒に楓が選手席から出て行った。

コタローのところに行ったようだ。

付き合いが短い俺よりは楓たちが色々言った方がいいだろう。

ネギ少年がこんだけレベルアップしてんだから、少しくらいは落ち込んでるかもしれないし。

さて、試合も終盤。

ネギ少年とセツナが舞台の上で真っ向からぶつかる構えを取る。会場全体の空気が張りつめていく。

静寂が包み込むこの一瞬、俺が大好きなこの一瞬。

そんな中で時間がゆっくりと過ぎ去っていき、そして――

体を小さく固めたネギ少年の攻撃がセツナの体へと突き刺さった。

低い響いた衝撃音と、セツナが倒れ伏してネギ少年の立つ姿が、ネギ少年が勝利したことを周りに告げていた。

俺も思わず拍手してやりたい気分になった。まあ、ちょっとだけだが。

自分よりも格上の相手によくやった。ネギ君。

後は決勝戦で、ご褒美を楽しめばいいさ。

「さて、次の試合まで時間があるな。それまで何をするかな――つと」

「おやおや。次の試合までゆっくり待っていればいいでしょうに」

「……せっかく勘を信じて行かなかったのに、アンタから来るんかい」

突然に目の前に現れたクウネルにため息をつく。

「つか正直心臓に悪い。前触れが無いから余計に。」

「それよりさっきの戦いは素晴らしかったですよアリウス。私としてはあなたの弟子の彼女とも戦ってみたかったです……」

「今度タマモでも渡すから勘弁してくれ」

「ああ、九尾の娘でしたか？ いえ、子というのは正しくないでしょうが……まあ、とりあえずそれはいいです」

「いいんかい！」

「ええ。また後日、色々とお話は聞かせてもらいますので」

そう言つて胡散臭い笑いを浮かべるクウネル。

周りではいよいよ近づく決勝戦で観客が沸き立つ中、やたらとクウネルの存在が薄く見える。

そういう魔法使つてるのか、元からそうなのか。

この人の考えることはよくわからないからな……

「観客席にいるあなたの従者さんたちとも色々とお話したいので、その時にはしっかりお願いしますよ」

「げ——」

「それではまた……」

そんなことを言つてさっさと消えてしまった。

いや、俺が何か言おうとする直前に消えるとか確実に狙つてるだろう。

そんなこととして楽しいのか……楽しいんだろうな。あの人の事だし。

考えるのはやめだ。次の試合を楽しみにさせてもらうか。
——と、その前に。

「……演出的にここいちゃ悪いだろうしな。やっぱり移動しよう」

俺だつてな。

感動の再開を邪魔するほど、空気が読めないわけじゃないさ。

そして決勝戦がいよいよ始まる。

観客も凄まじい歓声をあげて騒ぎ立て、一体どうなるのかと期待を大きくしている。

そしてネギ少年。

舞台に立ち、毅然とした表情でまっすぐとクウネルを見つめている。
おそらく、自分が何と相対するかの見当もついているのだろう。

「それでは決勝戦——Fight!!」

審判の開始宣言と共に、クウネルがいきなりアーティファクトを發動した。

それと同時に大量の本——「半生の書」が螺旋状にクウネルを取り巻くように出現した。

そして俺にやった時のと同じように、槌を本に挟んで引き抜いた。

「で、いきなりガトウさんですか」

「ガトウといえば、無音拳の使い手の紅き翼メンバーの方ですよね？」

「マスターのご友人の高畑・T・タカミチの師であるとも聞いています」

「おー！ 面白いなあのアートイファクト！」

「空気読めバカ狐」

「むががが」

俺は隣でぎゃーすか騒ぎ出しそんなタマモの口を押さえた。

他の観客も騒いでるが、コイツの場合『騒ぐ』のレベルが違うからな。

黙ってみてくれよ、もう。

さて、舞台上ではガトウに変身したクウネルが両手を合わせて……あ。

ガトウ（クウネル）が突如上空へ移動し、一瞬で数発の豪殺居合い拳を放った。

その着弾地点が舞台周りの池だったおかげで、大量の水飛沫が舞い上がった。

同時に、舞台上が水煙に包まれて様子をうかがうことができなくなる。

「これが狙いだな……っ！ っ！ ことはだ。残り時間を考えてもすぐ来るだろうな」

「マスター？」

「エクセル、一部始終を記録しとけよ。色々と見ておきたいからな」

「了解です」

横に控えるエクセルにそう言って、すぐに注意を舞台へと向ける。
あの水煙の中で変身するのか、それとも……

俺がそう考えている間に水煙が晴れて、舞台の二人が姿を現す。
今度のクウネルは本を一冊だけ手に持ってネギ少年と話し合っている。

そして再びクウネルが光に包まれて――

大量の鳩に包まれたナギ・スプリングフィールドがそこに現れていた。
た。

……何故に鳩？

ネギ君は目の前の人物に感動して声も出せない模様。

周りの観客はとんでもないイケメンの登場に凄まじく沸いている。

ネギ君に似た髪型と顔だったのもあるだろうけど。

俺が最後に見たときより結構年取ってるな。

「あれが英雄、サウザンドマスターのナギ・スプリングフィールド
ですか？」

「なんというか、ネギ・スプリングフィールドとは似てませんね。
性格とか」

「確かに、アリウスみたいなアホっぽい雰囲気だなー」

「んだとゴラア？」

「じよ、冗談だぞ……冗談……」

いいところなのに邪魔をするタマモに、今度は思い切りガンを飛ばして警告する。

途端にビクビクしながら縮こまったのでよしとしよう。

そうそう、そうやってちゃんと大人しくしてれば何も言わないさ。

タマモの頭を一発軽く叩いてから舞台の上へと目を向ける。

そこではネギ少年とナギさんが戦闘中だ。

もちろんネギ少年の力はナギさんに遠く及ばないし、そんなことは力がある奴なら誰だって分かってる。

本来ならば戦いになぞなるわけがないほどの力の差。

だがそれでも……ずっと会いたいと思ってた親父さんに会えるってのは嬉しいんだろうな。

戦いという中でも、拳と拳をぶつけ合う状況でも、触れ合うことができると言っるのは嬉しいんだろう。

……なんだか羨ましいぜ。

俺やタカミチやクルトは孤児だから、親はとくに死んじまってるしな。

にしてもナギさん、あの威力の魔法の矢を自分の子供にぶつ放すのはやりすぎでしょうよ。
空中で撃ったからよかったものの、遠くの方で大爆発を起こしてたぜ？

あの人も相変わらず——まあ中身はクウネルだが——ハチャメチャな性格をしている。

とりあえずネギ少年がナギさんにあえて万々歳……か。
めでたしめでたし。

|| || ||

さて、そんなこんなで大会も終わって授賞式。
決勝はもちろんナギさんの勝利で、クウネルが優勝ということになった。

ネギ少年が二位で俺とセツナが三位に入賞。

にしても、さつき楓をエクセル・アリス・タマモに紹介したのは凄くまずかったのかもしれない。

殺気の籠った視線が、楓がいるところからビシバシと……

「さあ！ 大会主催者である超鈴音の手から優勝者のクウネル・サンドース選手に、優勝賞金の一千万円が手渡されます！」

そんな宣言の声と共に授賞式も終わりを告げて、大量のマスコミが突っ込んでくる。

魔法世界でもよくあったなこんなこと。

テオドラとの結婚直後とか特に。

結婚一年目の拳闘大会の時も凄かったっけな。

そんなことを考えていたら、俺の手を掴むものがいた。

しかも思いつきりガツシリと。

そちらを向けば、ニッコリ笑顔の楓と困ったような顔のセツナがいた。

「楓、私ははずした方が——」

「うむ。頼むでござるよ。拙者は少し師匠と話すことがあるゆえ」

「わかった。また後でな」

そんな会話をしてすぐにその場から消えたセツナ。

その場に残ったのは、腕を掴まれて唇の端をヒクヒクさせる俺と、腕を掴んでニッコリ笑顔の黒いオーラを纏った楓。

……いや、まあ、なんというか、自業自得なのか？

「とりあえず、場所を移さないか？」

「そうでござるなあ。人が来ないところでじーーーーっくりと話を聞かせてもらうでござるよ」

ああ、怒ってる。わかつちやいたけどすごい怒ってる。

『マスター』

なんだこんな時に念話してきやがってエクセル！
空気読めよ！

『テオドラ様のことも伝えておりますので、自分の問題は自分で解決なさってください』

「さあ。一緒に行くでござるよ師匠。さあ！」

「チクシヨウ！ わかったよ！ いくらでも話でも説明でもしてやるさ！」

若干ヤケクソだがこれも自分で蒔いた種だしっかり説明してやるさ！

デートしたら許してくれるとかならいいんだが……不安だ。

第三十話 親子（後書き）

あとがき

久しぶりに更新ですね。

魔法世界編がメインのはずなのに、全然辿り着かない。

今回の飛ばし具合に関しては、メインとなる物語ではないからです。アリウスがメインなワケですし、これくらいがちょうどいいかなと。後は2日目午後の楓デート、夜はタカミチと話し合い、そんで帰宅。3日目は学園防衛でハツチャケ……くらいか。エヴァと酒飲みイベントもありだな。

結局、麻帆良の問題には本格的に関わっては行けないから飛ばし飛ばしなわけよ。

第三十一話 学祭デートは唐突に（前書き）

あけおめどうするー！

第三十一話 学祭デートは唐突に

「とまあそんなわけで……」

「ほほう？」

「いやあのだからな？ 何度も謝ってるじゃないか」

「謝ってすむ問題じゃないでござる」

「——そりゃそうかもしれんが、どうしようもないだろう」

俺だってテオドラが好きで結婚したわけだし、別に楓のことを忘れ
たってわけでもないし。

つーかどっちも大好きだし決めきれないし俺って最悪じゃねえか！
か、かくなるうえは……

「とりあえず一緒に学園祭をまわ——」

「そんなの当然でござる。言わなかったら本当に怒るところでござ
るよ？」

「面目ないな」

俺は深々と楓に頭を下げて謝った。

これで許してくれるとも限らないが、俺が悪いのは確かだしな。

「……顔を上げるでござるよ」

楓に促されてゆっくりと顔を上げていく。

そこには仕方ないといった感じの笑顔を浮かべた楓の顔があった。

「しょぼくれた師匠なんて見てても楽しくないでござるよ」

「……え〜と？ 許してくれるのか？」

「それは――」

ずずいと顔を近づけて、俺の手を取った楓は言った。

「拙者を楽しませてくれたら、でござるよ」

「なんとも奇妙な気分だ」

『そんな事言ったらぶっ飛ばされますよマスター』

「黙れ。気持ちの整理をさせろ」

『はいはいですよマスター。グッドラック！』

「……おのれエクセルめ」

俺は一時的に楓と別れ、ちょっとばかり準備をしてから合流することになった。

変装用つてのもあるんだが、やっぱりおしゃれして一緒に回った方がいいだろうということになったのだ。

まあ俺なんか完全にバトルスタイルだったし、楓も男装といった感じだったし、ちょうどいいのかもしれない。

髪を固めて後ろに撫でつけ、グレーのスーツをちょい着崩して身に付けているのだ。

正直言つてむずむずするんだが、麻帆良に来て初めてマトモな服装を着るんだから我慢しよう。

楓を怒らせちゃった後だしな。

「お待たせしたでござる」

「おゝ着たか……つてえ!？」

「な、何か変でござるか!？」

「いやいやお前そりや変じゃあないけどもな」

変装のために帽子を被るのもまあいい。

ジャケット着るのもまあおしゃれなんだろう。

うすーく化粧してる上に、なんかジャケットの下はワンピースときたもんだ。足が出るぞ生足が！

……まあ、つまりは十分似合ってるってこった。

「ど、どうでござるか？ 拙者なりに少し考えてみたでござるが…」

「ああ！ 似合っているとも！」

「し、師匠、声が大きいでござるよ」

「おお。そりやすまん」

楓にいわれて口を噤む。

周りからも少し視線が浴びせられていた。うゝむ、俺は気にしないのだが。

さすがに楓も女なのだ。ジロジロ眺められるのは嫌なのだろう。

「それじゃ、一緒に行こうぜ」

「……うむ、よろしく頼むでござる…」

元気よく返事した楓の手をとって、俺たちはほんの少しだけ早足で歩き出した。

「こうやって師匠と一緒に学園祭を回れるなんて夢のようでござるよ」

「あ、ああ。そうか？」

「もちろんでござるよ！……師匠は嬉しくないものでござるか？」

「んなことないさ。俺だって楽しいぞう！」

一緒に祭りを回り始めてから一時間ほど。

何故だか知らんがすっかり機嫌を直した楓が、俺と腕を組んでぴったりとくっついてくるのだ。

胸が当たってるが、まあ別に気にしてないならいいか。

「さうて、次はどこに行くか」

「拙者はどこでもいいでござるよ」

「そいじゃあ面白いトコを昨日見つけたんだが、そこに行こうか」

俺は、昨日色々回ってる時に発見した場所に行こうと声をかけた。

満面の笑顔で楓は頷いてくれたが……俺は肝心なことを忘れていたのだ。

「ひどいでござるひどいでござる！拙者がカエルが苦手だと知っておきながらーっ！」

「……あれ？そうだったっけ？」

物凄くマイナーなくせに、やたらと盛り上がってる『巨大力エルレ

ース』とかいう出し物。

カエルを模したメカを使うとかで、本物のカエルが入った水槽が入り口にずらっと並んでいたわけだ。

途端、楓が押し倒されそうな勢いで掴みかかってきた。

言われてようやく思い出したぜ。いかんせん昔の事だしな……

というか、そんな苦手はとづくに克服してると思うじゃないか？

「でもまあ盛り上がってるし——」

「とうかなんでここを選んだんでござるか！？ 師匠バ力でござ

るな！？ バ力でござろう！」

「バカまで言うことないんじゃないかな！？」

「じゃあ今度は拙者が行きたいところにいくでござる！」

若干はじめからそうしてくれとも言いたかったが、とりあえずインパクト最優先でこんな所にきた俺も悪いわけで。

まあどこにでも行ってやろうじゃないか。

あんまりにも変なところでなけりやあな。

「俺が負けた……本職舐められてたまるかい！」

「師匠、口調が……別にいいでござるけど」

とりあえず射的イベントで物凄く燃えた後、普通に神社の出し物を

いくつか楽しむことにした。

なんだかんだ言ってシンプルが一番だよな。

つか射的俺よりも上手いじゃないか畜生。

目を瞑って後ろ向いて百発百中とは……負けたぜ。お前が？1だ。

「師匠、バカやってないで正気に戻るでござるよ」

「ん？ ああすまん」

ブラブラ歩きながら祭りを回る。

何にしたって時間はあるさ。ゆっくりゆっくりいけばいい。

射的の景品を持って、わたがしを買って他愛も無い話を続ける。

「にしても凄い育ったよなあ楓。プロポーションもテオドラに負けないくら——」

「……………」

「ともかくあれだ！ ナイス成長だぞ！ わはは、はは、は……」

たまに地雷を踏みかけたりはしたものの、なんとか上手く回っていた。

「で、こんなとこまで来たわけだが」

「いい眺めでござるよ？」

「そうだな」

麻帆良へとかかる大橋の描くアーチの上。

風も出ているし足場も不安定だが、展望自体は最高な上に足場なんて気にするほど柔じゃない。

「そろそろお前も仕事とかあるんじゃないか？」

「……そうでござるな」

「行かなくていいのか？」

「行つて欲しいのでござるか？」

そんなことを言われて、俺は肩をすくめて口を開いた。

下から見上げてくるのは反則だというのは世界の真理というかそれっぽい真理なワケで。

「答えようが無い質問すんじゃないーっての」

「わわわっ！？」

俺は楓の頭を被つてる帽子の上から押さえつけた。

目が隠れるまで思い切り深く帽子を被らせたので、楓が驚きながら帽子を持ち上げる。

そうして帽子を持ち上げてから見えた楓の目をまっすぐに見ながら言う。

「俺はな。お前のことが大好きだ。でもな、他にもたくさん大好き

な奴がいる」

「師匠……？」

「俺はいつだって自分に素直に生きてるつもりだ。だから、お前が好きだって言ったのは俺の本当の気持ちだ。安心していぞ」

「……それで、何が言いたいんでござるか？」

不安そうな顔をして楓が声をかけてくる。

俺は楓にも悪いと思ったからさっさと答えてやることにした。

「お前は俺のことが好きなんだろう？ でもな、友人達と一緒にここで学校生活を送ることも大切だぜ？」

「だから、何が言いたいんでござるか……！？」

「お前がどうしたいのかってことだよ。楓」

かなり意地悪な問いかもしれないが、色々と悩む必要があるはずなのだ。

特に、これは人生に関わる重要な事だからこそ……

奔放に生きてきた俺だが、別にコイツにまで奔放に生きて欲しいなんて思っていないしな。

俺は黙って、楓が答えを返すのを待った。

「拙者は今までずっと、師匠と会いたいと思ってたでござる。でも……」

「でも？」

「——一度会ってしまったら、もう離れたくないと思ってしまったんでござるよ……？」

「楓……」

「だって仕方ないでござるよ！拙者は師匠にずっと会いたかった。たくさん話をしたかった。今やっと手で触れられる程に傍にいられることが嬉しくてたまらないでござる……！」

そうまで泣かれて抱きつかれちゃあ、俺としては何も言えないわな。いつの時代も男は女に弱いとか何とか。

テオドラに言われた時もそうだが、ナギさんがアリカ女王の尻に敷かれてたのも頷ける。

「悪かった。俺が意地悪すぎたよな」

「そつでござるよお……」

俺は、未だに涙ぐみながら抱きついてくる楓の頭を黙って撫でた。凄い罪悪感に苛まれるんだが……

ここは突っ走るのみ！

「楓、ちょい上向いてくれ」

「へ……んむっ！？」

顔を上げた楓の唇に、俺は突然にキスをした。

ちよいと強引な、触れさせるだけでなく押し付けるようなものだ。
俺は数秒程そうしていて、思考が混乱して行動不能に陥っている楓から顔を離れた。

「……はあつ。確か前はお前に不意打ちされたからな、お返した」

「え、ちょ、そんな、いきな、いきなりすぎるでござるよ？ あは、あはは」

ニヤリと笑って楓の頭に掌を乗せる。

物凄くテンパってあたふたしている楓だが、全然テンパるのが直らない。

「おい、しっかりしろしつかり」

「ハッ！？ 拙者は何を！？ というか師匠——！」

「いやな、キス一つであそこまで混乱するとは」

わっはっはと笑いながら楓に返す。

うむうむ。元通りになった用得結構なことだ。

さて——

「今日はもう時間だろ？ 祭りが終わっても俺はしばらく麻帆良にいる。心配しないで行って来い」

「わかったでござる！ ……絶対にいなくなったりしないでござるか？」

「ああ。心配すんな」

「――それじゃあ師匠、また今度〜でござる！」

元氣を取り戻した楓は、晴れやかな笑顔で去っていった。
いい事した後は気分がいいぜ。

俺も、そろそろ帰るとしますか。

〓 〓 〓

ピンポン♪

楓と別れてしばらく。
まったりとくつろぎながら家で皆とくつろいでいたんだが……どう
やら客人のようだ。

「客人をお連れしました」

エクセルが玄関に出て応対し、その客人を居間まで連れてきた。

「……邪魔するで」

「おー。来たか少年」

俺はソファに座ったままで客人——犬上小太郎を出迎えた。
ちよいとばかり連絡しといたんだが、どうやら大人しく来てくれた
ようだ。

「俺に修行をつけてくれるんやろ？」

「もちろん。強くなりたいんならな」

こついう、自分の欲望にまっすぐな奴は最高だ。

やたらと噛み合うし、おまけに自分と同じ狗族の血を引いてるとき
てる。

こりゃあ強くしてやらないと、俺も黙ってられないってもんだ。

「もちろん、すぐに強くなれるわけじゃないし、今教えられること
は簡単な基本だけだ。だから祭りが終わってからでもいいんだぜ？」

「俺は、少しでも早く、ちよつとでも強くなりたいんや。だから——」

「——」

「わかった。今から見てやるよ。とことんまで似てやがるなお前」

「は？」

「こつちの話だ。それよりも奥に來い、まずはお前の現在の實力が
らだ」

そう言い捨てて、家の奥へと向かう。

俺が使うものは簡単だ。エヴァも持っているアレである。

倉庫へとやってきた俺は、ダイオラマ魔法球を取り出した。

その中は、南の島もかくやという素晴らしい南の海のミニチュアになっている。

時間もエヴァの別荘と同じ設定だし、こつこつ事するにはピッタリだろう。

「さ、準備はいいか？」

「おう！ いつでもOKや！」

いい声だ。それじゃあ行こうか！

第三十一話 学祭デートは唐突に（後書き）

あとがき

楓のデートと、小太郎の修行テスト？です。
今年も頑張りまっす！

第三十二話 いよいよ最終日だったのでしよう

ダイオラマ魔法球の中へとコタローと一緒に入った俺。

まあエヴァは『別荘』と仮称してるみたいだし、俺は『島』とでも言っておくか。

俺たちは熱い熱い南の島の白い砂浜に降り立って歩き続けた。

「兄ちゃん、どこまで行く気や？」

「ん？ んゝ、じゃまあ此の辺でいいか」

声をかけられて立ち止まる。

正直言えばどこでも良かったし、まあ問題無いだろう。

そう思った俺は小さい後輩に向き直った。

「とりあえず実力でも見せてもらうか。アル……クウネルの時は瞬殺だったしな」

「……チツ、言い返したいけど事実や」

「ま、気にすんな。あの人は最強レベルだしな。お前が手を出せるレベルじゃない」

俺がそういつてみれば、物凄く悔しそうな顔を浮かべるコタロー。やっぱり強くなるにはこれくらいハングリーじゃなきゃな。やる気十分の方がはかどるってもんだぜ。

「んじゃまとりあえず……ムン！」

俺は簡単に手を合わせて、自分の横に分身を作り出した。

影分身にアレンジ加えた狗分身つつーもんだが……ま、教える必要はねーだろ。

原理自体は単純だけど、まずは力の使い方ってのを知らないが無駄だし。

「なんや兄ちゃん、分身なんて出して」

「何、お前の相手はこれにしておらおうと思ってな」

超遠隔操作も量産も可能な代わりに本体の10分の一くらいの力しかないんだけどな。

コタローレベルの奴ならそんなくらいの力があればお釣りが来るだろうしな。

「……成る程、俺は舐められとるわけやな？」

「別に舐めちゃいないさ。正当な評価だ。嫌ならとつと倒してみろこつたな」

「上等！」

目をギラリと光らせて、唸り声を上げたコタローが瞬動で突っ込んでくる。

やる気があるのはいいんだが、開始宣言してねーぞ？

ま、面白いからいいけど。

狗分身は気の出力が本体よりずっと低い上に、構成物質の狗神を使

えないが、戦闘経験はそのまんまだからな。
ただ瞬動するだけで奇襲や不意打ちになるわけが――

「――危なっ！？」

「だよな。やっぱり」

案の定、コタローはカウンターを危なく喰らいそうになってやがった。

まー避けられるだけの冷静さは残ってたから良かったものの、分身じゃなかったら問答無用でノックアウトだぞ？

分身とはいえ俺の10分の1なんだから、もうちょっと警戒しても
らわないと。

「ちいいっ！ 兄ちゃんこれホンマに10分の1なんか！？」

「そうだぞー。ちつとは緊張ってみろ」

砂浜で本格的にバトリ始めたコタローと狗分身を見ながら、俺はア
リスが用意した椅子に座った。

……いつの間に来たか知らんが、さすがにメイドとしては完璧なタ
イミングで現れるなコイツ。

「お前はどー思う？ アイツ、相当伸び代があると思うんだが」

「……なんとも言えません」

「オイ」

じつと眺めてるんだから少しは言うことあるだろう。

知識が詰まってるんじゃないのかお前。

じつとりと、横に立つアリスの銀髪の頭頂部あたりを眺め続ける。

「……そんなに見つめないください」

「やだね」

「ハゲちゃいます」

「いやいやそれは無いだろ。ツツコミが間違ってる。つーか俺がツツコミか!？」

「さすがマスターです」

嬉しくねーよそんな事褒められてもよ。

まあそんなこと言いながらコタローがバトってる場面をしっかりと確認してるから別にいいんだけども。

「で？ 実際のところは？」

「まだまだ弱いです。私が全力の攻撃を貰ったとしてもダメージは無いでしょう」

「そらお前がやたらと硬いからだ!」

「……それを抜きにしても。まだまだ一人前とはいえません」

んな事はわかってるっつーに。

それをここから強くするためにどれだけ手間をかけりゃあいいか聞いているんだろうが。

「まだまだ動きも荒く、力の使い方も粗雑です。それを矯正するだけでも十分レベルアップするでしょう」

「まーそんなところかね。一番大事なところが抜けてるのが困りモノだけどなんとかなるだろ」

俺も始めはほとんど我流だったしな。

色んな技術を集めて（エクセルとアリスが物凄い量の知識持ってたし）役に立ちそうなものを片っ端から身につけようと努力しまくったからな。

ちようどよく自分と同じ類の力を持つヤツを見つけたんだ。色々と訓練のし甲斐がありそうだ。

「あ、吹き飛ばされました」

「……ま、始めは基礎からだな」

吹き飛んで海に飛んでいったコタローを見ながら、俺とアリスはそんなことを呟いた。

「んじゃーまあ及第点ってところで。矯正点かなり多いけど何とかなるだろ」

「なんや、凄い気になるんやけど」

「それは今度な。楓とも修行しなきゃならんからその時に教えてや

る」

「……まあええけど」

「それまでは祭りを楽しめばいいさ。ガキはガキらしくしやがれつてのさ」

そう言つて、コタローにいくつかアドバイスを与えて家から送り出した

俺みたいな波瀾万丈な子供時代もいいが、偶には休みだつて必要なのだよ。

というか俺も祭りの最終日くらい一人でブラブラと酒飲んだりなんだりと……あ。

そついや皆にサービスするの忘れてたっけな。

いやいや前日までに散々遊びまわつたし大丈夫だと……

「アリウスー！」

「タマモか、何だ？」

そんな事を考えている最中に、タマモが冷蔵庫から酒を取り出そうとしている俺に声をかけてきた。

なんかやたらと笑顔な上に、狐耳と9本の尻尾が嬉しそうに揺れている。

「明日はみんなで祭りを楽しもうな！」

——アアウン、ソウシマスヨ……

結局俺は、家族には逆らえない男なのさ。

〓 〓 〓 〓 〓 〓

俺はアリス、エクセル、タマモを連れて祭りへと繰り出した。祭りも最終日ということだろうが、最後の学祭イベントのチラシが配られている。

なんでコスプレした3・Aの連中（一目目、さよを迎えに行った時に目にした）が配ってるのかは知らないが。

「って何でナギとクウネルの絵が書かれてんだよ！」

「その横にある女生徒の絵は無視ですか。さすがですマスター」

「というか面白そうだな！ 参加しようアリュス！」

「……子供ですね」

「聞こえたぞアリスー！」

騒ぐタマモは置いていてだ。

こいつはどうにもきな臭い感じがする。

火星ロボ軍団とか魔法騎士団とか、色々ツツコミどころが多すぎ

る。

とりあえず近くの広場で、配給される装備の試射みたいのを行っているのを見ることにする。

「……マスター」

「みなまで言うな。俺だってわかってるさ」

「対ゴーレム・ガーゴイル用の魔法具ですね。正式名称は対非生命型魔力駆動体特殊魔装具。相手がロボだというなら確かに有用ですね」

「あたしはどーいうことかわからないんだけど」

「俺だって詳しくはわからん。わからんが……何かあるのは確かみたいだな」

そんな事考えてるうちに携帯鳴ったし。

相手は……タカミチか。

どーせこの事でだろうな。

ちよつと面倒だが仕方ないから電話に出ることにする。

「はいもしもし。アリウスだぞつと」

『ああ良かった。アリウス？ 緊急で頼みたいことがあるんだけど』

「そんなこつたろうと思った。今、世界樹前の広場にいるんだがな。チラシとか魔法具とか……大丈夫なんか？ コレ」

『はははは……まあ最終日のイベントは前から派手だし、学園の結

界もあるから大丈夫だよ。むしろ、隠蔽のためには一番いい方法だ
と思うよ?」

「ふん。まー別にいいけどよ。で、本題は?」

あんまり長話をするのもなんだと思うから、タカミチを促して本題
を言うように仕向ける。

まー、あの武闘大会の胡散臭さとかチラシとか見る限り本題が何な
のかもぼんやりと知れるけどな。

『詳しい説明は後になるけど、全世界に魔法がバレる瀬戸際なんだ』

「……すげー大事じゃね? それ」

『そうだよ! だからできるだけ急いで来てくれ! それじゃあ集
合場所を言うから頼むよ!』

「……ま、そんなことになったら大変だしな。近くにエクセル達も
いるから、なるべく急いでいくよ」

『本当に助かるよ。それじゃ——』

タカミチは集合場所を告げるなり電話を切った。

かなり焦ってるようだ。この様子だと。電話の向こうからも慌し
い雰囲気も伝わってきたし。

俺は携帯をポケットにしまってエクセル達に向き直った。

「どうせお前ら聞いてただろ? そーいうわけで移動するぞ」

「了解でーす」

「了解」

「なんか面白いことになりそーだな」

エクセルとアリスは電波受信して盗聴してたみたいだし、タマモに限っちゃ俺と同じく耳がいいしな。

一々言わなくてすむから楽でいいや。

ほんじゃま、タカミチが言ってた場所にも向かうとしますか。

兵は拙速を尊ぶとかなんとか言うしな。適当に楽しみながらお手伝いしようじゃねーか。

なあお前ら？ クソ真面目に皆を助けるとか俺らしくねーもんなあ？

そんなこんなで説明聞いて、俺たちは学園長の所に残る事に。

というかアレだ。そんなに危機的状況でもねーじゃないかと思うんだが。

「俺たちが手伝うことなくね？」

「ふおっふおっふお、そんなことは無いじゃろ。何しろ数が多いからのう」

「生徒たちも大はしゃぎで頑張ってるみたいだし、んなこた無いと思うんだがねえ……」

さつきのメガネの女教師とかヒゲグラサン教師とか、タカミチ程じゃねーけど相当デキると見たんだが。

少なくとも楓と同じかそれ以上……ま、実際に戦ったこと無いからわからないが。

それと同じくらいかはわからないが、少なくともそのレベルのが数人はいると。

それに何よりタカミチもいるしな。

俺が活躍する前に全滅させちまうんじゃないか？

「生徒たちに対する魔法の隠蔽は行わなくても大丈夫じゃ、イベントの演出ということになっとるからの」

「だから派手に頑張ってくれってか？」

「そうじゃ。本国からの応援は間に合わないようじゃからな。できれば力を貸してもらいたいのが本音じゃよ」

「ふん」

爺さんが頭を下げるとは珍しい。

——そういや俺って魔法世界でも結構大物だったな、すっかり忘れてたが。

王族としての義務とか特に無いしな……今のところ。

そんなことはともかくとしてだ。

せっかく爺さんが頭を下げてるんだから、ここは大人しく手伝ってやろうじゃないか。

「でもよ、具体的に何すりゃいいんだ？」

「自由に遊撃してもらえれば結構じゃよ。鬼神兵の抑えも大変じゃ

ろっし……」

「それなら問題ねーって。よっぽど高ランクの奴らじゃなければ俺の従者連中だけでも楽勝だ」

「——え、マジ？」

「おう。マジマジ」

エクセルとアリスは本人の能力もそうだがやたらとアーティファクトが強力だし、タマモに至っちゃ本人が京都のスクナと同等レベルの大妖怪だからな。

それに加えてタマモのアーティファクトもなんかアレだしな。

ややこしいというか面倒というか。

俺ならたぶん、低レベルの鬼神兵なら右手一本でいけると思うが。

「部外者が頑張りすぎるのも悪いかもしれんな。やっぱ」

というか雑魚相手にするの面倒だし。

「……まあ、君に任せるわい」

「んじゃーとりあえずエクセル達に任せる。俺と爺さんは観戦といこうや」

爺さんが肯定してくれたので、俺も遠慮なくそれに乗っかることにした。

俺は武闘大会で色々楽しんだけど、こいつらはやってないからイライラもたまってるだろう。

敵をぶっ倒してそれを発散してもらいたいものだ。

「了解です。鬼神兵なんてちょいちょいのですよ」

「了解。目標を塵も残さず綺麗に殲め……いえ、掃除します」

「とりあえず久しぶりに本気を見せてやるからな。アリウス！ ちやんと見てるんだぞ！」

「わあーったから騒ぐな。ま、タカミチにでもついててくれ。和を乱さなきゃなんとなるさ」

「というわけでレッツ出陣！
できるだけ頑張ってくれよっと。」

第三十二話 いよいよ最終日だったのによ（後書き）

あとがき

携帯はギリギリ通じる時間だった。
すぐに使用不可能になりましたが。

アリウス君は現在、ラカンと同じ不条理レベルの強さに食い込み始めてます。

ちなみに最後に爺さんが折れたのは、元々みんなに解決してもらおうとか思ってたからです。

責任はワシが取るとか言ってるあたり、さすが爺さんだぜ。

第三十三話 従者としての露払い（前書き）

とりあえず仮契約のヤツについては簡単にね。

修行編のほう詳しく書けそうだな・・・

第三十三話 従者としての露払い

エクセル達もタカミチの方に行っ^たし、電話でもしようと思っ^たんだが。

「おいじーさん、ここっ^て電波通っ^てないのか？」

「ふお？ そんなはずないはずじゃが……」

「まあそうだよな。つーことは――ダメか」

やっぱり念話まで通じない。

チィ……いざ使えないとなるとやっぱり不便だな。とりあえず一個ずつ試すか。

「おいじーさんここのセキュリティとかどうなっ^てんだ。念話妨害までかけられてるじゃねーか」

「そんなこと言われてものう。念話妨害自体は簡単なものじゃし。止めようが無いんじゃよ」

「マジか？ ごちゃごちゃしたの嫌いなんだよな。下準備とかは全部エクセルとアリス任せだし……あれ？」

「どうしたんじゃ？」

話しかけてくるじーさんを無視して、念話を実行する。

『さよにだけ念話を通じる……こいつはラッキー』

幽霊だからか？ 念話の回線が細いのかもしれねえな。
まあいい。原理は知らないけどちょうどいいぜ。

『あ、アリウスさん！？』

『おう俺だ。いきなりですまんけど、そっちどうなってる？ まだ開始前だけだよ』

『えつとですね、もうロボットがいっぱい攻めてきちゃってます』

『うんまあそんなこつたろうと思った』

『へ？』

念話ごしに素っ頓狂な声を上げるさよ。

朝倉とかいうのと一緒にいるって聞いてるし、大方あの嬢ちゃんがまた司会でもやってるんだろう。

どうせなら見てるだけってのもつまらんだろうし、ちょっとくらい手伝いできた方がさよもいいよな。

いや、さよの場合はつまらないってよりも見てるだけは辛いつてのが正しいかね。

『つーわけでだ。カードもってアデアットって言うてみ』

『え？ はい、わかりました。……わ！ 笛が出ましたよー！』

『それがさよのアーティファクトな。こっちのカード調べたから名前は割れてる。「ネクロマンサーの笛」ってアーティファクトだ』
『な、なんか不気味ですね』

そりや名前は不気味だろうよ。『死霊術師の笛』だしな。別にそれだけが能ってわけじゃないし、人に影響与えられるくらい強い悪霊なんてそうそういないんだが。
特に麻帆良の地なんて、いたらいたでさよがとつくに会ってるだろう。

『それは主に霊体に干渉して幽霊操ったり、他者の精神に干渉したりするアーティファクトで、なんかヒーリングもできるらしい』

『でも使い方なんてわかんないですよ?』

『笛の吹き方を知らなくても、相手の事を思って吹けば効果はあるらしいぞ。ヒーリングだったら、治って欲しいな』とか考えて吹くといい』

『おお……テキトーなんですな』

『いやまあ、効果を最大限に発揮することは出来ないけどな、その場合。とにかくやってみ』

『はいっ！ わかりました！』

「さてじいさん。俺の用は終わったけどどうする?」

「長電話……いや、長電話しすぎじゃ。というかどうして繋がったんじゃ？」

「根性だ」

説明が面倒だからじじいに対してはそれで十分だろう。というか爺も言いたいことあるんならさっさと言え。

「そろそろ他の魔法先生も動くじやろうし、君のところの詳しい戦力を聞いておきたいんじやが……」

「おー、別にいいぜ。隠すことでもねーしな。でもタマモのはわかってるだろ？」

「ワシが実際に見たことあるわけじゃないしのう」

「まあいいか。アイツのアーティファクトやたら強力だし。んじやー詳しく……あ、学園結界消えたぞ」

「なんじゃと！？ あ、本当じゃ！」

まあいいや。

タカミチや魔法先生、それに俺の家族たちまでいるんだ。なんとかするだろうから放っておこう。

「そいじゃー爺さん、世界樹の上で見物でもしようぜ？ 酒でも飲みながらよう」

||

||

||

——世界樹前広場にて。

「ええと、あの……」

「ふーん。おまえが幽霊のさよとかいう奴か。あたしは玉藻だ。おまえは玉藻様と敬うように呼ぶが——あいたつ!？」

「ストップです。はしたないです」

「というか私達にまで悪い印象与えないでね、タマモちゃん?」

世界樹前広場にあるとある建物の上で、エクセル達がさよに話しかけていた。

楓にはもう接触したし、同じ仮契約相手を持つさよと直接話したかったようだ。

「私、エクセル・ミュリエールといいます。アリウス様のメイド二号です。よろしくね」

「アリス・ミュリエルです。よろしくです」

「……玉藻だ。よろしくな」

「あ、はい！ 相坂さよといいます。よろしくお願いします！」

ようやく彼女達は和やかな雰囲気で挨拶をし終えることが出来た。
しかしながら周りの状況を鑑みるに、いつまでもそうやっているわけにも行かない。

「まー、さよはここで見てるんだな。あたしがあいつらぶっ飛ばしてきてやるから」

「タマモちゃんの言うとおりですね。あなたには戦う力はまだありませんし」

「ヒーリングで手伝いくらい」

「……はい。それくらいしかできませんよね」

さよ自身、まだ自分が何も出来ないということは承知している。
しかしそれでも。役に立てないというのは歯痒いものだ。
だから少しでも目の前の女性達のように強くなろうと、さよは離れていく彼女達の背中をじっと眺めるのだった。

2手に分かれたエクセル達は、世界樹に群がるかのように通路を進むロボット達を排除していく。

さっきまで着ていなかった『何の変哲も無いメイド服』を着たアリスが、腕から銃口を突き出して連射しながら、的確にロボットたちを射抜いていく。

「23……45……78……」

無機質に数を数えながら次々と打ち抜いていくアリスの横で、見慣れない腕輪をしたエクセルがゆったりとした動作でその腕輪を掲げる。

周囲の魔力とエクセルの魔力を取り込んで、一瞬で魔導具を作り出す。

そして生まれた巨大な髑髏が描かれた超巨大なクラッカー。

それを戦場に向けてエクセルがぶっ放せば、色とりどりの小さな球が大量に飛び出した。

「アリスちゃん。いつもどおりよ」

「了解」

ひたすらにロボットを撃ち抜き続けるアリスが、空から降り注ぐ色とりどりの球……小型爆弾の雨に目をやった。

そして着ていたメイド服についていたフリルの下から、大量の銃口を覗かせる。

「ターゲット全ロック完了、目標の数は300。同時爆破します」

全身銃だらけと言ってもいい程の姿へと変貌したアリスが、空の爆弾へと向けて一斉に銃口を開いた。

その場に響いたのは合計二発分の銃声。全身から突き出た銃口の数は150。

全ての銃が全く同時に二度だけ火を噴き、狙いを謝ることなく空の爆弾へと着弾した。

そして、一瞬で銃口を消し去ってメイド姿に戻ったアリスが立ち止

まると同時。

辺りにいたロボットたちが突然に倒れこんだ。

「んゝ 良好良好、やっぱ私の作った『自動人形専用拡散波動爆弾』は最高だったみたいですなゝ」

エクセルのアーティファクト、ウロボロス創生連環によって作り出したマジックアイテムは、それ専用に作り出しただけあってロボットにも効果抜群であつたようだ。

そんな成果を生み出した彼女ら姉妹は、更なる敵を見つけるために、そしてタカミチと合流するべく湖の方へと進んでいく。

——同時刻。

子供用のワンピースではなく、煌びやかな着物を着たタマモも同じく湖に向かっていた。

タマモが二人と別れたのは簡単な理由だ。戦力バランスが取れた分かれ方をしただけである。

「こんなロボットなんかちょいちょいのちよいだつてのになゝ」

右手に青く燃える狐火を灯らせて薙ぎ払えば、ロボットが炎に飲み込まれて爆散していく。

ただ手を振るという行為を繰り返すだけで、いとも簡単にロボット

が消滅していくのだ。

そんな中、多脚戦車が4台ほど彼女の前に立ちふさがり、弾幕を張って立ち向かった。

「面倒だな」

そう言っただけの彼女は、左手に持つ一つの扇子をバツと開く。

たったそれだけのアクションで、彼女の前方にぽっかりと穴が開いた。それと同時に、彼女に向かってきていた戦車四台の後ろにも穴が開く。

その穴の向こうに覗いているのは、ロボット自身の姿だ。しかし突然に攻撃を止められるはずも無い。

「自滅とかほんとーに馬鹿だよな。ロボットなんてちよろいちよろーい！」

鼻歌を歌いながら、機嫌よく彼女は湖へと向かって突き進んでいく。

ちょうど、そんな時だったろうか。

学園の結界が破られたのは。

いよいよもって6体の鬼神兵が現れ、更には狙撃手も行動に移る。今、更なる戦いの火蓋が切られようとしていた。

第三十三話 従者としての露払い（後書き）

あとがき

エクセル達がアーティファクトを出したのは、殲滅するのが面倒だったからです。

筋肉が気に比例するのはたぶん間違っていないと思う。

まあラカン見れば一目瞭然だね。

故に！ 最高にして大量の筋肉を所望する！

やっとアーティファクトも出たので、今回から紹介していこうか。

アーティファクト：ネクロマンサーの笛。

効果：霊の悲しみを理解し、心のそこから思いやる心がなければ使用不可能。

霊への深い悲しみと無償の愛が、霊を操りコントロールするための条件。

ヒーリング
霊的治療の触媒にもなる。

生きている人間の霊格に干渉し、魔法の効果を下げることもある。

もしも使いこなすことが出来れば、魂を持つあらゆる存在に影響を与え、リヨウメンスクナですら使役できるだろう。

魂の宿っていない人工物は操れない。契約を完了済みの自動人形には魂が生まれるので干渉できる。

番号：632

名前：相坂 さよ

称号：乙女な地縛霊

色調：白

徳性：愛

方位：中央

星辰性：月

マスター：アリウス・ウィンダート

アーティファクト：創生連環 ウロボロス 形状は腕輪

効果：魔力を吸収し、人形（ゴーレム・ガーゴイル含む）や道具（武器から指輪まで様々な）を作り出し、それを使役することができる。作成時にかかる時間は一瞬。

作るために必要な知識が無ければ、何も作ることは出来ない。

人形の場合はその性能によって作成時に必要な魔力量が違う。道具の場合はその効果の大きさによって必要な魔力量が違う。

番号：662

名前：エクセル・ミユリエール

称号：冷静なる統率者

色調：金

徳性：知恵

方位：北

星辰性：月

マスター：アリウス・ウインダート

アーティファクト：神秘的奉仕服

マジカルメイド

効果：ご奉仕パワーによって、これを着た者はパワーアップする。

オート感卦法＋多機能搭載みたいなもの

多機能の例……異空間ポケット、絶対に破れない、絶対領域、

自動回復、魔力自動収集、e t c ……

番号：663

名前：アリス・ミュリエール

称号：奉仕者の鏡

色調：銀

徳性：信仰

方位：南

星辰性：月

マスター：アリウス・ウインダート

第三十四話 お膳立て

学園結界が破られ、6体の鬼神兵が動き出すと共に。

一人の狙撃手もまた動き始めていた。

その狙う先は、鬼神兵への封印処理を行おうとする魔法先生及び、危険度が高いと判断されたタカミチ。

イレギュラーであり優先的に排除しておいた方が言いと判断されたアリス・エクセル・玉藻の3人。

スコープの中に彼らを捉えた龍宮真名は、一切の躊躇無く引き金を引いた。

第三十四話 混沌と混乱と

「——アリスちゃん！」

「え？」

「むむむっ！？」

補助能力に長け、近距離から遠距離まで全ての攻撃を分析可能な『眼』を持つエクセルはそれに気付いた。

エクセル
そもそも彼女は、空間を把握して場を支配することに関してはずば抜けている。

パラケルススという稀代の錬金術師が作ったエクセルとアリスのホムンクルスには自己進化機能があり、茶々丸等に使用されている『オーバーテクノロジー未来技術』を遥かに超える『ロストテクノロジー失われた技術』を吸収してきた。

体表はミスリルやオリハルコンといった繊細にして強靱な物質によって構成された人工皮膚、核となるコアは『賢者の石』と呼ばれる永久機関。

その上で、アリスは近距離戦闘に長け、エクセルは遠距離戦闘に長けている。

その他補助機能として様々なものがあるのだが……そのうちのひとつがその『眼』である。

より広範囲かつ長距離を捕らえるだろうその眼は、範囲内にある全ての物を把握することも、1キロ離れたところにある文字すら読み取れるだろう。

そして今回、エクセルは視界内を高速で飛来する極小の物体を複数、その眼に捉えた。

その弾丸はまっすぐにアリスへと向かう。

しかし彼女は避ける素振りなど欠片も見せない。

アリスの防御力は尋常ではないほどに高い。

それこそ龍に噛み付かれようと、超弩級戦艦の砲撃が直撃しても、傷一つ付かないだろう。

だからこそその悠然とした態度であり、狙撃されたことに関しても全く気にせずに撃たれた方向へと反撃の態勢をとっている。

「ちょ、アリス君っ！」

すぐ横でその光景を見ていたタカミチが、迫り来る弾丸を途中で相

殺した。

そして弾丸へと居合い拳が衝突した瞬間、その弾丸から魔法が展開されるのを彼らは見た。

「……アリスちゃん、油断大敵でしょ」

「ごめんなさい姉さん、でもあの魔法は『強制転移魔法』じゃ……」

「微妙に術式が違ったっぽいけどな。だとしても油断しすぎだぞ〜アリスめ。あたしを見習え！」

わっはっはと腰に手を当てて笑う玉藻に、何も言い返せずにアリスはしよげこむ。

そんな事をしている間にも、その場にいる魔法使い達は次々とその『魔法』に飲み込まれていく。

そうしてどんどん学園側の戦力が磨り減っていく。

「これって不味いんじゃないですかね」

「……そうだね。アリウスは手伝ってくれないし、まあ彼らしいといえれば彼らしいんだけど」

「マスターは結構気まぐれですが、最近は空気を読めるようになりましたから」

「今回ばかりは、昔のちょっとバカなアリウスの方が良かったね」

跳弾をも利用した、超高等技術を駆使した精緻な狙撃。

なんとかそれを凌ぎながら、せめて狙撃の優位性を削ろうと建物の陰に隠れる。

「高畑先生！　これは――そちらの方は？」

「わ。メイドさんに……狐？」

「ああ、僕の友人だから気にしないでくれ。それよりも問題はこの狙撃だ」

すぐさま駆け寄ってきた桜崎刹那と神楽坂明日菜にタカミチは答える。

そうして紹介されたエクセル達も、軽く頭を下げた挨拶をする。

「コ、ココネが消えちゃったツスよ！？　死んじゃったんスか！？」

「大丈夫だ！　それよりも周りに気をつけて！」

「あれはおそらく強制転移魔法です。『普通』の転移魔法ではないようですが」

「弾丸にそんな魔法を込めても効果はそこまで高くないはずだ。一体そんな事をして何の意味が……」

「その通りネ」

唐突に聞こえてきた声に、その場にいた全員がそちらに目を向ける。

「戦場ならともかく、今この状況で3km先に転送したところで戦略的にさほど意味は無い」

強化服で身を包み、ゆっくりとこちらに向かってくるその少女。

「しかしそれが3km先ではなく、3時間先だったら……どうかな？」

「超鈴音！」

「超さん！」

今回の事件の首謀者、未来人であり火星人を名乗る超鈴音がそこにいた。

その姿を見て、刹那と明日菜がその名を叫んだ。

エクセルは超鈴音の姿を見るなりタカミチに問いかけた。

「あの少女が首謀者の超鈴音ですか？」

「そうだよ。そして僕の元生徒。それでも前まで担任をやってたからね」

「そうですか……アリスさん、彼女を捕らえてください」

根本を捕まえればそれで終わりだと、そう判断してアリスに呐喊させる。

それを見た刹那が、一度戦ったことのある超鈴音の危険性を踏まえ、た上で注意を促す。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ そんないきなり……」

「問題ありません。念のため、他のフォローにはタマモちゃんに対処してもらいます」

「そ、そうではありません！ 私達では彼女は……！」

タマモが宙に作り出したゲートの中に消え去り、エクセルとアリスが戦闘体制を取ったところで。

明日菜と刹那が非常に慌てた様子でエクセルに何かを言おうとした。

「おやおや、私の目の前でそんな会話をしているの力ナ？」

その瞬間、突然に超鈴音が彼らの背後に現れ、同時に攻撃を放った。相手を気絶させるだけの打撃と電撃を同時に放つ奇襲攻撃。

当然、そう簡単には当たらずも無いが。

「——ッ！」

「ム」

一瞬の攻防。

アリスの目の前に現れた超鈴音の攻撃を、そのまま横から掴み取る形でアリスが防御してそのまま捕まえた。

一度掴んだその腕からは、普通なら逃れることが出来なかったであろう。

「あっ……ぐ……」

「なっ！？」

突然に上がった声に目を向ければ、確かに捕らえていたはずの超鈴音が明日菜に攻撃を食らわせていた。

それにはさすがのタカミチも驚いた。友人の従者の事を実力も含めて信頼しているが故に。

逃がすはずが無いと、少しでも思ってしまったいたからこそ。

「貴様アツ！」

激昂した刹那が超鈴音に切りかかるも、無駄。

当然のごとく、刹那の真後ろに移動した超に攻撃されて沈黙する。

「あの移動は不味いですね」

「……フォローを頼めるかな？」

「了解です」

この学園祭限定で準備無しの瞬間移動可能、おまけに一発当てれば相手を撃破できるという弾丸。

その両方を備えた、正にラスボスともいえる超鈴音の前に。
戦士二名と魔法使い一名が立ち向かう。

|| || ||

「あたしに他のフォローってもなあ」

腕を振り、炎を飛ばして口を撃破していく。

どれだけやっても雑魚は雑魚、暇つぶしにしかない。

……むしろ彼女にとっては、暇つぶしにすらならない。

「やっぱ、狙うなら大物だよな……にひひひ」

くすくす笑って、他の一般生徒たちが口ボ達に立ち向かう横で鬼神兵へと飛び掛る。

それに対して鬼神兵は口腔から魔力による光線を放った。

制御状態にある攻撃であるために威力は本来の物ではないが、それでも十分に高威力の攻撃。

それを玉藻は、そのまま右手で受け止めた。

「ふふーん。やっぱこの程度なんだな……つまんなーい」

受け止めた衝撃で発生した風で髪を靡かせて、頬を膨らませて不満を漏らす。

本来、『九尾の狐』という大妖怪である彼女にとって。

鬼神兵程度では霊格としてのランクも全く違う。

もしもそういったもので彼女に釣り合うとするのなら、京都に封印されている『スクナ』あたりしか釣り合うものはないだろう。

「よーっし。じゃあそろそろ……いっけー!」

彼女が大きく声を上げ、受け止めていた光線に変化が現れた。

内部から膨れ上がるようにして、更に玉藻の腕の方から段々と赤く染まっていく。

そしてそれが鬼神兵の顔まで届いた途端。

光線が消え去り、そこには赤い炎の柱が出来上がっていた。

玉藻はそれを動かして鬼神兵の全身を満遍なく炎で覆っていく。

負ったダメージが大きかったのか、それとも高熱で間接部分をやられたのか、鬼神兵が膝をついた。

「よーっしトドメつくぞー！」

左手を前に出して手を開き、そこに炎を集中させていく。

次から次へと生まれ出る炎が一点に集中し、凝縮されて煌々と光り輝く玉となる。

「ひっさーっ！ 一寸——」

『あー、あー、玉藻？ 聞こえてるかー？』

「あ、アリウスだな。今ちょうど鬼神兵をボッコにしているとこで」
『』

唐突に入ってきた念話に、彼女は右腕の炎の玉を握りつぶした。
余波で周りに火の粉が飛び散ったが、燃え移ってないから大丈夫だろう。

そのまま玉藻はアリウスと会話を続け、何度か頷いた後で疑問を浮かべながら問い返した。

「え？ 戻って来い？ どーいうこと？」

|| || ||

「そのまんまの意味だ。ちょっと話してたら手出し無用ってことに

なっちまっただよ」

『というか何で念話が使えるんだ？』

「そーいうアイテムがあるのさ。わかったらさっさと戻って来い」

『せっかくトドメだったのになぁ……今戻るね』

アリウスはその声を聞いて念話を切った。

そして耳からイヤホンのような物はずして懐にしまいこむ。

謎の空跳ぶ絨毯の上に乗るアリウスは、横に浮く人物へと話しかける。

「これでいいんだろ？ エヴァンジェリンよう」

「ああ。邪魔が入るのは面白くないし、坊やの頑張り甲斐も無くなってしまうからな」

「そーいうもんなのかね」

「ああ。何百年も生きてると退屈こそが一番の敵だからな。それに、苦戦する姿の方が見ていて面白い」

そう言っただけで笑顔が浮かべるエヴァンジェリンに、アリウスが苦笑いで答える。

「このドSが……ま、タカミチもやられちゃったし、あいつらも呼び戻すかな」

「そうしろそうしろ、ついでにつまみを作って持ってこさせろ。お

前の従者の料理の腕は結構な物だからな」

「いいねえ……俺もこっちにきてから酒のつまみの好みが変わってよ」

「ケケケ、ソナ事ヨリ飲ミ比ベトイコウジャネエ力」

「お、俺と勝負しようってのか？ 俺は酒も強いぜ？」

遙か下の方の戦場を無視した、とても呑気な会話をする3人。

そんな光景を見て、アリウスと一緒にここへ来ていた学園長が話しかける。

「のう、アリウス君」

「なんだ？」

「いや、さっきまでノリノリじゃったのにどうしてエヴァの言うことを？」

「あー。そういう事ね」

納得したかのように大きく頷き、アリウスは学園長の方に向き直った。

どうやらアリウスが大人しくエヴァの頼みを聞いたことに学園長は疑問があるらしい。

エヴァ自身も、簡単に頼みを聞いたのが何故なのかはわかってないので、興味深げに顔をそちらに向けている。

だからというわけではないが、アリウスの出した単純すぎる答えには二人とも驚かされた。

「そつちのが面白そうだから」

「は？」

「ほ？」

「ケケケ、ヤツパ変ワツテヤガルゼ」

アリウスは元々自分が戦うのが一番好きだ。
強い奴と戦うのは大好きという性格である。

しかし……結婚し、強さを得て変わったとも言つべきか。
自分の子供の頃、強くなろうとひたすらに頑張っていた頃を、ネギ
やその生徒たちは思い出させてくれる。

そして、そんな姿を見ていると、どうしてもお膳立てなんていう物
をしたくなってしまうのだ。

「事情を聞けば、ネギ少年の生徒が事件の首謀者らしいからな。や
つぱ、そういう場合は担任のネギ先生に任せるべきだろう？」

「……ふん、初めて会った時とは随分変わったじゃないか。あの皇
女が変えたのか？」

「そうでもあるしそうでもないとも言えるな。ま、色々だろ、色
々とさ」

どこからともなく取り出したお猪口に、エヴァの持っていた徳利か
ら酒を注ぐ。

アリウスは、それをそのままぐいっと飲み干した。

「ま、今日は大人しく観戦に徹することにするよ。エクセル達含め、な」

「……ま、それならかまわん」

「ワシはかまうんじやがのう……」

「別にいいじゃねえか。ネギ少年達を信頼してやれよ」

「それは勿論なんじやがのう……まあいいわい」

諦めた様子の学園長も、酒を飲むために手を動かす。
そんな時、ちょうど準備を終えたのかアリウスの従者がそこへやってきた。

「マスター、おつまみとお酒の追加ですよ」

「ただいま戻りました」

「もう少しで鬼の丸焼きができたのにー。酒だー酒飲むぞー」

大量のつまみと何本もの酒瓶を抱えてやってきた彼ら。

眼を光らせたチャチャゼロやアリウス、満足気に笑顔を浮かべるエヴァ、下の戦場を心配しつつも期待はする学園長。

空中での宴は、祭りの終わりまで続いていく。

そんな彼らの下では、世界樹がその光をさらに強めていた。

学園祭最後のこのイベントも、いよいよ終焉を迎えようとしていた。

第三十四話 お膳立て（後書き）

あとがき

龍宮VS楓を書こうと思っていたら、いつの間にか終了間際でござるの巻。

まああそこは対して重要じゃないからいいけど、楓のアーティファクト関係どないするのー！

修行編しかないな……ハア……

まあそれもすぐだし、修行編には模擬戦も書けるし。
ラブコメも書く気満々だし。

やったるでー！

第三十五話 酒とつまみと祭りの終わり（前書き）

『THE グダグダ』でござるけども大丈夫か？

大丈夫じゃない、問題だ。

第三十五話 酒とつまみと祭りの終わり

「さてさて、見所は……あの褐色——龍宮だっけか？VS楓の方と、空中で奮闘するネギ少年かな？」

俺はエクセルの用意するつまみを食べながら、ふわふわと宙に浮くモニターを眺める。

これもまたエクセルが作ったマジックアイテムなんだが、遠見の鏡とは言った物だ。

転移やら念話の応用を使ったマジックアイテムらしいが、詳しいことは分らん。

「そういえば長瀬楓もお前の従者なんだっただか」

「デメエ結婚シテタンジャーノカヨ」

「それはそれ、これはこれ、だろ？」

「ふおっふおっふお。あの有名なお転婆皇女を嫁さんにしとるだけあつて言うことが違うのう」

「うつせえぞ爺さん」

「ふふん、事実だろう。ほらそのメイド、つまみをもつと寄越せ」

「少々お待ちを」

エヴァはエクセルにつまみを寄越すように言っている。
まったく。酒の席だからいいんだが、あんまりこき使わんで欲しいな。

俺もこき使う側だから人の事は言えないのかもしれないが。

「ほらアリウスー、あたしが酌してやるぞー」

「マスター、唐揚げと焼き鳥と枝豆を持ってきました」

「お前ら……最高だ」

まあ、いいや。

今は若者たちの戦いを観戦しながら酒を飲もう。

つて、前にもこんな事を言わなかったっけ？

「ところで貴様」

「あ？」

なんとなく感じた違和感に頭を捻っていると、エヴァのほうから話しかけてきた。

片手に酒の入ったお猪口、片手に焼き鳥を持ったまま。

「あの長瀬に出たアーティファクトは何だったんだ？」

「おいおい、そういうこと聞くかフツー」

普通はそういうことはもっと後でお楽しみにとっとく物だろうが。
やれやれだぜ、エヴァはそういうのがわかってないな。

「まあいいさ。あいつのアーティファクトは特殊だぞ？ 吹き飛ばす系って単純に表せるもんでもないし」

「ええわかりにくい。形状はなんだ？」

「団扇だ。葉っぱの奴」

「……天狗か。忍者にはお似合いかもしれんな」

だよな。俺も日本着てからアニメとか漫画とか見たけどすげーわアレ。ジャパニーズ忍者ってマジ凄い。

火を吹いたり風を起こしたり大爆発したり召喚魔法使ったりとか、ちよつと見習いたいくらいだ。

楓もあんな事できるのかね、ちよつと気になる。

「で、その長瀬は龍宮と戦り合ってるようだが、そのアーティファクトは使っておらんぞ」

手元の鏡を覗き込むようにして、エヴァが俺にそうやってきた。確かに、使っちゃいないな。悲しいが。

「まあ、相性もあるし。魔法自体を知ったのは最近だから使い慣れてない武器は使わない方がいいだろうさ」

「……お前、魔法の事は教えてやらなかったのか？」

なんだその白けた目は。いいじゃないか教えなくなつて。別にそういうのは必要ないと思っ

たし。

まだまだそんなときやあいつもガキだったんだからさ。

「この仮契約カード見るたびに犯罪臭が漂うな。よく嫁……お転婆皇女が許したな」

「ハッ！ とつくに制裁は受けたさ。一ヶ月ほど家族サービスの刑だったよ」

まったく、家族サービスはいいんだけど遠出とか遺跡探検とかダンジョン発掘とかできないのは辛かった。

基本的に俺はそういう冒険とかが好きだからな。

その時の一ヶ月はもうファミリードラマー本作れるくらいハチャメチャだった。

——あ、楓と褐色が相打ちになって転移した。

「んなことよりも終盤だぜエヴァ、祭りも終わりだ。楽しもって

手元の酒をぐいと煽ってエヴァにそう言い、俺は鏡をしまいこんだ。いつの間にやら鬼神兵も世界樹前広場以外の全てのポイントを占拠。夜も真っ暗でもうすぐタイムリミット。いよいよって感じた。

さあさあ。

あのナギさんの息子は、期待が持てるネギ少年は、一体どんな活躍を見せてくれるのかな？

「いやあ男前だったな。ネギ君。見れなかったお前が可哀想だぜマジで」

「……いや、いいさ。今の彼らを見ていればだいたいわかるよ」

「ま、そうかもな」

全ては終わった。ハッピーエンドかは知らないが、とりあえずネギ君は上手くやったようだ。

にしてもあの空中戦は見ててワクワクしたな。最近は強いのとやり合う事も少ないから余計に。

俺も今は地上に降りて、どうやら今まで時間跳躍させられたタカミチと話し中だ。

「詳しい話はエクセル達に聞いた。まあ、途中で撤退させたのは悪かったが負けちまうとはな」

「あはは。油断しちゃってね」

「俺の親友なんだからそう簡単に負けんなっつーのよ」

「手厳しいなあ……」

はっはっはとから元気っぽく笑うタカミチに酒瓶を一本投げ渡す。見事にナイスキャッチしたが、何か困ったような目で俺を見ている。

「なんだよ」

「君じゃないんだから直飲みしろっていうのかい？」

「俺が異常みたいじゃないか。酒に弱いわけでもないんだからそれくらい飲め」

「……まあ、たまにはいいかな」

ぐつと瓶を傾けてタカミチが酒を喉へと流し込んだ。
が、ちよつとクラリときている。

「ちよつと、度が、強すぎないかい？」

「俺にはこんくらいがちょうどいいんだよ。ほれパスしろって」

タカミチが俺へと投げ返した酒瓶をキャッチしつつ、俺はネギ少年たちの方に目を向けた。

どうやら、感動の別れイベントを実行中らしい。

ああいうものはいつ見てもいいもんだ。しかも俺は耳がいいから結構内容聞こえてくるし。

……しかし、未来から来たのかあの子。珍しい事もあったもんだ。

「正直、珍しいで済ますことでもないと思いますが」

「ダメだぞアリス、こいつあほだからな」

「んだと誰がアホだコラア！」

「ごめん！痛い痛い痛い！」

失礼なことを言った玉藻の頭をグリグリ苛めてアリスへと投げつける。

最近アイツの扱いがひどいような気がするが問題ない。

さて、そんなアホなやり取りをやっている間に、ネギ少年と最後に戦っていた子は巨大な魔方陣と共に消えていった。

ちょうど朝日も昇りかけた頃合だ。

「エクセル、ちょっといいか？」

「はい？ 何でしょうか？」

「タカミチに酔い止めの薬でもやってくれ。ちょっと酒が強すぎたかもしれん」

なんか完全に酔っ払ってる感じだし。このイベントの片付けもあるとしたら二日酔いは辛いだろ。

そんなわけでタカミチの介抱込みでエクセルに頼むことにして、俺は他の連中の元に向かうことにした。

まあ、他の連中といってもわかりきってるか。

「話すことは多いからな。楓、さよ、コタロ、言わなきゃならん事も多いし」

しばらくしたら俺が魔法世界に帰らにやならんという話とか。

……前みたいな事にならんよな。仮契約した時みたいに泣かれるのはゴメンなんだが。

色々と鬱だが……まあ、話さねばなるまい。コタロにも。

考えるのは全部後回しにしてその場の勢いで弟子にした俺が悪いし。どうせまたタマモあたりがなんか言うだろうけど。

ああもう！ 考えるのめんどくせえ！
とっととバラしてそんな時考えよう！

……いや、やっぱり今話したらなんか誤解されそうだからまた後でにしよう。

うん。やっぱり俺は優柔不断なのかもしれん。

「違うぞアリウス」

「おお、やっぱりそういうのとは違うよな。タマモもそう思うか」

「お前のはバカが考えすぎて空回りした拳句に知恵熱起こしているだけひゃあいひゃいひゃいひゃい」

アホ狐の頬を引っ張りまわしてこね回しつつ、俺は決断した。

今度、アルさん……じゃなくてクウネルが図書館島最深部に皆を招くとか何とか言っていた。

そんな時に便乗して俺も自己紹介、ついでに事情も説明して魔法世界の話とかすればうやむやになるだろう。

我ながらナイスアイディアだ。完璧だ。パーフェクトだ。

でも何でだろう。

なんかひどい事言われそうな気もするのよな。何でだろう。

第三十五話 酒とつまみと祭りの終わり（後書き）

あとがき

修行編及び魔法世界編が書きたくてたまらなくなりました。

第三十六話 マツリオワリ

生徒たちにとつての振り替え休日2日目。

学園祭は終わっちまった。

祭りの次の日に片付けまでちゃんとやるのが祭りってもんだが、さすがに手伝うわけにも行かないしな。俺は自宅でのんびりと飯を食ってから動くことにした。

にしても凄い祭りだったな。

都市一個が学園になつてゐるから、学園祭って言つても規模が違う。片付けも相当大変なことになりそうだ。まあ、その分人もいるだろうから大丈夫なんだろうが。

祭りの翌日は家で情眠を食つて過ごしたんだけど、今日は昔の馴染みに呼ばれているからそっちに行く事にする。

門番としてドラゴンがいるらしいが、倒さないように釘を刺された。なんだ、俺ってそんなに信用が無いんだろうか。

「よう。来たぜクウネルさん」

「ようこそアリウス君、いらっしやい。そちらの方々もようこそ…」

…」

そんなこんなで俺は招待された図書館の地下へとやってきた。

周りを見る限り魔法世界で見たような光景だが、よくもまあこんな場所が地下にあったもんだ。

「「お邪魔します」」

「邪魔するぞー」

「チツ、鬱陶しい……」

俺に続いて従者連中もやってきて挨拶したんだが、先に来ていたエヴァがものっそい嫌な顔をしている。

なんだろう、タマモとキャラが被るからか？ 狐耳と狐尻尾がついてるとはいえ金髪幼女で被ってるからな。
まーそれはそれとしてだ。

「オイ色ボケヤロー」

「何だそりゃ？ 俺の事か？」

「ケケケ、当タリ前ダロ？ 結婚済ミデロリコント力終ワツテルジヤネエ力」

「……毎回それを言う気かよ。やれやれだぜ」

とりあえず耳栓した気分でクウネルと話すことにする。

さん付けは……まあ、いらないだろう。本人がいらないうって言うてたんだし。

前はアルって呼び捨てだったんだから、それがクウネルに変わっただけだよな。

「で？ 俺を呼んだんだから何か言いたいこととか……」

「え？」

「いやほら、何かあるから招待したんじゃないの？」

「いえいえ、特にありませんが？」

「……マジで？」

「大マジですよ」

エヴァに率いられるようにして我が従者達も奥へと歩いていった後、俺はクウネルに話しかけたんだが……おいおい。

まあいいんだけどな。

それってつまり、昔馴染みだから招待したっつーわけで。

俺も30歳越えてオジサンになったけど、仲良くしてくれるって事だしな。

「んじゃ、勝手にくつろがせてもらうぜ？」

「ええ。もちろん。戯れに昔の話でもしてみましようか」

そこらに置かれた椅子に腰掛け、テーブルを挟んでクウネルと向かい合う。

そこへちょうどよく、紅茶を用意したエクセルがやってくる。

「ナイスタイミング。グッドだぞエクセル」

「ありがとうございます」

ぺこりとお辞儀をして、適当なお菓子を用意するらしくまた奥へと歩いていった。

それを見て、紅茶に一度口をつけたクウネルが話しかけてきた。

「いい子ですね。アリウス君」

「だろー？ 俺の従者には勿体無いくらいだぜ」

「キティの従者を遥かに凌ぐ自動人形……それを見ただけでも満足ですよ」

フフフと笑うクウネルは正直不気味だ。

まーマニアっぽい人から見たらエクセルやアリスはとんでもない存在なのかもしれない。

普通に飯食うしトイレにも行くし子供も産めるらしいし。

あれ、あいつらホムンクルスとか言ってたよな……まあいいや。大切な家族ってことには変わらないしな。ははははは。

「ヘイ、どうして俺はこんなに詰め寄られてるんだ？」

「どうしてかは自分の胸に聞いてみるでござるよ、師匠」

「ハハハハハ……」

右を向けば長身を生かして俺に詰め寄る楓。

さすがに俺ほどに背が高いわけじゃあないが、それでも高いものは高い。

ジト目……まあ細目だからわかりにくいが、とにかくじとっとした視線を至近距離から俺へと浴びせまくっている。

「で、さよ。お前もか」

「当たり前です！ 聞いてないですよー！」

「痛くない。痛くないけど心に来るなコレ……」

ふわふわと宙に浮かぶさよが、涙目でぽかぽか殴るように腕を振る。もちろん透けてるさよの攻撃はあたるはずもないんだが、それ以上に涙目で悲しそうにされるのが辛い。

やっぱ結婚したただの他の人と仮契約したのと色々問題はあったけど、同じクラスに俺と仮契約してるヤツがいるとは思わなかったんだろぅなあ……二人とも。

悪い事したよ、ホントに。

「兄ちゃん、ネギよりも性質が悪いんとちゃう？」

「お前まで言うか！？」

コタローまでもが俺に小声でそういった。

「つか師匠と呼べ俺の事は！ その方がカッコイイだろ！」

というか周りから浴びせられる視線が非常に冷たい気がするんだが

——ええいつ！ こうなれば……

「悪かったよ。でもな。俺は誰かを好きになる事はやめられないし、それを一人だけで済ませることも出来ないんだ！」

なんかそれっぽい事言って誤魔化そう！

そうすりゃなんとか——ん？

「——まあ、少くくらは痛い目にあつたほうがいいと思いますが」
「え？」

最後にボソツと零した言葉に疑問を浮かべるネギだったが、エクセルは他の人にもお茶を入れるためにその場を去ってしまった。
ネギとしては、タカミチの友人であり魔法世界に住んでいるというアリウスに話でも聞いておきたかったのだが、それより先に楓やさよという彼の生徒がアリウスへと詰め寄つた。
そうして話が終わるまで待とうと思つていたらこれである。

「楓さんとさよさんの知り合いだったんですね。アスナさんも会つたことがあるつて言つてましたけど……」

「うゝん。そうは言つても全然記憶に無いのよね。あんな人なら絶対に忘れないと思うんだけど」

椅子に座り、美味しいお菓子とお茶を頂きながら横に座るアスナへとネギは問いかける。

アリウスがアスナの事を知つていて、会つた事もあると言つていたから氣になつてはいたのだ。

しかしアスナは思い出せない。

会つたことがあるといつても、それは本当に数えるほどの事しかないし、その頃からドンドン仲良くなつていったタカミチの事ばかりしか覚えていないのだ。

「しゃーないなーアスナはー」

「子供の頃なら仕方ないですよアスナさん」

「いやいやそりゃひでーだろ鳥娘」

「え？」

ザシャツと地面に降り立つ音と共に、アスナをフォローしようとした刹那の頭を大きな手が驚掴みにした。

そのままワシャワシャと掻き回した所で驚いた刹那が手を払いのけて椅子から立ち上がる。

「な、な、な——！？」

「人との出会いは大切にしろよ？ 忘れたなんていったら拗ねちまうだろうが」

「誰がじゃ？」

「俺がだぜ」

驚く刹那を前にして、肩に乗せた玉藻へと囁くアリウス。
いつの間にやら復帰完了していたらしい。

「まーいいさ。忘れちゃったもんは仕方ない。でもこれ以上は忘れないなよ？」

「え？ うん、わかった」

アリウスに笑いながら言われ、アスナはそのまま頷いた。
帰ってきたアリウスに、ちょうどいいと思ってネギは問いかけようとするのだが。

「あの、アリウスさんに聞きたいことが……」

「ん？ あー、ネギ少年か。ナギさんの事を知りたいんだろ？」

「はい！ できれば知ってる限り教えてもらえれば……」

気合の入った声でネギはアリウスに問いかける。

アリウスも大体の事は把握しているが、しかし首を横に振った。

「ごめんな。あんまり知らないんだわ」

「え、そうなんですか？」

「ああ、俺の知ってることはタカミチより少ない。残念だけどな」

「そう……ですか」

見るからにネギが落ち込み、それを見たアリウスも悪いことをしたかまと思う。

おまけに周りには「期待させるようなこと言ってるじゃねえよアホ」みたいな目でアリウスを見る彼の従者達がいた。とはいえ知らないものは知らないのだから仕方が無い。

「まー代わりに修行の手伝いとか――」

「おいアリウス」

「なんだよタマモ、今俺はネギ少年とだな……」

「後ろ、後ろ」

「後ろだあ？」

タマモに髪の毛をぐいぐいと引っ張られ、アリウスは言われるとおりに後ろを向いた。

そこにいたのは、まだ話は終わっていないとばかりにアリウスを見つめる少女達。

話をうやむやにしようという彼の浅すぎる考えは砕け散り、冷や汗をだらだらと流す。

瞬時に肩の上から消えたタマモを無視し、誰かに助けを求めようと周りを見るが――

「ふふふ」

「ケケケ」

「自業自得だな。いい気味だ」

アリウスもはじめから当てにはしていなかったクウネル、エヴァとチャチャゼロは笑うだけ。

面白いから茶でも飲みながら見物しようといったところか。

「今度、楓姉ちゃんやアリウスの兄ちゃんと一緒に修行する事になったんや」

「アリウスさんと修行するの？」

「そや。いつの間にか差が開いてたーみたいにならんようにな、ネギ」

「もちろん！ 僕だってマスターと修行してるから負けないよ！」

ネギと小太郎はなんか凄く爽やかな会話をしていた。
どうやら修羅場に興味は無いようだ。

子供なら当然である。自分達の話に盛り上がるだろう。

「え？ 何？ さよちゃんが好きなの？ スクープじゃん！」

「ふふふふ、ラブ臭がするわ……ずばり修羅場ね！」

「パル、こういうのはあまり首を突っ込まない方がいいですよ」

「そ、そっだよー」

「楓がいつもより面白いアル……コタロより犬っぽい人アルネ」

順応性が高いというか、自分達のクラスメイトが年上の男性に迫っているのを遠巻きに見物して笑っている。

こういう年頃の少女にとっては他人の恋愛なんてのは話のネタにするべきものであるらしい。

とどのつまりは救援など誰もするはずが無い、という事。

「ははは、勘弁してくれよ」

「駄目でござる」

「駄目です」

ニツコリ笑顔でそう言われ、笑顔の裏に隠された有無を言わさぬ迫力を感じ取ったアリウス。

彼が無茶をするときにテオドラの発するそれによく似たそれ。

よく躑けられたというわけではないが、そうされるとアリウスは従うより他に道は無くなる。

アリウスも彼女達に嫌われたに思っているわけではないのだから。

「……わかったよ。埋め合わせをさせてくれ」

完全に折れたアリウスはそう言って二人の肩に手を置いた。

もちろん、半透明なさよの肩にもどうやってか。たぶん、理屈を聞いても気合としか返ってこないだろう。

アリウスにとって、またまたハードな日々が続いていくようである。

第三十六話 マツリオワリ（後書き）

あとがき

とりあえず簡単なまとめっぽくしたかったんだ。

第三十七話 夢の国に向けて（前書き）

もちろん夢の国ってのは某ネズミの王国じゃありませんので。

第三十七話 夢の国に向けて

「はっはっはっはっはー！ オラオラア！ その程度かコタロー！」

「ちょっちキツツイわ兄ちゃ——ぶっ！？」

アリウスに殴られた小太郎が、きりもみ回転をしながら海の中へと殴り飛ばされた。

ここはアリウスが所持するダイオラマ魔法球の中だ。

麻帆良では夏休みに突入し、前からしていた約束通りにアリウスは小太郎たちと一緒に修行をおこなっていた。

そう、「たち」である。

「今っ！ スキありでござる！」

小太郎を殴り飛ばしたアリウスの背後に現れた楓が、本気の拳をアリウスの背中に叩きつけようとした。

しかし、いつの間にか振り返っていたアリウスがその拳をガッチリと受け止める。

その手を振り払って逃げようとする楓だが、アリウスの力に敵うはずもなく、そのまま振り回されてしまう。

片手で楓の腕を掴み、ぶんぶんと勢いをつけて小太郎と同じ方向の海へと投げつけた。

「甘いぜ！ 俺の背後を突こうなんざ100年早い！」

呵呵大笑、その言葉のとおりの中に浮かんで彼は笑っていた。

巨大な水しぶきを上げた海の中には、並び立つ小太郎と楓の姿。模擬戦とはいえ、そう簡単に諦めては意味がない。自分よりも強い相手と戦う事は、たとえ歯が立たなくても意味のあることなのだ。それに何より、彼ら二人ともあっさりと負けを認めるような性格はしていない。

「あかん。やっぱり兄ちゃん強すぎや。どうやっても攻撃が当たらん」

「やはり、協力しないと無理でござるな」

「……せやな」

圧倒的な力の差を前に、二人はそれを悟った。

バラバラにかかっているのでは無理。連携しなければ攻撃を当てることもできないだろう。

一拍だけで調子を整え、彼らは再び跳びあがった。

絶対的な力を振るう自らの師匠へと。

修行も終わり、既に休憩モードに入った彼ら。

控えていたメイドたちに水を渡されて、まずは水分補給を行っていた。

「なんか、兄ちゃんを相手してると強くなった気がせーへんなー」

ぐったりとした小太郎が、目の前で平然としているアリウスに言った。

アリウスは今の今まで小太郎と楓を相手にしていたにも関わらず、大して疲れた様子も見せていない。

それを見て微妙に落ち込んでいるらしい小太郎に、アリウスはフオロ―をすることにした。

「そう言うな。お前は確実に強くなってるぞ」

「慰めはいらんで」

「そんなんじゃない。こっちが出力を上げてくから変わってないよ
うに思うだけだ。お前は確実に強くなってるさ」

彼の言うとおり、小太郎は確実に強くなっている。

身体能力もそうだし、気の使い方も、狗神の使役、狗族の力を使う
獣化も。

それらを鍛える全体的な力の底上げは、確かに行われていた。

元々アリウスと小太郎の戦闘スタイルはほとんど同じだ。レベルが
圧倒的に違うことを除けば同じなので、修行方法もアリウスと同じ
事をすればいい。

「いやでも、わかりにくいでござるよ師匠」

「……せいっ」

「あいてっ」

楓にチョップを食らわせて、何か言おうとしたのを遮った。

叩かれた所をさすった楓は涙目でアリウスを見やった。

「ひどいでござるよ。間違ったことは言っていないでござるっ」

「うつせ！ 俺様だつてためーらの事を思つてこの修行方式にしてるんだぜ？ 基礎能力を鍛えながら、適度に強い奴と戦い続ける方が経験値的にも伸びやすいんだよ」

「……まあ、それは確かでござるけど」

小太郎だけでなく、楓の強さも以前とは増していた。

楓はそこその強さを持っていたので小太郎ほどに伸びやすかったわけではないが、確かに強くなった。

縮地法にしても、忍術にしても、過酷な模擬戦の中で何度も使うちにキレが良くなっていた。

ただ、それでもアリウスに通用しないというのが楓にとっては不満であるようだ。

「それに玉藻殿と師匠も模擬戦も、とても割り込もうとは思えぬ。アレは見本にはならぬでござるよ」

「あー。確かに楓姉ちゃんの言うとおりや。何で兄ちゃん陰陽術とか弾きとばせるんや」

「気合だ！」

この魔法球の中では、小太郎や楓の修行だけではなく、アリウスの修行も行われている。

鈍るわけにもいかないという事でアリウスが行っている修行風景と模擬戦の様子を、小太郎や楓はほぼ毎日のように見せられているのだ。

その様子はまさに人外魔境のトンデモバトル。

かつて楓も小太郎も京都での戦いの際にリョウメンスクナという化

け物の一体を見ているが、玉藻はそれに匹敵する力を持つ化け物なのだ。人としての優れた知性や陰陽術まで使いこなすため、それ以上の力を持っていると言ってもいい。

そしてアリウスは楓が知る限りでは一番のチートキャラだ。つい先日 of 武道会でも最強クラスであるアルビレオ・イマと戦い、（おそらくであるが）ナギ・スプリングフィールドになった彼の攻撃を相殺していた。楓の使う攻撃をいくら受けても平然としていたという点でも、それは際立った印象となっていた。

そんな二人の模擬戦である。

二人にとっては結構な頻度で行われている模擬戦だが、そこまでの強さに至ってはいない者にとっては凄まじいものだった。

陰陽術を使って水が竜巻のように、狐火が蛇のようになって襲い掛かり、呪符や呪具を用いた封印術、結界までも使いこなし、元々の九尾の狐としてのポテンシャルを備える玉藻。

そんな玉藻の攻撃全てを理不尽な力技で全て打ち破って、狗神を体に纏った状態で殴りかかっていくアリウス。

「まーいきなり俺たちみたいな強さになれるとは思うなよ。一足飛びに強くなれるのは一握りの天才だけだ。基礎能力を上げ続けるのが一番手っ取り早い強くなる方法だ」

「了解でござる」

「そのうち追いついたるからな！」

「おう。望むところだ」

小太郎の挑戦とも取れる言葉を受け、アリウスはからからと笑った。

|| || ||

「ほう、それではあの竜娘はアリアドネーに？」

「ああ。打倒エヴァだとかで修行もしたし、勉強熱心だからな。あそここの総長にも気に入られてる」

数日後、エヴァの所有する別荘にて。

ネギや小太郎たちが修行を行っている最中、彼らはそんな会話をしていた。

ネギたちは基本的にエヴァの別荘で修行を行っていて、楓や小太郎がアリウスの魔法球で修行するのはあくまで例外なのだ。もちろん、アリウスが忙しかったりする時は彼らもネギたちと一緒にエヴァの別荘で修行をする事になっている。

「まああの年で私に喧嘩を売ったんだ。才能はあったからな」

「はっは、違いない」

フレイアがエヴァとバトった時のことを思い返す。

あの時から強かった彼女は現在アリアドネーにて教師をしていて、アリアドネー騎士団においても屈指の実力を誇ると聞いている。

竜族の血を引いている上に、炎の魔法において特に秀でた才能を誇っていたフレイア。他の属性の魔法については普通の域を出なかったが、特化型な上に特殊能力持ちなので才能や性格も合わさって比較的早くレベルアップができたのだ。

「聞いたぞ。あいつらは魔法世界に来るらしいな。それも全員が」

「……ああ、弟子経由で聞いたのか」

「そーだよ。俺の弟子はあれで意外とおしゃべりみたいだ」

目を細めたエヴァにアリウスがさりと云った。

アリウスは魔法世界に住んでいるので、楓はその話を聞きたくて魔法世界のことを言ったのだろう。

だから今度、全員にまとめて話してもしてやろつかとアリウスは考えていた。

「紅茶です」

「お、ご苦労さん」

「こいつに茶を出す必要は無いぞ茶々丸。こいつのメイドにやらせればいいんだ」

「マスター、あの二人はお菓子の用意をしています」

茶々丸が言った言葉にエヴァがぐむむと顔をゆがめた。

なんか自分だけ狭量な態度を見せてしまったのが嫌だったのか。

「……おいお前、なんだその顔は」

「別に？ なんでもないぜ？」

「嘘付け！」

「マスター、紅茶が零れます」

「そうだぞー。あんまりテーブルを揺らすなよ」

身を乗り出したエヴァが両手でテーブルをぶつ叩くのを注意する。こればかりは最近キレやすい、というか感情が豊かになったエヴァが悪い。

結局は紅茶が零れたりはしなかったでなかったことになったが。

「にしても、随分鍛えたな。あの犬コロ、前より随分とマシになったじゃないか」

「そうか？ 俺的にはまだまだなんだが」

空中にどこからともなくモニターを出して、そこに映る弟子たちを眺める二人。

今現在はネギと小太郎が模擬戦している最中のようだ。

なんか既に子供の域を超えたバトルが展開されているが、どうやらアリウスからすれば「まだまだ」であるらしい。というか子供と比べるほうがおかしいのだが。

そんな彼らを眺めてあっけらかんとアリウスは言った。

「なんか、こういう子供がバトルばかりしてていいのかね。せつかく平和なんだから青春してほしいもんだ」

「お前が言つな。お前が。散々修行をつけさせといて」

まだ若いのに微妙にじじくさいことを言って、年齢的にはかなり上のエヴァのほうがツツコんだ。

しかし、そんな心配はいらないという事を後に彼は知る。

あれだけ仮契約してキスしまくってるなら十分に青春してるんだぜとアリウスは言って、照れ隠し目的の攻撃を大量に食らうことになるのだ。

「というか、師匠だってカードをたくさん持つてるでござるよね？」

「……あ」

殴られても仕方が無いでしょう。

メイド二人はそんなアリウスの姿をカメラに収め、面白おかしく笑って言った。

そして数日後。

やたらと元気そうなツインテールな少女がやってきた。

「誰だこのガキ？ ネギ少年の知り合いか？」

「失礼ねっ！ って、あれ？ なんかどこかで見たような……それにその名前……」

アンナ・ココロヴァというその幼女。じゃなくて少女。通称アーニヤ。

不躰にアリウスから放たれた言葉に怒るものの、不思議そうに首をかしげた。

それも当然だ。

タカミチ経由で遙か昔に顔を合わせた事もあるし、紅き翼のメンバーであつたという事でアリウスの名前自体はそれなりに知っている。だから彼女はネギからアリウスのことの説明を受けた時、とんでもなく驚いて声を上げた。

アリウスの場合、紅き翼であると同時にヘラス帝国の皇女と結婚しているという事自体も問題だつたようだ。

「なんでこんな人がここにいるの！？ エヴァンジェリンってどういうこと！？」

既に状況がキャパシティを越えているらしい彼女は、そのあとで「ありえないんだわ」と言つてぶつ倒れてしまった。

せつかく長旅をして日本に来たというのに、先行き不安なアーニヤであつた。

第三十七話 夢の国に向けて（後書き）

あとがき

一番の問題はモチベーションだ。
それが問題なんだ。

今思えば、エヴァの「夢の国」発言もフラグだったのかと覚えてならない。

伏線とかがあると読み直してて面白いよね。

第三十八話 一足お先（前書き）

ただいまな回。

第三十八話 一足お先

俺はゆっくりと、広大にして何もない真っ白な空間へと降り立った。トレーニングルームとしてエクセルに用意させた異空間だが、これくらいの広さなら問題ないだろう。

俺は結構遠くに立って見ている小太郎に声をかけた。

「今からやる俺様の戦いをしっかりみておけよー」

たぶん聞こえたと思う。こくこく頷いてたからな。

それを確認してから俺は目の前の巨大な敵に目を向ける。幻想空間の中だからこそ作り出せた敵とはいえ、バトルする分には問題ないだろう。現実世界で身体にダメージがないのも効果的だ。

まあそんなわけで、とりあえず目の前のを効率的にぶん殴って見せようと思う。

「ようしエクセル！ 鬼神兵起動だ！」

『ラジャーですマスター』

俺の声にどこからともなく返事が返ってきて、それと同時に目の前の鬼神兵が動き出した。

ホンモノではなく幻想空間ならではの造り物なのだが、この空間の中でなら本物と同じだけの強さを発揮するだろう。

本来こういうデカブツには、戦士系が足止めしてる間に魔法使いが大呪文でトドメを刺すってのが定石だ。しかしまあ、ネギや小太郎が目指してる最強クラスってのはそういうセオリーが通用しないレ

ベルだ。

だからここらで一度、戦士系で最強クラスにまで辿り着いたらどうやるのかってのを見せてやろう。

「こういうデカブツはなあ……」

右手一本に力を込めて、思い切り振りかぶって準備する。

別にそこまで力なんて溜める必要ないんだが、ここはまあわかりやすい形を見せるって事でいいだろう。

アーティファクトも必要ない。あれは古龍を相手にする時とかくらいじゃないと威力が高すぎるからな。

「力いっぱい、殴り抜けろっ！」

一息に鬼神兵の懷まで飛び込んだ俺は、思い切り拳を振りぬいた。鬼神兵の防御力を上回るその攻撃は相手の腹をぶち抜いて、体全体を広報へと吹き飛ばした。

「これが戦士系の基本、『全力でアタック』だ！」

「……いや、無茶苦茶やろ」

なんだか失礼な言葉が聞こえた気がするが、気のせいだろう。

我が師、ジャック・ラカンが目の前ドラゴンぶん殴ってたからなあの人無茶苦茶だったが、俺はそこまでじゃないはずだから安心しろ。

なっはっはっは。

「なんか最近あいつら元気だなー」

「そうだなー。っていうかお前はだらけすぎだぞアリウスー」

エヴァの別荘にお邪魔させてもらい、玉藻と一緒にだらける俺。ネギと小太郎と一緒にバトル中だ。俺の特訓のおかげで強くなったじゃないか。やっぱり幼いうちは長所を伸ばしまくらないとな。短所を補うなんてのは別に精神的に落ち着く大人になってからでも出来る。

だから俺は小太郎の長所を伸ばしまくった。子供だから出来ることは限られてるが、やっぱり伸ばすとしたら基礎の身体能力だ。混血でも狗族の血が入ってる俺や小太郎は元の身体能力が高い。普通の人間に比べても、その限界値だってかなり高いのだ。それを伸ばさない手はないだろう。

潰れる寸前の重石を付けて筋トレをやらせた後、ぶっ倒れるまで模擬戦やってから、よく食わせてよく寝かせる。こういう時間が大量に必要な事は別荘があるからこそできる方法だろう。

まあ、俺も無駄に年取りたくないからかなり分身で済ませてるんだけどな。

今日みたいならけたいだけって時は例外だ。分身にやらせても意味がない。

「あいつら魔法世界に行くんだよな、エヴァ？」

「……おい、私に聞くな。というかそれくらい知ってるだろう」

「再確認だよ。それなら俺が案内してやることもやぶさかではないんだが……」

「だが、どうした？」

だべる俺から離れて紅茶を飲んでいたエヴァが、こちらに目を向けている。

俺は重―いため息を付いてから、渋々といった感じで声を出した。

「……いや、テオドラがな」

「何だ、あの姫様はお前の嫁だろう。どうかしたのか？」

「いい加減に帰って来いって、手紙が一日一通くらい届くんだよ。しかも日に日に内容が短くなって筆圧が強くなってるんだ」

このままだと、そのうち角でガリガリと削って手紙を書いてきそう
で怖い。

半端じゃなく怖いのだ。どんどん簡素になる内容と文章の短さが、
膨れ上がる怒りを表現しているかのようでやたら怖い。

確かに俺がこちらに長居すぎたのも悪かった。

「くく、はっはっはっは！ それは本当か？ それは、怖いな。
くくく」

「笑い事じゃねえんだよ……はあ……」

だからマジで早く帰ないとマズイ。

ついでに言えば、最終的にはアイツがこっちにやってきてもおかしくない。

普通なら無理だろうが、生憎とアイツはフレイヤをいつでも呼び出せるのだ。アイツの強さと魔法なら、余裕でゲートポートに侵入くらいできるだろう。

「あいつら、まだ魔法世界には行かないんだろ？」

「ああ。出立は10日後だ。どうする？ 私はさっさと帰ってやったほうが良いと思うぞ」

「……やっぱりなー。15年もナギさん待ってる奴が言つと説得力あるよな」

「死にたいか？」

「冗談だよ」

爪をギラリを光らせてこつちを睨むので、軽く手を上げて返しておいた。

まああつちも本気じゃないだろうからそれで済んだが……さて、どうするか。

さすがにあいつの機嫌を損ねたいとは思わんし、かといって弟子の事を放り投げるってのもアレだ。

じゃあどうするかって言うと、どうする？ 俺の^{ひとがた}人形ゴーレムでも残してくか？ 陰陽道のアレよりはずっと高性能だから、今の小太郎くらいの強さはあると思うけど。

「まあ、帰るのは確定だな。あいつらにやあ悪いが、結婚生活の破綻は怖い」

「ははは、タカミチが泣くぞ」

「え？　なんで？」

「……お前、あいつの親友とか言ってなかったか？　いや、まあいい。とにかく、帰るのならさっさと帰れ。いつまでも私の別荘を使われるのは不愉快だ」

そんな事、言われなくともわかつてる。まあ、昔よりはトゲがなくなった用で何よりだ。俺が知ってる昔なんてのはたいした事ないだろうけどな。それでもエヴァが冗談だのに付き合ってくれるのは前よりは楽でいい。

それに、言われたとおりに別荘から出ようとした俺に、エヴァはこんなことを言ったのだ。

「あの犬がここを使うことは許可してやるよ。お前のメイドの紅茶代としてな」

気前の良いことだ。

まあ、これであいつらの修行場所は確保できたといったところだろう。

安心してあつちに帰れるというものだ。

うん、後は俺の^{ひとがた}人形に任せよう。

なんとか説明してくれるさ。ははは。

つーわけで帰ってきた。

「強引ですなマスター」

知ったこっちゃない。帰るときはさっさと帰る。それが俺だ。ぐだぐだ悩むのも良いが、行動に移すときはスパッと切り替えないとな。

俺は帰るといって一気に麻帆良学園を出てきたし、帰ると言った時にごちゃごちゃ言われた時は人形（人形）をおいて逃げ出した。結婚生活の危機って言えば少しは納得するだろう。

逆に怒りそうなのも二人ほどいるのが恐ろしいが…… なんとかなさ。

皇族権限で無理矢理ゲートをくぐらせてもらい、そのまま直行でヘラスまで。

家用機で最高スピードを出したから、時間なんてそんなにかからなかったと思う。

ただ問題は、この先なワケだ。

「……おい。エクセル、アリス」

「はい？」

「なんでしょうマスター」

ニコニコしながらエクセルが、あくまで無表情にアリスが答える。しかし今はアリスの無表情もどこか悪意的に感じる。

なんか禍々しい雰囲気、俺が普段の拠点にしてる別邸から漂ってるんだが？

「一体何を言ったんだ。空気が違うぞ」

「若い娘とイチャイチャとか」

「若い娘とデートとかです」

「ついでに言うなら、知り合いの美人と毎日会ってたって言ったぞ」

そんな言葉を聴いて、しばし沈黙。

いやまあわかってたさ。こいつらは基本的にテオドラの味方で、逐一情報流してるんだろ？なあとかとは思ってたさ。

でも、実際にこうして口に出して言われるとまた違う感じがするよな。

もういい！ 家の中に入らないと解決しない！ さあ行くぞ！

「……ただいまーっ」と

玄関にトラップはなかった。よかった。とりあえず出て行けやゴルアって事はないようだ。

そのまま先に進む。人の気配は……一名。たぶんテオドラ。二階だな。

とりあえずそれだけ確認して、俺は後ろの三人に声をかけることにした。

「すまんが、あれだ。二人にしてくれ」

「わかりました」

「了解です」

「おー。そこまでボケじゃなかったか。安心しろ、手は出さん」

3人の了承を得て二階に上る。

そのまままっすぐにテオドラの気配がする部屋に向かい、やっぱり言うべきかなんというか。

そこは俺の部屋だった。結構広めで、ベランダやら何やらを色々と完備してある部屋だ。

なんとなく嬉しくなったが、急いで中に入ることにした。

「随分と、遅かったのう」

「……悪かったよ」

初めに投げかけられたのは攻める言葉で、俺は迷いなく頭を下げて謝った。

声に込められていた感情から寂しさが感じられれば、そうしないわけにもいくまい。嫁さんほっぽってっつのはさすがに不味かったよ
うだ。

旅に出たことは今までもあったが、今回は特にエクセル達から得られた情報が過激だったんだろう。

悪い事したなあ、ホントに。

「待ちくたびれてしまって、そっちに行こうかと思ったほどじゃ」

「おいおいマジか。想像通りかよ。つかそれはヤベェだろ」

「いいんじゃないよ。妾は皇女じゃからな」

ツンとベランダの方を向くテオドラだが、まあコイツなら動いてたんだろうなあ。

そういう行動力があるのは承知済みだ。いくらここが安全地帯で認定住居だとはいえ、王宮から勝手に外出するとか普通はヤバいつてもんだ。まあゲートを通つての移動はさすがにやりすぎかもしれないが、こいつならやる。間違いない。

俺は頭をかきながら、ゆっくりとテオドラに近づいた。

「そう怒るなよテオ、つれないな」

「怒らせたのは誰じゃったかの？」

「俺さ。だから、その怒りを静めるのも俺がやる」

惚けるように言ったテオドラを、そっと抱き寄せて顔を近づける。目の下に涙の後はなかった。よかった。さすがにそこまで寂しがらせてたら夫失格だ。

そのまま顎を持ち上げてキスしようとして……テオドラの指に止められた。
むう。

「流すつもりじゃろ？」

「……ダメか？」

「そりゃそうじゃ。散々放っておいてくれたんじゃないからな」

顔が至近距離のままでフッフと笑うテオドラ。

あーダメだ。コイツ綺麗過ぎるぜ。ってか誘ってるだろ絶対に。

しかし止められた以上、目の前のテオドラにそのまま欲望のままに行動するのはアウトだ。

俺がそんな葛藤に悩まされていたのが表情に表れたのか、テオドラの方から口を開いた

「じゃが……そうじゃな。口付けをするなら、その前に一言だけでいいから言ってくれぬか」

全く、可愛すぎるだろ。

とてもじゃないが、自分がこんな幸せでいいのかと不思議に思えるくらいだぜ。

俺は心のそこからこみ上げる喜びをそのままに、テオドラへ思いをぶちまけた。

「愛してるぜ。誰よりも、何よりも、だ。お前は俺にとって最高の女だ」

「一言でいいといったじゃろくに……んっ」

とても一言じゃ言い表せないというか、俺にとってはこれでもまだ良い足りない気がする。

まあそんな事はどうでも良い。どうでもいいからこそ、俺はテオドラの唇に自分のそれを重ね合わせた。

そのまま強過ぎない程度に、テオドラの柔らかい体を抱き締める。

家に帰ってきたんだな、と。

そんな実感が持てた。

……心底惚れるってのはこういう事を言うんだな。今ならわかるぜ。

第三十八話 一足お先（後書き）

あとがき

いやー一時は魔法世界人が現実世界きちゃだめだとか言われてかなり混乱しましたが、最近はラカンがマホラに来てたり闇の魔法の巻物をどつかで賭けでぶんどったりしてたみたいだし、色々やってるから大丈夫っぽいんだね。
よかったよかった。

というかねギ君が強すぎてどうしようもないんだけどどうすればいいんだろう。まあ、色々考えてはいるんですがね……

第三十九話 探し人は誰ですか（前書き）

話がほとんど進んでない気がするけど気にするな。

第三十九話 探し人は誰ですか

場所はアリアドネー。

アリウスが魔法世界へと帰ってきてから3日目くらいの事である。彼はここで教師兼魔法騎士団の副総長をやっているフレイアに会いにきたのだ。

「それで？」

「いや……悪かったなフレイア」

「そうですよ！　なんだってお兄様は私を邪険にするんですか！」

「いや、邪険にしたつもりはないんだがな。というかお兄様というのもいい加減にやめねえか？　というか彼氏くらい紹介しろよ」

「無理です！　だってお兄様以上の男性なんていませんもの！」

目をきらきらとさせて自分を見つめるフレイアに、アリウスは深く深くため息をついた。

どうしてこうなったのか。

少し考えたアリウスは、全部アリアドネーが悪いという事にした。フレイアがこうなったのはアリアドネーに通ってからだし、そこから改善しなかったのもアリアドネーで教師をやっていたからだ。そうしてアリウスは考えるのをやめた。

「まーいいや。お前の人生だからな、お前の好きなようにすりゃい

いさ。俺の師匠はそんなような事を言ってた気がする」

「もちろん、私は私の意思でお兄様をお慕いしておりますから！」

「わーったよ、わーったから」

アリウスはとても心配しているが、フレイアはフレイアで充実した生活を送っている。

元から教えることに關しての才能はあつたのだらう、性格としてはアリウス以外には厳しくて真面目だし、強いことも幸いして生徒からの信頼も高かった。

ついでに言えば、容姿のおかげもあるだらうか。

真紅の長髪を持ってスタイルも抜群、男子からの人気はもちろんだが、いわゆるかつこいい系の容姿でもあつたので女子からの人気も高かった。

……アリウスの前ではこんなだが、それを知ったら生徒達はどう思ふのだらう。

「ところで、師匠がどこに行つたかわかるか？」

「知りませんよ。前に私にちよつかいかけに来た時以来、会っていません。というかその時はお兄様も一緒でしたし。何かあつたんですか？」

「いやー、なんというかなあ……」

「？」

ネギくんが来る事を伝えろと、アリウスは学園長に言われていた。伝書鳩代わりにするとは腹が立つぜっていう心持ちだったが、どち

らかといえはネギ達のために彼はそれを引き受けたのだ。
ただ、ジャック・ラカン放浪気味だし気まぐれだし、なるべく早く見つけたい。

さっさとその気にさせないと、その時になってめんどくさいとか言
って放置するとかも有り得るのだ。

というかその仕事も光速の勢いで終わらせてテオドラとまったりし
たいのが彼の本音なのだ。

そんなわけでフレイアにも久しぶりにあいたいし、ついでに情報で
もあるかと思ってきたのだが。

「うん、お前にはそれまでは内緒にしとくか」

「えー！　なんでなんですか！」

「なんかお前、騒ぎそうだし。つーか声デカい。周りを見る周りを」

そんなアリウスの声にフレイアが周りを見回せば、向けられていた
視線が一気に散らばった。

彼らのいる場所はアリアドネー、フレイアがアリウスへとオススメ
したカフェ。

最近ちよつと落ち着いたアリウスはともかく、フレイアの声はでか
くてとっても目立っていたのでした。

「ああああ、もう、早く言ってください！」

「言っても無駄そうだったじゃねえか」

「そんな事ありませんよ！」

すぐにテンションが上がってカッ力する、今後の課題はそこだろう

なあ。総長のセラスあたりに手紙でも書いておいて頼んで見ようかとすら思うアリウスだった。

ヘラスの王族に連なるものがそう簡単に他のトップとやり取りして良いのかといえば本当は全然良くないのだが、そこは彼クオリティなのでOKである。

ハッキリ言っと、堂々とやってれば結構バレないものなのである。

（まー、一通りアリアドネーを見回ったら次に行くか。さっさと探さねーとな）

「お兄様！ 聞いてますか！」

「聞いてるよ」

がみがみとうるさいフレイアの声に顔をしかめ、犬耳をたれさせてアリウスはコーヒーに口をつけた。

「それで私の所に？」

「おう。タカミチは麻帆良だし、お前みたいに頭が良いなら師匠の場所もわかるだろ？」

「アリウス、君は少し立場という物をだね……」

自分を訪れたアリウスに、クルトは特大の頭痛を抱えたように頭を抱えた。

クルトが仕事を片付けてメガロメセンブリアにある私邸に戻った時、そこにはアリウスの姿があったのだ。

見つかってしまえば彼の立場としては大問題である。

友人として済めば良いが、アリウスの正体が割れた瞬間に大問題だ。

「まあいい。少なくとも中に入ってしまったえば大丈夫だろう」

「悪いな。勝手に上がったちまってたんだが、あんまり酒が無くて困ってたんだよ。一緒に飲もうや」

「アリウス、話を聞いていたか？」

「だからわざわざこっそり進入したんじゃないか。家を守る魔法まで突破して」

完全に不法侵入だが、クルトはアリウスだから仕方が無いと納得した。

そうしてアリウスと向き合うように席に座り、彼の持参した酒を煽り……むせた。

「げっほ、ごほ、なんだこの酒！？ アルコール度数高くないかい？」

「あ、悪い。俺は結構強いほうだから相当高いの持ってきてしまった」

「……やれやれ。先に言っておいてくれよ」

やれやれとため息を付きながらチビチビと酒を飲み始めたクルト。アリウスは初めからぐいぐいと強い酒を飲んでいる。

ちなみにテーブルに置かれているつまみは、クルトの家に保管されていたものをアリウスが勝手に調理した。

雑ではあるが、少なくともつまみ代わりにはなるようだ。

「用があるから師匠を探してるんだが知らないか」

「私が知るわけないでしょう」

「だよな」

アリウスも少しは予想していたようだ。

ただ、クルトの情報収集能力や政治力に期待をしていたのもあったから、少しばかり残念だったが。

そんなアリウスにクルトは言った。

さすがクルトだ。アリウスとは頭の出来が違う。

「君はラカンの隠れ家の一つや二つくらい知っているだろう？ 虱

潰しにすれば良いじゃないか」

「やだよめんどくせえ」

「……はあ。一度しか言わないぞ。本来なら立場的にダメなんだからな」

手元の酒を水で割って何とか飲み干し、クルトはアリウスに教えることにした。

クルトは新オスティアの総督になった。それはもちろんアリウスも知っている。

だからこそ得られる情報があったのだ。

要するに、オスティアで開かれる終戦記念祭や拳闘大会の事である。

「一度、拳闘大会に誰が出資しているかを調べて、そこから調査してみる。どうせアリウスも拳闘大会に参加するんなら、それくらい

知っておけ」

「それって師匠に関係あるのか？」

「つべこべ言わずにやれ。そしてこれ以上私に関わるな。色々マズイからな」

そんな風に会話を切られ、しばらくするとアリウスはクルトの家から追い出された。

ベランダから追い出されて急いで行けといわれるあたり、かなりヤバかったのかもしれない。

「うーむ。強引過ぎたか」

しかし、得るものはあった。

後は彼の従者にでも任せれば勝手に探してくれるだろう。

アリウスは結構任せきりっぽい感じになってる事にため息をついた。

「ようやく見つけたぜ」

「お、久しぶりだな」

のんきな顔で飯を食いながらそんな事を言うラカンに、アリウスは若干ピキリときた。

クルトから情報を得た後、彼はエクセルとアリスに情報を調べさせた。

そして拳闘大会の裏の出資者がラカンであることを突き止め、金の出所やら連絡手段とかをエクセルがよくわからない手段で見つけて

きて、最終的にラカンの居所を突き止めた。

アリウスにはさっぱり理解できないが、ハッキングパワーという事らしい。

そして一番最後にラカンの存在が発見された自由都市グラニクス。アリウスはグラニクス付近にあるラカンの隠れ家を知っていたので、割と早めに発見と相成ったのだ。

ちなみに、クルトから情報を得たのは36時間くらい前の事だ。エクスセルたちの優秀さがよくわかる速度である。

「——とりあえず、あのじいさんからの伝言は伝えたぜ」

「めんどくせえ」

「言うと思っただぜ」

「遠いんだよ、わざわざ行くのめんどーし。勝手になんとかするだろ」

言うと思った、とアリウスは思った。

というかアリウス自身もそんな事思っあたり、かなり思考回路が似ている気がする。

でも一応、弟子とか色々いるわけだから話して見ることにした。

「ナギさんの息子のネギくんとか、結構面白いのは多いと思うんだが」

「じゃあてめえがいけよアリウス、俺の弟子だろ」

「俺だつてめんどくさい。というか……」

弟子という部分にピクリと耳を動かして、アリウスは言った。

そして不意に、ラカンに向かってパンチを放った。

全力ではないが、小型竜ならそれだけで気絶する威力のそれだったのだが、ラカンはごく普通に受け止めて見せた。

「おいアリウス、お前……」

「宣戦布告だぜ、ジャック・ラカン」

「……おいおい。マジでやる気みてーじゃねえか」

「当然！　いつまでも師匠師匠と呼び続けるのもなんだし、いい加減に独り立ちつてのがしたいのさ」

それは今思いついたことではない。

終戦20周年を迎えた盛大な祭りの場、そこで開かれる拳闘大会もまた盛大。

できることなら、そんな派手な場で師匠をぶっ倒したい。アリウスが結構前から考えていた事である。

前にテオドラから言われた拳闘大会への出場をやめろというのは、既に期限が切れている。彼女もアリウスの気持ちを汲んでくれたらしい。

「拳闘大会で戦^やろうぜ」

「別に暇だからいーけどな。一応弟子だし生意気でムカつくし。喧嘩を買ってやるうじゃねえか」

あっさり受諾。

昔にタカミチとアリウス戦わせて競わせるとか言ってたし、まだ弟

子みたいな扱いのままにしておきたいのかもしれない。色々便利だし。

もしくは弟子がそういう事を言ったのが結構誇らしいのから勝負したいのかも……それはないか。

「ところで、お前は普通に参加していいのか？ あれじゃね？ あのじゃじゃ馬姫と結婚したならマズイだろ？」

「だ、代理に予選させて途中からエントリーすりゃ大丈夫だって」

肝心なところが結構抜けている点は、昔からずっと変わらないアリウスだった。

第三十九話 探し人は誰ですか（後書き）

あとがき

この作品はどこへ向かっていくんだろう。なんでクルトがツンデレるんだよ。

なんか今更シリアス書くのがバカらしくなってきた。

散々ギャグっぽくやってきたんだし、もう突っ切ってやろうか。

実家から東京に戻り、原作を読んでいて気づいた。

どうやら、他の新任の先生よりもネギの方が上手くやっているらしい。

あれほどの責任感を持つ先生は大人でも珍しいらしいが、上手くプレッシャーや責任をかわす方法を知らないから、それだけ真っ正直に受け止めるのが良いんだろうな。

……フツ、子供の頃のハートを保ちたいぜ。右から左に受け流す技術ばかり身に付いて困るって奴だ。

第四十話 ドびつくりニュース（前書き）

ネギま、単行本26巻の拳闘大会の決勝トーナメント表に『ウルフ王子』という名前がありますが、私のユーザーネームには欠片も関係ないはずだという事を言っておくぜ。

第四十話 ドびっくりニュース

さて、アリウスの代理として拳闘大会の全国決勝への出場権を入手する選手とは誰か。

ハッキリ言って数年前まで拳闘大会で優勝しまくったとか王族権限とか色々使えばどうとでもなるとは思うが、さすがにそれはズルだろう。

そんなわけで、一人の代理人が選ばれたのである。

『私ですか？』

「ああ。玉藻はやる気なんかねえみてーだし、アリスとエクセルはさすがに師匠とやる際のパートナーには力不足だ。テオは戦えないし、後はもう俺のパートナーに相応しい奴なんて現状お前しかない」

『ふっ！ ふさわしいですか！』

やたらとテンションの高いフレイアが、アリウスのパートナーとして拳闘大会に出るようだ。

アリアドネーの副総長の仕事はどうしたとも言いたくなるが、時間はいくらでも作れるので大丈夫だろう。

拳闘大会の決勝への参加資格は各地の大会で一定の結果を出せば得られるため、アリアドネーの近くで開催されている夏季大会にでも出場すれば何とかなる。そうすれば移動も楽だし必要な時間も少なくて済むはずだ。

ついでに言えば実績のある拳闘士団とかの団体に加入していれば参

加資格も得やすいのだが、それについての心配は要らないだろう。なにしろ、何度も優勝しているアリウスがトップを勤めている団体があり、フレイアはそれに所属している事になっているのだから。

「それで、大丈夫か？ お前も忙しいかもしれないが……」

『大丈夫です！』

「そ、そうなのか？」

『はい！ それくらいの時間は簡単に作れますので！』

アリウスの目の前で、モニターの中のフレイアが目をギラギラと光らせる。

片手でトーナメントに出て決勝トーナメント出場資格をゲットするとか、かなり失礼な気もするがたぶん大丈夫だろう。

フレイアの容姿と実力なら、普通に客からも人気が出るだろうし。

アリウスがトップの傭兵団兼拳闘士団兼賞金稼ぎ結社『黒き獵犬』。それなりに実績のある団体で、結構な数の賞金稼ぎや傭兵や拳闘士を抱えていて、エクセルが全ての管理を行っている。

ちなみに、アリスは主に家事をやったりテオドラの傍に控えている。王族がそんなものを率いるなとも思われるが、書類上でだけはアリウスではなく『アルス・ウィダーツ』なんて偽名を使っているので問題ない。

もちろん周りは全員知っているが、問題ない。

問題ない、はずなのだ。

「まあ、そういうことならいいか。大会の方はデータを送っとくから、そっちの予定とあわせてくれ。ウチの拳闘士団ならかなり融通

が利くから、空いてる時間で大会に出といてくれ」

『わかりましたわ。それでは、次は直接お会いしましょうねお兄様』

「へーへー。じゃあな」

ブツリとモニターが掻き消えて、アリウスの部屋に静けさが戻る。学園長からの頼みの伝言と宣戦布告を終えた後、アリウスは自前の高速艇でヘラスまで戻ってきた。

その後で急ぎフレイアに連絡を取り、こうして拳闘大会のパートナーとして決勝への出場権を勝ち取るように頼んだわけだ。

フレイアほどの実力があればそれくらいは楽勝だろうから、アリウスも楽が出来るというものだ。

「ま、これであっちは問題なしと」

「なんだかお疲れですねマスター」

「アリスか。テオドラは？」

「下でくつろいでいます」

アリウスの前に紅茶を置いたアリスはそう答えた。

「どうやらテオドラもこの家にやってきたようだ。」

もうすぐオスティアでの終戦20周年の式典やらで忙しいだろうに、まあその式典にはアリウスも参加しなきゃならないが、主にヘラス帝国を代表するのはテオドラだし表立って色々やるのもテオドラなので、アリウスは彼女の夫として警護さえ出来ればそれでいい感じだ。

最近となっては古龍ともバトってるくらいなので、正直言えば護衛

が全部アリウスで補えるんじゃないかとテオドラは思っている。もちろんそんなアホな話があるはずもないので、しっかりと護衛をつけることになっているのだが。

「なんじゃ、そんな顔をして」

「いや、テオこそな。忙しかったんじゃないのか？」

「せっかく時間を作ったんじゃない。愛する夫の所に来るのは当然じゃろう」

肩を寄せ合って柔らかそうなソファへと腰掛ける二人。

一回り小さなテオドラは、アリウスの肩にこてんと首を乗せて目を瞑っている。

「……恥ずかしくねえのかよ」

「別に？ これくらい普通じゃ。これからしばらく忙しいんだから、少しくらいはいいじやろう」

「ったく、しゃーねえなあ」

アリウスはソファの後ろにだらけさせていた腕を戻し、テオドラの頭の腕に動かした。

角がちよつと邪魔であったが、今まで何度となく同じ状況になったことがあるアリウスは慣れた感じでテオドラの頭を撫でていく。

女はめんどくせー、しかし好きな女は別。

割とマジにそんな事を思っているアリウスは、すりすりと身体を密着させてくるテオドラとは対照的に上を向いて仏頂面をしていた。もちろん、不機嫌だからなんてことはない。単なる照れ隠しだ。テ

オドラもそれがわかっていているからこそ、アリウスから離れることをやめないのだ。

「ところでアリウス？」

「なんだ？」

しばらく経ってから、アリウスの横に普通に座り直したテオドラが言った。

すっかり気が抜けているアリウスは、次に彼女が言った言葉を聴いて紅茶を嘔いた。

「父上が言っておったんじゃがな」

「おう」

「そろそろ孫の顔が見たいそうじゃ」

「おう——ぶあはっ!？」

慌ててテオドラの方を見るアリウスだったが、彼女はあくまで平然とした態度を崩していない。

ただ、頬は結構赤くなっていたりもしたのだが。

アリウスもそれに気づいたのか、かなり焦って口を開く。

「親父さん、前は長命族だからゆっくりしろつつつてたんじゃ!？」

「お主は待たせすぎじゃ。いい加減に、妾もじゃな……」

恥ずかしそうに言いながらも迫ってくるテオドラに、後ずさりしす

ぎたアリウスはソファから転げ落ちた。

思えば彼にも待たせすぎたという自覚はあった。

しかしまだまだ子供っぽい精神を持つことをアリウスは自覚していたし、何よりもラカンに勝ててないから一人前じゃないとも思っていた。

自分がまだ立派な親になれるかわからないとか、アリウスも一応そういう事は考えた事はあったのだ。普段は記憶の底にまでしまいこんで意識しない事ではあるが、確かにあったのだ。

「それとも、妾との子供は欲しくないのか？」

「いやいやいやいや！ 違う！ それは違う！」

テオドラの言葉を大慌てで否定するアリウス。

既に頭の中は焦りすぎてパニック状態なため、テオドラの口の端に浮かぶ笑みには気づいていない。

とにかく先走ったアリウスはテオドラに言った。

「とにかく俺を信じてくれ。俺はジャック・ラカンに勝つ。その時まで、待ってくれ！」

「……ふふっはっはっは！ 焦りすぎじゃアリウス」

「なぬ？」

「少し発破をかけようと思っただけじゃ。妾もしばらくは政務との調整で忙しいのでな。今のうちに応援というわけじゃ」

「……………マジで？」

「マジじゃ」

アリウスはぽかと口を開けて呆然としていたが、数秒後には頭を抱えて悶えだした。

その横ではテオドラが少し大きめの声で笑い声を上げている。

「びつくりさせんじゃねえよ！」

「でも、子供が欲しいのは本当じゃからな？」

「——あ？」

「ふふ。応援してるんだから絶対に勝つんじゃぞ」

そう言ったテオドラは、すっきりした顔で家から出て行った。

そして再び口をあけて思考停止していたアリウスは、今度こそ豪快な笑みを顔に浮かべて力強く立ち上がった。いつも通りの彼に戻ったようだ。

そんな様子を、後ろでアリスが微笑みを浮かべて録画していた。

「そっいや、もうあいつらは魔法世界きてるのかな」

「楓さん達ですか？」

テオドラが忙しくなり、アリウスが修行漬けの毎日になって数日。

自宅地下に設置した修行用の特別室に籠って、エクセルの作り出した仮想敵相手に実戦形式での修行を積んでいた。

ちなみにその仮想敵というのは、麻帆良で幻想空間内に鬼神兵を時と同じ方法で作りに出したモノである。

もちろん作り出せる仮想的には限度があるが、今回の相手は上位の元素精霊十体くらい。最上位じゃあないがそれを数で補ったのバトルだった。

そんな感じのバトルを終えたアリウスは、紅茶を入れてくれたアリスへと尋ねたのだ。

「いつ来るか覚えてないのかアリウス。だめだめだな！」

「うるせえよ玉藻。てめーは黙ってる」

「邪険だなこんにゃろー！」

寄ってきた玉藻を遠くに放り投げ、アリウスは一息にカップの中身を空にした。

その間に何かを調べていたアリスが、少し驚いたような顔をして戸惑いながら口を開いた。

「あの、マスター」

「やけに時間かったな」

「いえ、その。日にちは覚えていたのもう来てるとは思ってたのですが、調べて見るとですね……」

「？」

「見たほうが早いと思いますので、これをどうぞ」

アリスは手に持っていた情報端末をアリウスの方に向け、大型モニターを宙へと出現させた。

そのモニターへと目を向け、じっと眺めていたアリウスだったのだが――

『――世界各所で同時多発的に起こったゲートポート魔力暴走事件の続報ですが、各ゲートポートでは依然魔力の流出が続き、復旧の目処は立たず旅行者の足にも――』

『――依然犯行声明もなく背景が全て謎に包まれたままのこの事件ですが、メセンブリア当局により新たな映像が――』

『――この外見上10歳程度の少年に見える人間に、懸賞金付きの国際指名手配が――』

最後までその情報を見終わったアリウスは、至極冷静にアリスへと問いかけた。

ただ、アリウスの顔はぴくぴくと引き攣っている。そりゃそうだ、とアリウスは言うだろう。なにせ、なんでか知らないが何人もの知り合いがいきなり賞金首になっているのだ。それも、結構大きな事件の犯罪者として。

「これ、ギャグ？」

「ギャグじゃないです」

「おー、あの犬も賞金首だな。あの忍者もいるぞ」

玉藻が賞金首になったネギ・スプリングフィールドと愉快的仲間達の一覧を見てわははと笑う。

アリウスはそれを見てため息を吐き、もう一度アリスと目を合わせ、呟いた。

「なんか、また厄介な事になった気がするぜ」

「……ですね」

訪れる嫌な感じ、不吉な予感をそのままに感じ取ったアリウス。犬だから第六感がとかではなく、もちろん経験で。

しかし自分にも超重要イベントが迫っていることもあり、しばらくは静観することに決めた。

……知らぬ間に巻き込まれている事にアリウスが気づくのは、もっ
とずっと後の事である。

第四十話 ドびっくりニュース（後書き）

あとがき

ラカンとの戦いで3話くらい使っても大丈夫なんだろうか。もっと長い気もする。5話とか。

つか敵弾吸収陣とかどうすりゃいいんだよ。

あのエヴァさんが完成系思い描きながら技術的障害と費用対効果を考えて断念したもんをネギ君は完成させちゃったわけだろ？ それってネギくんがエヴァですら乗り越えられなかった技術的障害を乗り越えちまつたって事だろ？ 完全にネギの才能がエヴァの才能と年月を凌駕しちまつてるじゃねえか。

奇跡的な才能の前には積み重ねた努力は無意味って誰かが言ってたが、こと開発力に限ってはネギくんもそれと同じだな。

ネギの魔法世界における急激なレベルアップの要因は、闇の魔法習得時のエヴァと殺し合いもかなり影響してると思う。

十日以上も殺され続ける上で心を折られずに勝利が絶望的な相手と戦い続けるとか普通できねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5910/>

とある狼の冒険譚

2011年9月15日19時03分発行